埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 474 集

久　喜　市

栗 橋 宿 跡 Ⅶ

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
（第 1 分冊）

２０２２

国土交通省　関東地方整備局
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第 105・121 号土壙出土遺物

中国産磁器

序

埼玉県北部の県境を流れ下る利根川は、坂東（関東）にある大河であり、河川の長男に擬され「坂東太郎」とも呼ばれています。その流域に育まれた肥沃で広大な大地には、1,280万人にもおよぶ人々が生活を営んでいます。

また、万葉集の東歌に「刀祢河泊（とねかは）」と詠まれるなど、いにしえからその脅威と恵みに対し、人々は畏怖と親愛の想いを持ってきました。滔々（とうとう）たる流れは交通路として、また農業・生活・工業用水の源として、限りない恩恵をもたらしています。一方、過去にはたびたび恐ろしい水害を引き起こしてきました。

そこで国土交通省では災害を未然に防ぎ、首都圏の安全性を確保するため、氾濫区域の堤防強化対策事業を実施しています。

この事業地に含まれる加須・羽生・久喜地区には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。久喜市の栗橋宿跡はその一つであり、当該事業に伴う事前調査として、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が発掘調査を実施しました。

江戸時代に日光道中（どうちゅう）の宿場であり、商人や職人の住まいが建ち並んでいた栗橋宿は、利根川を船で越える房川（ぼうせん）の渡しに関所が置かれ、交通の要衝として栄えました。今回の調査では、宿場の町屋に建ち並ぶ建物跡や廃棄土壙などが発見されたほか、町屋の間を東西に抜ける往来道の一部を検出することが出来ました。鍛冶職人が住んでいた区画からは、鞴（ふいご）の羽口などの生産関連遺物が多く出土し、旅籠屋があった区画からは火事で焼けた中国産の磁器がまとまって出土しました。いずれも当時の宿場町の生活をうかがわせる貴重な資料です。

本書は、これらの発掘調査結果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、御尽力を賜りました国土交通省関東地方整備局、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、久喜市教育委員会、地元関係者等の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　依　田　英　樹

例　言

1　本書は久喜市に所在する栗橋宿跡第９地点の発掘調査報告書である。本書では第一面の調査成果について報告する。

2　遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

栗橋宿跡第９地点（No. 86 － 011　第１次）
久喜市栗橋中央二丁目 3491 － 2 他
平成 29 年 10 月 11 日付教生文第２－ 25 号
栗橋宿跡第９地点（No. 86 － 011　第２次）
久喜市栗橋中央二丁目 3491 － 2 他
平成 30 年４月 10 日付教文資第２－５号

3　発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成 29 ～ 30 年度）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査」
（第１次）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成 30 年度埋蔵文化財発掘調査」
（第２次）
報告書作成事業（令和２～３年度）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和２年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和３年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

5　発掘調査、整理報告書作成事業はＩ－３に示した組織により実施した。

栗橋宿跡第９地点第１次発掘調査は、平成 29 年 10 月１日から平成 30 年３月 31 日まで実施し、岩瀬譲、大屋道則、魚水環、田續良太が担当した。

第２次調査は、平成 30 年４月１日から平成 31 年３月 31 日まで実施し、岩瀬譲、大屋道則、劔持和夫、桑原安須美、大木丈夫が担当した。

整理・報告書作成事業は、令和２年４月１日から平成４年３月 31 日まで実施し、村山卓、高橋杜人（令和２年４月～令和３年３月・令和４年１～３月）、高橋一生（令和３年４月～ 11 月）、福田 聖（令和３年 12 月）が担当した。

報告書は令和４年３月 22 日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 474 集として印刷、刊行した。

6　発掘調査における基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。空中写真撮影は、第１次調査を株式会社新日本エグザ、第２次調査を三和航測株式会社に委託した。

7　発掘調査における自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

8　発掘調査における写真撮影は各担当者が行い出土遺物の写真撮影は村山が行った。巻頭図版用の遺物撮影は、小川忠博氏に委託した。

9　文字資料の釈文は、久喜市教育委員会・久喜市立郷土資料館及び依田英樹の協力を得た。

10　出土品の整理と図版作成は、村山、福田、高橋一生、高橋杜人が行い、木製品については矢部瞳、金属製品については瀧瀬芳之、石製品・土製品については水村雄功、酒盃の調査については魚水環の協力を得た。また、鍛冶関連遺物については、魚水の協力を得て高橋杜人が整理した。町並みの復元、文献調査にあたっては、劔持和夫の協力を得た。

11　文献調査に際して、久喜市立郷土資料館より「栗橋宿往還絵図」に関する資料提供を受けた。

12　本書の執筆は、Ｉ－１を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、その他を村山・高橋一生・

高橋杜人が行った。また、金属製品を瀧瀬、木製品を矢部、酒盃を魚水が一部分担して執筆した。

13　本書の編集は村山が行った。

14　本書にかかる諸資料は、令和４年４月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

15　発掘調査と本書の作成に際し、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝致します。（敬称略）

久喜市教育委員会　池尻　篤　井上美奈子
岩浪雛子　鈴木裕子　富元久美子　中野高久
中村和夫　野坂知広　堀内謙一　巻島千明
丸山謙司　両角まり

凡　例

1　栗橋宿跡第９地点におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に示した方位はすべて座標北を示す。

　Ｅ７－Ｈ５グリッド北西杭の座標は、Ｘ＝15530.000ｍ、Ｙ＝－11660.000ｍ、北緯36°08′23.6540″東経139°42′13.5751″である。

2　調査に際して使用したグリッド名称は、事業地内の全体を覆うように設定した。座標値Ｘ＝16000.000ｍ、Ｙ＝－12300.000ｍ を北西の原点（Ａ１－Ａ１グリッド）とし、100×100ｍの大グリッドを設定し、さらにその中を10×10ｍの小グリッドに細分した。

3　グリッドの名称は、北西原点を基点に北から南にアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ…）、西から東に数字（１・２・３…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。同様に、小グリッドは各グリッドの北西隅を基点に、北から南にＡ～Ｊ、西から東に１～10とし、グリッド内を100に区分した。

　これらを合わせた呼称は、ハイフォン（－）をはさみ、大グリッドを左に、小グリッドを右に表記した。（大グリッド）－（小グリッド）

4　本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

ＳＢ…建物跡　ＳＥ…井戸跡　ＳＤ…溝跡
ＳＯ…道路跡　ＳＫ…土壙
ＳＸ…性格不明遺構　Ｐ…ピット
基礎…基礎状遺構　桶…埋設桶

5　本書における挿図の縮尺は、以下の通りである。例外については図中に縮尺とスケールを示した。

全測図　1/400　区割り図　1/200
遺構図　1/120・1/80・1/60・1/30
遺物実測図・拓影図　1/2・1/3・1/4・1/6
建物等の遺構図は原則、日光道中側を上にして示した。

6　遺構断面図に表記した水準数値は、全て海抜標高（単位ｍ）を表す。

7　遺物観察表の表記は以下のとおりである。

・遺物計測値は、陶磁器・土器等をcm、銭貨をmm、重さをｇ単位とした。
・計測値の（　）は復元推定値、［　］は現存値を示す。
・陶磁器の計測値のうち、口径は口縁上端部の径を、底径は畳付下端部の径を示した。蓋は底径欄に下端の径を示した。輪高台状のつまみが付く蓋は口径欄につまみ上端部の径を示した。
・瓦の計測値は、「長さ」に瓦当面からの長さ（奥行）、「幅」に全幅、「径」に瓦当部の軒丸部分の径を記載した。
・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。
　Ａ：雲母　Ｂ：片岩　Ｃ：角閃石　Ｄ：長石　Ｅ：石英　Ｆ：軽石　Ｇ：砂粒子　Ｈ：赤色粒子　Ｉ：白色粒子　Ｊ：針状物質　Ｋ：黒色粒子　Ｌ：その他
・焼成は良好・普通・不良の３段階に分けて示した。
・残存率は器形に対する大まかな遺存程度を％で示した。
・備考には出土位置、煤の付着、推定生産地、文様の特徴、特筆される事項等を記した。陶磁器では（　）内に慣用名を記した。

8　遺物実測図の網かけは漆、被熱、タール付着等の範囲を表す。網かけの濃度によって種類を区分し、図中に例示した。主な網かけは以下のとおりである。

赤漆20%　茶漆30%　黒漆35%　炭化50%

9　本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の１/50000 地形図、久喜市発行の１/2500 都市計画図を編集のうえ、使用した。

10　遺構番号は、原則、調査時のものを用いた。調査の都合上、遺構番号に多くの欠番が生じているが、これらについても欠番のまま扱った。欠番遺構および特に変更したものは下記の表に示した。

11　文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

遺構番号振替え・欠番一覧表

新	旧	備考
SB4	SK29	同一遺構と認識
SB4	SK59	同一遺構と認識
SB4	SK60	同一遺構と認識
SB4	SK61	同一遺構と認識
SB5	SD3	名称変更
SB7	SX1	同一遺構と認識
SB8	SX4	同一遺構と認識
SB9	—	新規発番
SB10	—	新規発番
桶 5	SK15	名称変更
桶 5	第二面 SK353	同一遺構と認識
桶 45	SK89	名称変更
桶 46	SK123	名称変更
桶 47	SK215	名称変更
桶 48	SK228	名称変更
SE1	SK30	名称変更
SE3	SK104	同一遺構と認識
SE4	SK256	名称変更
SK4	SK67	同一遺構と認識
SK12	桶 2	同一遺構と認識
SK12	SK13	同一遺構と認識
SK97	二面 SK388	同一遺構と認識

新	旧	備考
SK112	SK113	同一遺構と認識
SK145a	SK145	名称変更
SK145b	SK145	名称変更
SK202	SK307	同一遺構と認識
SK226	二面 SK650	同一遺構と認識
SK229a	SK229	名称変更
SK229b	SK229	名称変更
SK263	SK258	同一遺構と認識
SK293	第二面 SK412	同一遺構と認識
SK617（二面）	SK236	同一遺構と認識
SK688	SK97	同一遺構と認識
SK689	SX2	名称変更
SK690	SK159	SK159 を２遺構に分割
SD15a	地境 1	名称変更
SD15b	地境 1	名称変更
SD16	地境 2	名称変更
SD17	地境 3	名称変更
SD18	地境 4	名称変更
SD19	地境 5	名称変更
SD20	地境 6	名称変更
SD21	地境 7	名称変更
SD22	地境 8	名称変更
SD23	地境 9	名称変更
SD24	地境 10	名称変更
E7-F5 P3	—	新規発番
E7-G4 P3	SK241	名称変更

新	旧	備考
E7-G4 P4	SK242	名称変更
E7-H4 P2	橘 15 P2	名称変更
E7-H5 P1	SK327 b	名称変更
E7-J5 P6	F7-A5 P4	名称変更
欠番	SK76	位置不明
欠番	SK103	位置不明
欠番	SK115	位置不明
欠番	SK133	位置不明
欠番	SK180	番号重複
欠番	SK191	位置不明
欠番	SK225	位置不明
欠番	SK234	位置不明
欠番	SK237	位置不明
欠番	SK254	位置不明
欠番	SK266	位置不明
欠番	SK283	位置不明
欠番	SK288	位置不明
欠番	SK310	遺構として不成立
欠番	SK311	位置不明
欠番	SK315	位置不明
欠番	SK327a・c	位置不明
欠番	SK328	位置不明
欠番	SK329	位置不明
欠番	SK330	位置不明
欠番	E7-H6 P1	位置不明
欠番	E7-H6 P2	位置不明
欠番	E7-I6 P1	位置不明
欠番	E7-J5 P3	位置不明
欠番	E7-J5 P4	位置不明
欠番	F7-A5 P3	位置不明
欠番	F7-B7 P1	位置不明

目　次

（第１分冊）

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　　（1）発掘調査 …… 2
　　（2）整理・報告書の作成 …… 2
　3　発掘調査・報告書作成の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
　1　地理的環境 …… 4
　2　歴史的環境 …… 6
　　（1）中世の栗橋とその周辺 …… 6
　　（2）近世の栗橋とその周辺 …… 10
　　（3）栗橋宿の様子 …… 13
　　（4）幕末から近代の栗橋地区 …… 16
Ⅲ　遺跡の概要 …… 19
Ⅳ　第一面の遺構と遺物 …… 31
　1　建物跡 …… 31
　2　埋設桶 …… 118
　3　井戸跡 …… 145
　4　溝跡・竹樋 …… 167
　5　道路跡 …… 217
　6　土壙 …… 243
　　（1）第１区画（区画AA） …… 249
　　（2）第２区画（区画Z） …… 265
　　（3）第３区画（区画Y） …… 341

（第２分冊）

目次
　　（4）第４区画（区画X） …… 369
　　（5）第５区画（区画W） …… 463
　　（6）第６区画（区画V） …… 589
　　（7）第７区画（区画U） …… 625
　7　鍛冶関連遺物 …… 721
　8　文字資料 …… 748
　9　出土遺物一覧と遺構の時期 …… 751
Ⅴ　自然科学分析 …… 785
Ⅵ　調査のまとめ …… 793

（第３分冊）

目次
写真図版

挿図目次

（第１分冊）

第１図　埼玉県の地形…… 4
第２図　栗橋宿跡周辺の地形…… 5
第３図　周辺の遺跡…… 7
第４図　遺跡位置図…… 20
第５図　基本土層…… 22
第６図　第一面全体図…… 23
第７図　第一面区割図（１）…… 24
第８図　第一面区割図（２）…… 25
第９図　第一面区割図（３）…… 26
第10図　第一面区割図（４）…… 27
第11図　『絵図』と調査区の対比…… 28
第12図　調査前の敷地と地境に関わる遺構… 29
第13図　第１号建物跡（１）…… 32
第14図　第１号建物跡（２）…… 33
第15図　第１号建物跡（３）…… 34
第16図　第１号建物跡出土遺物（１）…… 35
第17図　第１号建物跡出土遺物（２）…… 36
第18図　第１号建物跡出土遺物（３）…… 37
第19図　第１号建物跡出土遺物（４）…… 38
第20図　第１号建物跡出土遺物（５）…… 40
第21図　第１号建物跡出土遺物（６）…… 41
第22図　第１号建物跡出土遺物（７）…… 42
第23図　第１号建物跡出土遺物（８）…… 43
第24図　第１号建物跡出土遺物（９）…… 44
第25図　第２号建物跡…… 47
第26図　第２号建物跡出土遺物（１）…… 48
第27図　第２号建物跡出土遺物（２）…… 50
第28図　第２号建物跡出土遺物（３）…… 50
第29図　第２号建物跡出土遺物（４）…… 51
第30図　第２号建物跡出土遺物（５）…… 52
第31図　第２号建物跡出土遺物（６）…… 53
第32図　第２号建物跡出土遺物（７）…… 54
第33図　第３号建物跡（１）…… 57
第34図　第３号建物跡（２）…… 58
第35図　第３号建物跡出土遺物（１）…… 59
第36図　第３号建物跡出土遺物（２）…… 60
第37図　第４号建物跡（１）…… 61
第38図　第４号建物跡（２）…… 62
第39図　第４号建物跡（３）…… 63
第40図　第４号建物跡出土遺物（１）…… 64
第41図　第４号建物跡出土遺物（２）…… 65
第42図　第５号建物跡（１）…… 67
第43図　第５号建物跡（２）…… 68
第44図　第５号建物跡出土遺物（１）…… 69
第45図　第５号建物跡出土遺物（２）…… 70
第46図　第６号建物跡（１）…… 72
第47図　第６号建物跡（２）…… 73
第48図　第６号建物跡（３）…… 74
第49図　第６号建物跡（４）…… 75
第50図　第６号建物跡出土遺物（１）…… 76
第51図　第６号建物跡出土遺物（２）…… 77
第52図　第６号建物跡出土遺物（３）…… 78
第53図　第６号建物跡出土遺物（４）…… 79
第54図　第６号建物跡出土遺物（５）…… 80
第55図　第７号建物跡（１）…… 82
第56図　第７号建物跡（２）…… 83
第57図　第７号建物跡（３）…… 84
第58図　第７号建物跡出土遺物（１）…… 85
第59図　第７号建物跡出土遺物（２）…… 86
第60図　第７号建物跡出土遺物（３）…… 87
第61図　第７号建物跡出土遺物（４）…… 87
第62図　第８号建物跡（１）…… 90
第63図　第８号建物跡（２）…… 91
第64図　第８号建物跡（３）…… 92
第65図　第８号建物跡（４）…… 93
第66図　第８号建物跡（５）…… 94
第67図　第８号建物跡（６）…… 95
第68図　第８号建物跡出土遺物（１）…… 96

第69図　第８号建物跡出土遺物（２）…… 97
第70図　第８号建物跡出土遺物（３）…… 98
第71図　第８号建物跡出土遺物（４）…… 99
第72図　第８号建物跡出土遺物（５）……100
第73図　第８号建物跡出土遺物（６）……101
第74図　第８号建物跡出土遺物（７）……102
第75図　第８号建物跡出土遺物（８）……103
第76図　第８号建物跡出土遺物（９）……104
第77図　第８号建物跡出土遺物（10）……105
第78図　第８号建物跡出土遺物（11）……106
第79図　第８号建物跡出土遺物（12）……107
第80図　第８号建物跡出土遺物（13）……108
第81図　第８号建物跡出土遺物（14）……109
第82図　第８号建物跡出土遺物（15）……110
第83図　第８号建物跡基礎の樽側板の長さ・幅・厚み……114
第84図　第９号建物跡……116
第85図　第10号建物跡……117
第86図　第１号埋設桶・出土遺物……119
第87図　第３・４号埋設桶・出土遺物……121
第88図　第５号埋設桶・出土遺物……122
第89図　第６号埋設桶・出土遺物……124
第90図　第７号埋設桶・出土遺物……125
第91図　第８号埋設桶・出土遺物……126
第92図　第９・10・11号埋設桶・出土遺物……128
第93図　第12号埋設桶・出土遺物……129
第94図　第13号埋設桶・出土遺物（１）…130
第95図　第13号埋設桶出土遺物（２）……131
第96図　第14号埋設桶・出土遺物……132
第97図　第15号埋設桶・出土遺物……133
第98図　第16号埋設桶・出土遺物……135
第99図　第17・18号埋設桶・出土遺物……136
第100図　第19号埋設桶……137
第101図　第19号埋設桶出土遺物……138
第102図　第20号埋設桶・出土遺物……139
第103図　第21・22号埋設桶・出土遺物……140
第104図　第23号埋設桶・出土遺物……141
第105図　第45号埋設桶・出土遺物……142
第106図　第46号埋設桶・出土遺物……143
第107図　第47号埋設桶・出土遺物……143
第108図　第48号埋設桶……144
第109図　第１～４号井戸跡……146
第110図　第１号井戸跡出土遺物（１）……147
第111図　第１号井戸跡出土遺物（２）……148
第112図　第１号井戸跡出土遺物（３）……149
第113図　第２号井戸跡出土遺物（１）……150
第114図　第２号井戸跡出土遺物（２）……151
第115図　第２号井戸跡出土遺物（３）……152
第116図　第２号井戸跡出土遺物（４）……153
第117図　第２号井戸跡出土遺物（５）……154
第118図　第２号井戸跡出土遺物（６）……155
第119図　第２号井戸跡出土遺物（７）……155
第120図　第２号井戸跡出土遺物（８）……156
第121図　第２号井戸跡出土遺物（９）……157
第122図　第３号井戸跡出土遺物（１）……158
第123図　第３号井戸跡出土遺物（２）……159
第124図　第３号井戸跡出土遺物（３）……159
第125図　第４号井戸跡出土遺物（１）……161
第126図　第４号井戸跡出土遺物（２）……162
第127図　第４号井戸跡出土遺物（３）……164
第128図　第４号井戸跡出土遺物（４）……165
第129図　第４号井戸跡出土遺物（５）……166
第130図　第１号溝跡……168
第131図　第１号溝跡出土遺物（１）……169
第132図　第１号溝跡出土遺物（２）……170
第133図　第１号溝跡出土遺物（３）……171
第134図　第１号溝跡出土遺物（４）……172
第135図　第２号溝跡……173
第136図　第２号溝跡出土遺物（１）……174
第137図　第２号溝跡出土遺物（２）……175
第138図　第４号溝跡（１）……177
第139図　第４号溝跡（２）……178
第140図　第４号溝跡出土遺物（１）……179

第141図　第４号溝跡出土遺物（２）……180
第142図　第１～３号竹樋配置図……181
第143図　第５～８号溝跡……182
第144図　第５号溝跡出土遺物（１）……183
第145図　第５号溝跡出土遺物（２）……184
第146図　第５号溝跡出土遺物（３）……184
第147図　第６～８号溝跡出土遺物……185
第148図　第15号溝跡（１）……187
第149図　第15号溝跡（２）……188
第150図　第15号溝跡出土遺物（１）……189
第151図　第15号溝跡出土遺物（２）……190
第152図　第16号溝跡・出土遺物（１）……191
第153図　第16号溝跡出土遺物（２）……192
第154図　第17号溝跡……193
第155図　第17号溝跡出土遺物（１）……194
第156図　第17号溝跡出土遺物（２）……196
第157図　第18号溝跡……197
第158図　第18号溝跡出土遺物……198
第159図　第19号溝跡……200
第160図　第19号溝跡出土遺物（１）……201
第161図　第19号溝跡出土遺物（２）……202
第162図　第19号溝跡出土遺物（３）……203
第163図　第19号溝跡出土遺物（４）……204
第164図　第19号溝跡出土遺物（５）……205
第165図　第19号溝跡出土遺物（６）……206
第166図　第19号溝跡出土遺物（７）……207
第167図　第20号溝跡・第4号竹樋……209
第168図　第20号溝跡出土遺物（１）……210
第169図　第20号溝跡出土遺物（２）……210
第170図　第21号溝跡出土遺物……211
第171図　第23号溝跡……212
第172図　第23号溝跡出土遺物……213
第173図　第24号溝跡……214
第174図　第24号溝跡出土遺物（１）……215
第175図　第24号溝跡出土遺物（２）……216
第176図　第24号溝跡出土遺物（３）……216
第177図　道路状遺構（１）……218
第178図　道路状遺構（２）……219
第179図　道路状遺構（３）……220
第180図　道路状遺構（４）……221
第181図　道路跡出土遺物（１）……223
第182図　道路跡出土遺物（２）……224
第183図　道路跡出土遺物（３）……225
第184図　道路跡出土遺物（４）……226
第185図　道路跡出土遺物（５）……227
第186図　道路跡出土遺物（６）……228
第187図　道路跡出土遺物（７）……229
第188図　道路跡出土遺物（８）……230
第189図　道路跡出土遺物（９）……231
第190図　道路跡出土遺物（10）……236
第191図　道路跡出土遺物（11）……237
第192図　道路跡出土遺物（12）……238
第193図　道路跡出土遺物（13）……239
第194図　道路跡出土遺物（14）……240
第195図　道路跡出土遺物（15）……241
第196図　道路跡出土遺物（16）……242
第197図　第66号土壙……249
第198図　第66号土壙出土遺物（１）……250
第199図　第66号土壙出土遺物（２）……251
第200図　第66号土壙出土遺物（３）……252
第201図　第66号土壙出土遺物（４）……253
第202図　第131号土壙……254
第203図　第131号土壙出土遺物（１）……255
第204図　第131号土壙出土遺物（２）……256
第205図　第131号土壙出土遺物（３）……258
第206図　第131号土壙出土遺物（４）……259
第207図　第１区画の土壙……261
第208図　第１区画の土壙出土遺物（１）…261
第209図　第１区画の土壙出土遺物（２）…262
第210図　第１区画の土壙出土遺物（３）…263
第211図　第１区画の土壙出土遺物（４）…263
第212図　第１区画の土壙出土遺物（５）…264
第213図　第４号土壙……266
第214図　第４号土壙出土遺物（１）……267

第215図　第４号土壙出土遺物（２）……268
第216図　第４号土壙出土遺物（３）……270
第217図　第99号土壙……271
第218図　第99号土壙出土遺物（１）……272
第219図　第99号土壙出土遺物（２）……273
第220図　第99号土壙出土遺物（３）……274
第221図　第99号土壙出土遺物（４）……275
第222図　第122号土壙 ……276
第223図　第122号土壙出土遺物（１）……277
第224図　第122号土壙出土遺物（２）……278
第225図　第122号土壙出土遺物（３）……279
第226図　第122号土壙出土遺物（４）……280
第227図　第２区画の土壙（１）……281
第228図　第２区画の土壙（２）……292
第229図　第２区画の土壙（３）……293
第230図　第２区画の土壙（４）……294
第231図　第２区画の土壙（５）……295
第232図　第２区画の土壙出土遺物（１）…295
第233図　第２区画の土壙出土遺物（２）…296
第234図　第２区画の土壙出土遺物（３）…297
第235図　第２区画の土壙出土遺物（４）…298
第236図　第２区画の土壙出土遺物（５）…299
第237図　第２区画の土壙出土遺物（６）…300
第238図　第２区画の土壙出土遺物（７）…301
第239図　第２区画の土壙出土遺物（８）…302
第240図　第２区画の土壙出土遺物（９）…303
第241図　第２区画の土壙出土遺物（10）…304
第242図　第２区画の土壙出土遺物（11）…305
第243図　第２区画の土壙出土遺物（12）…306
第244図　第２区画の土壙出土遺物（13）…307
第245図　第２区画の土壙出土遺物（14）…308
第246図　第２区画の土壙出土遺物（15）…309
第247図　第２区画の土壙出土遺物（16）…310
第248図　第２区画の土壙出土遺物（17）…311
第249図　第２区画の土壙出土遺物（18）…312
第250図　第２区画の土壙出土遺物（19）…313
第251図　第２区画の土壙出土遺物（20）…314
第252図　第２区画の土壙出土遺物（21）…315
第253図　第２区画の土壙出土遺物（22）…316
第254図　第２区画の土壙出土遺物（23）…317
第255図　第２区画の土壙出土遺物（24）…318
第256図　第２区画の土壙出土遺物（25）…319
第257図　第２区画の土壙出土遺物（26）…320
第258図　第２区画の土壙出土遺物（27）…321
第259図　第２区画の土壙出土遺物（28）…330
第260図　第２区画の土壙出土遺物（29）…330
第261図　第２区画の土壙出土遺物（30）…331
第262図　第２区画の土壙出土遺物（31）…332
第263図　第２区画の土壙出土遺物（32）…333
第264図　第２区画の土壙出土遺物（33）…334
第265図　第２区画の土壙出土遺物（34）…335
第266図　第２区画の土壙出土遺物（35）…336
第267図　第２区画の土壙出土遺物（36）…337
第268図　第２区画の土壙出土遺物（37）…338
第269図　第２区画の土壙出土遺物（38）…339
第270図　第50号土壙……342
第271図　第50号土壙出土遺物（１）……343
第272図　第50号土壙出土遺物（２）……343
第273図　第50号土壙出土遺物（３）……343
第274図　第78・79号土壙……344
第275図　第78号土壙出土遺物……345
第276図　第85号土壙……346
第277図　第85号土壙出土遺物……347
第278図　第305号土壙 ……347
第279図　第305号土壙出土遺物（１）……348
第280図　第305号土壙出土遺物（２）……349
第281図　第305号土壙出土遺物（３）……349
第282図　第３区画の土壙（１）……351
第283図　第３区画の土壙（２）……352
第284図　第３区画の土壙（３）……353
第285図　第３区画の土壙（４）……354
第286図　第３区画の土壙出土遺物（１）…355
第287図　第３区画の土壙出土遺物（２）…357
第288図　第３区画の土壙出土遺物（３）…358

第289図　第３区画の土壙出土遺物（４）…359
第290図　第３区画の土壙出土遺物（５）…360
第291図　第３区画の土壙出土遺物（６）…361
第292図　第３区画の土壙出土遺物（７）…362
第293図　第３区画の土壙出土遺物（８）…364
第294図　第３区画の土壙出土遺物（９）… 365
第295図　第３区画の土壙出土遺物（10）… 366
第296図　第３区画の土壙出土遺物（11）… 366
第297図　第３区画の土壙出土遺物（12）… 367
第298図　第３区画の土壙出土遺物（13）… 368

表目次

（第１分冊）

第１表　周辺の遺跡一覧…… 8
第２表　第一面建物跡一覧表…… 31
第３表　第１号建物跡出土遺物観察表（１）… 38
第４表　第１号建物跡出土遺物観察表（２）… 40
第５表　第１号建物跡出土遺物観察表（３）… 42
第６表　第１号建物跡出土遺物観察表（４）… 43
第７表　第１号建物跡出土遺物観察表（５）… 44
第８表　第２号建物跡出土遺物観察表（１）… 49
第９表　第２号建物跡出土遺物観察表（２）… 50
第10表　第２号建物跡出土遺物観察表（３）… 50
第11表　第２号建物跡出土遺物観察表（４）… 55
第12表　第３号建物跡出土遺物観察表（１）… 59
第13表　第３号建物跡出土遺物観察表（２）… 60
第14表　第４号建物跡出土遺物観察表（１）… 65
第15表　第４号建物跡出土遺物観察表（２）… 66
第16表　第５号建物跡出土遺物観察表（１）… 69
第17表　第５号建物跡出土遺物観察表（２）… 70
第18表　第６号建物跡出土遺物観察表（１）… 76
第19表　第６号建物跡出土遺物観察表（２）… 80
第20表　第６号建物跡出土遺物観察表（３）… 80
第21表　第７号建物跡出土遺物観察表（１）… 86
第22表　第７号建物跡出土遺物観察表（２）… 87
第23表　第７号建物跡出土遺物観察表（３）… 87
第24表　第８号建物跡出土遺物観察表（１）… 97
第25表　第８号建物跡出土遺物観察表（２）… 97
第26表　第８号建物跡出土遺物観察表（３）…111
第27表　第８号建物跡基礎の樽部材の計測表 …112
第28表　第一面埋設桶一覧表……118
第29表　第１号埋設桶出土遺物観察表 ……120
第30表　第３号埋設桶出土遺物観察表 ……123
第31表　第５号埋設桶出土遺物観察表 ……123
第32表　第６号埋設桶出土遺物観察表 ……124
第33表　第７号埋設桶出土遺物観察表 ……125
第34表　第８号埋設桶出土遺物観察表 ……126
第35表　第10・11号埋設桶出土遺物観察表 ……128
第36表　第12号埋設桶出土遺物観察表 ……129
第37表　第13号埋設桶出土遺物観察表（１）…130
第38表　第13号埋設桶出土遺物観察表（２）…132
第39表　第14号埋設桶出土遺物観察表 ……132
第40表　第15号埋設桶出土遺物観察表 ……133
第41表　第16号埋設桶出土遺物観察表 ……135
第42表　第17・18号埋設桶出土遺物観察表 ……137
第43表　第19号埋設桶出土遺物観察表 ……139
第44表　第20号埋設桶出土遺物観察表 ……139
第45表　第22号埋設桶出土遺物観察表 ……140
第46表　第23号埋設桶出土遺物観察表 ……141
第47表　第45号埋設桶出土遺物観察表 ……142
第48表　第46号埋設桶出土遺物観察表 ……143
第49表　第47号埋設桶出土遺物観察表 ……143
第50表　第一面井戸跡一覧表……145
第51表　第１号井戸跡出土遺物観察表（１）…147
第52表　第１号井戸跡出土遺物観察表（２）…148
第53表　第１号井戸跡出土遺物観察表（３）…149
第54表　第２号井戸跡出土遺物観察表（１）…152

第55表　第２号井戸跡出土遺物観察表（２）…154
第56表　第２号井戸跡出土遺物観察表（３）…154
第57表　第２号井戸跡出土遺物観察表（４）…155
第58表　第２号井戸跡出土遺物観察表（５）…155
第59表　第２号井戸跡出土遺物観察表（６）…156
第60表　第２号井戸跡出土遺物観察表（７）…157
第61表　第３号井戸跡出土遺物観察表（１）…158
第62表　第３号井戸跡出土遺物観察表（２）…159
第63表　第３号井戸跡出土遺物観察表（３）…159
第64表　第４号井戸跡出土遺物観察表（１）…163
第65表　第４号井戸跡出土遺物観察表（２）…166
第66表　第４号井戸跡出土遺物観察表（３）…166
第67表　第一面溝跡一覧表……167
第68表　第１号溝跡出土遺物観察表（１）……169
第69表　第１号溝跡出土遺物観察表（２）……170
第70表　第１号溝跡出土遺物観察表（３）……171
第71表　第１号溝跡出土遺物観察表（４）……172
第72表　第２号溝跡出土遺物観察表（１）……174
第73表　第２号溝跡出土遺物観察表（２）……175
第74表　第４号溝跡出土遺物観察表（１）……180
第75表　第４号溝跡出土遺物観察表（２）……180
第76表　第５号溝跡出土遺物観察表（１）……183
第77表　第５号溝跡出土遺物観察表（２）……184
第78表　第５号溝跡出土遺物観察表（３）……184
第79表　第６～８号溝跡出土遺物観察表……185
第80表　第15号溝跡出土遺物観察表（１）……190
第81表　第15号溝跡出土遺物観察表（２）……190
第82表　第16号溝跡出土遺物観察表（１）……191
第83表　第16号溝跡出土遺物観察表（２）……192
第84表　第17号溝跡出土遺物観察表（１）……195
第85表　第17号溝跡出土遺物観察表（２）……196
第86表　第18号溝跡出土遺物観察表……198
第87表　第19号溝跡出土遺物観察表（１）……203
第88表　第19号溝跡出土遺物観察表（２）……204
第89表　第19号溝跡出土遺物観察表（３）……205
第90表　第19号溝跡出土遺物観察表（４）……206
第91表　第19号溝跡出土遺物観察表（５）……207
第92表　第20号溝跡出土遺物観察表（１）……210
第93表　第20号溝跡出土遺物観察表（２）……211
第94表　第21号溝跡出土遺物観察表……211
第95表　第23号溝跡出土遺物観察表……213
第96表　第24号溝跡出土遺物観察表（１）……216
第97表　第24号溝跡出土遺物観察表（２）……216
第98表　道路跡出土遺物観察表（１）……231
第99表　道路跡出土遺物観察表（２）……238
第100表　道路跡出土遺物観察表（３）……239
第101表　道路跡出土遺物観察表（４）……240
第102表　道路跡出土遺物観察表（５）……241
第103表　道路跡出土遺物観察表（６）……242
第104表　第一面土壙一覧表……243
第105表　第１区画土壙一覧表……249
第106表　第66号土壙出土遺物観察表（１）……251
第107表　第66号土壙出土遺物観察表（２）……252
第108表　第66号土壙出土遺物観察表（３）……253
第109表　第131号土壙出土遺物観察表（１）…257
第110表　第131号土壙出土遺物観察表（２）…259
第111表　第131号土壙出土遺物観察表（３）…259
第112表　第１区画の土壙出土遺物観察表（１）……261
第113表　第１区画の土壙出土遺物観察表（２）……262
第114表　第１区画の土壙出土遺物観察表（３）……263
第115表　第１区画の土壙出土遺物観察表（４）……264
第116表　第１区画の土壙出土遺物観察表（５）……264
第117表　第２区画土壙一覧表……265
第118表　第４号土壙出土遺物観察表（１）……269
第119表　第４号土壙出土遺物観察表（２）……270
第120表　第99号土壙出土遺物観察表（１）……273
第121表　第99号土壙出土遺物観察表（２）……273
第122表　第99号土壙出土遺物観察表（３）……275
第123表　第122号土壙出土遺物観察表（１）…278

第124表　第122号土壙出土遺物観察表（２）　…279
第125表　第122号土壙出土遺物観察表（３）　…280
第126表　第17・18号土壙出土玉髄剥片一覧表 …284
第127表　第２区画の土壙出土遺物観察表（１）
……321
第128表　第２区画の土壙出土遺物観察表（２）
……330
第129表　第２区画の土壙出土遺物観察表（３）
……330
第130表　第２区画の土壙出土遺物観察表（４）
……332
第131表　第２区画の土壙出土遺物観察表（５）
……335
第132表　第２区画の土壙出土遺物観察表（６）
……337
第133表　第２区画の土壙出土遺物観察表（７）
……339
第134表　第２区画の土壙出土遺物観察表（８）
……339
第135表　第３区画土壙一覧表 ……341
第136表　第50号土壙出土遺物観察表（１）……343
第137表　第50号土壙出土遺物観察表（２）……343
第138表　第50号土壙出土遺物観察表（３）……344
第139表　第78号土壙出土遺物観察表 ……346
第140表　第85号土壙出土遺物観察表 ……347
第141表　第305号土壙出土遺物観察表（１）　…348
第142表　第305号土壙出土遺物観察表（２）　…349
第143表　第305号土壙出土遺物観察表（３）　…349
第144表　第３区画の土壙出土遺物観察表（１）
……362
第145表　第３区画の土壙出土遺物観察表（２）
……365
第146表　第３区画の土壙出土遺物観察表（３）
……365
第147表　第３区画の土壙出土遺物観察表（４）
……366
第148表　第３区画の土壙出土遺物観察表（５）
……368
第149表　第３区画の土壙出土遺物観察表（６）
……368

Ⅰ　発掘調査の概要

１　発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所では「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画【大臣管理区間】」に基づき、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業として、利根川右岸の堤防を拡幅し、強化する事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、利根川上流河川事務所長から平成17年１月20日付け利上沿第18号で、埼玉県教育委員会教育長宛て、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

事業予定区域については埼玉県指定旧跡や周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成17年３月17日付け教生文第1780号で回答した。

当該箇所については、近世絵図等から栗橋宿の範囲であることは明らかであったが、遺構の状況等を把握するために平成23年12月に試掘調査を実施した。その結果、近世の遺構、遺物が多量に検出され、「栗橋宿跡」（№86-011）として埋蔵文化財包蔵地として登載した。

上記の埋蔵文化財の所在が明確になったことから、利根川上流河川事務所長宛てに、計画上やむを得ず現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査が必要な旨を回答し、取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることとなった。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、生涯学習文化財課（当時）の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて定期的に会議を開催し、各種の調整を行った。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が利根川上流河川事務所長から平成24年２月９日付け国関利上沿第27号で、埼玉県教育委員会教育長宛て提出された。それに対する埼玉県教育委員会教育長からの発掘調査が必要な旨の勧告は下記のとおりである。

平成24年２月９日付け教生文第４－1337号

また、同法第92条の規定により公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

〔１次調査〕

平成29年10月11日付け教生文第２-25号

〔２次調査〕

平成30年４月10日付け教文資第２-５号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

２　発掘調査・報告書作成の経過

（１）発掘調査

栗橋宿跡第９地点の発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業（加須・久喜地区）に伴って、平成29年度（第１次）、平成30年度（第２次）、に実施した。調査対象面積は2168.40㎡である。

第１次調査は、平成29年10月１日～平成30年３月31日まで実施した。

９月１日に発掘調査届等の事務手続きを行い、10月２日から発掘調査事務所設置、囲柵の設置工事を行った。10月４日から重機による表土掘削を開始し、第一面の検出を行った。10月半ばから補助員作業を開始し、遺構の確認作業に入った。11月前半に基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。

遺構確認作業の結果、近世の建物跡・井戸跡・土壙・埋設桶・区画施設などの遺構が検出された。確認された遺構は掘削・精査を行い、順次、土層断面図・平面図の作成、写真撮影等の記録作成作業を行った。２月から３月に自然科学分析委託、３月下旬に空中写真撮影委託を実施した。

第２次調査は、平成30年４月１日～平成31年３月31日まで実施した。

４月２日に発掘調査届等の事務手続きを行った。４月前半から補助員作業を再開し、遺構の掘削・精査・記録作成作業を行った。８月に重機掘削を実施して第二面の検出を行った。これに伴い9月前半に準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。第二面からも近世の井戸跡・土壙等が検出された。１月前半に自然科学分析委託、7月末と２月後半に高所作業車による写真撮影を実施した。平成30年７月後半と平成31年２月前半にに空中写真撮影委託を実施した。補助員作業は３月前半まで実施し、３月22日までに現場の埋め戻しおよび撤収作業を終えた。3月14日に第１次調査出土品と併せて発見届（幸手警察署長宛）と保管証（埼玉県教育委員会宛）を提出した。

（２）整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、令和２年４月１日から令和４年３月31日まで実施した。令和２年度は建物跡・井戸跡と出土遺物、令和３年度は土壙などの遺構と出土遺物の整理を行った。なお、令和３年度までは、主に第一面の検出遺構・出土遺物の整理を行い、第一面の土壙の一部・ピットと、第二面に関わる諸整理は令和４年度以降に本格的に行う予定である。

各年度の作業は、出土遺物の水洗、注記から開始し、順次、接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺物は、実測、トレース、採拓を経て、遺構ごとにパソコンで印刷用の挿図を作成した。実測には磁気式３次元位置計測装置、正射投影画像撮影機を活用した。掲載遺物の一部は写真を撮影し、写真図版の版下データを作成した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等の照合作業を行い、修正を加えた第二原図を作成した。第二原図は仮版組を行った上で、スキャナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いてデジタルトレースと編集作業を進め、印刷用の挿図版下データを作成した。

発掘調査で撮影された遺構写真は、選別を行い、写真図版用の版下データを作成した。

口絵写真は、特徴的な遺物を対象に、令和３年11月に委託撮影を実施した。

作成した遺構・遺物のデータ、自然科学分析結果等をもとに、原稿を執筆した。また、遺構・遺物の挿図と写真図版等を組み合わせて、報告書の割付・編集を行った。入稿後、３回の校正を経て、令和４年３月22日に、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第474集『栗橋宿跡Ⅶ』（本書）を刊行した。

遺物及び図面類・写真類・データ類等の諸資料は、令和４年２～３月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

３　発掘調査・報告書作成の組織

平成 29 年度（発掘調査）

理事長	塩野谷孝志	**調査部**	
常務理事兼総務部長	川目晴久	調査部長	赤熊浩一
総務部		調査部副部長	田中広明
総務部副部長	黒坂禎二	主幹兼調査第一課長	山本靖
総務課長	曽川浩二	主査	岩瀬譲
		主査	大屋道則
		主事	魚水環
		主事	田續良太

平成 30 年度（発掘調査）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	川目晴久	調査部長	瀧瀬芳之
総務部		調査部副部長	吉田稔
総務部副部長	田中広明	主幹兼調査第一課長	栗岡潤
総務課長	新井了悟	主査	岩瀬譲
		主査	大屋道則
		主任専門員	劒持和夫
		主事	桑原安須美
		主事	大木丈夫

令和２年度（整理・報告書作成）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	福沢景	調査部長	吉田稔
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	上野真由美
総務部副部長	山本靖	主任	村山卓
総務課長	鈴木裕一	主事	高橋杜人

令和３年度（整理・報告書作成）

理事長	依田英樹	**調査部**	
常務理事兼総務部長	福沢景	調査部長	田中広明
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	福田聖
総務部副部長	上野真由美	主任	村山卓
総務課長	鈴木裕一	主事	高橋一生
		主事	高橋杜人

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

栗橋宿跡は、ＪＲ宇都宮線と東武日光線の栗橋駅から北東へ約１km、埼玉県久喜市栗橋北２丁目3409−２他に所在する。

現在の久喜市は平成22年（2010）に久喜市、栗橋町、菖蒲町、鷲宮町の１市３町が合併して誕生した新市である。旧制でいうと、栗橋宿跡の在所地は葛飾郡栗橋町となる。

旧栗橋町は埼玉県の北東端に位置し、県境をなす利根川の東岸は茨城県古河市、および猿島郡五霞町である。昔日は日光道中（街道）の宿駅として栄え、利根川の流れを利した舟運も盛んであった。今日では地区内に上掲２路線の鉄道をはじめ、国道４号、同125号、県道３号さいたま栗橋線、同12号川越栗橋線などの幹線道が縦横に走り、広域運輸の要所となっている。この交通網を活かし、近年においては都心部通勤のためのベッドタウン、また物流基地や工業地として新たな発展を遂げつつある。

周辺の地形は概ね平坦であり、郊外には自然堤防に沿って延びる帯状の屋敷林と、それを囲む水田の広がる景観も残されている。栗橋宿跡はこの低平な中川低地の奥部、東流する利根川の河畔に立地している。

中川低地は縄文時代前期に奥東京湾だった部分が、後の海退に伴って形成された沖積低地である。南北に長大で、ともにローム台地（洪積層）である西側の大宮・館林台地、東側の猿島・下総台地を分けている。栗橋地区周辺では沖積層の厚さは30〜40mにも達し、縄文海進時に棲息していた貝類の殻を含む、軟弱な泥層の広がりが確認されている（久喜市教育委員会2008）。

弥生時代から古墳時代になると、北部の加須地域で地殻変動（関東造盆地運動）による地盤沈降が発現し、次第に低地（加須低地）の形成をみる

第１図　埼玉県の地形

ようになる。沈降運動の進行とともに、熊谷から南方の川越方面へ流下していた利根川は、やがて東方の加須（低地）方面へ大きく流向を転ずる。結果、大宮・館林台地は南北に分断され、沿川部は埋没して漸次低地化していく。

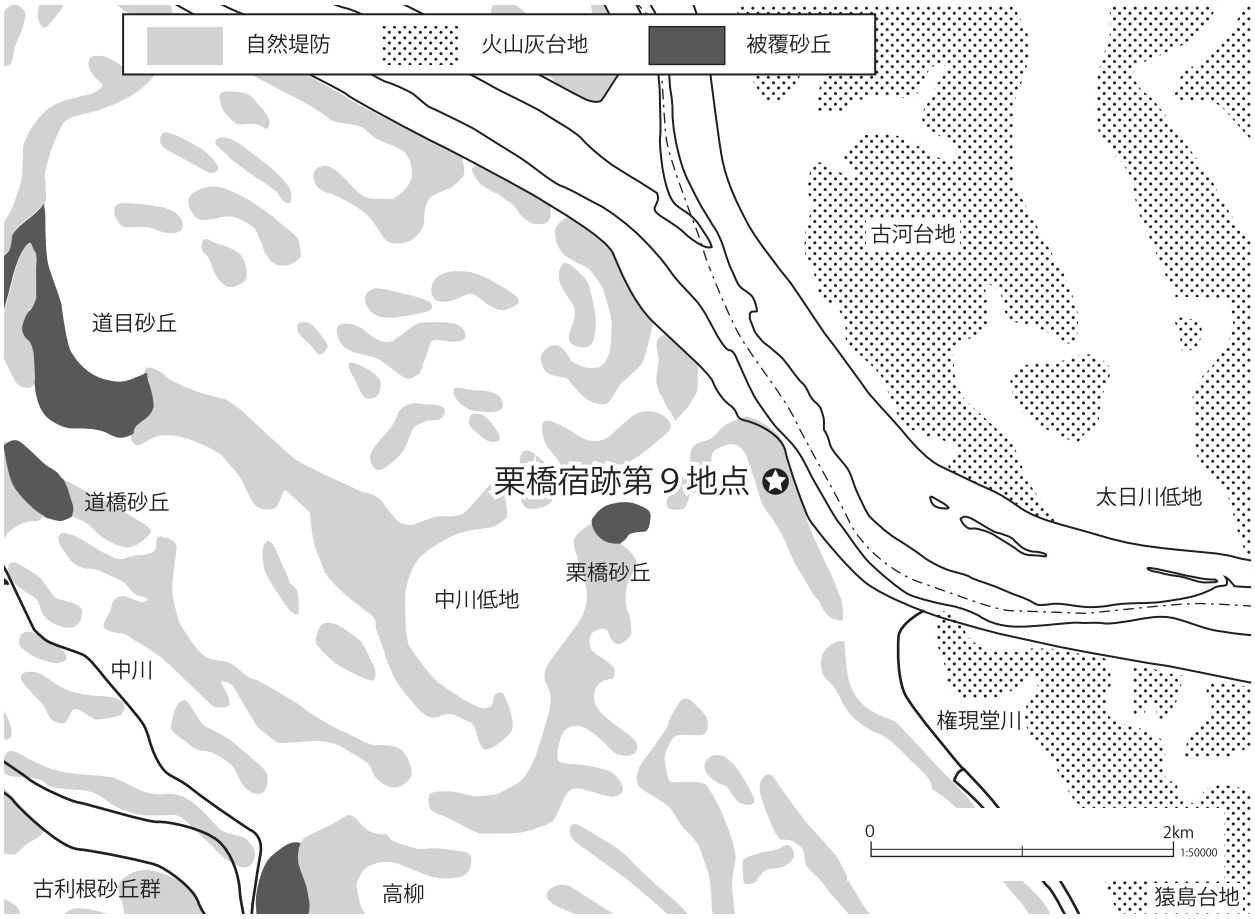
この現象は古墳の調査でも確認されており、行田市の真名板高山古墳（堀口1992）や羽生市の小松１号墳（矢口・瀧瀬1996）などは、地表下３m程に埋没した状態であった。

奈良時代から平安時代になると、加須低地（中川低地）では河川の氾濫が広域化し、関東造盆地運動に伴う地盤沈降と相俟って、利根川や渡良瀬川など、大河川が集中して流れ下る大規模な河成平野が形成されていく。栗橋宿跡の周辺では、表層約20mが河川堆積による沖積層となっている。

両河をはじめ、会の川、合の川、北川辺蛇行流路、島川、浅間川、大落古利根川、庄内古川の自然流下は加須低地に多くの砂礫を供給し、諸河川の両岸に自然堤防や後背湿地を発達させた。また、浅間川と会の川が大落古利根川に合流する久喜市栗橋町高柳には、大河の証しである河畔砂丘が形成された（埼玉県1993）。

こうした低地部に対する人為的な改変は、徳川家康が関東を領有するようになると急速に進められることになる。所謂「利根川東遷」と呼ばれる、利根川流路の改修工事である。

東遷事業は流路そのものを新たに開削し、それまでの自然流下の道筋を締め切るなど、非常に大掛かりな工事であった。事業の進捗とともに、栗橋地区は北西側の古利根川（後に廃川）、東側の利根川（渡良瀬川・権現堂川）、南西側の中川



第２図　栗橋宿跡周辺の地形

（島川）で画され、各堤防が連接して「輪中」の地となっていく。江戸時代には島中川辺領（しまじゅうかわべりょう）と称され、北西の向川辺領、古河川辺領、東の関宿藩領とともに、利根川に沿った輪中地帯を形作った。

とはいえ、栗橋宿は低い自然堤防上に立地すること、河川に取り囲まれた町であること、人工的な流路変更で河流が不安定だったことなどから、大規模な改修や築堤工事を重ねてもなお、洪水の害や排水の難からは逃れきれなかった。実際、堤防上に構えられた日光道中栗橋関所も元禄３年（1690）、同８年、宝永元年（1704）、寛保２年（1742）の四度、利根川の氾濫で流失している。

洪水の被害は現代にまで及び、昭和22年（1947）のカスリーン台風では、加須市大利根地区において利根川の堤防が決壊し、栗橋地区も一面湖沼化するほどの災害に見舞われた。

利根川改修は江戸時代初期に本格化したが、決して完遂された訳ではなく、400年以上を経た今日にあっても、それは国土交通省の「首都圏氾濫区域堤防強化対策事業」に継承されているのである。

栗橋宿跡第９地点を含む日光道中栗橋宿は、その成立以前に渡良瀬川が形成した北西－南東方向の長さ約300m、幅120m程の自然堤防上に立地している。土質はシルト質、あるいは砂質である。遺跡付近の標高は11～12mを測り、南側の後背湿地に営まれる水田との比高差は約1.0mである。

明治10年（1877）頃の町や村の様子を記録した『武藏國郡村誌』栗橋宿の項には、地味として「色赤真土に少しく砂を混す質美にして稻粱菽麦に宜しく桑茶に適せす水利不便にして時々水旱に苦しむ」とある（埼玉県1955）。作物に挙げる粱は粟、菽は豆のことである。

２　歴史的環境

（１）中世の栗橋とその周辺

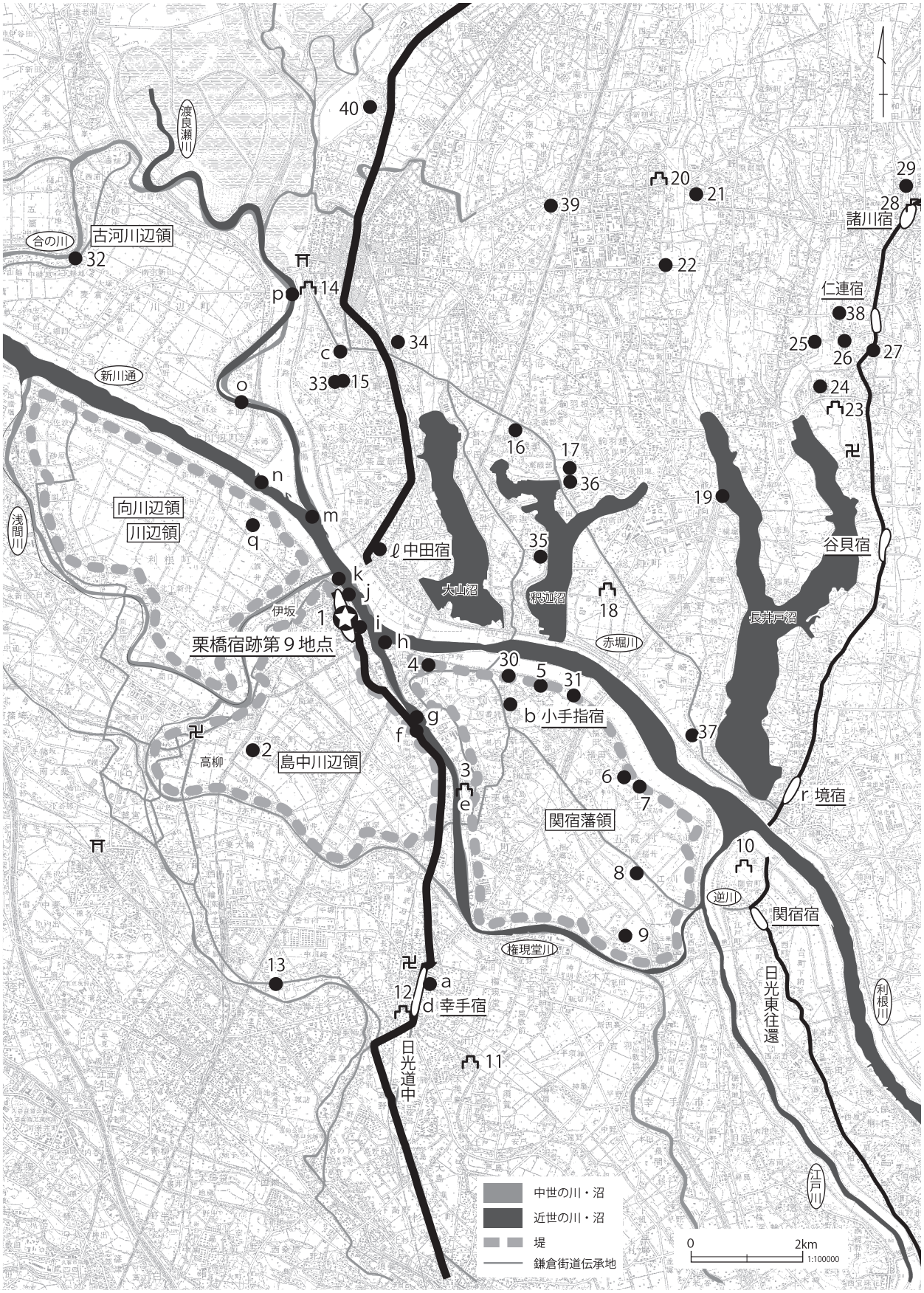
栗橋宿跡の所在する中川低地周辺の地表は、地形の沈降と河川の乱流による堆積土に厚く覆われている。そのため遺跡の分布は未だ不明な部分が多く、現在検出されているよりも多くの遺跡の存在が予想される。

栗橋地区では、古代以前に遡る遺跡は確認されていないが、後述するように、栗橋宿跡関連の発掘調査では、縄文土器・石器・土師器などの出土がある。縄文時代前期（約6000年前）の海進時には栃木市藤岡付近まで海が入り込み、栗橋地区は海底であった。海退後は河川が乱流し、付近は湿地のような状態が長く続いた。

当地は、平安時代には下総国葛飾郡新居郷に属したものと考えられる。12世紀には摂津源氏源頼政の郎党下河辺氏が関与して八条院領下河辺庄が立荘される。下河辺庄の成立の経緯ははっきりしないが、安元２年（1176）の八条院領目録にはみえないので、それ以後、下河辺行平が下河辺庄の荘司を安堵される治承４年（1180）までの間に成立したと考えられる。下河辺行平が荘司を安堵された記録は『吾妻鏡』にみられ、このことから、寄進者も下河辺氏である可能性が高い。

下河辺氏の本拠地もはっきりしないが、12世紀後半～13世紀前半の遺跡・文化財の伝来状況から、古河市大生郷周辺の可能性が指摘されている。下河辺氏のその後については良く分かっていない。『吾妻鏡』の建長２年（1250）の記事に下河辺左衛門尉が見えるのを最後に動向は追えなくなる。

また、『吾妻鏡』には大河戸兄弟に関する記事があり、三郎行元は地区内の高柳が本貫地とされている。高柳から伊坂にかけては、鎌倉街道に比定される古道が今も一部残っている。近くには静


渡良瀬川
古河川辺領
合の川
新川通
向川辺領
川辺領
浅間川
伊坂
栗橋宿跡第９地点
中田宿
大山沼
釈迦沼
赤堀川
長井戸沼
谷貝宿
諸川宿
仁連宿
小手指宿
高柳
島中川辺領
関宿藩領
境宿
逆川
関宿宿
権現堂川
幸手宿
日光道中
日光東往還
利根川
江戸川
中世の川・沼
近世の川・沼
堤
鎌倉街道伝承地
0
2km
1:100000

第３図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧（第３図）

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	栗橋宿本陣跡・栗橋宿跡	21	本田山遺跡	a	田宮町
2	佐間小草原遺跡	22	蔵王遺跡	b	小手指宿
3	栗橋城址	23	東の門西の門遺跡	c	徳淑院
4	宿北・宿東遺跡	24	北山田北久保遺跡	d	幸手宿
5	釈迦新田遺跡	25	御領遺跡	e	道標
6	同所新田遺跡	26	大膳屋敷跡	f	一里塚
7	新田遺跡	27	関根豪族屋敷跡	g	勘平の渡し
8	桜井前遺跡	28	諸川西門城址	h	川妻の渡し
9	瀬沼遺跡	29	本田遺跡	i	下河岸跡
10	関宿城址	30	上原遺跡	j	栗橋河岸
11	天神島城址	31	殿山塚	k	房川の渡し
12	幸手城址	32	倚井陣屋遺跡	ℓ	中田宿
13	渡辺氏屋敷跡	33	城地遺跡	m	本郷渡し
14	古河城址	34	石行塚遺跡	n	中渡し
15	鴻巣館跡	35	羽黒遺跡	o	鈴木の渡し
16	磯部館跡	36	釈迦才仏遺跡	p	古河の渡し
17	香取東遺跡	37	清水遺跡	q	旗井小学校
18	水海城址	38	新屋敷遺跡	r	境宿
19	向坪Ｂ遺跡	39	大塚遺跡		
20	円満寺城址（小堤城址）	40	野木宿遺跡		

御前終焉の地も伝承されている。

下河辺庄は13世紀後半には、北条氏一門の金沢氏の手に渡っており（建治元年『金沢実時譲状』金沢文庫古文書）、金沢氏が庇護した称名寺（神奈川県横浜市金沢区）の所領となる。その荘域は極めて広大で、古河市周辺や埼玉県東部地域から、現在の千葉県野田市にまで及んでいた。

下河辺庄は大きく３つの地域に分かれており、北から「野方」（茨城県古河市周辺）・「河辺」（埼玉県幸手市・杉戸町・吉川市・三郷市など）・「新方」（埼玉県春日部市・越谷市・松伏町など）と呼ばれている。13世紀後半以降に下河辺庄を支配した金沢称名寺の諸史料には、新方のエリアが頻繁に登場する。栗橋周辺の様子を伝える史料は少ないが、栗橋地区に当たる狐塚、高柳の両郷は金沢氏の支配を受けていたとされる。

その一部は南北朝期以降も金沢称名寺の所領として伝えられていくが、南北朝期には、小山氏の所領となっていた地域もあったようで（年不詳『小山氏所領注文案』小山文書）、小山政義の乱を経て、14世紀後半には鎌倉府・鎌倉公方の御料所となったらしい（『頼印僧正行状絵詞』）。小山義政の乱後は隣接する太田庄も御料所となっており、こういった経緯から、足利成氏も下河辺庄の北部である古河を拠点としたとみられる。

旧大利根町や旧栗橋町などの地域では、中世の遺跡はほとんど検出されていない。唯一、旧栗橋町の佐間小草原遺跡（２）が知られるのみである。中世墓を中心とした遺跡で、板碑37基、古瀬戸の瓶子、常滑の大甕などが工事中に出土した。板碑の年代は、文和３年（1354）から明応７年（1498）に及んでいるが、特に15世紀代の板碑が主体を占める状況である。平成17年の調査では、溝跡や土壙などが検出され、板碑、漆塗り椀などが出土した。留意されるのは、出土遺物のなかに中世瓦が数点含まれている点であり、墓域に伴う仏堂などの施設が存在した可能性が高い（久喜市教育委員会2008）。

中世段階の利根川は、羽生市川俣で会の川、加須市大越で北川辺蛇行流路跡、浅間川に分流して

いた。栗橋地区周辺では、洪水による大量の土砂の堆積と、関東造盆地運動による地盤の沈降が進み、遺跡の存在は定かではない。

ただし、これまでの栗橋宿跡関連の発掘調査では、縄文時代から中世の遺物が若干ながら出土している。

縄文時代の土器類は摩耗したものが僅かに認められるに過ぎず、遺跡の存在を想定できるほどのものではない。栗橋宿本陣跡で出土した縄文時代の石器類も、近世以降の好事家によって蒐集されたものである可能性が高い。一方、古墳時代前期の土師器は、各調査地点から複数の破片資料が得られており、近隣の微高地上に遺跡が存在する可能性は充分にあろう。

栗橋宿跡では、古墳時代後期から奈良平安時代の土器類の出土も少量認められる。さらに、中世段階の舶載磁器（青磁・白磁）・古瀬戸・常滑なども各地点から出土しており、長期の利用ではないかもしれないが、周辺域での断続的な土地利用が想定できる。

一方、渡良瀬川（太日川）の左岸、および権現堂川の左岸では、栗橋城址、古河城址をはじめとする数多くの遺跡が知られている。

近世初期までの「栗橋」といえば、現在の茨城県猿島郡五霞町の元栗橋を指す。享徳４年（1455）の享徳の乱後、御座所を古河に移した鎌倉公方足利成氏が古河公方と称して以降、元栗橋にはその支城の栗橋城（３）が置かれた。

鎌倉街道中ツ道（奥州道）の利根川の渡河点があった栗橋城は、水陸の要衝として後北条氏の関宿城（10）攻略の拠点となった。天正２年（1574）に関宿城開城後は北関東攻略の起点となったが、豊臣秀吉の小田原攻めにより天正18年（1590）に開城する。『鷲宮町史』、『町史五霞の生活誌』によれば、栗橋城の城下町は城の東側に広がり、古河方面への道と関宿方面への道が分岐していたという。また、南側には鎌倉街道中ツ道・奥州街道の渡船場があったとされている。遺跡の分布は、その街道沿い、および東側の福田近辺の関宿・古河を結ぶと考えられる道沿いに分布している。

古河城（14）も栗橋城同様に、後北条支配下の足利氏によって戦国城郭として整えられたが、やはり天正18年の小田原攻めによって破却された。

その後、徳川家康に従っていた小笠原秀征が古河城を修復し、近世以降も幕閣を含む歴代の城主によって拡張され、古河は城下町として栄えていく（古河市史編さん委員会1985、茨城県古河市教育委員会2004）。

古河城南の御所沼の奥に舌状に突出した台地上には、古河公方の御所として知られる鴻巣館跡（15）がある。初代古河公方足利成氏によって、享徳４年（1455）に築造された連郭式の城郭で、最後の古河公方足利義氏の娘氏姫の居館として知られている。足利氏の後裔、喜連川氏の尊信が寛永７年（1630）に古河を離れた後は、時宗十念寺の寺域となった。

渡良瀬川、利根川の左岸には、現在大小の沼沢地が多く認められる。その多くは利根川改修以後の赤堀川の開削によって形成されたもので、本来は猿島台地を開析した中小河川による支谷であった。その縁辺部に古河公方入府とともに、足利成氏の重臣たちの城や館が造られたと考えられる。小堤城跡（20）、磯部館跡（16）、水海城址（18）等が知られるが、詳細についてはほとんど明らかでない。茨城県側の城館跡や周辺の中世遺跡については、既刊の『栗橋関所番士屋敷跡』や『栗橋宿跡Ⅰ』（ともに埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018）に詳しいので参照されたい。なお、近年では古河市東の門西の門遺跡（23）で調査がおこなわれており、大規模な堀が巡らされた城跡が検出されている（古河市教育委員会ほか2021）。瀬戸美濃系陶器は、大窯第３～４段

階のものを中心とした組成で、栗橋宿成立直前の当該地域の遺物様相を考える上で注目される成果である。

（２）近世の栗橋とその周辺

利根川の改修

中世の古河を中心とした栗橋周辺の様相は、徳川家康の江戸入府によって一変する。

特に大きな影響を与えたのが、利根川改修事業、所謂利根川の東遷である。徳川幕府は、家康の関東入府後早々に利根川の改修に着手した。それまでの本流であった浅間川、会の川、古利根川の川筋から、新川通、赤堀川を開削して常陸川に結び、合わせて権現堂川を介して江戸川とつなぐ大規模な流路変更で、利根川東遷事業と言われるものである。その目的は、江戸を水害から守るためという治水が第一義とされてきた。また、古河城を合わせた江戸の北の防衛線とする説も重視されている。また、「内川廻し」と呼ばれる内陸航路の確保、水田開発目的とする説も有力である。

栗橋周辺では、文禄３年（1594）忍城主松平忠吉の命を受けた忍藩家老小笠原三郎左衛門が羽生市上新郷で会の川を締め切ったのに端を発する。元和７年(1621)には、利根川と常陸川を結びつける意図のもとに旧大利根町佐波から旧栗橋町中渡までの新川通、五霞町川妻から境町長井戸への赤堀川が開削された。しかし、当初の赤堀川の掘削は失敗に終わり猿島郡釈迦沼にまでしか至らず、現在の五霞町域に甚大な被害をもたらした。その後、２度の拡幅、増掘（二番堀、三番堀）を経て、漸く承応３年（1654）に通水に成功した。銚子へ至る新たな利根川の主流路が形成されたのである。更に、天保９年(1838)に会の川と浅間川が完全に締め切られ、利根川の流れは新川通の流路へと一本化され、現在に至っている。

利根川本流の開削、整備とは別に、天正４年(1576)の権現堂堤の築堤に始まる五霞町、幸手市域でも大規模な河川改修が行われた。赤堀川通水以前の利根川では、寛永18年(1641)に逆川が開削される。これにより常陸川と寛永12年(1635)から開削が進められていた江戸川が、関宿の北で繋がった。江戸川は、更に拡幅工事が進められ正保元年（1644）に完成し、前述の赤堀川三番堀の完成以前は、利根川、渡良瀬川両大河の水は、一部逆川を介して常陸川に注ぐものの、ほとんどはこの江戸川を流れていた。

このような利根川を中心とした河川改修の結果、前述の「内川廻し」の航路とともに、利根川上流域の上野、渡良瀬川上流域の下野との航路が確保され、北関東が江戸を中心とする経済圏の一部となった。また、利根川、荒川両大河の河川改修は、埼玉平野に広大な新田開発をもたらし、航路の開発とともに、その経済効果は絶大であった。

一連の工事の結果、栗橋地区を含む島中川辺領は、外縁部に囲堤が造られ河川の流路が固定されるとともに、領域全体が輪中となり、治水環境が整えられた。

日光道中と栗橋宿の成立

日光道中は、元の奥州街道（奥大道）のうちの江戸・宇都宮間を含み込み成立したものと捉えられる。寛永13年（1636）に日光東照宮の造替が竣工し、徳川家光・家綱が盛んに社参を行うようになる頃には、日光道中としての整備も進んだと考えられる。一方、元栗橋は、利根川の河川改修による度重なる洪水が発生し、宿と渡しは荒廃した。そのため、栗橋宿の位置を現在地に移したようで、『栗橋町史』では、その時期を元和７年（1621）前後と想定している。なお、『新編武蔵風土記稿』（以下『風土記稿』）では、慶長年中に池田鴨之介と並木五郎兵衛による開墾と伝え、明治10年（1877）頃の『武蔵國郡村誌』（以下『郡村誌』）や、明治45年の『栗橋町郷土誌』では、その時期を慶長19年としている。

すなわち『風土記稿』は、

栗橋宿は、江戸より十四里の行程なり、慶長年中下総國栗橋村の民池田鴨之助、並木五郎平と云もの願ひ、伊奈備前守忠次の指揮によりて開墾せしが、民家次第に増加しつひに宿並をなせり、故に下総國の方を元栗橋村と云ひ、當所を新栗橋と云、正保の國圖には上川邊新田と記し、傍に栗橋町ともにと細書し、別に又新栗橋町の名をも載せたり、後一村となりしは當所次第に繁昌し、いつしか上川邊新田の名を失ひ、其地を概して今の名となりしにや、―下略―

と記している。

また、『郡村誌』は「開墾家」池田鴨平の記事中で次のように述べている。

―前略―　慶長十九年鴨之助村民並木五郎平と謀り当所を開墾し竟に一村落をなし栗橋に対して新栗橋と号す元和八年将軍家日光社参の時本陣役を勤む(是より世々本陣となる)　―下略―

池田鴨平は『風土記稿』に見える鴨之助の後裔で、『郡村誌』当時の池田家当主である。

地誌の記述からすれば、栗橋宿は慶長19年（1614）、五霞町元栗橋の地に住居していた池田鴨之助、並木五郎平（五郎兵衛）を中心とする人々が移り住み、開拓して興した町ということになる。

両書に示された移転年代に対し、『久喜市栗橋町史　通史編上』（久喜市教育委員会2015）は、明確にはできないとしながらも、

「寛永元年（1624）には、関所が改めて設置されており、江戸と秋田を度々往返し、栗橋を通った秋田佐竹家家臣の『梅津政景日記』によれば、元和８年（1622）までの記述には「栗橋」とのみあるが、寛永３年には、「今栗橋」と「元栗橋」と区別されて記述されるようになる」

と記し、移転が行なわれたのは元和後半から寛永初年の間と考定している。

これまでの発掘調査の成果では、栗橋宿本陣跡などから、17世紀前葉に遡り得る土壙が検出されている。多量のかわらけを伴う様相から一般の集落の様相とは考え難い（『栗橋宿本陣跡』Ⅱ）。遅くとも寛永期頃までには宿場の機能を備えた町として成立していたものと考えられるが、遺構数が極端に少なく、続く時期の遺構がほとんど検出されない点をどう理解するのかが問題である。

前述のように、寛永期に入ると「今栗橋」と「元栗橋」を区別した史料がみられる。宿内深廣寺の石造名号塔群の銘文には、承応３年（1654）７月までに立てられた８基が「新栗橋」とみえるが、同年８月以降に立てられた12基は「栗橋」とのみあり、「新栗橋」「今栗橋」が「栗橋」として定着していく過程が窺われる。その時期（17世紀中葉）までには、今の栗橋が宿場として確立していたはずであるが、発掘調査で検出された当該期の遺構は極めて少なく、初期の栗橋宿を考える上で大きな問題点である。

日光道中と栗橋宿の本陣・脇本陣

栗橋宿を通る日光道中は、江戸日本橋を起点とする五街道の一つで、日本橋から終点の下野国日光坊中まで20宿、36里11町（約142.6㎞）の道程であった。初め奥州街道とされた道は、徳川歴代将軍が家康を祀る東照宮への参詣道として重要視されるようになる。そして事実上、日光が目的地となったことから日光道中となり、宇都宮から先の東北方面が奥州道中になったものと考えられている（久喜市教育委員会2015）。

日光道中の道筋が確立する以前、奥州へ向かう街道は一般に鎌倉街道中道、または奥大道と呼ばれ、鎌倉幕府にとって軍事上重要な道であった。中道は幸手において元栗橋へ向かう東回りの道と、鷲宮から北川辺を経由して古河へ達する西周りの道とに分岐していた。後者は自然堤防上の高まりを縫って北上する道で、江戸時代には旧栗橋町高柳で東へ折れ、古利根川に沿って栗橋宿へ至

る新道として整備される。この道は日光御廻道と呼ばれ、将軍の日光社参に際し、本道の日光道中が洪水などで通行不能となった場合の迂回路とされた。

栗橋宿は江戸日本橋から、千住宿－草加宿－越ヶ谷宿－粕壁宿－杉戸宿－幸手宿を経た、日光道中第７番目の宿場である。路程は江戸から14里15町（約56.6km）、幸手宿から２里３町（約8.2km）、次の中田宿まで18町（約２km）、古河宿まで１里20町（約6.1km）であった（久喜市教育委員会文化財保護課2020）。

利根川対岸の中田宿とは渡船で繋がれ、両宿は合宿で１宿と数えられていた。合宿とは、二つの宿で伝馬（各宿に規定の人馬を常備させ、幕府公用の貨物人員を次の宿へ継送する制度）を月の半分交替で勤めることをいう。

江戸時代の初期に「日光道中」の名称は確立していなかったともいわれるが、いずれにせよ、その宿駅として栗橋宿は成立したのである。街道の整備が先か、町の開拓が先か明らかでないものの、『風土記稿』に関東代官「伊奈備前守忠次の指揮によりて開墾せし」とあるので、おそらく両事業は個別単独ではなく、密接な関連の下、計画的かつ複合的に実施されたに違いない。

『郡村誌』に「開墾家」とされた池田家は代々栗橋宿本陣を勤めた家柄で、今般の堤防強化対策事業に伴う転居まで、本陣の跡地にお住まいになられていた。

本陣の跡地は「栗橋宿本陣跡」として発掘調査した範囲の北部であり、敷地境や建物跡の一部が検出された。池田家家紋の「揚羽蝶文」をデザインした鬼瓦や中国産を含む陶磁器類は、文政五年の大火で被災した本陣備品を含むものである。並木家も江戸時代を通じ、同じく上町で旅籠屋（萬屋？）を営んだ栗橋宿の名家であり、現在整理中の栗橋宿西本陣跡の一画にあたるものと考えられる。『栗橋宿絵図』（池田家所蔵・『栗橋町史　資料編一』所収）には、本陣池田家の位置に「御本陣」の記載があるが、その街道を挟んだ反対側に「往古仙臺様御本陣」「五郎平」などの記載がある。近年『伊達治家記録』から関所の検討を行った堀内謙一は、仙台藩との関りを示唆するこの注記に注目し「恐らく栗橋宿の開発者である二人、すなわち池田鴨之助の東側住居と並木五郎兵衛の西側住居にそれぞれ相当する敷地の可能性が高い。つまりこの絵図は、栗橋宿が開発された比較的初期の上一（栗橋宿で最初に開発された地区）の状況を描いているものと考えられる」と指摘している。また『栗橋宿絵図』については、関所番の名前の組み合わせから概ね18世紀中頃と推測している。

栗橋関所

町の移転と同じ頃、栗橋宿から利根川対岸の中田宿への渡河点には、新たに関所が置かれた。これを「栗橋関所」と通称するが、正式には「房川渡（ぼうせんのわたし）中田御関所」あるいは「中田御関所」という。

『風土記稿』には、

關所　利根川堤上にあり、其置れし年代詳ならず、見張番所を構へて往來の旅人を改む、是を房川渡中田御關所と唱ふ、往來改の條目を記せし高札を建、往古のことを傳へず、關所番人四人あり、是は寛永元年今の加藤木工兵衞、足立十右衞門、富田定右衞門、嶋田源次郎の祖先御抱となり、世々在住してこれを勤む、此内後年外御關所より來りし者も有と云

とある。開設年代は詳ならずとしながら、寛永元年（1624）以降には４名の番士がその任に当たっていると記す。

当初の番士は富田茂左衛門、新井喜平次、佐々木長左衛門、森又左衛門であったといわれる。新井は後に落合、森は後に加藤と改称している。後に幾度かの交替があり、寛政12年（1800）以降は『風土記稿』が挙げる加藤、足立、富田、嶋田

（島田）の４家に固定する。近年では落合家と仙台藩の関りについて個別の考察も行われており、各藩と交通の実態についても今後、検討が進むことが期待される（堀内2021）。

関所と番士は関東代官伊奈氏の支配下にあったが、寛保３年（1743）に伊奈忠尊が失脚した後は、栗橋宿周辺を支配する代官が所管するようになった（久喜市教育委員会2015）。

番士は代官所の手代に次ぐ下級武家の身分で、基本的には世襲であった。禄高は足立家のみが前任地（水戸街道の金町松戸関所）から引き継ぐ20俵４人扶持、他の３家は20俵２人扶持であった。因みにいえば、江戸町奉行所同心の禄は30俵２人扶持である。

関所、即ち番士の主たる任務は、女性や負傷者、不審者の通行を厳しく取り締まることにあった。関所の勤務は原則２名ずつの当番制で、明け六つ時から夕七つ時まで関所に詰めた。夜間は番士１名と宿民から雇用された下番１名が宿直した。参勤交代の大名家など、多人数の通行がある場合には全員が勤務することもあった。

番士４家は牛頭天王社（八坂神社）の西方、古利根川の堤防脇に各々屋敷を構えていた。これを拝領屋敷、または居屋敷と称した。屋敷は東から加藤家、足立家、嶋田家、富田家の順で並立していた。調査対象地外の富田家を除く各屋敷の規模や構造などについては、当事業団が発掘調査を実施した、栗橋関所番士屋敷跡の調査報告書（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018）を参照されたい。

先にも触れたように、堤防上に構えられていた関所は元禄３年、同８年、宝永元年、寛保２年の四度、利根川の氾濫により流失し、その度毎に再建されている。寛保二年の時は加藤家裏の堤防が決壊し、周囲より一段高い盛土上に建てられていたにも拘らず、屋敷は押し寄せた砂で軒先まで埋め尽くされている（埼玉県教育委員会2002）。

明治２年（1869）、新政府の行政が及ぶに至り、240年以上続いた房川渡中田御関所は廃止となる。番士４家も時を待たず任を解かれ、新たに置かれた葛飾県役所へ奉職することとなった。

（３）栗橋宿の様子

江戸を発した日光道中は幸手宿から北上し、栗橋宿の入り口で直角に左折、直ぐに右折すると長い北向きの直線路となる。宿の北端で再び右折、堤上の関所を経て中田宿へ向かう房川渡（渡船場）となる。この道筋は関所付近を除き、現在も主要地方道羽生外野・栗橋線に踏襲されている。『風土記稿』は栗橋宿の規模を長さ10町（1090ｍ）余、民家419軒とし、その多くは街道左右に透き間なく建ち並び、櫛の歯のごとくであると記す。

宿内には上町、中町、下町、三ツ俣、船戸、鍛治町の小名（地区名）があることが、『風土記稿』に記載されている。上町は街道沿いの北部で、本陣や脇本陣、問屋場、旅籠屋など宿の中枢的な施設が集中していた。北端で右折して関所へ向かう街道沿いは、上横町もしくは横町と呼ばれた。中町は同じく中央部、下町は南部で新町とも称される。本書報告の栗橋宿跡第９地点は中町（史料によっては「仲町」）に位置する。三ツ俣は牛頭天王社と関所番士屋敷の間、船戸は利根川堤防に沿った堤外（河川側）の町で、河岸場があり舟問屋などが立ち並んだ。鍛治町は上町と堤防に挟まれた地区で、渡船や舟運に携わる水主たちの住まいが密集していた。町の中心は北部の上町側で、昭和初期の上町では、本通りに面した家はその全てが瓦葺きであった。それに対して中町、新町（下町）は農家が多く、藁屋根の家々が目立ったという（久喜市教育委員会2011）。

『久喜市栗橋町史　資料編二』（久喜市教育委員会2013）に載る文政十二年（1829）の「栗橋宿外十二ヶ村農間渡世改帳（抄）」には、宿の大きさが記されていないものの、家数434軒、人口

1,772人とある。434軒のうち309軒は「農間商幷職人」で、建て前上は農業となっている。

一方、『大概帳』によれば、往還（街道）の距離は南隣の小右衛門村の境から房川渡船場まで15町13間（約1,658m）、道幅は６間半（約11.7m）、町並の長さは南北10町30間（約1,140m）である。人口は男869人、女872人の計1,741人、家数は本陣・脇本陣各１軒、旅籠屋25軒を含め、総数404軒とする。

『大概帳』に載る埼玉県内の他の５宿の人口、および家数は次のとおりである。

草加宿：3,619人、723軒（うち旅籠屋67軒）
越ヶ谷宿：4,303人、1,005軒（うち旅籠屋52軒）
粕壁宿：3,701人、733軒（うち旅籠屋45軒）
杉戸宿：1,663人、365軒（うち旅籠屋46軒）
幸手宿：3,937人、962軒（うち旅籠屋27軒）

杉戸宿を除くと、栗橋宿の人口や家数は他宿の半数以下で、合宿である中田宿の人口403人、家数69軒を加えてもその数は４宿に遠く及ばない。人口、家数ともに、関所や渡船場を有する街道の要衝にしては意外な数値である。なお、越ヶ谷宿は千住宿、宇都宮宿に次ぎ、日光道中では３番目の規模を有する繁華な宿場であった。

明治時代の『郡村誌』を見ると、栗橋宿の人口は男1,109人、女1,131人の計2,240人である。家数は戸数として本籍476戸、寄留４戸、社１戸、寺５戸が挙げられている。日光道中に該当する道については、これを「陸羽街道」と呼んで、小右衛門村から房川渡場まで15町55間（約1,745m）、道幅は４間（約7.2m）としている。

『大概帳』と比較すると、道幅が２間半（約4.5m）も狭くなっている。試みに『郡村誌』に載る他宿の「陸羽街道」幅を確認したところ、杉戸宿は５間、幸手宿は６間と記されている。両宿の幅からしても、栗橋宿のそれを４間とする『郡村誌』の記述には注意が必要である。現在の主要地方道羽生外野・栗橋線の幅は、路側帯を含めれば10mを超える。

これまでの発掘調査では、本陣跡の北辺部で道路跡が検出されている。硬化面の幅は６～７mで、関所へ続く往昔の街道そのものであることは間違いない（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2020a）。第一面で検出された道路跡の両側に敷設された木樋や、第二面で検出された側溝状の溝と土壙の間隔は、7.3～7.5m（およそ４間）と読み取ることができる。発掘調査前、この部分に存在した道路の幅は６m程であった。

この点について、『大概帳』は宿の南北を貫く街道の幅（６間半）で、『郡村誌』の記述は誤記や誤植ではなく、そこから折れて関所へ向かう街道の幅（４間）をそれぞれ示しているのではなかろうか。江戸時代の諸絵図が関所前の街道を心持ち細く描いているのも、故なきことではないのかもしれない。

宿内の生業について、『風土記稿』は宿駅関連と諸商とし、『大概帳』は農業の傍ら旅籠屋（25軒）や食物を提供する茶店の他、諸商を営む者が多いと記す。

天保14年（1843）～弘化２年（1845）頃に作成されたと考えられる久喜市所蔵の『栗橋宿往還絵図』には、町並の図とともに居住者名と職業が書き込まれている。同図によれば、職種は旅籠屋22軒（うち飯売旅籠屋２軒）、荒物屋12軒、煮売茶屋10軒、青物屋９軒、饂飩屋８軒、小売酒屋６軒、茶屋５軒、舂米屋５軒、餅菓子屋５軒、湯屋４軒、髪結４軒、豆腐屋３軒、糸屋３軒、畳職人３軒、塩物屋２軒、煙草屋２軒、足袋屋２軒、医師２軒、鍛冶屋２軒、乾物屋２軒、甘酒屋２軒、油屋２軒、出穀問屋２軒の他、駕籠屋、芋屋、舟問屋、質屋、古立道具屋、鍋釜屋、左官、附木屋、定足屋、絵師、仕立職人、綿屋、建具屋、飴屋、小間物屋、薬師屋、按摩各１軒などとなっている（他に明家、明地あり）。

一方、前出の「栗橋宿外十二ヶ村農間渡世改帳（抄）」には居酒屋27軒、髪結７軒、湯屋６軒、煮売屋５軒、質屋29軒（休業中８軒）が経営者名とともに記されている。『栗橋宿往還絵図』に比して質屋の軒数が異常に多いが、これは他職を兼業する者も載せたためであろうし、煮売屋が少なく居酒屋が多いのも、酒肴を提供する煮売茶屋や一部の旅籠屋をも含むためと解される。

『郡村誌』では、専ら男は農・工・商、女は農・商に携わるとする。

栗橋宿と舟運

栗橋宿は利根川河畔に拓けた町のため、舟船による物資運輸も盛んであった。船戸町（栗橋河岸）と宿の南端近く（下河岸）には河岸場が備わり、周辺農村の年貢米をはじめ、民間の荷も多数取り扱かわれた。

利根川では舟運による輸送が発達しており、栗橋近辺でも権現堂河岸と関宿河岸が古くから知られている。栗橋河岸は、近世当初の元禄年間には年貢米を江戸へ送る「津出し湊（河岸）」ではなかったが、明和８年（1771）には中里村の、天明期（1781～89）には加須市域の水深村の津出しが行われ、近世中・後期にはその役割があった。栗橋町史に『武蔵国郡村誌』から作成した栗橋町域の明治初期の船の一覧が掲載されているが、その数610艘に上る。いかに栗橋区域が舟運と密接な生活を送っていたかが分かる。

この内、栗橋宿が有していた舟運に関わった所謂川船は、高瀬舟10艘、小高瀬舟２艘、似艪（にたりひらた）船８艘、屋形船17艘である。

江戸まで荷を運んだ舟は荷下ろしの後、奥川積問屋を通じて塩、砂糖、肥料、木綿、瀬戸物などを積載して遡行の途に就いた。奥川積問屋とは特定の河岸場との取引権を有する問屋のことで、栗橋河岸を持ち場としたのは、江戸小網町二丁目の利根川屋多吉であった（久喜市教育委員会2015）。

栗橋河岸には、房川渡しから堤沿いに続く舟戸町の船着き場と、やや下った利根川と権現堂川の分岐付近の下河岸があった。

栗橋関所では、船改め役を務める船問屋が船荷を改める「船改め」が行われていた。『栗橋関所史料一』によれば、船改めは享保年間（1716～1736）に下河岸で行われていた。しかし浅間山噴火（1783）の泥流の影響で、利根川の川筋が変化して下河岸に接岸できなくなり、舟戸町近辺に場所を移したとされている。従って、津出し湊や、江戸との川船の往来に利用されたのは舟戸町の河岸場と推定される。

河岸には舟の手配と荷の積み下ろしを行う舟問屋があり、栗橋舟渡町の河岸場では伊勢屋と菊田屋が著名である。栗橋の関所では舟荷も改める必要があったが、実際の業務はこれら舟問屋に委託されていた。

近世の栗橋村

近世初頭では栗橋宿を含む井坂、松長、佐間、島川、広島、河原代、狐塚、中里、小右衛門の各村は幕府の蔵入地で、代官伊奈半十郎忠治によって支配されていた。伊奈氏の支配は関東諸国に及び、特に武蔵国東部の低地開発を強力に推し進めたことで知られている。その結果、開発された広大な新田は伊奈氏の支配地として引き継がれていった。利根川東遷事業による新田開発もその一環とも言えるだろう。

元禄10年（1697）の所謂元禄の地方直しでは、高柳村、高柳新田は酒井対馬守、島平村は酒井監物、広島村は久津見斧太郎、河原代村は久津見斧太郎・榊原大膳の旗本知行へ支配替えが行われた。

加えて、松長、間鎌、間鎌新田、佐間、佐間新田、井坂の各村は、18世紀中葉の延享年間（1744～1748）、19世紀前半から中葉の文政年間から安政年間に徳川御三卿領への支配替えとなった。

周辺の近世遺跡

栗橋周辺の近世遺跡は、日光道中と古河城を中心に展開する。

古河城（14）は、小笠原氏［天正18年（1590）～慶長７年（1602）］、戸田松平氏［～慶長17年（1612）］、小笠原氏［～元和５（1619）］、奥平氏［～元和8年（1622）］、永井氏［～寛永10年（1633）］、土井氏［～天和元年（1681）］、堀田氏［～貞享２年（1685）］、藤井松平氏［～元禄６年（1693）］、大河内松平氏［～正徳２年（1712）］、本多氏［～宝暦９年（1759）］、松井松平氏［～宝暦12年（1762）］、土井氏［～明治２年（1869）］と藩主が変遷した。歴代古河藩主によって、城の拡張、城下町の整備が続けられた。特に、度々将軍の日光参詣の宿城となったため、その都度、特別な手当金が支給され整備が進んだ。

利根川の東側は、利根川の河川改修以降も、この古河城を中心として遺跡が展開している。

旧総和町香取東遺跡（17）では18～19世紀の土壙(墓壙)、井戸跡、溝跡が検出された。南側に隣接する釈迦才仏遺跡（36)(茨城県教育財団1998)には、南北11.4m、東西8.4m、高さ1.0mの不整隅丸方形を呈する近世後半の塚が造られた。

長井沼の奥になる本田山遺跡（21）は、中世に引き続き近世でも墓地として継続している。柳橋城の南側となる旧総和町向坪Ｂ遺跡(19)(茨城県教育財団1986)からは近世の土壙、溝跡が検出され、土壙墓が含まれていると考えられる。長井沼東側の旧鎌倉街道は栃木県多功に通ずる日光東街道として、元和年間には整備されていたとされている。街道には仁連宿、谷貝宿が設けられた。仁連宿の北、諸川には中世から続く本田遺跡(29)（技研測量設計株式会社2010）があり、17世紀後半を中心とする掘立柱建物跡、竪穴状遺構、地下式坑、土壙、墓壙、井戸跡、溝跡が検出された。

利根川の西側では、近年の堤防強化対策事業に関わる発掘調査成果がある（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2021）。栗橋宿跡から10kmほど上流の本田遺跡では、利根川に隣接する水塚の調査が行われ、水塚の盛土・石積みと、その上の建物跡・隣接する蔵跡などが検出された。水塚を広範囲に発掘調査した事例は少なく、建物構造等を把握する上で貴重な成果となった。一方で、水塚と建物の構築順序などを遺構の観察から明確にすることは予想外に困難であった。特殊な近世構築物に関わる調査方法の確立が必要となろう。建物の基礎からは幕末～明治期の生活道具・建築材が多く出土し、清朝磁器や赤瓦の出土が特筆される。地方農村の遺物様相を窺うことができる好例である。

（４）幕末から近代の栗橋地区

幕末の栗橋宿

幕末の19世紀中葉には、天保の飢饉に端を発する打ちこわし、慶應２年（1866）から始まる武州世直し一揆、元治元年（1864）の水戸浪士による天狗党の乱など、社会情勢が不安定になった。栗橋でも、慶應４年（1868）羽生陣屋焼き払いに始まる打ちこわしが波及した。『足立家文書御関所日誌』には、9000人余りが宿内へ侵入し、名主良右衛門宅に放火し、仲町百姓弥平次宅、本陣池田由右衛門宅を打ちこわし、また関所へも押し入り、番士が関所から退去したとある。

明治２年（1896）２月には、葛飾県役所から関所廃止の通知が出された。番士四家は関所道具を栗橋宿へ預け、関所改めの廃止を各所に通知し、関所を引き払った。一方栗橋宿は、明治22年（1889）に町村制が施行され、北葛飾郡栗橋町となった。交通の要衝としての役割は引き継がれていった。

近代の栗橋地区

本陣池田家の池田鴨平は、明治新体制下におい

て、葛飾県の組合取締役・勧農取締役方を務め、行政区画が埼玉県に移行すると、第八区区長となった。明治９年（1876）の明治天皇行幸に際しては、案内人を務めている。

交通網における大きな変化は、大宮～宇都宮間の鉄道敷設で、明治18年（1885）７月に栗橋駅までが開通する。当所、渡船連絡であった利根川の渡河も、翌年７月には鉄橋が架設された。四号国道の利根川渡河は大正期に至ってもあいかわらず渡船であったが、大正13年（1924）に利根川橋が開通した。

一方、明治10年（1877）には内国通運会社が東京深川から栗橋を経て、思川の生井村（栃木県小山市）まで蒸気船通運丸を就航させた。内国通運会社は、江戸飛脚問屋仲間を中心に、京都・大阪の飛脚問屋仲間などが参加し、明治５年に設立された運輸会社である。

内国通運会社の代理店として荷客を取り扱ったのは、運送業を営む上町の小林家である。小林家は、近世には旅籠屋「會津屋」として営業していたが、近代に入り、運送業へ業種転換を図った。

なお、明治４年（1871）に郵便制度が開始されると、栗橋町にも郵便取扱所（のちの郵便局）が設置された。設置場所は内国通運会社の代理店にも指定される小林家（會津屋）宅である。政府は郵便制度を普及させるにあたり、その土地の名望家や素封家に役人並みの待遇と引き換えに郵便制度への協力を行わせたのである（久喜市教育委員会2014）。

明治６年には、政府は太政官布告第230号により、国内の陸上・水上交通をほぼ独占する権限を内国通運に与え、各地の輸送を同社に統合していく政策をとった。通運会社の資料によると、栗橋が寄港地として掲載されるのは、明治10年８月21日の運航からで、扇橋－乙女（栃木県小山市）間を毎日運航する就航路であった。寄港地は扇橋・行徳・松戸・加村・野田・宝珠花・関宿・境・中田・栗橋・古河・生井・生良の順であった。また、同13年７月10日開設の扇橋－北河原（行田市）間の就航路にも、栗橋の地名が記される。

明治13年（1880）には長島良幸が長島丸を、同35年（1902）には栗橋の廻船問屋古川平兵衛が古川丸を就航させるが、内国通運会社との競争に敗れ撤退している。その後、鉄道の発達により、舟運は衰退し、大正８年（1919）、内国通運も撤退している（栗橋町教育委員会2010）。

このころの栗橋町の様子は、明治35年（1902）の『埼玉県営業便覧』にみることができる。旧日光道中の表通りには商家が連なり、回漕、運送業に関わる店が多いのも特徴である。明治31年（1898）に町の地主や商人による出資で開業した栗橋銀行や、明治33年開業の栗橋商業銀行、いずれも池田鴨平が設立に関わった栗橋学校（明治５年（1872）に私塾として開校）・淑徳女学館（明治22年（1889）開校）等、主要な施設が旧宿場内に設置されていたことが分かる。

利根川沿いの船戸町には回漕業や料理店等が立ち並び、文豪田山花袋が度々訪れたという鯉料理店の稲荷楼（稲荷屋）も船戸町にあった。稲荷楼は利根川の上に張り出すように店を構えており、川岸には桟敷を作るなど風情ある店であった。ちなみに『風土記稿』には、利根川の産物として、鯉、鮒、鰻、鯰、さい（ニゴイ）、いなは（種不明）の６種の川魚が挙げられ「味ひ最美なり」とある。

稲荷楼は、国会開設に先立つ大同団結運動期に政治活動にも用いられた。明治21年には栗橋町の町制が敷かれるにあたって、埼玉県知事らが巡視後に投宿している。翌22年１月には「町村制講義会」が栗橋学校で講習会を開くが、その聴衆は300余人に上り、夜には稲荷楼で盛大な懇親会が行われたという。同年には、幸手・杉戸地域の有志によって結社「蘭交会」が発足、例会が行わ

れている。また、明治24年９月には自由党派の政談演説会が開かれ、稲荷楼で小宴が開かれている（久喜市教育委員会2011）。

近世の宿場町を骨子としつつ、近代化を遂げた栗橋町であったが、前代に引き続き水害・災害と直面することも多かった。明治43年（1910）の水害では冠水を逃れたが、それ以前の明治23年の水害では栗橋町の戸数の25％強が冠水したとされる。

明治33年（1900）からは、利根川の抜本的な改修計画（利根川改修計画）が始まり船戸・鍛冶町は河川敷となる。利根川における近代治水事業は以後、継続的に実施されている。

栗橋宿跡の利根川渡河地点という立地は、交通の要衝としての発展と、水害によるリスクが表裏一体の関係にあったと言えよう。

Ⅲ　遺跡の概要

栗橋宿跡第９地点の調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴って実施したものである。所在地は久喜市栗橋中央二丁目である。

栗橋宿は、慶長年間に池田鴨之助、並木五郎平らが元栗橋から移住して開宿した宿場と伝わる。南北に走る日光道中を挟んで町屋が並んでいた。『日光道中宿村大概帳』には、宿高689石余、宿往還の長さ15町13間余、宿町並10町30間、宿の家数404軒、本陣・脇本陣各１軒、旅籠屋25軒、人口1741人（男性869人、女性872人）と記されている。

栗橋宿関連の発掘調査は、既に報告された平成24年の栗橋関所番士屋敷跡・栗橋宿跡第１地点に始まり、継続的に続けられ、範囲も広範囲に及ぶ。このため、調査区全体を網羅するように、大グリッドと小グリッドを組み合わせて方眼を組んでいる。詳細は凡例と第４図に示した。今回報告する栗橋宿跡第９地点は、大グリッドのＥ７～Ｆ７グリッドにまたがるエリアである。

栗橋宿跡第９地点は、栗橋宿の中町と呼ばれる地域の一部で、日光道中の東側に位置する。北側は第３地点（『栗橋宿跡Ⅰ』報告）、南側は第８地点（『栗橋宿跡Ⅵ』報告）である。

発掘調査は、上下二面の遺構確認面を設定して実施した。標高は、上面の第一面で10.00～10.20m程、下面の第二面で9.50m前後である。

このうち本書では19世紀前半以降を中心とする第一面の調査成果の一部を収録する。

第５図には調査区各所の基本土層を示す。

基本土層①は、Ｅ７－Ｇ４グリッドの第261号土壙付近で観察したものである。１層はこの付近の第一面検出面であり、強くしまった砂質土である。整地土であろう。２層は均質な砂質土、３層は川砂で、自然堆積の可能性がある。４層は粘性の高いシルト質土で、下層の遺構覆土かもしれない。

基本土層②は、Ｅ７－Ｇ５グリッド付近の第６号建物跡基礎の立ち割り調査で記録を行ったものである。Ⅰ層は灰白色砂で鉄分が沈着して硬化しており、第６号建物跡に伴う地表面の可能性があるとされた。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層は、掘り込みの可能性もあるが、平面的な範囲を追えていない。Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層が、このエリアの基本層序と思われ、いずれも砂質土である。上層のⅤ層とⅦ層がやや厚く堆積するもので、自然堆積層と判断される。Ⅶ層については、暗灰色の砂質土ブロックが下層側に多く沈み、砂質土と鉄分集中が互層状になることから、洪水による堆積及び、水が引く過程での堆積土層と判断されている。両者の間には、やや薄い砂層（Ⅵ層）がみられ、上面が平坦にも関わらず、下層側のⅦ層境が波打つことから、整地層であると判断されている。各基本層序の様相から、第一面直下の土層が、洪水堆積土と整地土を繰り返して形成されている可能性が考えられる。

第５図には、基本層序に加えて、道路跡に近い西側壁の模式図を示した。ここでは、第107号土壙を覆う焼土層が第一面より上位で検出されている点と、第一面以下の掘り込み中（土壙か）に浅間Ａ火山灰層が確認されている点を示した。

この火災層については、多量の被熱した陶磁器が出土した第105号・121号土壙に関わる火災と同時期と推定される。

調査で検出された第一面の遺構は、近世の建物跡10棟を始め、埋設桶26基・井戸跡４基・溝跡18条（竹樋４条を含む）道路跡１条・土壙311基・ピット27基・性格不明遺構１基である。

調査対象地全体が、宿場の町場であるため、調査では、東西方向の地境溝が検出された。これらは、栗橋宿跡各所の調査で検出され、「杭列」と呼ばれていた遺構と同種のものである。各地点

栗橋関所跡
推定関所跡
利根川
栗橋宿本陣跡
栗橋関所番士屋敷跡
栗橋宿西本陣跡
栗橋宿跡
調査区
旧堤防・旧道
日光道中
A3
A4
A5
A6
A7
A8
B3
B4
B5
B6
B7
B8
北２丁目陣屋跡
第５地点
栗橋関所番士屋敷跡
栗橋宿本陣跡
C3
C4
C5
C7
C8
栗橋宿西本陣跡
D3
D4
D5
D6
D8
第６地点
第１地点
第３地点
E3
E4
E5
E6
E8
第９地点
F8
F3
F4
F5
F6
第８地点
第７地点
G3
G4
G5
G6
G7
G8
第２地点
H3
H4
H5
H6
H7
第４地点
I3
I4
I5
I6
I7
I8
0
100m
1:4000

第４図　遺跡位置図

の調査成果から、その多くは側板を有す構造の溝であった可能性が高く、本報告でもこれらを溝跡として扱った。ただし、同一箇所で何度も改修される性格上、良好に遺構の形状を留めるケースは少ない。

地境の溝で区画された中には、堅固な構造の基礎を有す建物跡が多く検出されており、特に樽地形建物跡が２棟検出されている点が注目される。土壙は調査区全体に広がっており、大多数が生活用具の廃棄に用いられたものと思われるが、一部では火災の後片付けに関わる土壙が認められ、被熱した陶磁器・土器・瓦が多く出土している。

第９地点の特色は、調査区の中央部やや北側に、東西方向の道路跡が通過する点である。この道は、調査前まで舗装道路として機能していたもので、明治35年の『埼玉県営業便覧』には「合ノ道」と記されている。さらに遡る近世の絵図類には「往来道」・「仮往還」と記載されている。

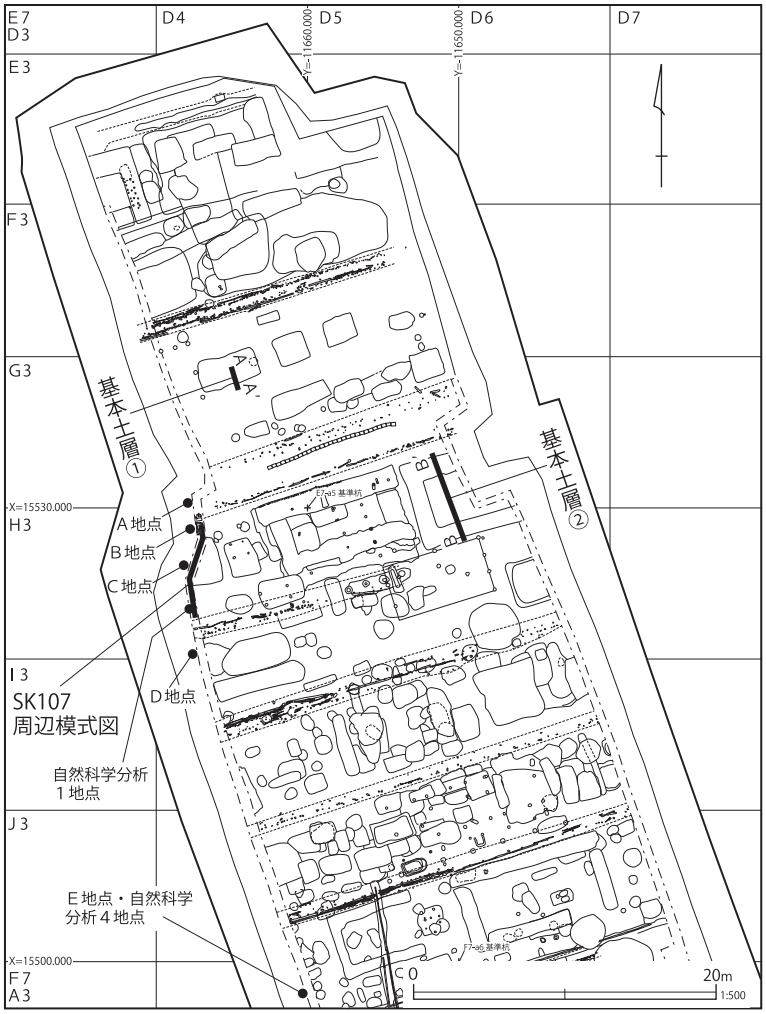
日光道中から堤防側に抜けるこの道は、第９地点の調査区を過ぎると、宿の裏手を南北に走る道にぶつかる。これは日光道中とほぼ並走する「鍛冶町」に面した道と考えられる。その道も横切って直進すれば、道は堤に上がる。ここより利根川側は船戸町（船戸河岸）になる。『日光道中分間延絵図』や『風土記稿』の挿図をみると、堤の上にも道が走っており、前者には関所正面に至る堤の上に「堤上野道」の注記も確認できる。このように、本地点で確認された「往来道」は、日光道中と鍛冶町の道、堤上の道、そして船戸河岸をつなぐ道であった。

道路からは数枚の硬化面が検出され、その間には砂質土を主体とする土層が認められる。二次堆積層ではあるが、浅間Ａ火山灰層の位置も押さえられている。確実な道路硬化面は、遺物からみれば、18世紀中葉以降のものであった。それ以下にも2枚の整地面と認定し得る面は存在したが、積極的に路面とは認めがたく、「往来道」の成立時期もその前後と考えられる。

出土遺物は、土壙を中心に陶磁器類や瓦が多量に出土した。陶磁器類は、各遺構の最新期の陶磁器や特徴的なものを中心に挿図・観察表で示した。磁器では肥前系・瀬戸美濃系磁器の碗皿類が主体であったが、本調査区では、19世紀前葉の火災処理に関わる土壙から多量の舶載磁器が出土し注目される。陶器では瀬戸美濃系のものが多いが、本調査区では、19世紀中葉前後の大堀相馬系陶器など、地方窯系陶器に良好な資料が目立つ。

瓦類については、全てを収蔵することが難しいため、現地で水洗い、乾燥を行い、種別毎に分類し、記録するように努めた。その内容は第243表の出土瓦一覧表にまとめた。挿図では軒瓦・鬼瓦を中心に示した。多いのは桟瓦であり、軒瓦の瓦当文様が残るものを中心に図示した。本調査区では、僅かながら軒丸部分を梅鉢文とする軒桟瓦が認められるのが特徴的である。また、第121号土壙から出土した瓦にみられる刻書「角屋七兵衛」は、近世の絵図に認められる旅籠屋の屋号を刻む稀有な事例である。

調査地点は地下水位が高い環境であり、木製品も多量に残存していた。木製品は建築部材や桶材等から、各種の生活用具まで多様である。特に漆器椀類や下駄の出土が目立つ。樽地業建物に用いられた樽には、多くの焼印や墨書があり、その内容から、隣接する２基の建物が、相互に関連しながら建てられたことが窺われた。金属製品では釘と考えられる棒状製品が圧倒的に多い。また、針金状の銅製品も多く出土した。鍛冶行為に関わる土壙からは、蹄鉄や溶着した銭貨が出土しており、原料として持ち込まれた可能性があろう。銭貨は寛永通宝が主体である。石製品では砥石が主体をなし、材質は粘板岩・ホルンフェルス・流紋岩が多い。鍛冶行為に関わる土壙からは、楕円形



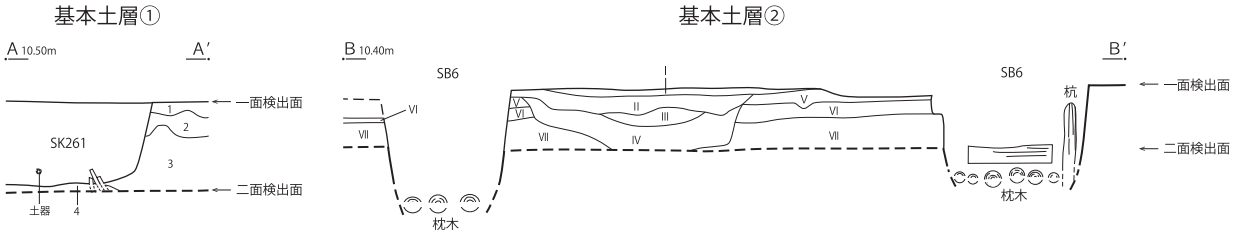
※A・B・C・D・E地点は写真図版12参照

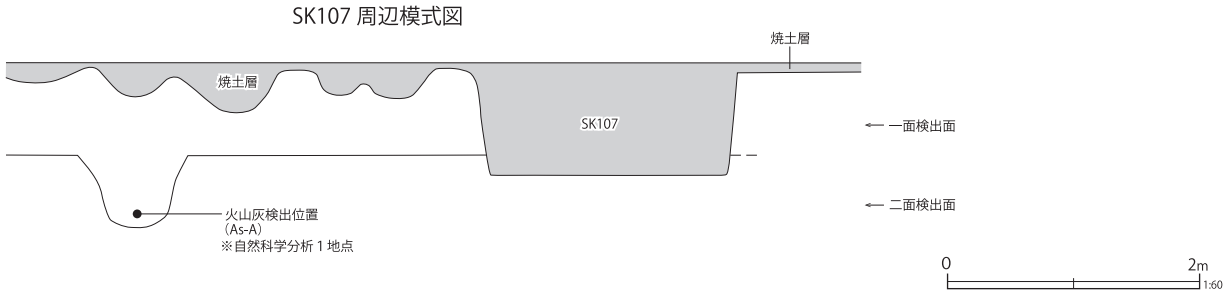
基本土層①

1　黒灰色土　砂質　非常に硬くしまっている
2　黒灰色土　砂質　均質で混入物ほぼない
3　黒灰砂　川砂自然堆積　河岸砂丘上の堆積か
4　黒灰色土　シルト質　粘性非常に強く、しまりやや強い（湧水）　下層の川砂層からの噴砂と思われる部分あり　均質な堆積

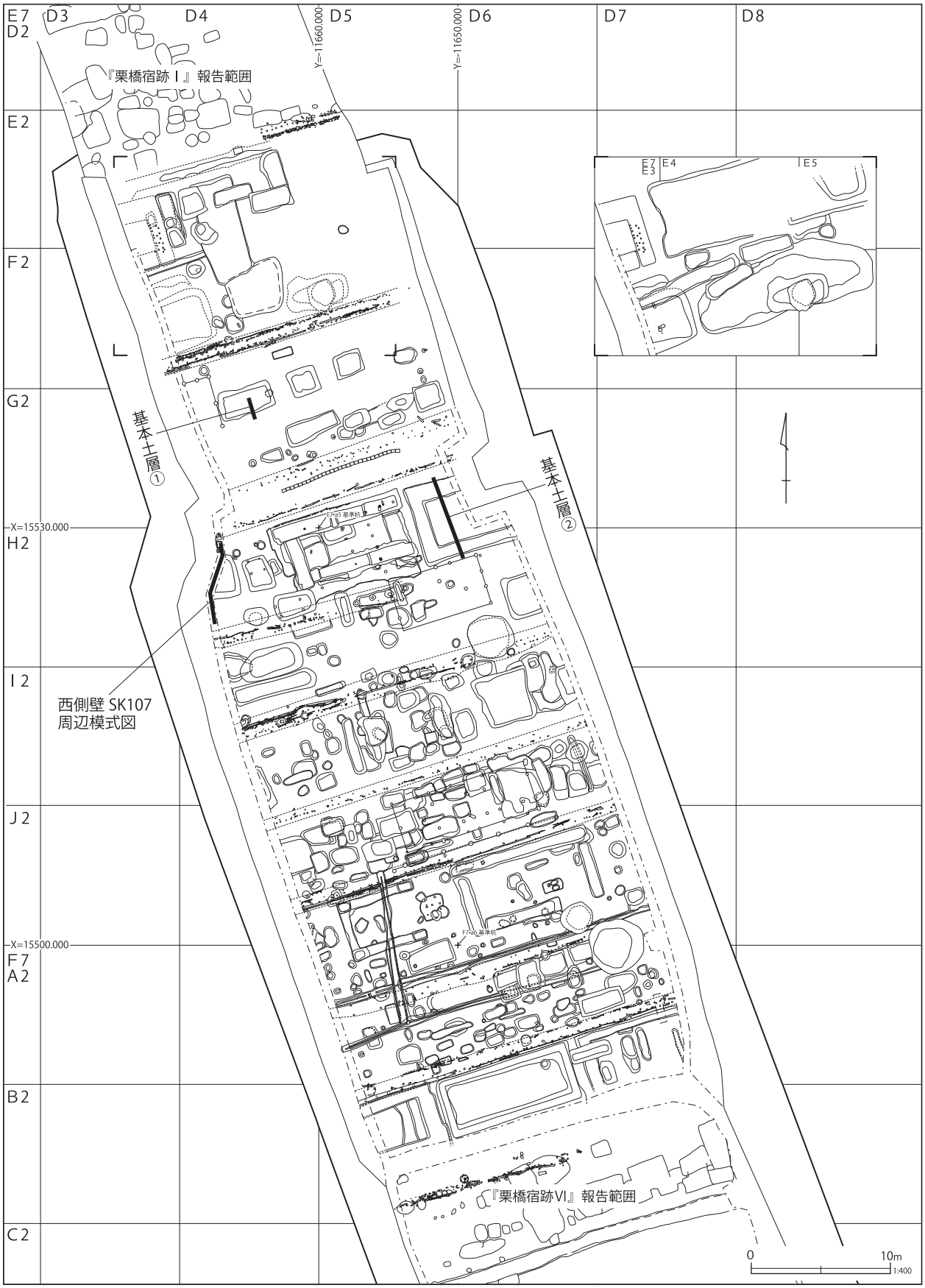
基本土層②

Ⅰ　灰白色砂　25㎜前後の厚さで褐鉄の堆積砂が帯状・フラットに入る　最下層は暗灰色シルト質土（1㎝厚）　SB6掘方に切られている　平面での広がりは不整形　SB6施工時の踏み固めの影響による硬化面か　粘性なし　しまり非常に強
Ⅱ　灰褐色土　砂質　暗灰色シルト土ブロックをまだらに含む　凹状の堆積　下層に炭化材片が集中して堆積　粘性・しまりあり
Ⅲ　灰白色土　砂質　Ⅱ層土に似るが炭化材は包含せず　粘性・しまりあり
Ⅳ　灰白色土　Ⅶ層に似るが堆積の方向が北上から南下方向へ湾曲して堆積
Ⅴ　淡灰色土　砂質　自然堆積層　灰白色シルト質ブロック（φ1㎝～5cm）を混土する層が帯状にフラットに入る　粘性なし　しまりやや強
Ⅵ　暗灰色土　砂質　整地層　厚さ10cm前後でフラットに区画V―U～合の道まで広がる　上層はフラットだが下層は波打っている　粘性わずか　しまりあり
Ⅶ　洪水堆積土　灰白色砂質土と褐鉄集中堆積層が互層となっている　灰白色シルト土ブロック（φ10～15㎜）多量　暗灰色砂質土ブロックは下層に多く含む　水流にけずられて運ばれてきたものと考えられる（自然堆積層）

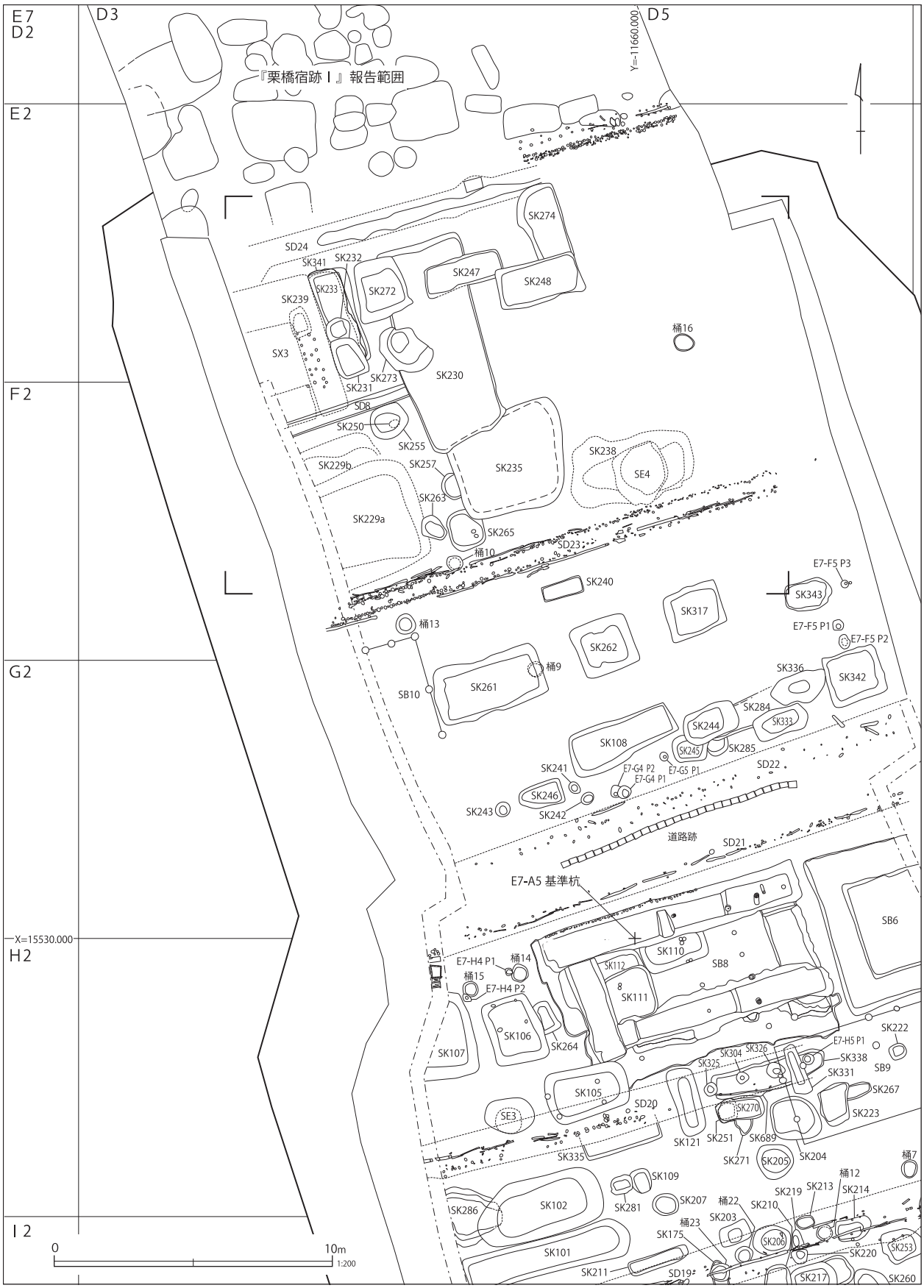




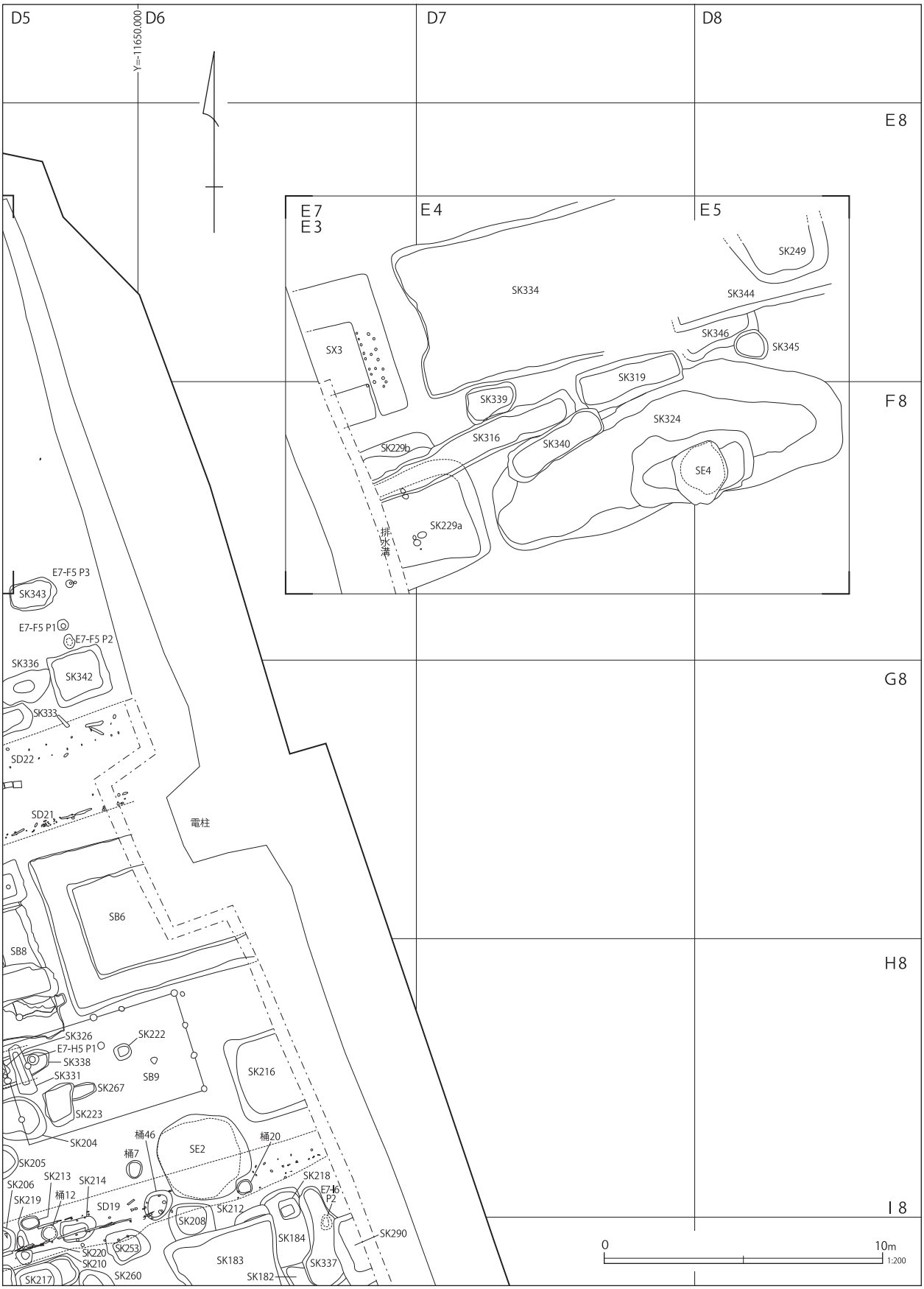
第5図　基本土層


E7
D2
D3
D4
D5
D6
D7
D8
Y=-11660.000
Y=-11650.000
『栗橋宿跡Ⅰ』報告範囲
E2
F2
G2
H2
I2
J2
F7
A2
B2
C2
X=15530.000
X=15500.000
基本土層①
基本土層②
西側壁 SK107
周辺模式図
E7
E3
E4
E5
『栗橋宿跡Ⅵ』報告範囲
0
10m
1:400

第６図　第一面全体図


E7
D2
D3
D5
Y=-11660.000
『栗橋宿跡Ⅰ』報告範囲
E2
SK274
SD24
SK341
SK232
SK233
SK247
SK248
SK272
SK239
SX3
桶16
SK230
SK273
SK231
F2
SD8
SK250
SK255
SK238
SK229b
SK257
SK235
SE4
SK263
SK229a
SK265
SD23
桶10
E7-F5 P3
SK240
SK343
SK317
桶13
E7-F5 P1
E7-F5 P2
SK262
G2
桶9
SK336
SK342
SB10
SK261
SK284
SK244
SK333
SK108
SK245
SK285
SK241
E7-G4 P2
E7-G5 P1
SD22
E7-G4 P1
SK246
SK243
SK242
道路跡
SD21
E7-A5 基準杭
SB6
X=15530.000
H2
E7-H4 P1
桶14
SK110
SK112
SB8
桶15
E7-H4 P2
SK111
SK106
SK264
SK222
E7-H5 P1
SK107
SK304
SK326
SK338
SK325
SB9
SK331
SK105
SK267
SK270
SK223
SE3
SD20
SK121
SK251
SK689
SK335
SK271
SK205
SK204
桶7
SK109
桶12
SK219
SK213
SK214
SK102
SK281
SK207
桶22
SK210
SK286
SK203
桶23
SK175
SK206
SK220
SK253
SK101
SK211
SD19
SK217
SK260
I2
0
10m
1:200

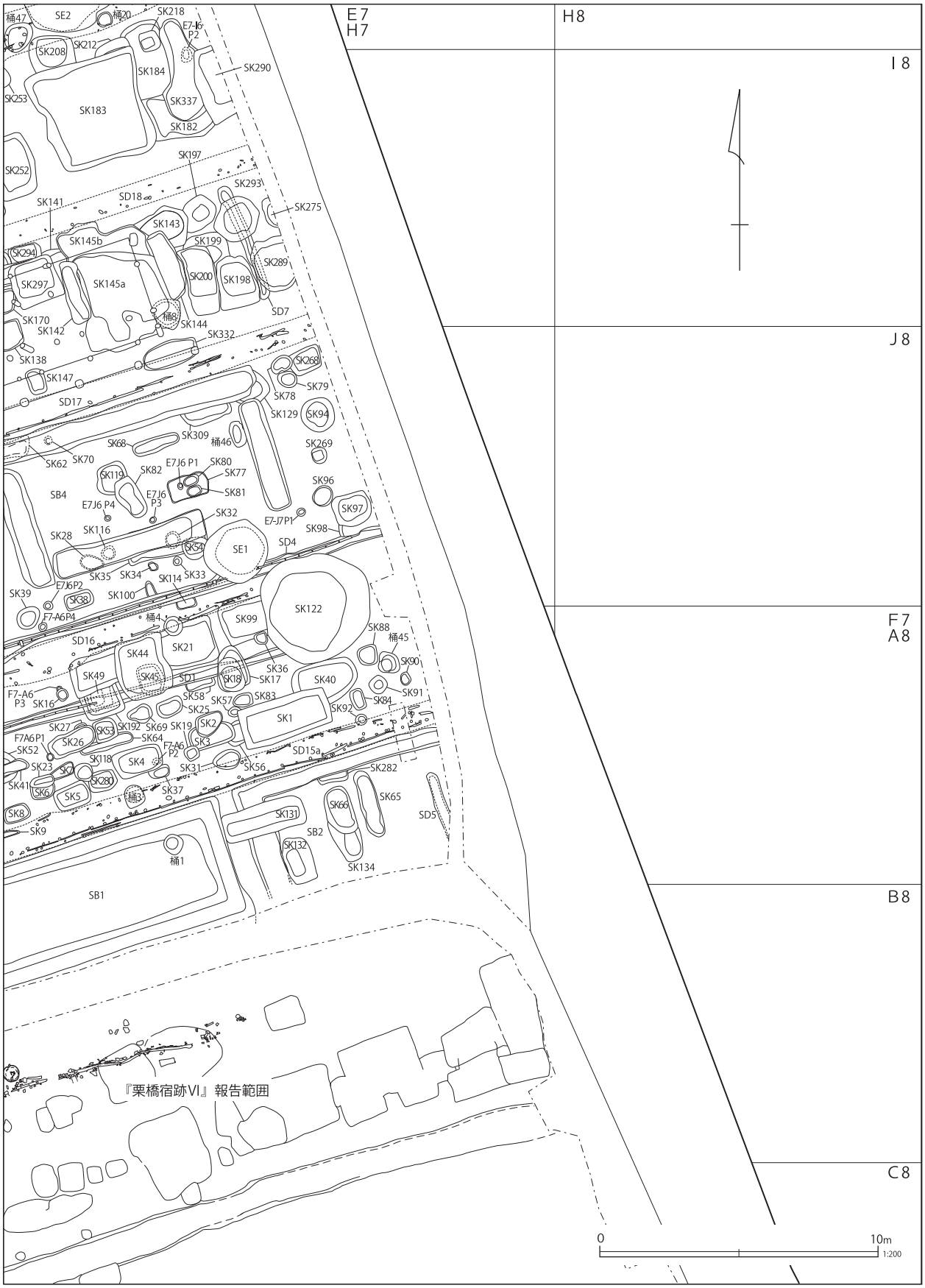
第７図　第一面区割図（１）


D5
D6
D7
D8
Y=-11650.000
E8
F8
G8
H8
I8
E7
E3
E4
E5
SK249
SK334
SK344
SK346
SK345
SX3
SK319
SK339
SK324
SK316
SK340
SK229b
SE4
SK229a
排水溝
E7-F5 P3
SK343
E7-F5 P1
E7-F5 P2
SK336
SK342
SK333
SD22
SD21
電柱
SB6
SB8
SK326
SK222
E7-H5 P1
SK338
SB9
SK331
SK267
SK216
SK223
SK204
桶46
桶20
SE2
桶7
SK205
SK213
SK214
SK218
SK206
SK219
桶12
SD19
SK212
E7-I6 P2
SK208
SK184
SK290
SK220
SK253
SK210
SK183
SK337
SK217
SK260
SK182
0
10m
1:200

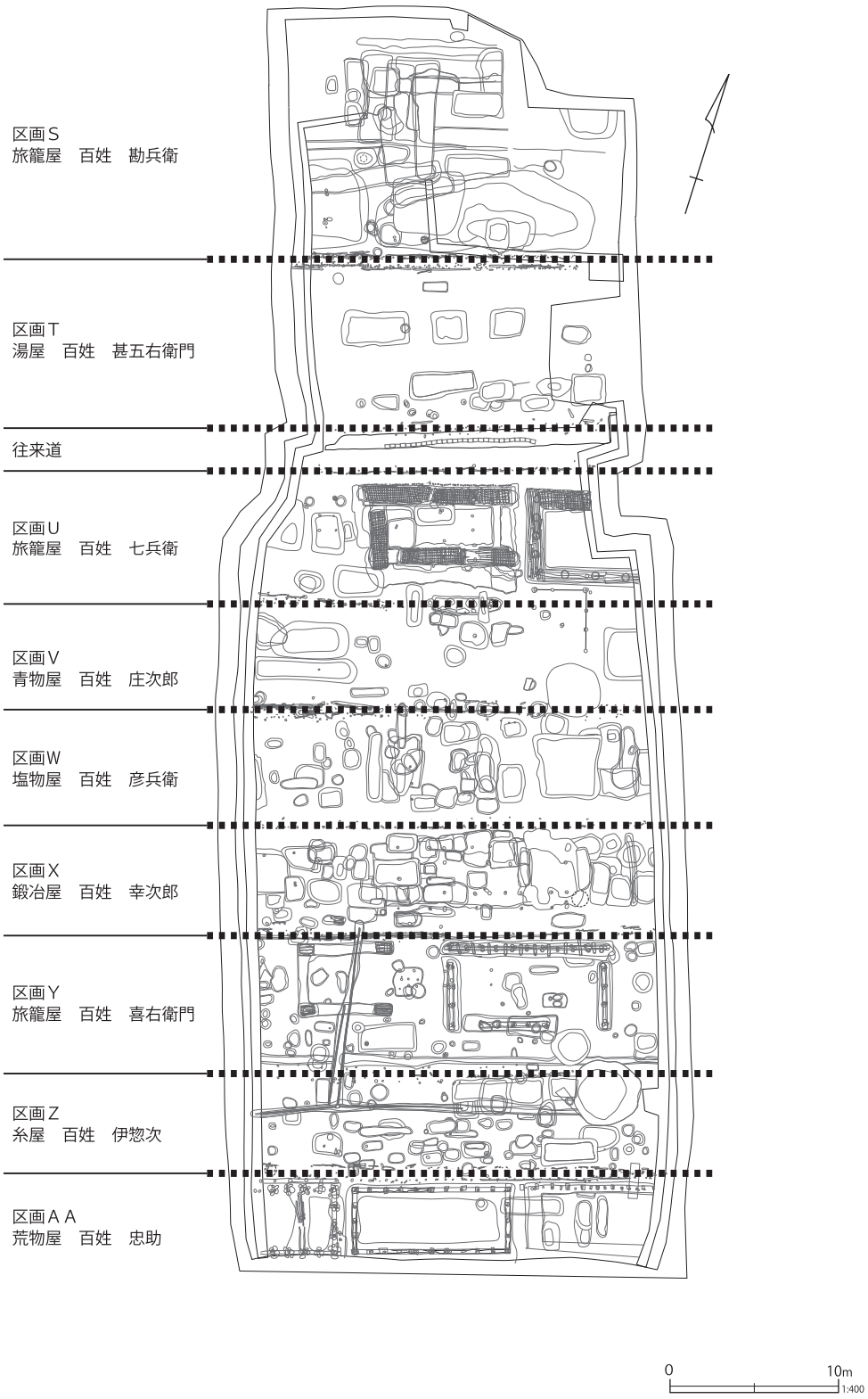
第８図　第一面区割図（２）

H2
I 2
J 2
F7
A2
B2
C2
X=15500.000
Y=11650.000
0
10m
1:200
F7-A6 基準杭
『栗橋宿跡VI』報告範囲
SB1
SB3
SB4
SB5
SB7
SD2
SD4
SD6
SD15b
SD16
SD17
SD18
SD19
SE2
SK102
SK101
SK286
SK281
SK109
SK207
SK203
SK205
SK219
SK213
SK214
SK212
SK218
SK208
SK184
SK183
SK182
SK253
SK220
SK260
SK190
SK252
SK318
SK323
SK195
SK193
SK166
SK165
SK167
SK168
SK179
SK178
SK177
SK163
SK161
SK164
SK169
SK224
SK162
SK314
SK173
SK196
SK308
SK221
SK188
SK227
SK186
SK226
SK189
SK187
SK159
SK141
SK143
SK145b
SK145a
SK142
SK297
SK298
SK181
SK259
SK300
SK299
SK303
SK150
SK138
SK332
SK301
SK147
SK139
SK152
SK153
SK154
SK151
SK136
SK160
SK135
SK137
SK140
SK194
SK185
SK120
SK148
SK156
SK157
SK158
SK149
SK155
SK146
SK287
SK62
SK70
SK119
SK68
SK47
SK63
SK82
SK48
SK46
SK116
SK313
SK71
SK305
SK93
SK276
SK277
SK312
SK278
SK279
SK42
SK50
SK39
SK124
SK44
SK45
SK21
SK128
SK85
SK126
SK43
SK130
SK72
SK125
SK291
SK73
SK86
SK74
SK75
SK49
SK16
SK87
SK51
SK688
SK192
SK53
SK69
SK26
SK27
SK64
SK118
SK4
SK52
SK55
SK95
SK14
SK295
SK41
SK23
SK6
SK5
SK280
SK37
SK10
SK11
SK8
SK117
SK12
SK22
SK9
SK24
SK292
SK20
SK7
SK2
SK38
SK35
SK34
SK100
SK93
E7-J5 P5
E7-J5 P2
E7-J5P6
E7-J5P1
E7J6P2
E7J6 P4
E7J6 P3
F7-A6P4
F7-A5P1
F7-A6P3
F7A6P1
F7-A5 P2
桶11
桶21
桶22
桶23
桶12
桶7
桶20
桶47
桶48
桶19
桶17
桶18
桶5
桶6

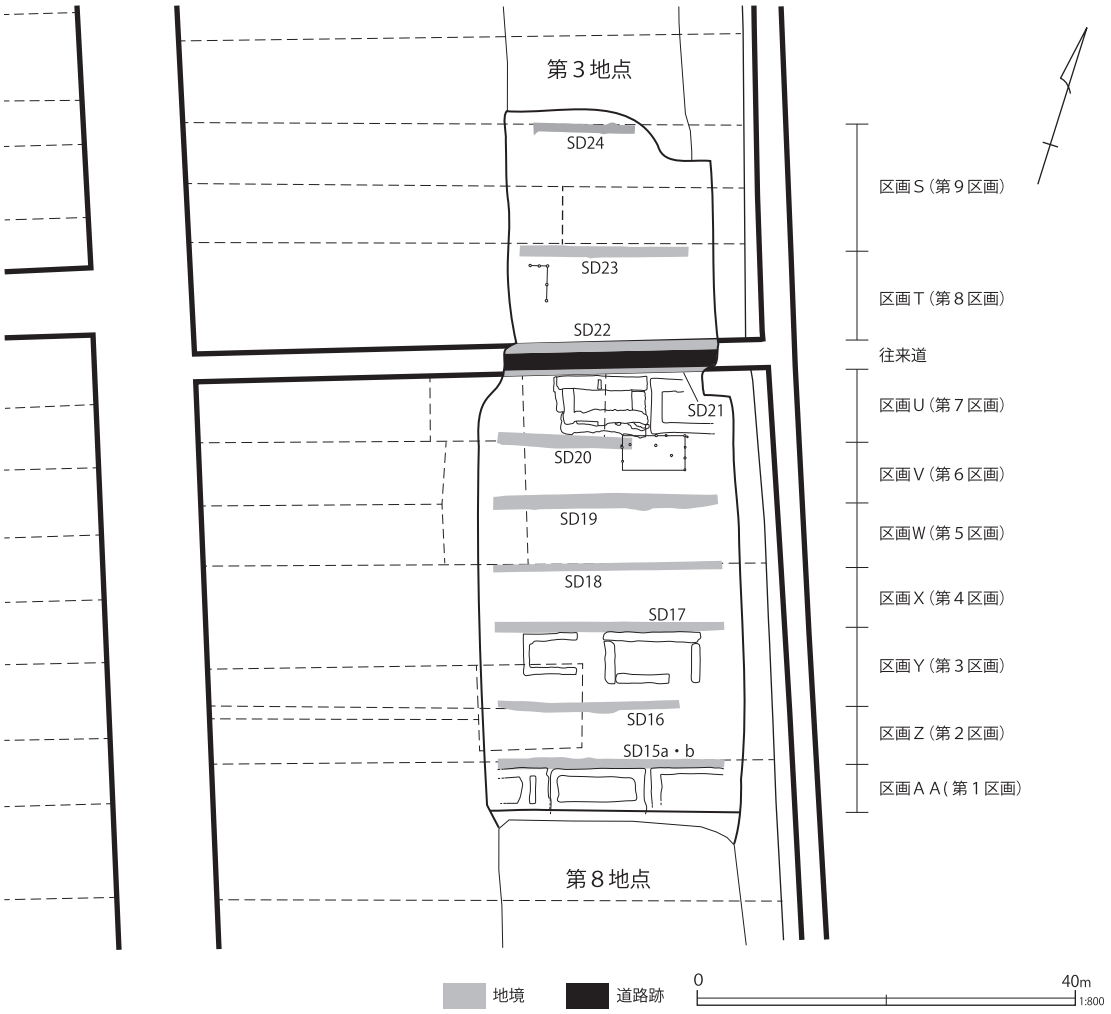
第９図　第一面区割図（３）



第 10 図　第一面区割図（4）



第 11 図　『絵図』と調査区の対比



第 12 図　調査前の敷地と地境に関わる遺構

に再加工されたホルンフェルス製砥石がまとまって出土しており、生産活動の実態を考える上で興味深い。硯、火打石の出土も目立つ。一部の土壙からは、使用痕の無い玉髄の剥片がまとまって出土しており、火打石の加工を行っていた可能性もある。他に被熱した土壁材や玩具類、髪飾り類等の硝子製品、貝類や種子類等の自然遺物も一定量出土している。これらの遺物については、第243表の出土遺物一覧表に数量を示し、各遺構の出土遺物について触れる中で、その傾向について記述する。

なお、栗橋宿跡の陶磁器類については、『栗橋宿本陣跡Ⅰ』で、時期区分を行い、それを元に遺構の時期を推定している。本書の中でも、遺構の年代推定には、この時期区分を使用して表記する。概要は以下の通りである。

栗橋１期…17世紀前半

栗橋２期…17世紀後半～18世紀初頭　該当遺構がほとんど無い

栗橋３期…18世紀前葉～中葉（第２四半期～第３四半期前半）、肥前系磁器の粗製（波佐見系）碗多い

栗橋４期…18世紀後葉（第３四半期後半～第４四半期前半）、肥前系磁器外面青磁釉碗各種、筒形碗

栗橋５期…18世紀後葉～19世紀初頭（18世紀第４四半期後半～19世紀第１四半期）肥前系磁器広東碗

栗橋６期…19世紀前葉（第１四半期後半）瀬戸美濃系磁器の出現

栗橋７期…19世紀前葉～中葉（第２四半期中心）磁器湯呑形碗、陶器青緑釉土瓶等多い

栗橋８期…19世紀中葉（第３四半期）体部半球形の磁器卵殻手酒杯、型押壽文皿、木型打込施文に染付を施す磁器碗皿類

栗橋９期…19世紀中葉～後葉　酸化コバルト染付磁器の出現以降

次に、調査区の地境から窺われる区画の呼称と、史料との対比について記しておく。

本調査地点では、地境の位置と、調査前まで残っていた敷地境の位置を対比することで、９つの敷地と想定される区画が確認された（第11・12図）。本地点の表土掘削は、調査区の南部から順に行ったため、南部から第１区画～第９区画と仮称して調査を実施した。そのため、遺構番号も概ね、南から北に大きな番号になる。

一方で、栗橋宿跡の整理においては、北部から町屋エリアの敷地名称をアルファベット表記の通し番号で示してきた。北側本陣の隣接区画を「区画Ａ」として、以下、南に向かって「区画Ｂ」「区画Ｃ」と順に名付けている。なお、「区画Ｚ」をまで発番した後は、より南を「区画AA」として、「区画AB」・「区画AC」と順に名付けるものとする。この方法では、本調査区は「区画Ｓ」から始まって「区画AA」までである。

以下、各遺構の説明については、便宜的に調査時の仮名称「第１区画」～「第９区画」を用い、必要に応じて「区画Ｓ」～「区画AA」を併記したい。ただし、「調査のまとめ」の中では、栗橋宿跡全体で用いている区画名「区画Ｓ」～「区画AA」の名称を用いることにする。

これらの区画については、久喜市教育員会所蔵の『栗橋宿往還絵図』（以下『絵図』）との対比により、概ね各区画の使用者が特定できる。

第９地点では、

第１区画（区画AA）荒物屋　百姓　忠助

第２区画（区画Ｚ）糸屋　百姓　伊惣次

第３区画（区画Ｙ）旅籠屋　百姓　喜右衛門

第４区画（区画Ｘ）鍛冶屋　百姓　幸次郎

第５区画（区画W）塩物屋　百姓　彦兵衛

第６区画（区画Ｖ）青物屋　百姓　庄次郎

第７区画（区画Ｕ）旅籠屋　百姓　七兵衛

第８区画（区画Ｔ）湯屋　百姓　甚五右衛門

第９区画（区画Ｓ）旅籠屋　百姓　勘兵衛

のように、調査で検出された区画と、『絵図』の記載が対応するものと考えられる。なかでも、遺物の様相との一致がはっきりしているのが、第４区画（区画Ｘ）の「鍛冶屋　百姓　幸次郎」である。第４区画の土壙からは、多量の鍛冶関連遺物（鉄滓・鞴の羽口など）が出土している。これらの鍛冶関連遺物については、鞴の羽口を中心に巻末にまとめて図示・解説したほか、遺物の重量・点数等を第239・240表に示した。

なお、『絵図』については、記載された人名等と他史料との対比から、天保14年（1843）～弘化２年（1845）頃の成立との指摘がある（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2021）。史料として具体的な年紀が記されるものではないが、概ねこの前後の時期と捉えることができる。

本書では、第一面の遺構を報告する。ただし、諸事情から、土壙のうち第８・９区画の土壙については、第二面の遺構とともに次年度以降の報告（令和５年度予定）とする。

Ⅳ　第一面の遺構と遺物

１　建物跡

建物跡は10棟が検出された。位置、規模等の基本的な情報は第２表に、遺構図及び出土遺物は第13～85図に示した。建物跡や溝跡の平面形は、原則、日光道中を上にして構成した。

建物跡の多くは布掘り状の基礎を伴う堅固なもので、土蔵等の重厚な上屋建物が想定される。第１～６号、８号建物跡が該当する。一方、第７・９・10号建物跡は、明瞭な掘方を持たず、捨杭（松杭）のみが検出された建物跡で、土台建物の捨杭の可能性が高いものである。

建物の基礎内からは多量の遺物が検出される傾向にあるが、多くは下層の遺構や包含層から混在したものと考えられ、建物跡に直接伴う遺物は少ない。掲載遺物の抽出にあたっては、最新期の陶磁器に留意した。

第１号建物跡（第13～24図）

Ｆ７-Ａ５・６、Ｂ５・６グリッドに位置する。第１区画（区画AA）の中心に位置し、西側（オモテ・日光道中側）に第３号建物跡、東側（ウラ・利根川側）に第２号建物跡が接して検出されている。『絵図』では「荒物屋　百姓　忠助」の区画に該当する。

基礎の規模は長軸10.23m、短軸4.55m以上であるが、南側は第８地点の調査区境にかかって、掘方の範囲が明確では無い。検出面からの深さ0.46m、長軸方位はN-72°-Eである。

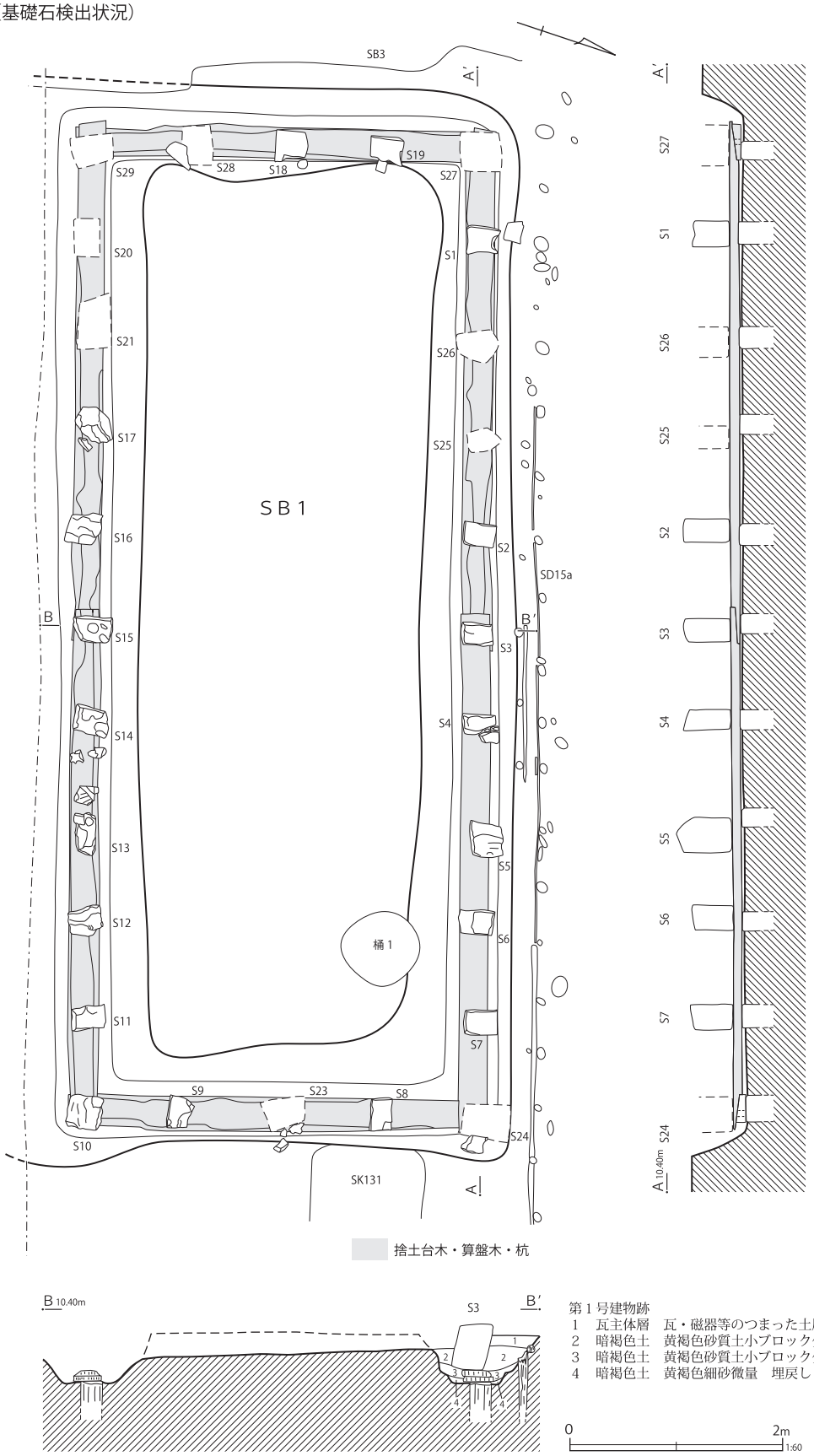
平面形は東西に長い「ロ」字状の、布掘り基礎である。基礎構造は捨土台上に切り石をのせるものであり、所謂「蝋燭地業」の建物である。

表土掘削時に、大谷石とおもわれる石材（蝋燭

第２表　第一面建物跡一覧表　単位：m

番号	グリッド（区画）	長軸	短軸	桁行推定	梁間推定	深さ	長軸方位	備考
1	F7-A5/6,B5/6（１区）	10.23	(4.55)	9.13	3.65	0.46	N-72°-E	SB3より古　桶1・SD15a・SK131重複
2	F7-A6/7,B6（１区）	(7.76)	(3.98)	(6.97)	(3.40)	0.46	N-73°-E	SK131より古　SD15a・SK132/282重複
3	F7-A5,B5（１区）	(5.60)	4.55	(4.92)	3.70	0.43	N-72°-E	SB1より新　SD15aより古　SD15b重複
4	E7-J5/6/7（３区）	10.38	5.54	9.15	4.53	0.44	N-71°-E	SK28/32/35/54/62/70/116より古　SK129/309より新 桶46重複
5	E7-J5・F7-A5（３区）	5.70	4.55	4.73	3.61	0.40	N-73°-E	SD2より古　SK313　E7-J5 P2重複
6	E7-G5/6,H5/6（７区）	(7.02)	5.88	(6.17)	4.53	(1.03)	N-74°-E	樽1 外径0.50m内径0.45m高さ0.49m（側板11枚） 樽2 外径0.45m内径0.41m高さ0.43m（側板11枚） 樽3 外径0.47m内径0.43m高さ0.61m（側板12枚） 樽5 外径0.45m内径0.39m高さ0.62m（側板10枚） 樽6 外径0.48m内径0.43m高さ0.62m（側板11枚） 樽7 外径0.48m内径0.42m高さ0.62m（側板11枚） 樽8 外径0.48m内径0.43m高さ0.63m（側板15枚） 樽9 外径0.49m内径0.44m高さ0.56m
7	E7-I5/6,J5/6（４区）	9.90	3.60	9.90	3.60	-	N-71°-E	SK301/690より新　SD6・SK138/139/141/142/145a/145b/146/147/150/159/170/171/172/194/294/297/298/299/300/302/303/306重複
8	E7-G4/5,H4/5（７区）	樽地業掘方 9.76 テラス状部分含む 10.19	樽地業掘方 5.85 テラス状部分含む 6.62	7.29	3.60	1.30	N-73°-E	樽1 外径0.50m内径0.44m高さ0.62m 樽2 外径0.50m内径0.44m高さ0.61m 樽3 外径0.52m内径0.47m高さ0.62m 樽4 外径0.53m内径0.47m高さ0.61m 樽5 外径0.53m内径0.47m高さ0.62m 樽6 外径0.49m内径0.44m高さ0.61m 樽7 外径0.44m内径0.38m高さ0.61m 樽8 外径0.50m内径0.45m高さ0.62m SK105/110/111/112より古
9	E7-H5/6（６区）	6.64	3.62	6.64	3.62	-	N-73°-E	SK204/326/331/338・E7-H5 P1重複
10	E7-F4,G4（８区）	-	-	(1.83)	(3.67)	-	N-74°-E	

（基礎石検出状況）

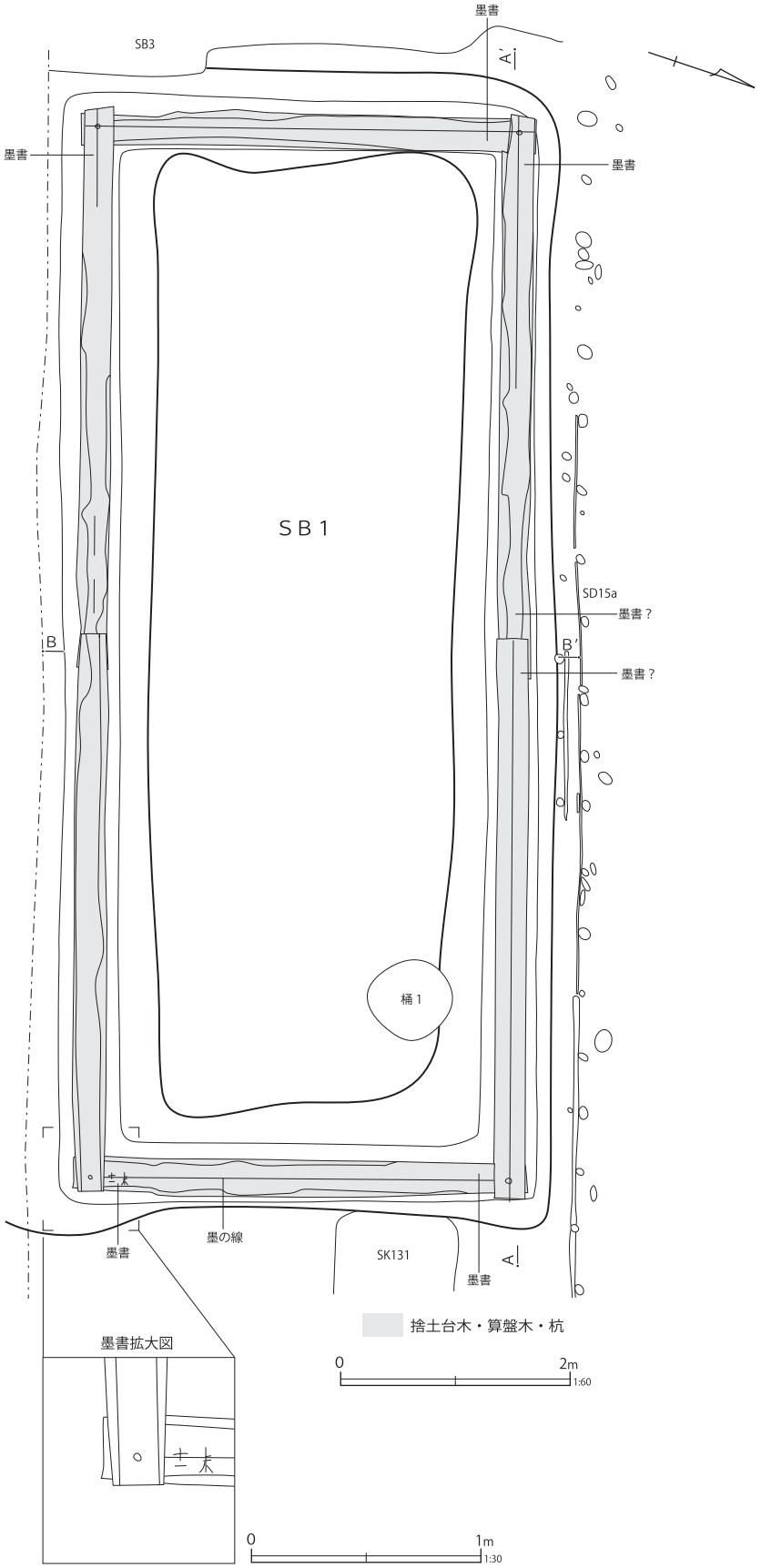


第１号建物跡
1　瓦主体層　瓦・磁器等のつまった土層
2　暗褐色土　黄褐色砂質土小ブロック少量　しまり弱　埋戻し
3　暗褐色土　黄褐色砂質土小ブロック少量　炭化物粒子微量　埋戻し
4　暗褐色土　黄褐色細砂微量　埋戻し

0　2m
1:60

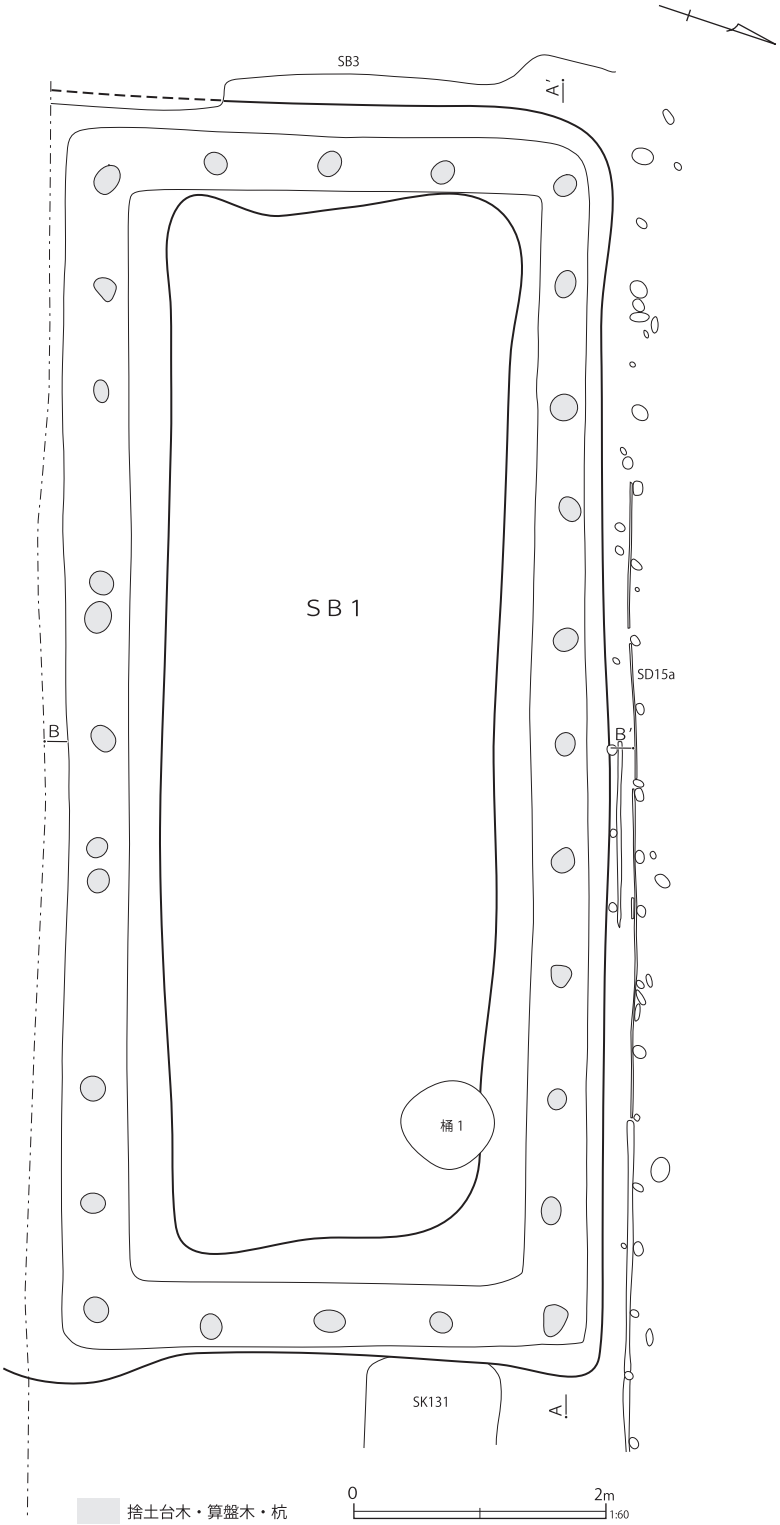
第 13 図　第１号建物跡（１）

（捨土台木検出状況）

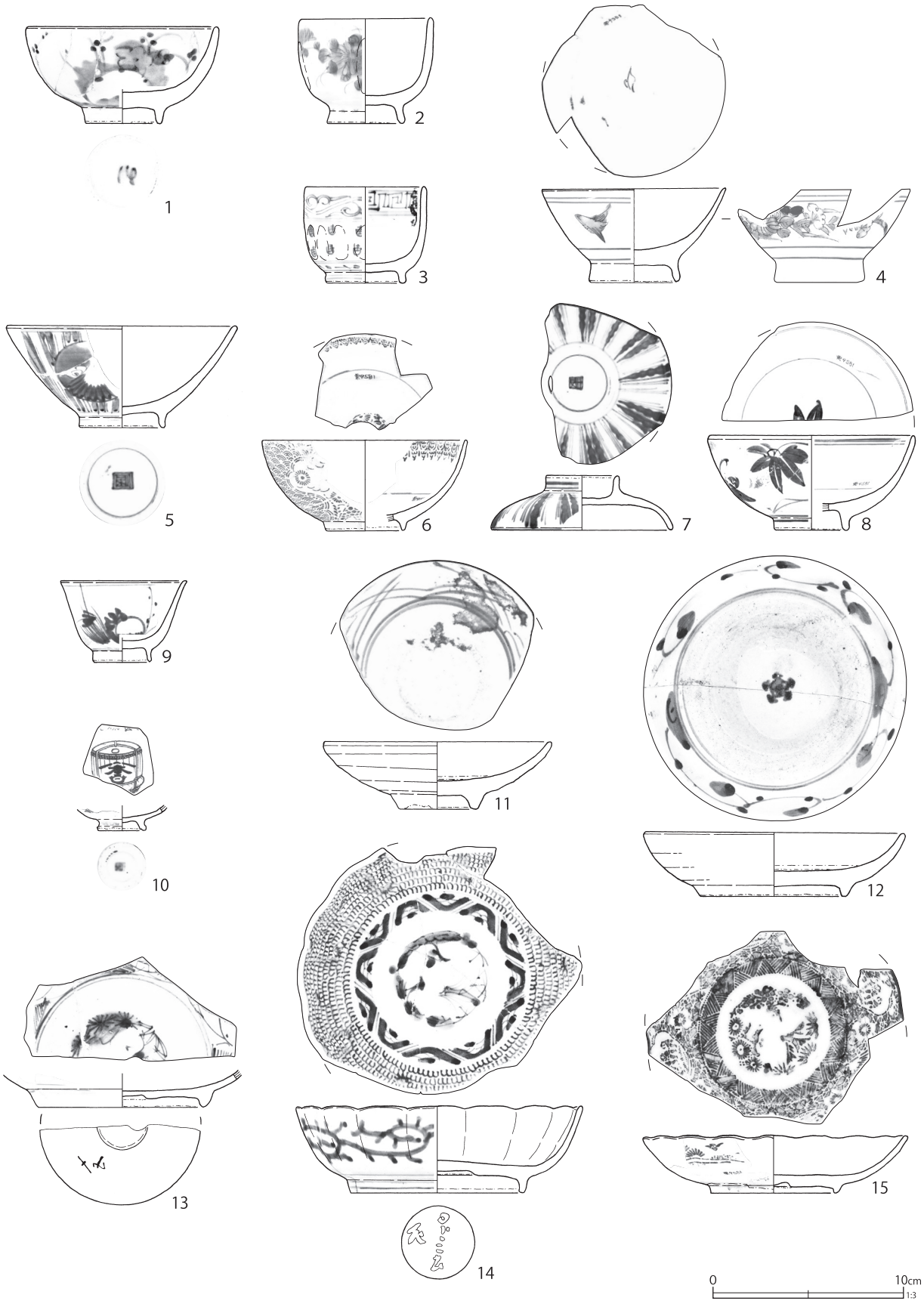


第 14 図　第 1 号建物跡（2）

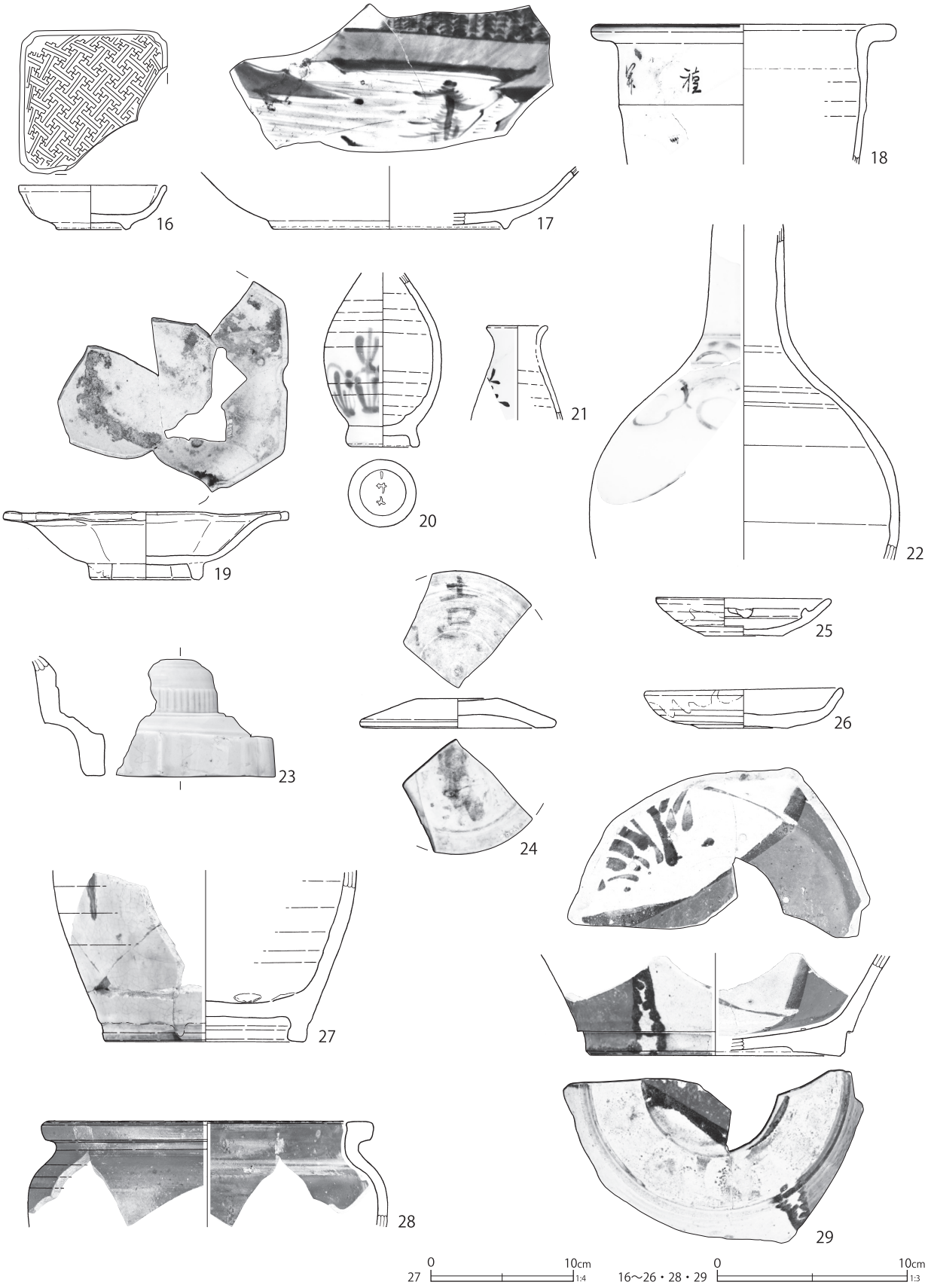
（捨杭検出状況）



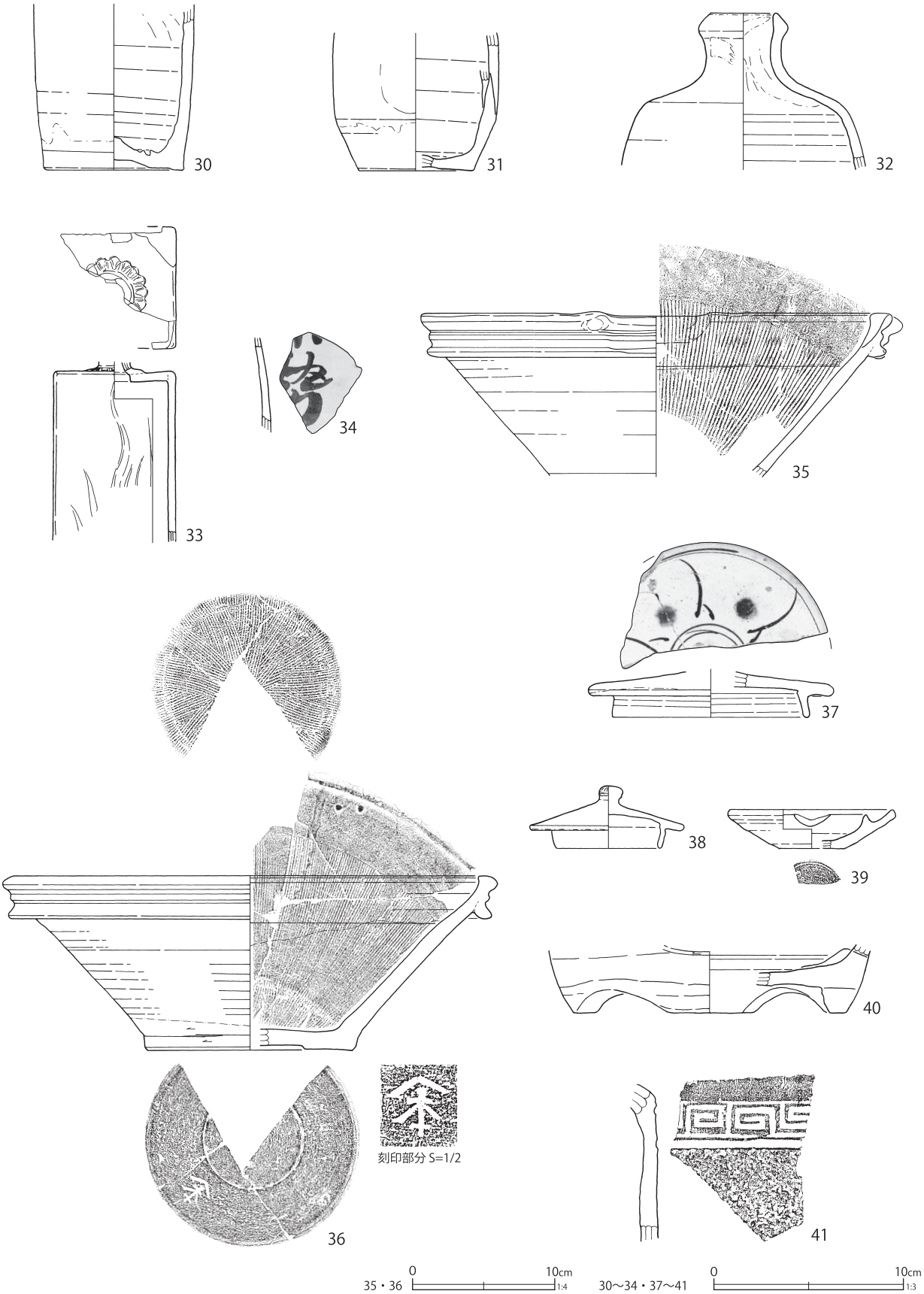
第15図　第1号建物跡（3）



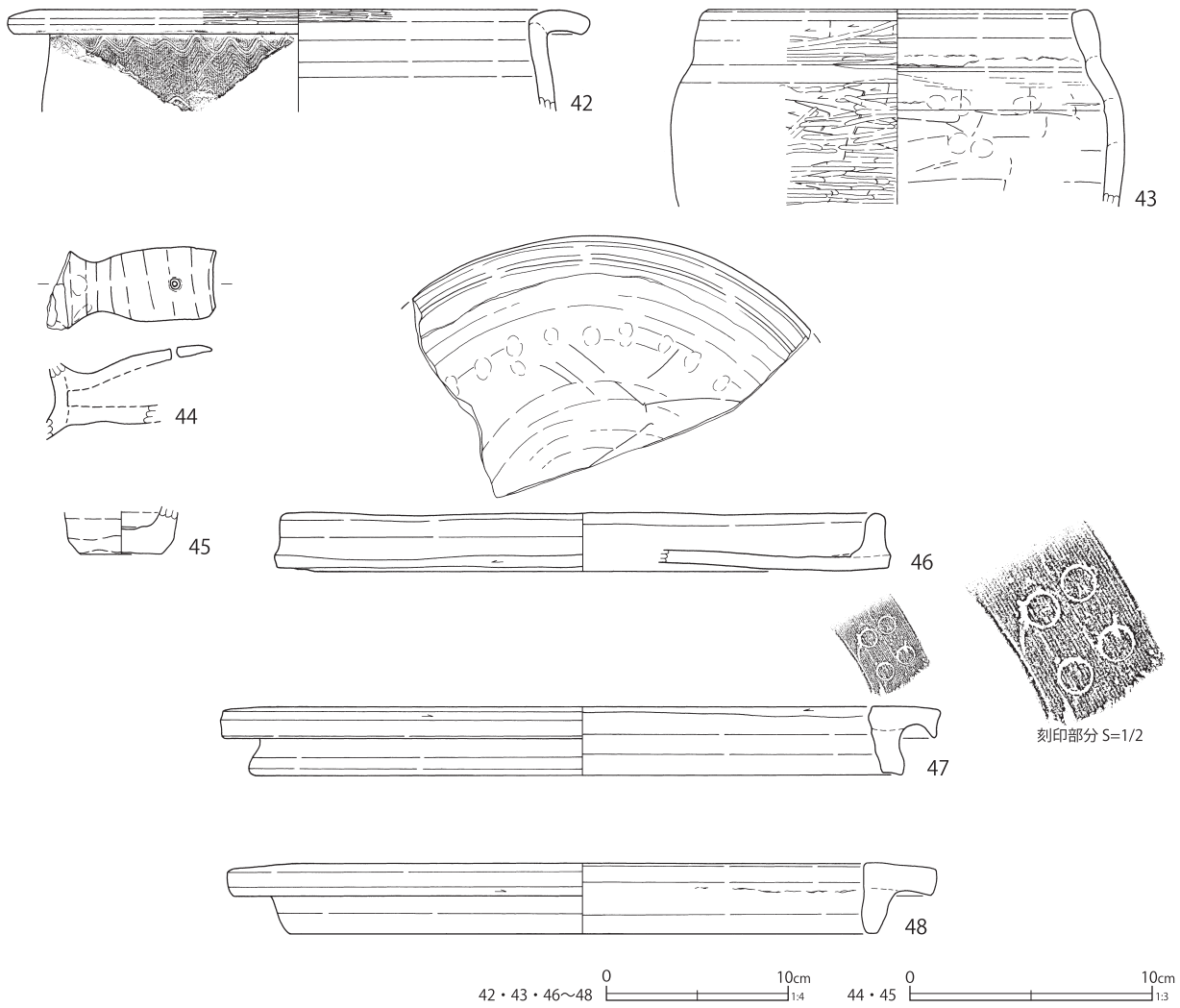
第 16 図　第 1 号建物跡出土遺物（1）



第 17 図　第 1 号建物跡出土遺物（2）



第 18 図　第 1 号建物跡出土遺物（3）



第 19 図　第 1 号建物跡出土遺物（4）

第 3 表　第 1 号建物跡出土遺物観察表（1）（第 16 ～ 19 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	9.8	5.0	3.7	-	80	普通	灰白	SB1	肥前系　内外面施釉　外面染付	
2	磁器	碗	6.6	5.5	3.8	-	60	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（湯呑形碗）	
3	磁器	碗	(6.1)	5.0	3.9	-	60	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（湯呑形碗）	
4	磁器	碗	9.4	4.9	4.5	-	60	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉・色絵（赤・緑・黄・紫）	70-1
5	磁器	碗	(11.8)	5.3	4.3	-	50	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	
6	磁器	碗	(10.6)	4.7	(4.0)	-	30	良好	灰白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉・型紙摺絵染付	
7	磁器	蓋	3.6	2.8	(9.3)	-	60	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付	
8	磁器	碗	(10.4)	4.9	(3.7)	-	40	普通	灰白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付（一部に緑色呉須）	70-2
9	磁器	坏	6.4	4.2	2.8	-	70	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	
10	磁器	坏	-	[1.3]	2.3	-	20	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付　内面上絵付（青）（卵殻手酒杯）	70-3
11	磁器	皿	(11.6)	3.5	3.9	-	60	良好	灰白	SB1	肥前系　内外面施釉　内面染付・蛇の目釉剥ぎ	
12	磁器	皿	13.4	3.3	7.4	-	100	普通	灰白	SB1	肥前系　内外面施釉　内面染付・蛇の目釉剥ぎ	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
13	磁器	皿	-	[1.9]	(8.5)	-	30	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付　焼き継ぎ痕・焼き継ぎ印（赤）	70-4
14	磁器	皿	14.8	4.5	8.9	-	50	良好	白	SB1	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目状高台　焼き継ぎ痕・焼き継ぎ印	
15	磁器	皿	(13.7)	3.0	6.4	-	50	良好	灰白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉・型紙摺絵染付　蛇の目状高台　同文別個体２あり	
16	磁器	皿	(7.5)	2.3	3.6	-	70	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　型成形　内外面施釉　内面型押施文	
17	磁器	皿	-	[4.4]	(16.2)	-	20	良好	白	SB1	肥前系　内外面施釉　内面染付	
18	磁器	植木鉢	(15.2)	[7.3]	-	-	15	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉（口縁部酸化クロム青磁釉）　外面酸化コバルト染付・上絵付（黒）	
19	陶器	皿	(14.8)	3.5	5.6	K	60	良好	白	SB1	型成形　内外面施釉（緑・紫）　磁器質	
20	磁器	御神酒徳利	-	[9.1]	3.4	-	60	普通	白	SB1	瀬戸美濃系　外面施釉・染付　焼き継ぎ印（白）	70-5
21	磁器	燗徳利	3.0	[4.9]	-	-	10	良好	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉（外面酸化クロム青磁）・上絵付（緑）	
22	磁器	徳利	-	[17.5]	-	-	30	普通	白	SB1	肥前系　外面施釉・染付	
23	磁器	置物か	-	[6.2]	-	-	20	普通	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面施釉	
24	磁器	蓋か	-	1.5	(8.2)	-	25	普通	白	SB1	瀬戸美濃系　内外面墨書「吉」ほか	70-6
25	陶器	灯明皿	9.0	2.0	4.0	GI	95	普通	灰白	SB1	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
26	陶器	灯明皿	10.2	2.1	4.7	GI	100	普通	灰白	SB1	北側　瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
27	陶器	甕	-	[12.0]	13.0	I	10	普通	灰白	SB1	瀬戸美濃系か　内面灰釉・目跡６　外面糠白釉、上位鉄釉流し掛け　高台内鉄釉	70-7
28	陶器	甕	(16.6)	[5.5]	-	I	10	良好	灰赤	SB1	内外面鉄釉　口縁部上端露胎　胎土炻器質	
29	陶器	鉢	-	[5.3]	13.1	I	20	良好	灰白	SB1	内外面灰釉・柿釉掛け分け　内面呉須絵・目跡４遺存　蛇の目状高台部に目跡５遺存	71-2
30	陶器	徳利	-	[8.7]	7.0	DI	20	普通	淡黄	SB1	瀬戸美濃系　外面灰釉（つけ掛け）	
31	陶器	徳利	-	[7.2]	(6.0)	DEK	20	普通	灰白	SB1	瀬戸美濃系　外面灰釉　体部窪ます	
32	陶器	徳利	3.4	[8.2]	-	K	20	普通	灰白	SB1	瀬戸美濃系　外面灰釉	
33	陶器	瓶類	-	[9.4]	-	I	35	普通	灰赤	SB1	備前系　板作り成形　外面施文	71-1
34	陶器	燗徳利	-	[5.0]	-	I	5	普通	浅黄橙	SB1	外面灰釉　呉須絵（文字）「□勢」	71-3
35	陶器	擂鉢	(31.6)	[11.5]	-	DIK	60	良好	灰白	SB1	益子系　内面口縁部～外面柿釉	
36	陶器	擂鉢	(33.0)	12.2	14.2	DI	40	普通	灰白	SB1	内外面柿釉・内面拭き取り・擂目　蛇の目状高台部に刻印「㐂」	71-4
37	陶器	蓋	-	[2.4]	(10.2)	I	35	普通	淡黄	SB1	上面白化粧・施釉・鉄絵・緑釉　（三彩土瓶の蓋）	
38	陶器	蓋	-	3.2	5.4	HIK	65	普通	灰白	SB1	上面灰釉　最大径 8.1 ㎝	
39	施釉土器	灯明皿	(8.4)	2.0	(3.4)	AI	30	普通	淡赤橙	SB1	江戸在地系　底部糸切痕　内外面透明釉	71-5
40	陶器	涼炉	-	[3.4]	(14.2)	AI	5	普通	浅黄橙	SB1	京都産　白色土器質	71-6
41	瓦質土器	火鉢	-	[8.2]	-	CHK	5	普通	黄灰	SB1	外面施文　燻す	
42	瓦質土器	火鉢	(28.6)	[5.5]	-	CEH	10	普通	浅黄橙	SB1	口縁部ミガキ　外面波状文　燻す	
43	瓦質土器	火消壺	(20.6)	[10.7]	-	CI	15	普通	灰白	SB1	外面ミガキ　燻す	
44	土師質土器	把手付鍋	-	[3.9]	-	CEH	20	普通	灰白	SB1	把手部分　穿孔１遺存	
45	土師質土器	焼塩壺	-	[1.9]	(3.3)	A	10	普通	にぶい橙	SB1	外面全体摩耗　胎土粉質	
46	土師質土器	焙烙	(32.4)	[3.2]	(33.8)	CFGHI	20	良好	灰白	SB1	底部シワ状痕・少量煤付着	
47	瓦質土器	竈鍔	32.0	3.7	35.6	AH	55	普通	灰白	SB1	上面刻印「○」４箇所　煤付着　最大径 39.3 ㎝	71-7
48	瓦質土器	竈鍔	(31.4)	3.9	(31.5)	CEI	40	普通	灰白	SB1	煤付着　最大径 (39.0) ㎝	

石）が検出された面から遺構検出・精査を開始した。検出面では基礎掘方上に瓦・陶磁器が敷き詰められたように検出されている（１層・写真図版14-1）が、掘方内に充填された土にはこういった混入物が少ない。

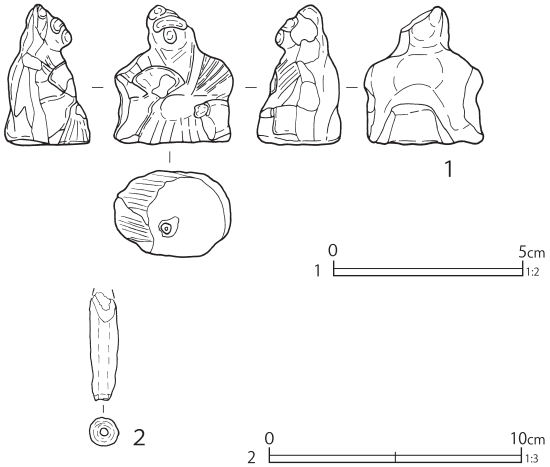
蝋燭石は長さ35～50㎝、幅20～35㎝ほどのもので、桁行方向（南北辺）に十一箇所、梁間方向（東西辺）に五箇所が配されていたものと考えられる。コーナー部の蝋燭石は共有なので、計二十八個の蝋燭石を用いる。

土台木は、長軸方向で２本の木を継いでいるため、全体で６本の土台木を使用している。丸太状の木の上下面を削り取って平滑にしたものである。削り取った平坦面には手斧と思われる工具痕跡がみられる。

土台木同士の接続は端部を厚みの半分だけ削り取り、相互に合わせる「合いじゃくり」による。各隅部の継ぎ目は、上から木釘で止められている。長軸方向の土台木には墨付けの跡が残っており、南東隅部には「十一」「［尺ヵ］」、北西隅には「八」「七」などの墨書が残る。他の隅部や継ぎ目にも墨書の可能性がある墨痕が残っているが、字画を追うのが困難であった。これらの墨書・墨痕・墨描き線の位置については第14図に、墨書・墨痕らしい痕跡のある隅部・継ぎ目は、写真図版15～18に示した。

遺物は基礎内から出土したものを扱った。

第16～19図は出土した陶磁器・土器類である。１は肥前系磁器の粗製碗で、雪輪草花文を染付する。全体が僅かに煤で汚れているようであるが、被熱などの痕跡は明確ではない。２・３は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗で、いずれも体部に面取りがみられる。２は外面に秋草文、内面口縁部に二重圏線を染付する。高台は厚手で高く、少し「ハ」字形に開く。３は外面に崩れた壽文を、内面口縁部に角渦文を染付する。４は瀬戸美濃系磁器の広東碗で、外面に色絵で花や鳥を描く。内底面にもワンポイントで崩れた赤絵の文が描かれる。５は瀬戸美濃系磁器の平碗である。酸化コバルト染付で、丸文内に富士山を染付する。６は瀬戸美濃系磁器の丸碗で型紙摺絵染付、７は瀬戸美濃系磁器の蓋でよろけ縞状の文様が酸化コバルト染付される。８は瀬戸美濃系磁器の丸碗で、外面に紅葉を酸化コバルトで染付し、間に緑色で草文を描き込む。９は口縁部が端反になる瀬戸美濃系磁器の坏で、酸化コバルトで染付される。



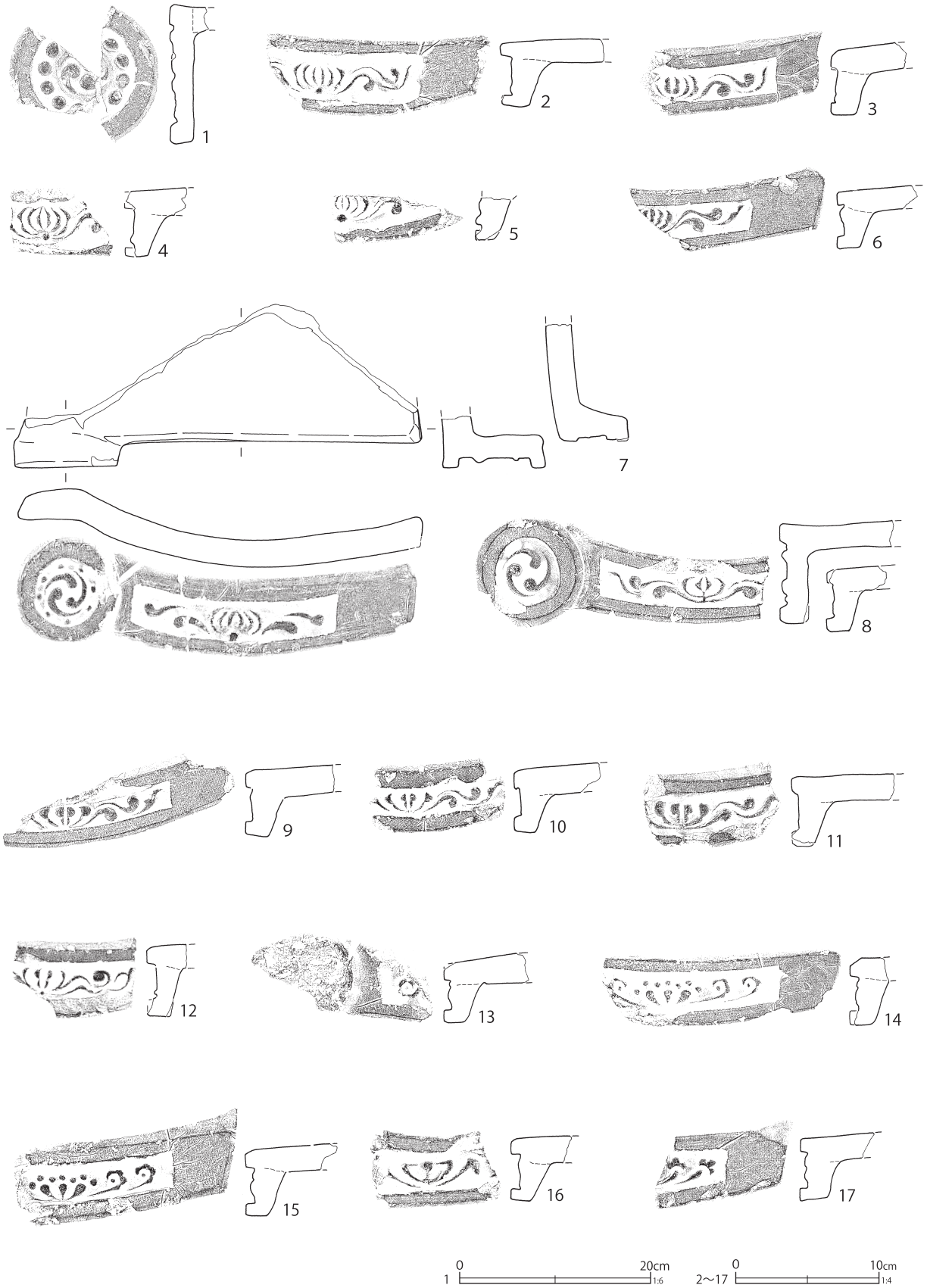
第 20 図　第１号建物跡出土遺物（５）

10は瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒杯で、内面に樽の絵と店印「㐂」が上絵付けされる。描かれているのは野田市の柏屋七郎右衛門（茂木家）の屋号紋である。柏屋は天明４年（1784）から醤油造りを始め、大正６年（1917）に野田醤油株式会社（キッコーマン）に参加して消滅している（野田市郷土博物館2000）。栗橋宿跡での類似例は、北２丁目陣屋跡遺物包含層の出土例（事業団報告書468集第24図151）がある。

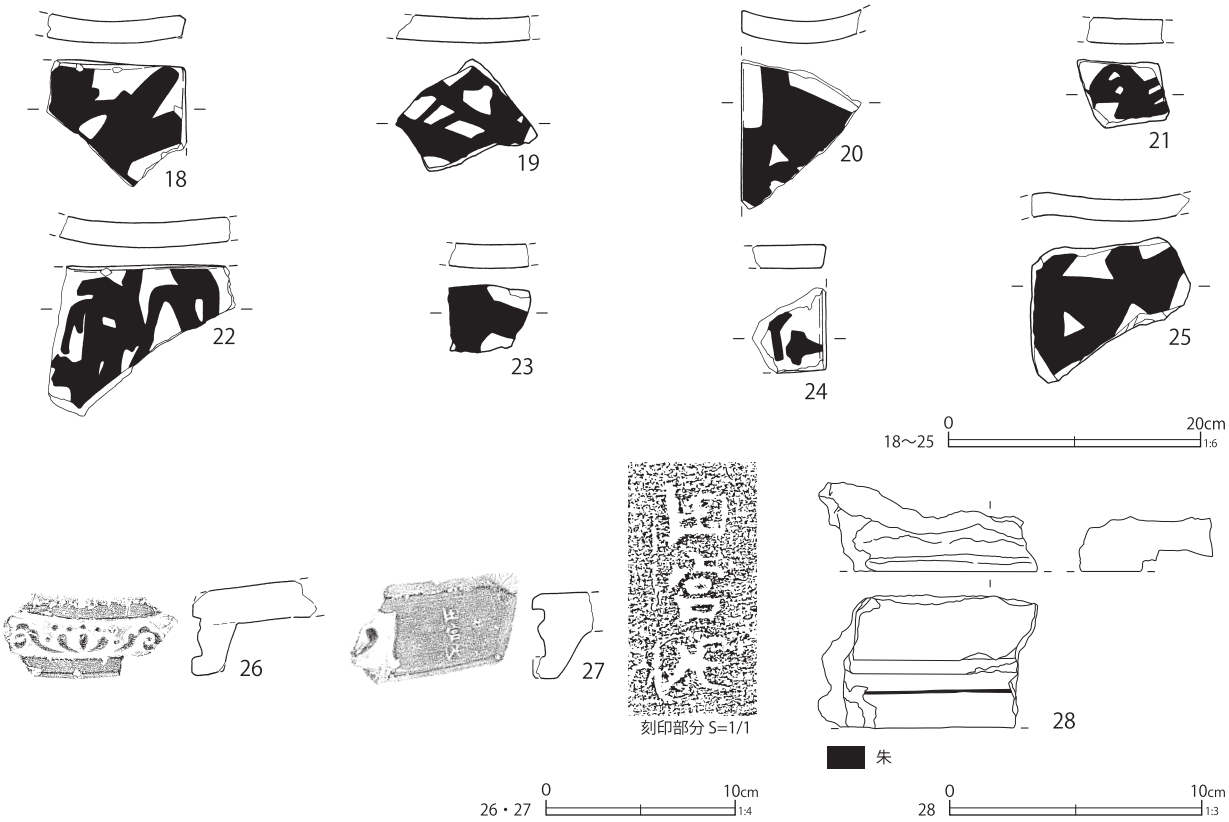
11・12は肥前系磁器の皿で、蛇の目状に釉剥ぎされるものである。11は斜格子文、12は崩れた花唐草文を染付する。13は瀬戸美濃系磁器の皿で、外面高台際に圏線、内面底部に環状松竹梅文を酸化コバルトで染付する。蛇の目状高台を有し、焼き継ぎ印がみられる。14は肥前系磁器の皿で、外面に太い唐草文、内面に鹿の子状の微塵唐草文、底部に環状松竹梅文を染付する。蛇の目

第４表　第１号建物跡出土遺物観察表（２）（第 20 図）

番号	種別	器種	幅	器高	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	土製品	人形	3.1	3.7	2.2	16.6	－	良好	橙	SB1	江戸在地系　前後合二枚型成形　中実	242-1
2	土製品	土錘	縦［4.2］　横 1.1			5.1	K	普通	にぶい褐	SB1	硬質　孔径 0.3	



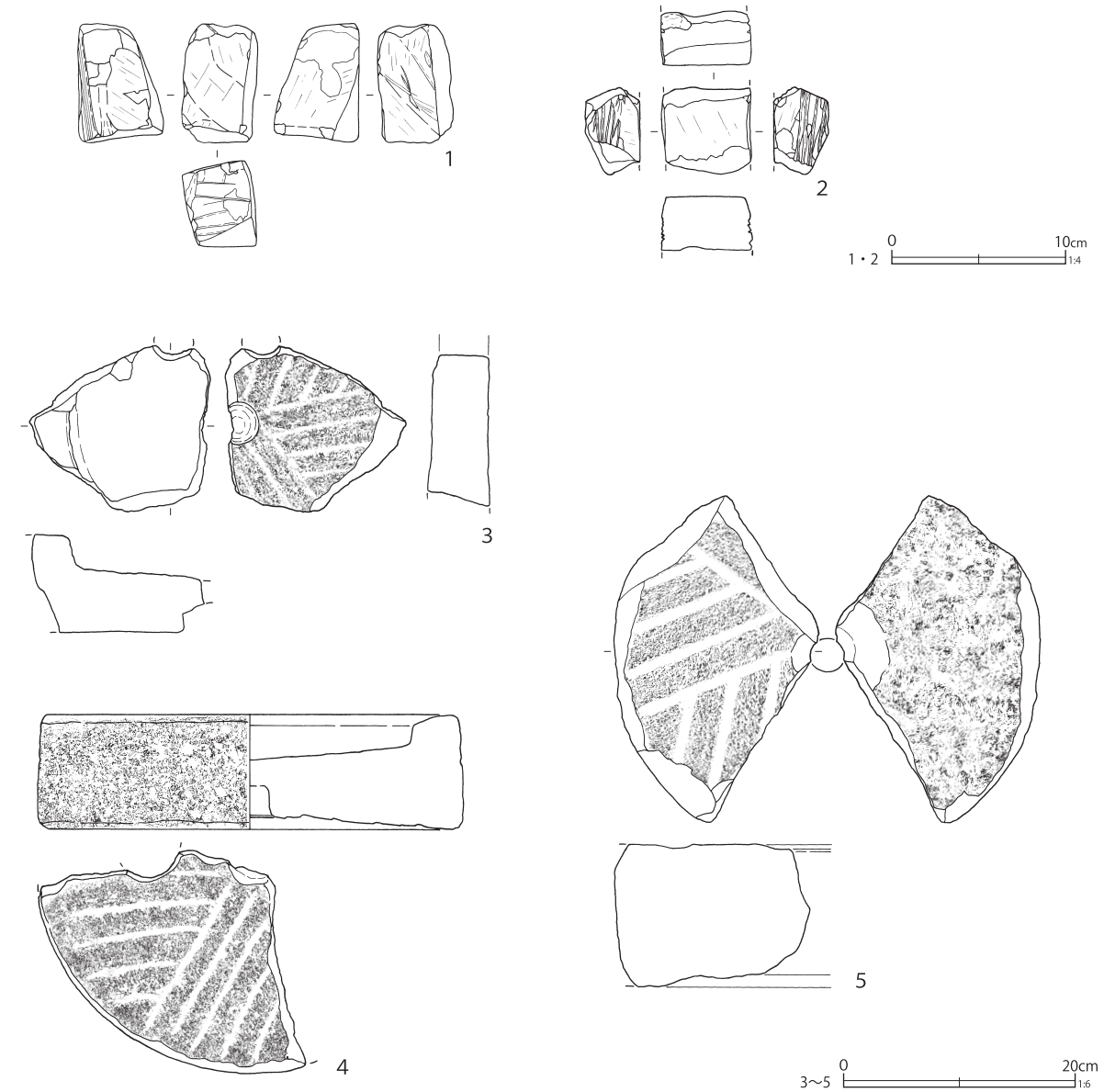
第 21 図　第 1 号建物跡出土遺物（6）



第 22 図　第 1 号建物跡出土遺物（7）

第 5 表　第 1 号建物跡出土遺物観察表（3）（第 21 ～ 22 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒丸瓦	[4.5]	-	14.2	AIK	普通	灰白	SB1	右巻き　12 珠文	
2	瓦	軒桟瓦	[8.4]	[17.4]	-	AIK	普通	灰白	SB1		246-1
3	瓦	軒桟瓦	[5.3]	[14.6]	-	AIK	普通	灰	SB1	胎土軟質	
4	瓦	軒桟瓦	[5.5]	[7.4]	-	ACIK	普通	灰白	SB1	胎土軟質　上面摩耗	
5	瓦	軒桟瓦	[2.4]	[10.0]	-	AIK	普通	灰白	SB1	弱く被熱か	
6	瓦	軒桟瓦	[6.1]	[15.3]	-	AIK	普通	灰白	SB1	胎土軟質	
7	瓦	軒桟瓦	[11.3]	[28.4]	7.0	AIK	良好	灰白	SB1	右巻き　8 珠文	246-2
8	瓦	軒桟瓦	[9.0]	[21.0]	6.5	AIK	良好	灰白	SB1	右巻き	246-3
9	瓦	軒桟瓦	[7.2]	[16.4]	-	AIK	良好	灰	SB1		
10	瓦	軒桟瓦	[6.2]	[10.1]	-	AHIK	良好	灰白	SB1		
11	瓦	軒桟瓦	[8.0]	[12.1]	-	AIK	良好	灰白	SB1	胎土硬質	
12	瓦	軒桟瓦	[3.0]	[9.5]	-	AIK	良好	灰白	SB1	胎土硬質	
13	瓦	軒桟瓦	[7.9]	[13.0]	-	AIK	普通	灰白	SB1	胎土軟質　上面摩耗	
14	瓦	軒桟瓦	[3.0]	[16.8]	-	AIK	普通	灰白	SB1	上面摩耗	246-4
15	瓦	軒桟瓦	[6.2]	[15.4]	-	AIK	良好	灰白	SB1		246-5
16	瓦	軒桟瓦	[4.9]	[9.2]	-	AIK	普通	灰白	SB1	胎土軟質	246-6
17	瓦	軒桟瓦	[5.7]	[10.0]	-	AHIK	良好	灰白	SB1	胎土硬質	
18	瓦	桟瓦	[10.1]	[11.2]	-	ACGIK	良好	灰白	SB1	裏面墨書あり　胎土硬質	246-7
19	瓦	桟瓦	[8.7]	[11.3]	-	ACIK	良好	灰	SB1	裏面墨書あり　胎土硬質	246-8
20	瓦	桟瓦	[11.9]	[9.5]	-	ACEIK	良好	灰白	SB1	裏面墨書あり　胎土硬質	246-9
21	瓦	桟瓦	[5.5]	[7.3]	-	ACIK	良好	灰白	SB1	裏面墨書あり　胎土硬質	246-10
22	瓦	桟瓦	[12.1]	[14.9]	-	I	良好	灰白	SB1	裏面墨書あり　胎土硬質	246-11
23	瓦	桟瓦	[5.4]	[6.6]	-	ACIK	良好	灰	SB1	裏面墨書あり　胎土硬質　断面煤付着	246-12

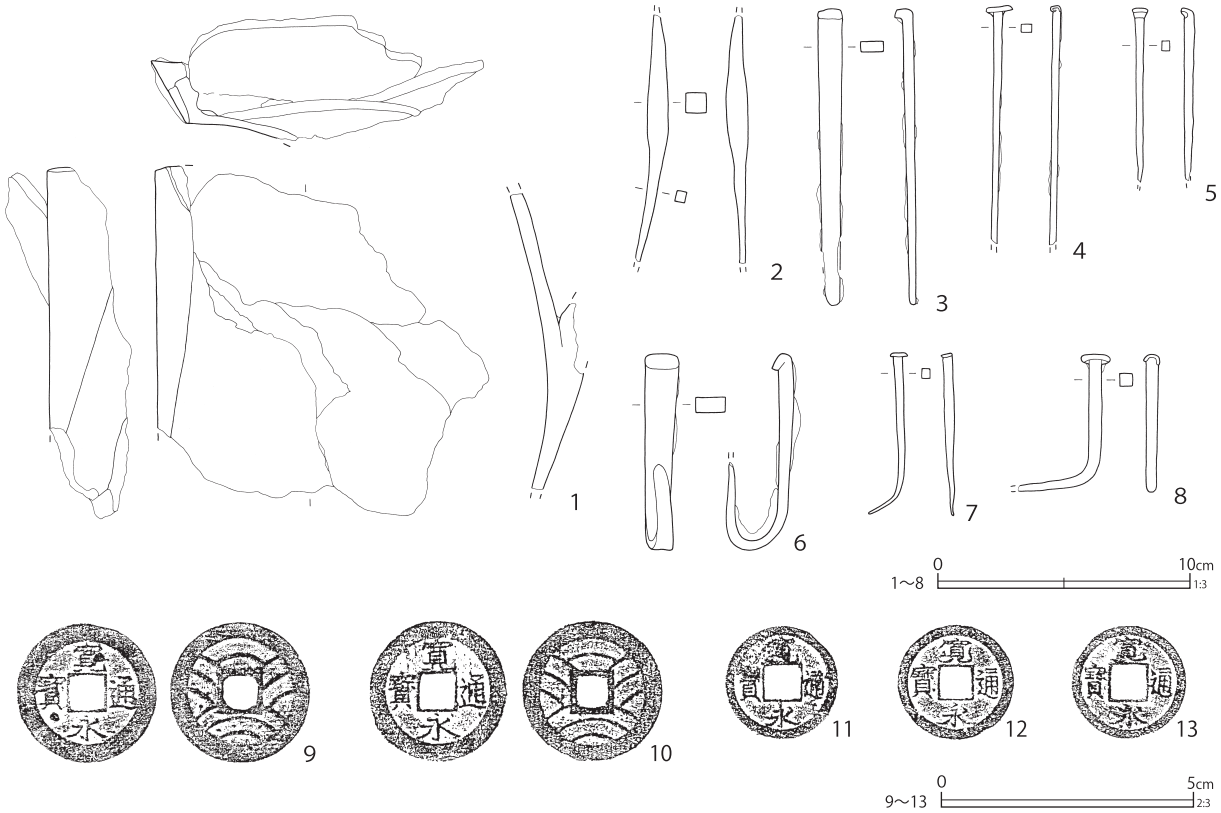


第 23 図　第 1 号建物跡出土遺物（8）

番号	種別	器種	長さ	幅	高さ	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
24	瓦	桟瓦か平瓦	[6.7]	[5.8]	-	ACIK	良好	灰白	SB1	裏面墨書あり　胎土硬質	247-1
25	瓦	桟瓦	[11.6]	[12.7]	-	ACIK	良好	灰白	SB1	裏面墨書あり　胎土硬質	247-2
26	瓦	軒桟瓦	[6.6]	[9.8]	-	AEK	普通	灰白	SB1	東海式　胎土軟質　上面摩耗	247-3
27	瓦	軒桟瓦	[2.4]	[9.7]	-	AIK	普通	灰白	SB1	北側基礎　刻印「田宮瓦」	247-4
28	建築材	漆喰	厚 5.3	8.7	3.5	－	－	－	SB1	朱の痕跡あり	

第 6 表　第 1 号建物跡出土遺物観察表（4）（第 23 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	砥石	6.8	4.3	4.9	202.4	流紋岩	SB1	北側基礎 ノコギリ痕 幅広工具痕 刃物痕 砥面 4 被熱（剥落）	
2	石製品	砥石	[5.0]	[5.2]	[3.1]	113.2	流紋岩	SB1	刃物痕 砥面 3	
3	石製品	石臼	縦 [19.3] 横 [23.2] 高さ 10.0			5130.0	安山岩	SB1	径 (37.2) cm 殻臼の上臼 下面に目 中心軸受孔 供給孔あり	
4	石製品	石臼	縦 [14.3] 横 [15.8] 高さ 8.4			1855.1	角閃石安山岩	SB1	上臼 下面擂目 穿孔 2（内未貫通 1）内面口縁部研磨 被熱（一部黒化）	
5	石製品	石臼	縦 [28.4] 横 [17.8] 高さ 12.4			8400.0	花崗岩	SB1	下臼 上面擂目 下面工具痕 穿孔（貫通）径 (2.9) cm	280-1



第24図　第１号建物跡出土遺物（９）

第７表　第１号建物跡出土遺物観察表（５）（第24図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	鉄製品	鋤先	縦［14.0］横［13.1］厚さ［3.1］重さ468.2	SB1		
2	鉄製品	馬鍬の刃か	長さ［9.8］幅0.8 厚さ0.8 重さ19.5	SB1		
3	鉄製品	釘	長さ11.7 幅0.9 厚さ0.4 重さ19.0	SB1		
4	鉄製品	釘	長さ［9.3］幅0.4 厚さ0.3 重さ3.8	SB1		
5	鉄製品	釘	長さ［6.9］幅0.3 厚さ0.4 重さ3.5	SB1		
6	鉄製品	釘	長さ7.7 幅1.2 厚さ0.6 重さ26.0	SB1		
7	鉄製品	釘	長さ6.4 幅0.3 厚さ0.4 重さ3.0	SB1		
8	鉄製品	釘	長さ［5.4］幅0.5 厚さ0.5 重さ7.1	SB1		
9	銅製品	銭貨	径28.3 厚さ1.6 重さ6.2	SB1	寛永通寶（新）11波	
10	銅製品	銭貨	径28.2 厚さ1.4 重さ5.7	SB1	寛永通寶（新）11波	
11	銅製品	銭貨	径22.9 厚さ1.1 重さ2.3	SB1	寛永通寶（新）	
12	銅製品	銭貨	径22.9 厚さ0.8 重さ2.0	SB1	寛永通寶（新）	
13	銅製品	銭貨	径23.0 厚さ1.0 重さ2.6	SB1	寛永通寶（新）	

状高台の中心に焼き継ぎ印がみられる。15は瀬戸美濃系磁器の型紙摺絵染付の皿で、図示した以外に同文の皿が２点ある。16は瀬戸美濃系磁器の型押成形の皿である。17は肥前系磁器の皿で、口縁部は端反形になって、径も28cmを超えるものと考えられる。内面に山水文を染付する。

18は瀬戸美濃系磁器の植木鉢で、口縁部は肥厚する。上位は酸化クロム青磁釉に上絵付けで崩れた文字を書く。体部中位に突帯が巡り、以下は施釉して酸化コバルト染付で絵付けする。19は磁器質であるが陶器とした。内外面に緑釉・紫色の釉薬を掛け分けるが、大部分が剥離している。型成形で平面形六角形に作り、口縁部の各辺の中央部には半円形の抉りを入れる。高台も六角形で体部とは別作りで貼り付ける。

20は磁器の御神酒徳利と思われるが、形状が

通常より細見である。外面に崩れた草花文を染付する。高台内に焼き継ぎ印と思われる文字が焼き付けされる。外面にはくすんだ呉須で草花文が染付される。21は瀬戸美濃系磁器の燗徳利で、外面は酸化クロム青磁釉の上に、緑色の上絵付けが施される。22は肥前系磁器の徳利で、大型の鶴首瓶である。23は磁器であるが器種は不明である。置物の類であろうか。底部畳付き部は露胎、他は施釉される。近代のものであろう。24は瀬戸美濃系磁器の蓋と思われるが、内外面とも露胎とし「吉」などの墨書がみられる。

25・26は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。25は受皿で、光沢のにぶい柿釉が掛けられるが、ややムラがある。内底面にはごく弱い回転ナデの痕跡が残る。受部は低く径6.5㎝、外面は口縁部直下までケズリ整形で、重ね焼き痕は径6.4㎝である。26は油皿で、基礎北辺の出土である。柿釉は全体にムラ無く掛かり、にぶい光沢がある。内面底部には径4.4㎝の重ね焼き痕がみられる。外面口縁部はやや広くヨコナデ、以下はケズリで成形する。外面底部には4.2㎝の重ね焼き痕がみられる。

27は陶器の甕と考えられる。内面も灰釉が施釉され、底部に砂が付着する目跡が６個並ぶことから、広口の形態になるものと思われる。外面は糠白釉状の不透明白色釉で、上位に鉄釉が流し掛けされる。高台内は錆釉が拭き取られて鉄化粧状である。胎土は瀬戸美濃系陶器に類似する。

28は炻器質の陶器甕で、胎土は赤味が強い。施釉されるのは光沢の強い鉄釉で、外面は褐色味を帯び、内面はより濃い色調である。口唇部の釉が拭き取られるので、有蓋のものと思われる。29は産地不明陶器の鉢で、灰釉と柿釉を掛け分けている。内面に藍色の呉須絵で草花文を描く。底面にピン痕状の目跡がみられる。高台は蛇の目状高台で畳付き部は露胎、その部分に径２㎝強の目跡が認められる。胎土は硬質で緻密である。

30～32は瀬戸美濃系陶器の徳利類である。30は二合半徳利で、灰釉付け掛けのものである。栗橋宿跡では、このタイプの出土例は少ない。31は所謂「ぺこかん徳利」の小型のものであるが、灰釉を施す点が珍しい。32は一升徳利の上部破片である。黄色味が強く、光沢の鈍い灰釉が施される。頸部の沈線は見られない。33は備前系陶器の瓶類で、板作り成形のものである。頸部と体部境に蓮弁状の文様を有す。外面は弱いヘラ彫りで草花文を描く。34は産地不明陶器の燗徳利で、呉須絵で「□勢」の文字が書かれる。「原勢屋」と書かれていた可能性が高い。

35は益子系と思われる陶器擂鉢で、内外面に柿釉が施される。擂目はやや粗く、一単位13条と思われる。胎土は灰白色で緻密である。36は地方窯系の陶器擂鉢で、内外面とも赤味を帯びた柿釉が施される。体部外面上位はロクロナデ、下位はケズリが施される。擂目は一単位16条と思われる。蛇の目状高台の畳付部に刻印「㐂」がある。胎土は35より雑で、やや黄色味を帯びる。37は陶器の蓋で、三彩土瓶の蓋である。比較的大型のものである。上面は白化粧後施釉、緑釉の円文と鉄釉で文様を描く。38も陶器の蓋で、土瓶の蓋である。上面に掛かる灰釉は光沢が強い。つまみは菊花状に型押しされる。

39は江戸在地系土器と考えられる施釉土器の灯明皿で、受部の切り込みは半円形である。40は京都産陶器で、いわゆる白色土器の涼炉である。窓部と脚の抉りはケズリ成形、外面底部は雑に回転ケズリされる。外面体部はヨコナデ調整である。

41は瓦質土器の火鉢で筒形を呈するものと考えられる。口縁部はヨコナデでミガキは施されない。直下に角渦文が施文される。胎土には角閃石を多く含む。42も瓦質土器の火鉢で、口縁部はミガキ、外面体部に櫛歯波状文を施文する。強く燻され内外面とも黒色を呈する。胎土に角閃石を

含む。43は瓦質土器の火消壺で、外面はケズリ後にミガキで調整する。胎土に角閃石が多く含まれる。

44は、土師質土器の把手付き鍋の把手部分である。胎土に角閃石を含む。45は土師質土器の焼塩壺である。底部は糸切と思われるが、外面の摩耗が激しく、痕跡を確認できない。内面はロクロナデと思われる回転ナデ痕が明瞭である。胎土に微細な雲母を含む。46は土師質土器の焙烙で、底部は平底に近い。体部外面下位にケズリを施す。内面は周囲をやや強く回転ナデ、その内側に指頭圧痕が連続する。中心部付近は弱い回転ナデで一部にヘラのあたりが見える。胎土に角閃石が多く含まれる。

47・48は瓦質土器の竈鍔である。47は上部内外面にケズリを施して面取りする。上面は丁寧にナデを施す。「○」４つの刻印がある。胎土は緻密でやや粉っぽい印象である。雲母微細粒を少量含む。48は外面鍔部下端にケズリを施し、面取りとする。上面は丁寧な回転ナデで平滑に整える。下端は丸く整形する。胎土は白色粒子が多い砂っぽい印象のもので、角閃石は微量に留まる。

磁器には、型紙摺絵染付の製品が一定量含まれており、本跡は19世紀後半の構築と考えられる。

第20図１は土製品の人形で裃を着た狸のようである。前後二枚合せ型成形、下面に孔を有す。２は環状土錘である。

第21・22図は基礎内から出土した瓦類である。軒桟瓦では、２～６に示したタイプの瓦がが多く、非掲載のものを含め、７点（中心飾り遺存５点）を確認した。また、９～12に示したものは、中心飾りが四弁のもので、７点（中心飾り遺存５点）を確認した。13～15・26は所謂「東海式」の軒桟瓦で、８点（中心飾り遺存４点）を確認した。

18～25は平瓦部分の下面に墨書が認められる。残念ながら細片ばかりで文字を判読するには至らなかった。27は刻印「田宮瓦」のある軒桟瓦である。なお、図示し得なかったが、軒丸瓦の瓦当部破片が２点認められた。

第23図は石製品である。１・２は流紋岩製の砥石である。１はノコギリ痕状の工具痕が残る。置き砥であるが、破損面にも刃ならし痕がみられる。２は両側面に刃ならし痕が顕著である。３・４は石臼でいずれも穀臼である。３は輝石安山岩製の上臼で内面（上面）から下方へ貫通する供給孔があり、下面には貫通しない軸受け孔がみられる。内面には使用による摩耗がみられ、少量の煤の付着も確認される。５は花崗岩製の下臼で、中心に軸受け孔が残る。

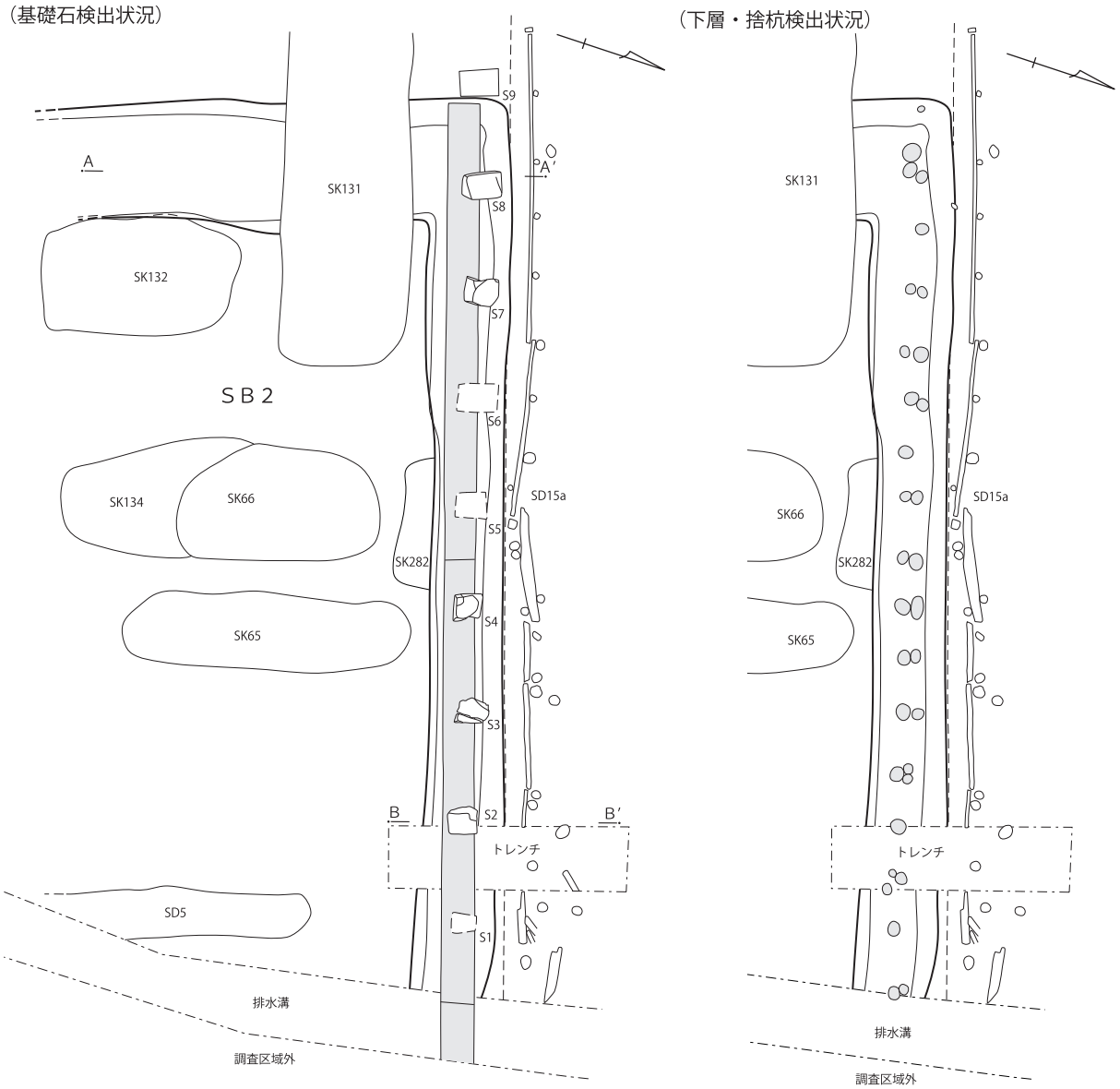
第24図は金属製品で、１は鋤先、３～８は釘である。９～13は寛永通寶で、９・10が四文銭、他は新寛永の一文銭である。

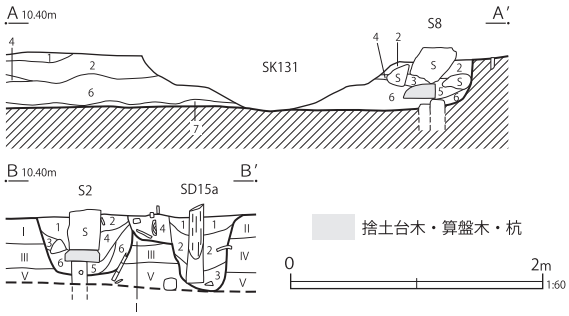
第２号建物跡（第25～32図）

Ｆ７-Ａ６・７、Ｂ６グリッドに位置する。第１区画（区画AA）の東側に位置し、西側（オモテ・日光道中側）に第１号建物跡と第３号建物跡が連なって検出されている。『絵図』の「荒物屋百姓　忠助」の区画に該当する。

検出されたのは、布掘り状の掘方を有す基礎である。本来は「ロ」の字形に巡るものであろうが、東側と南側が調査区外に延びるため、全体の形状が不明である。調査範囲の基礎の規模は長軸7.76m以上、短軸3.98m以上、深さ0.46m、長軸方位はN-73°-Eである。重複する遺構のうち、第131号土壙より古い建物跡である。

基礎は、北辺（桁行方向）に蝋燭地業を有す構造である。掘方掘削後に捨杭を打ち、その上に捨土台を置き、６層で周囲を埋めている。その後、蝋燭石を据えて、５層から１層へと順に埋めている。蝋燭石の上位を固める１層（第25図B―B´の１層）は硬く、踏みしめられている可能性もある。捨土台は、上面・下面とも面取り状に削って平坦面を造り出した丸太で、木表が下側であっ





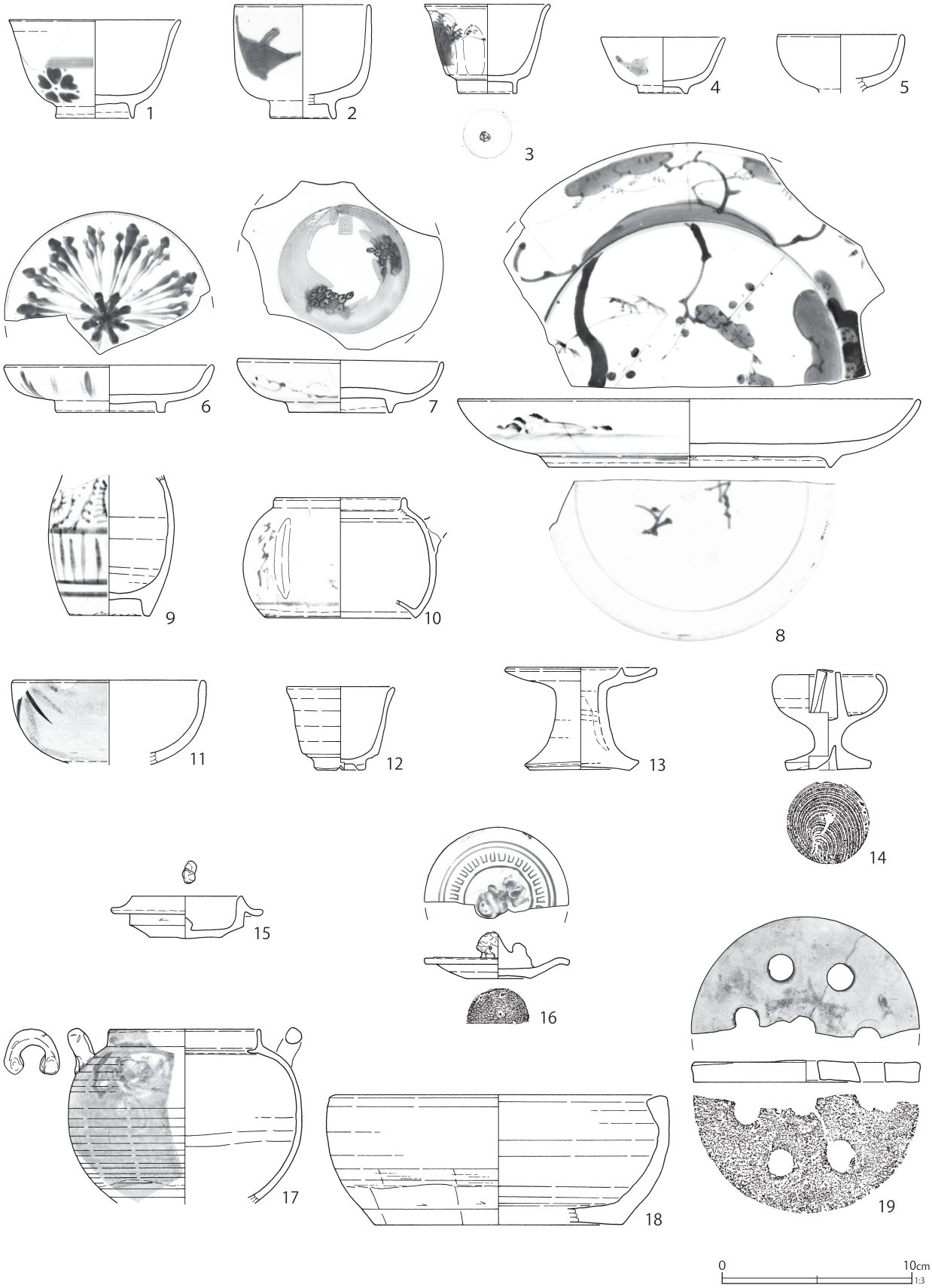
第２号建物跡　A-A’
1　オリーブ灰色土
2　暗褐色土　　オリーブ灰色土小ブロック微量
3　暗褐色土　　石のズレに伴って２層が流入したもの
4　暗褐色土　　オリーブ灰色土小ブロック含む　２層と６層が混ざったもの
5　暗褐色土　　石のズレに伴って４層が流入したもの
6　暗褐色土　　オリーブ灰色ブロック多量　北側から堆積する傾向
7　黒褐色土　　木片・木製品を含む　粘性弱

第２号建物跡　B-B’
1　暗褐色土　　オリーブ灰色土小ブロック含む　しまり強
2　暗褐色土　　１層と同じだがより酸化する
3　黒褐～灰黄褐色土　炭化物粒子少量　粘性あり
4　黒褐～灰黄褐色土　３層と同じだがより酸化する
5　灰黄褐色土　　粗砂微量　粘性あり
6　暗褐色土　　酸化鉄・炭化物粒子微量　粘性あり

Ⅰ　にぶい黄褐色土　細砂・炭化物粒子微量
Ⅱ　にぶい黄褐色土　炭化物粒子微量
Ⅲ　灰黄褐色土　　細砂少量　砂質土に近い　炭化物粒子微量
Ⅳ　灰黄褐色土　　砂質土に近い　オリーブ灰色土小ブロック・細砂少量　炭化物粒子少量
Ⅴ　灰黄褐色土　　細砂・炭化物粒子微量　粘性あり

第 15a 号溝跡
1　黒褐色土　　細砂微量　埋戻し
2　黒褐色土　　炭化物粒子・オリーブ灰色粒子含む　埋戻し
3　黒褐色土　　細砂少量　埋戻し
4　暗褐～にぶい黄褐色土　暗褐色土をベースに黄褐色細砂が混ざる　板の北側はラミナ状で洪水層の可能性あり

第 25 図　第２号建物跡



第 26 図　第 2 号建物跡出土遺物（1）

第８表　第２号建物跡出土遺物観察表（１）（第 26 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(8.9)	5.1	4.0	-	40	良好	白	SB2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付　(端反碗)	
2	磁器	碗	(6.9)	5.9	(3.4)	-	45	普通	白	SB2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面木型打込文・染付　(湯呑形碗)	
3	磁器	坏	(6.4)	4.6	2.9	-	55	良好	白	SB2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	
4	磁器	坏	(6.4)	2.9	(2.4)	-	55	良好	白	SB2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面木型打込文・染付	
5	磁器	仏飯器	(6.4)	[2.9]	-	-	45	普通	白	SB2	瀬戸美濃系　内外面施釉（外面酸化コバルト単彩）	
6	磁器	皿	(10.8)	2.4	(5.6)	-	50	良好	白	SB2	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　口紅	
7	磁器	皿	10.5	2.7	5.2	-	70	良好	白	SB2	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面木型打込施文・染付	
8	磁器	皿	(24.0)	3.5	(14.7)	-	45	普通	白	SB2	肥前系　内外面施釉・染付　高台内ハリ支痕４遺存	72-1
9	磁器	御神酒徳利	-	[7.2]	4.2	-	60	普通	白	SB2	肥前系　外面施釉・染付	
10	磁器	急須	(6.6)	6.2	(7.8)	-	15	普通	白	SB2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	
11	陶器	碗	(10.0)	[4.3]	-	DI	20	普通	灰白	SB2	瀬戸美濃系　内外面灰釉　外面上絵付(赤)	
12	陶器	坏	(5.4)	4.3	(2.4)	K	20	良好	灰白	SB2	京都信楽系か　内外面施釉　高台部切れ込み　胎土磁質	72-2
13	陶器	灯火具	(7.6)	5.3	5.2	I	85	良好	灰白	SB2	京都信楽系　内外面透明釉	
14	陶器	秉燭	(5.1)	5.2	4.3	H	80	良好	灰白	SB2	底部糸切痕（右）　内外面鉄釉	
15	陶器	蓋	5.7	2.1	3.7	EHK	45	良好	灰白	SB2	上面灰釉	
16	陶器	蓋	6.5	2.4	3.2	I	50	普通	白	SB2	上面白化粧・施釉　上絵付（赤・緑）	72-3
17	陶器	土瓶	(7.8)	[9.1]	-	K	25	普通	灰白	SB2	外面灰釉・呉須絵・白土染付	
18	瓦質土器	火鉢	(17.0)	6.8	(13.0)	CHI	15	普通	にぶい橙	SB2	底部ヘラナデ　やや酸化炎焼成	72-4
19	瓦質土器	目皿	(11.6)	1.1	(11.8)	ACEI	50	良好	灰白	SB2	下面砂目　被熱・赤変	

た。蝋燭石は大谷石と思われる凝灰岩である。

これに対し西辺は、捨土台・捨杭等の工法ではなく、大きく２層の暗褐色土で埋め戻すのみであった。

なお、北側に近接する第15ａ号溝跡は地境の溝である。土層セクション（第25図左下）に見る４層部分は、第２号建物跡の掘方を壊している。部分的に横矢板状の木材が遺存していたため、調査時には盛土の土留めか木塀と考えていたようだが、溝の側板を設置するための掘方であると思われる。１～３層部分は幾度かにわたって掘り直された地境溝の本体であろう。

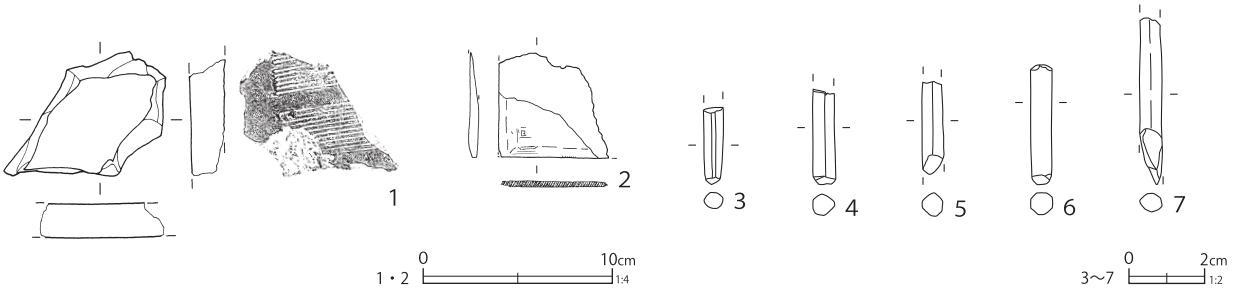
第26図１～19に出土した陶磁器類を示した。

１は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、外面に横帯と桜花文を染付する。全体に薄手で高台部は特に薄い。２は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗で、外面に木型打込の上から鳥文を染付する。３は瀬戸美濃系磁器の坏で端反形のものである。体部は面取りされ、酸化コバルト染付が施される。４は瀬戸美濃系磁器の坏で、背の低い端反口縁のものである。外面に木型打込の上から松・鳥文を染付する。

５は瀬戸美濃系磁器の仏飯器で、脚部を欠失する。外面は青呉須の単彩とする。６は瀬戸美濃系磁器の皿で、内外面によろけ縞文状の染付がみられる。淡く口紅を施す。高台部はやや幅広い。７は瀬戸美濃系磁器の皿で、体部は極めて薄い。内面に木型打込の上から花文を染付する。高台内全体を露胎とする。８は肥前系磁器の皿で、腰の張る形態のものである。内面に松竹梅文、外面に山水文を染付する。

９は肥前系磁器の御神酒徳利で外面は下位に縦格子、上位に蛸唐草文を染付する。10は瀬戸美濃系磁器の急須で酸化コバルト染付が施される。

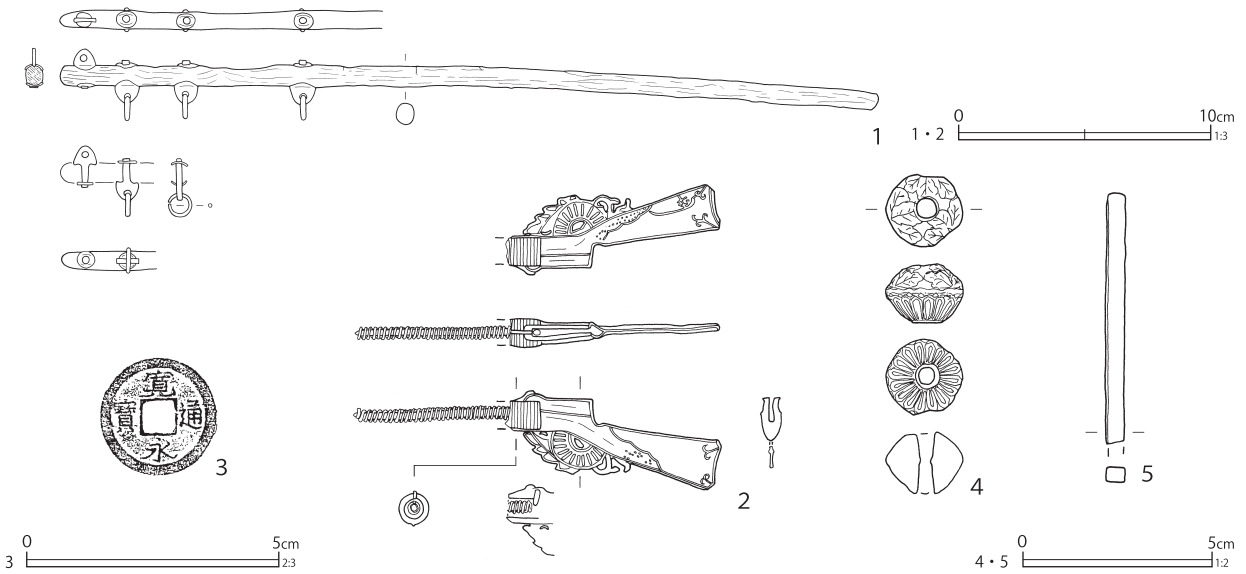
11は瀬戸美濃系陶器の丸碗で色絵を施す京風碗である。12は高台に三角形の切れ込みを有す坏で、口縁部は端反になる。高台内には抉り状の



第 27 図　第 2 号建物跡出土遺物（2）

第 9 表　第 2 号建物跡出土遺物観察表（2）（第 27 図）

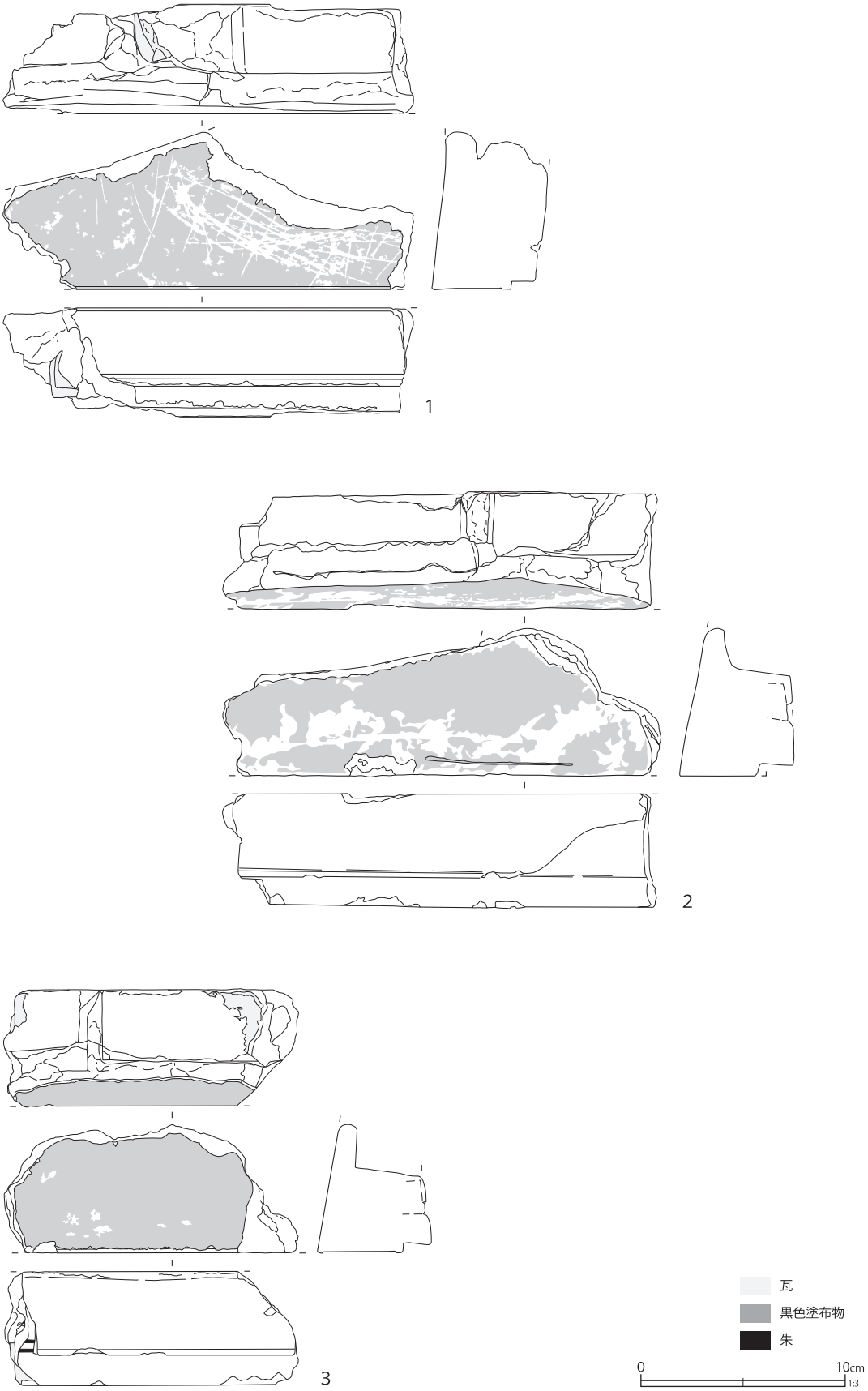
番号	種別	器種	長さ	幅	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	桟瓦	[6.6]	[8.5]	-	AIK	良好	灰白	SB2	下面櫛歯状条線　胎土硬質	
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ		石材	遺構	備考	図版
2	石製品	石板	[5.5]	[5.8]	0.5	24.0		粘板岩	SB2	刻書あり 側面工具痕	
3	石製品	石筆	[2.0]	径 0.5	-	1.0		滑石	SB2	白色不透明	284-2
4	石製品	石筆	[2.5]	径 0.6	-	1.7		滑石	SB2	白色不透明	284-2
5	石製品	石筆	[2.4]	径 0.6	-	1.4		滑石	SB2	白色不透明	284-2
6	石製品	石筆	3.2	径 0.6	-	2.4		滑石	SB2		284-2
7	石製品	石筆	[4.4]	径 0.6	-	2.7		滑石	SB2	白色不透明	284-2



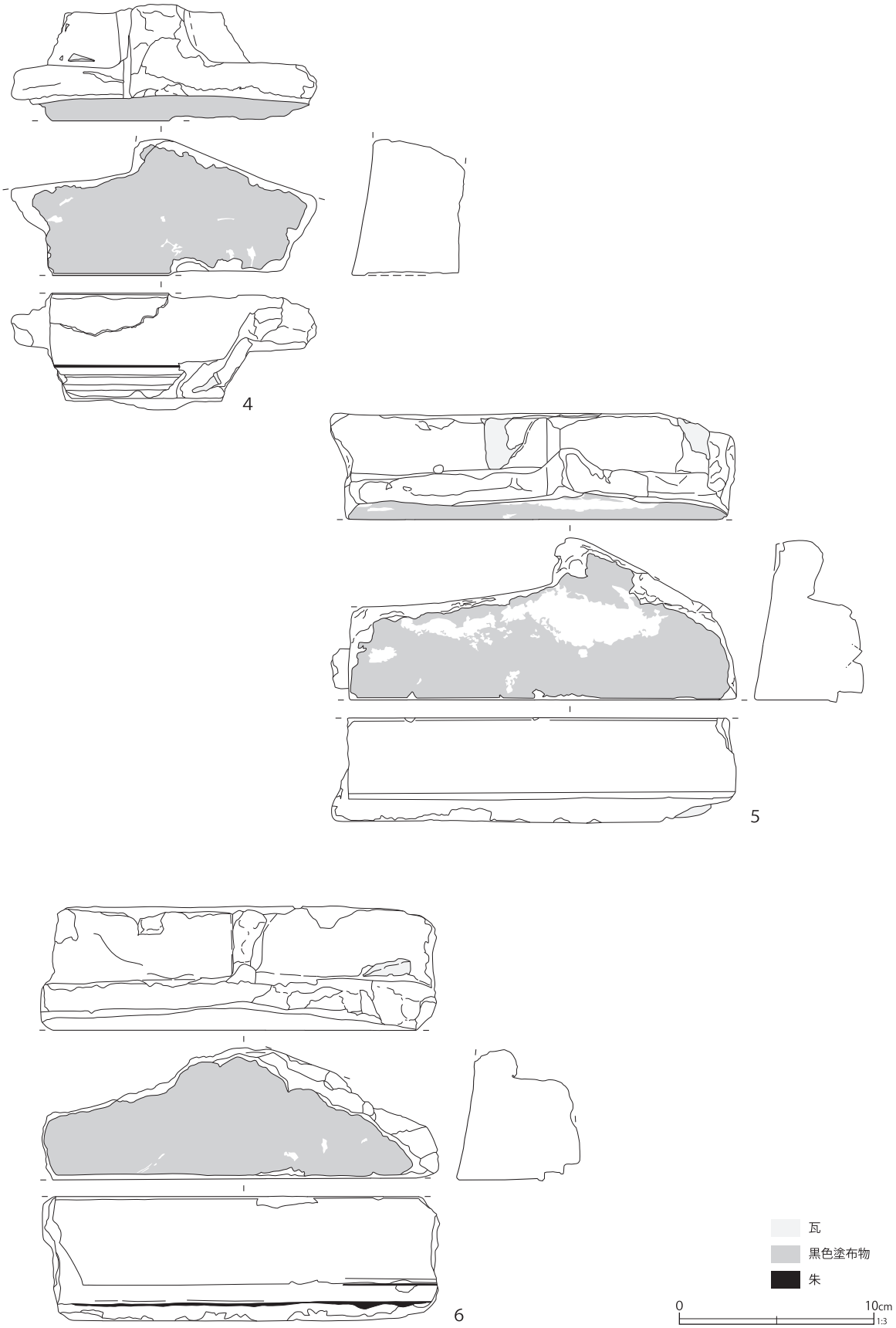
第 28 図　第 2 号建物跡出土遺物（3）

第 10 表　第 2 号建物跡出土遺物観察表（3）（第 28 図）

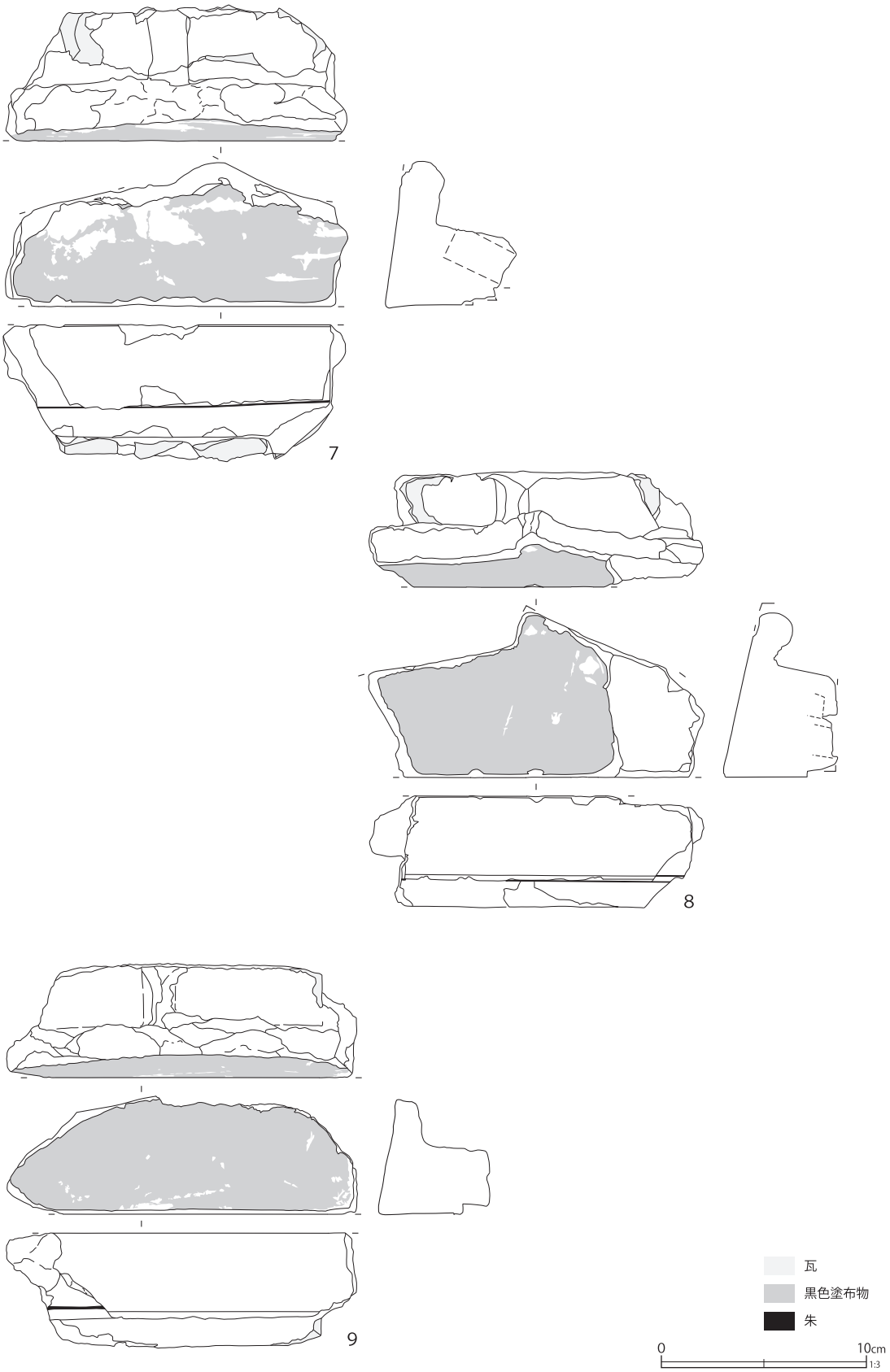
番号	種別	器種	法量				遺構	備考	図版
1	銅製品 木製品	竿秤	長さ 32.5 金具縦 2.4 横 0.9 径 0.9 重さ 20.3				SB2	取緒金具 4	277-1
2	銅製品	トイガン	長さ [9.7] 高さ 2.7 幅 0.8 重さ 14.2				SB2	銃身欠失 芯とバネのみ残る	277-6
3	銅製品	銭貨	径 23.6 厚さ 1.1 重さ 2.5				SB2	寛永通寶（新）	
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構	備考	図版
4	土製品	玉	1.6	2.0	2.0	4.0	SB2	胎土：AHIK　焼成：普通 色調：にぶい橙　型成形 焼成前穿孔（孔径 0.5）	285-1
5	硝子製品	笄	[6.6]	0.5	0.4	6.0	SB2	中実　被熱（黄白色化）	284-6



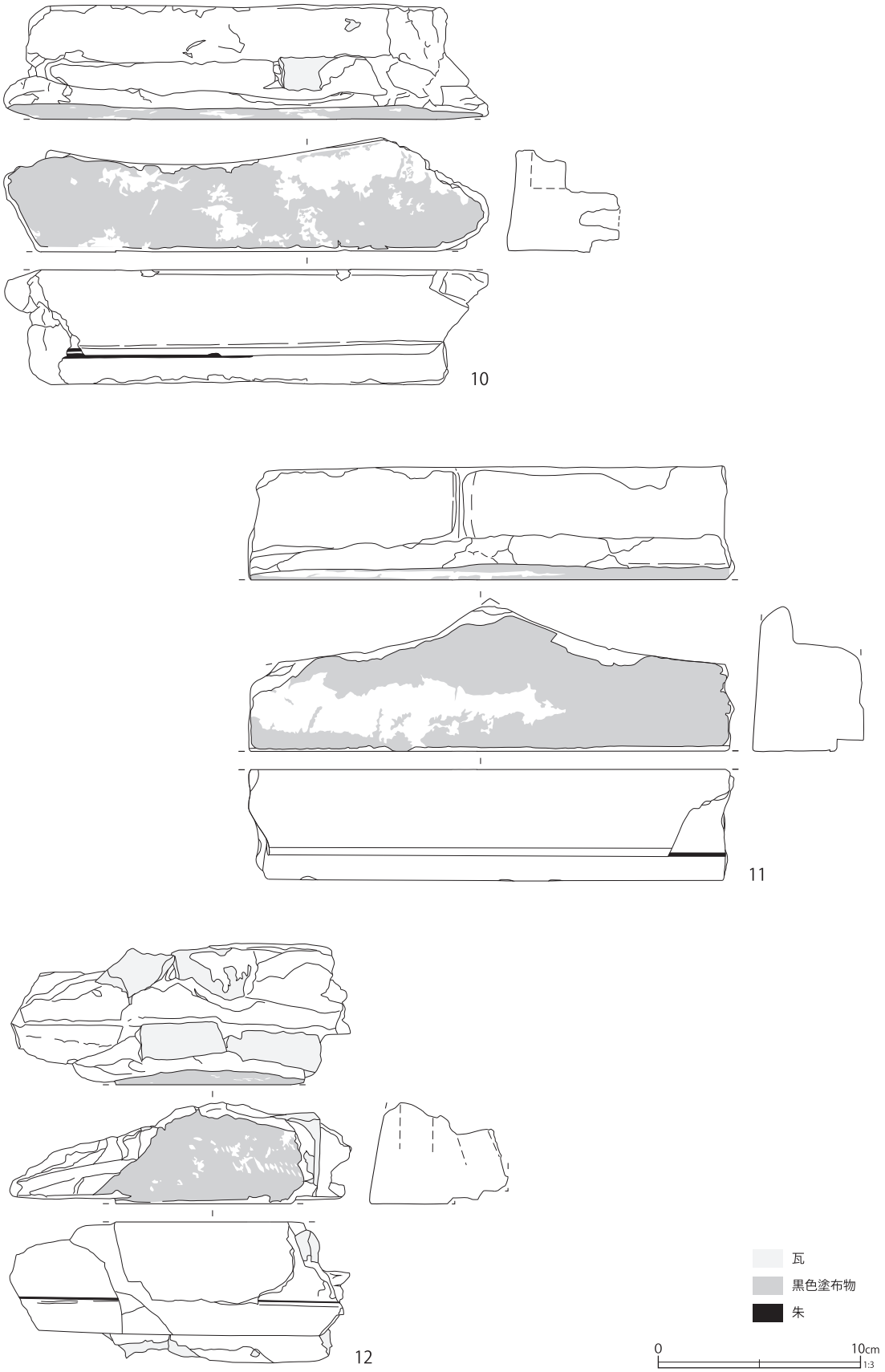
第 29 図　第 2 号建物跡出土遺物（4）



第 30 図　第 2 号建物跡出土遺物（5）



第 31 図　第 2 号建物跡出土遺物（6）



第 32 図　第 2 号建物跡出土遺物（7）

第 11 表　第２号建物跡出土遺物観察表（４）（第 29 ～ 32 図）

番号	種別	器種	高さ	幅	厚さ	遺構	備考	図版
1	建築材	漆喰	7.7	20.1	5.0	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物	
2	建築材	漆喰	7.2	21.5	5.6	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物	
3	建築材	漆喰	6.3	14.3	5.6	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	
4	建築材	漆喰	7.0	15.7	5.5	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	
5	建築材	漆喰	8.3	20.9	5.4	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物	
6	建築材	漆喰	6.7	20.4	6.4	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	285-5
7	建築材	漆喰	7.1	16.7	6.6	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	
8	建築材	漆喰	8.0	16.3	5.5	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	285-6
9	建築材	漆喰	5.7	17.1	5.6	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	
10	建築材	漆喰	5.6	24.0	5.6	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	
11	建築材	漆喰	7.2	24.1	5.5	SB2	表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	
12	建築材	漆喰	5.0	16.8	7.0	SB2	瓦含む　表面黒色塗布物　朱の痕跡あり	

ヘラ痕跡があり、本来短い渦巻き状のケズリを有していたものであろう。胎土は磁質で、京都信楽系陶器の可能性がある。13は京都信楽系陶器の灯火具である。底部は回転ケズリ痕が残る。胎土は磁質である。14は陶器の秉燭で体部が薄い。茶色味を帯びた鉄釉が施される。底部中心に貫通しない穿孔がある。

15は陶器の蓋で土瓶蓋と思われる。つまみは痕跡的だが、僅かに捻って装飾的に作っている。貫入の多い黄色の釉薬が施される。弱い被熱がみられるが、使用によるものと考えられる。胎土や釉薬は京都信楽系陶器に類似する。16も陶器の蓋でやはり土瓶蓋と思われる。上面は色絵、つまみは獅子を意匠化するが崩れている。17は陶器土瓶で、体部外面は下位をケズリで整形する。青・白の絵付けがみられる。

18は瓦質土器の丸火鉢で、底部はヘラナデ、体部下位はケズリで整形するが、上位はナデが加えられる。胎土には赤色粒子と角閃石が多く含まれる。全体に橙色味が強いが、二次的な被熱の可能性もある。19は瓦質土器の目皿である。使用により被熱・変色しているようである。下面は砂目、上面は周囲を回転ナデ、内側は多方向のナデで調整する。側面は強くヨコナデが施される。胎土に角閃石が一定量含まれるほか、微細な雲母粒を僅かに含む。

第27図には瓦・石製品をまとめた。１は桟瓦で、凸面側に瓦の反りに対して並行に複数の条線を施したものである。滑り止めの用途があるとされている（金子2018）。瓦類の出土は少なかったが、この他に軒丸瓦の破片が１点（51ｇ）認められた。

石製品は、出土した資料全てを図示した。２は粘板岩製の石板である。３～７は石筆である。白色不透明の短いものが多い。

第28図１は金属製品の竿秤で先端に量るものを提げる鉤を連結する金具が一箇所、提緒を装着する遊環付の金具が三箇所にある。棒に目盛は残っていない。

２は金属製品の拳銃模造品（トイガン）である。玩具の射的に用いられたマッチ棒を飛ばすトイピストルと考えられる。筒状の銃身は失われ、内部の芯とバネ（鉄製）が残る。銃身以外の部分はアンチモニー製か。

３は銭貨で、寛永通寶の新寛永である。

第28図４は土製品で髪飾りの玉とみられる。全体に木の葉と蓮弁状の文様が施され、雲母が表面に付着する。

出土した陶磁器類には、瀬戸美濃系磁器の酸化コバルト染付の製品がまとまっており、端反の坏や燗徳利が多い。型紙摺絵の製品は、丸碗が１点みられるが、ほとんど含まれていなかった。この

ような遺物組成は第１号建物跡より明らかに古い様相である。

一方、本跡を掘り込んでいると観察された第131号土壙も酸化コバルト染付の磁器が主体であり、第２号建物跡との時期差は小さい。遺物様相から見れば、両者の新旧関係に疑問が生じる。いずれにしても第２号建物跡は栗橋９期の比較的早い段階で構築された建物と考えられる。

基礎の掘方に囲まれたエリアからは、第65・66号・132号土壙が検出されている。遺構重複による新旧関係は把握できなかったが、第132号土壙の陶磁器は、建物跡の遺物とさほど年代差が無く、栗橋９期の早い段階である。第65・66号土壙は、出土遺物の時期から建物廃絶後の土壙とみられる。特に型紙摺絵染付の磁器を含む第66号土壙は、建物解体時の廃棄物を処理した土壙の可能性がある。

このほか基礎に囲まれたエリアの一部で、陶磁器類とともに瓦を埋め込んだ漆喰が多く出土した。この部分には浅い窪みがあったようだが、掘り込みの広がりが捉え難く遺構とは認定できなかった。共併する磁器類には、瀬戸美濃系磁器の酸化コバルト染付のものが多く含まれ、型紙摺絵染付のものが少数みられた。従って第２号建物解体後の投棄物がまとめられていた可能性もある。ここから出土した漆喰を第29～32図に掲載した。

漆喰は内部に瓦の破片を混ぜ込んで固めてある。下面には、横方向に朱線が引いてあるものが多いが、朱線を覆って漆喰が被っているものも見受けられる。朱線は漆喰を塗り重ねていく過程で、一時的な割り付け線のような役割を果たしたものだろうか。

上部には桟瓦の凸面（下面）の圧痕が横に連続して残っている。このことから、瓦の下面を充填した漆喰の一部で、建物の軒下部分の部材と考えられる。また、外面は黒く塗られており、黒壁の土蔵建物の一部である可能性が高いであろう。

これらが、建物跡の解体に伴うものであるならば、第２号建物跡は、漆喰塗り黒壁・瓦葺きの土蔵建物であった可能性が高い。

第３号建物跡（第33～36図）

Ｆ７-Ａ５・Ｂ５グリッドに位置する。第１区画（区画AA）の西側に位置し、東側（ウラ・利根川側）に第１・２号建物跡が連なって検出されている。以上の第１～３号建物跡は同じ敷地に属し、『絵図』の「荒物屋　百姓　忠助」の区画に該当する。

基礎の規模は長軸5.60m以上、短軸4.55m、深さ0.43m、長軸方位はN-72°-Eである。

基礎は布掘り状で、北・東・南の三方を検出したほか、中心の梁間方向に南北をつなぐ掘り込みがみられ、全体の平面形が「日」の字形であった可能性が考えられる。ただし、中心の梁間方向の掘方は、外周の掘方より深い。

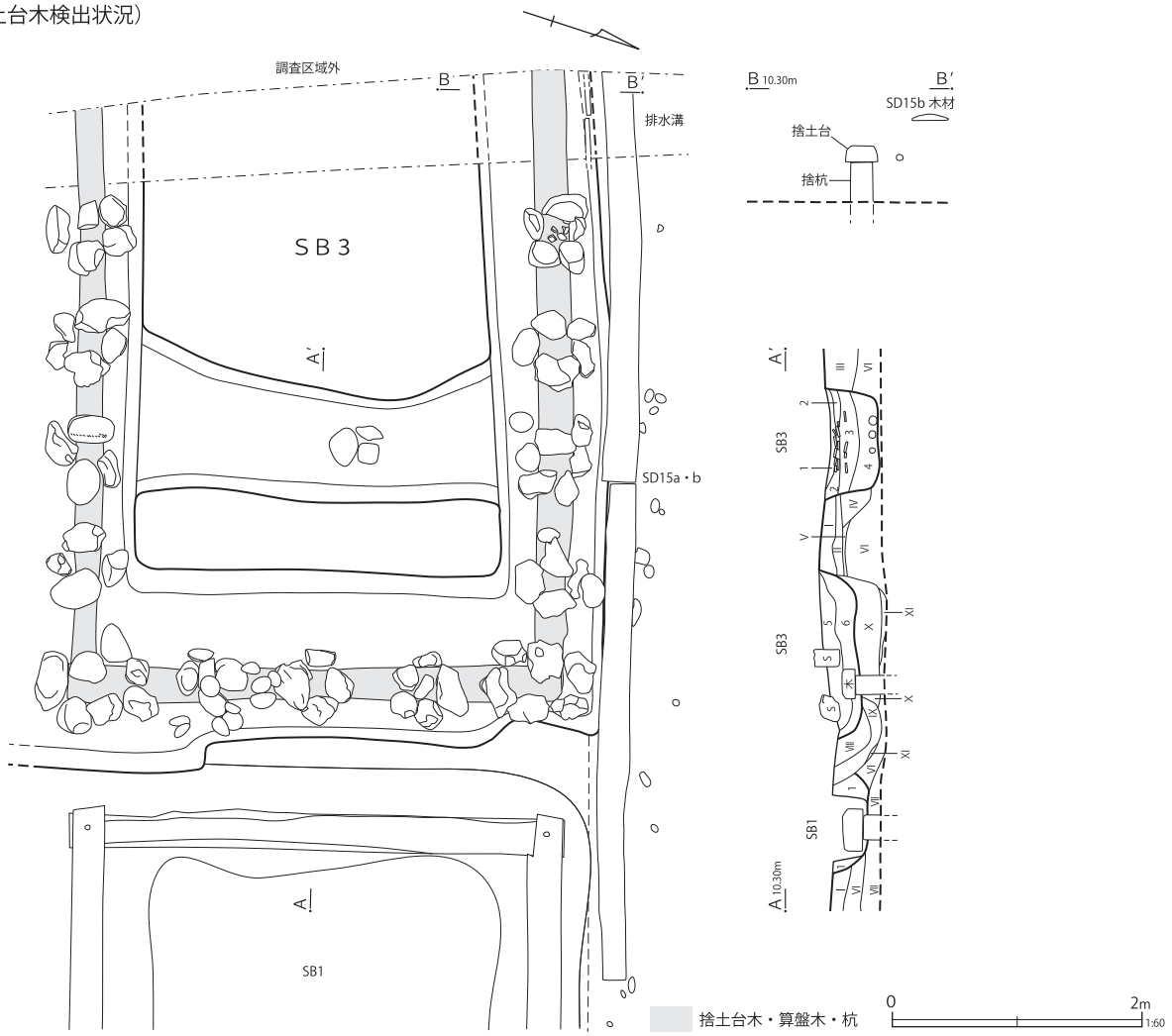
基礎の外周部（北・東・南側）掘方内には、捨杭上に土台木を配す。その上には人頭大の河原石を５～７個一組で据えている。土層は砂質土である。

中心に配された南北方向の基礎には捨杭は見られないが、掘方底面に三本の根太木が配されており、捨土台と思われる。掘方内の土は砂と砂質土の互層を基本としており、上層には瓦が充填されていて、ほぼ中央に３個の礫を配している。

第35図には出土した陶磁器類を示す。

１は肥前系磁器の碗で、高台は高く薄い。色絵が施される。２は瀬戸美濃系磁器の端反の坏で、外面を面取りし酸化コバルト染付で漢詩文を染付する。３も瀬戸美濃系磁器の端反の坏で、外面に酸化コバルト染付で圏線を染付する。４は肥前系磁器の仏飯器で、外面に崩れた梅樹文が染付される。底部は高台畳付部が僅かに面取りされ、墨書がみられる。５は肥前系磁器の鉢で、内面体部に青磁釉を施す。内底面に山水文を染付し、外面に

（捨土台木検出状況）



第１号建物跡
１　にぶい黄褐色土　細砂少量
第３号建物跡
１　暗褐色土　砂質土
２　暗褐色土　砂質土　１層と細砂が交互に堆積
３　灰黄褐色土　砂質土　しまり強
４　灰黄褐色土　砂質土　灰黄色細砂に同色の小ブロックを混入した土　埋戻しか
５　灰黄褐色土　炭化物微量　埋戻しか
６　灰黄褐色土　砂質土　５層より暗灰黄色に近い　炭化物微量　灰黄色土小ブロック少量　埋戻し

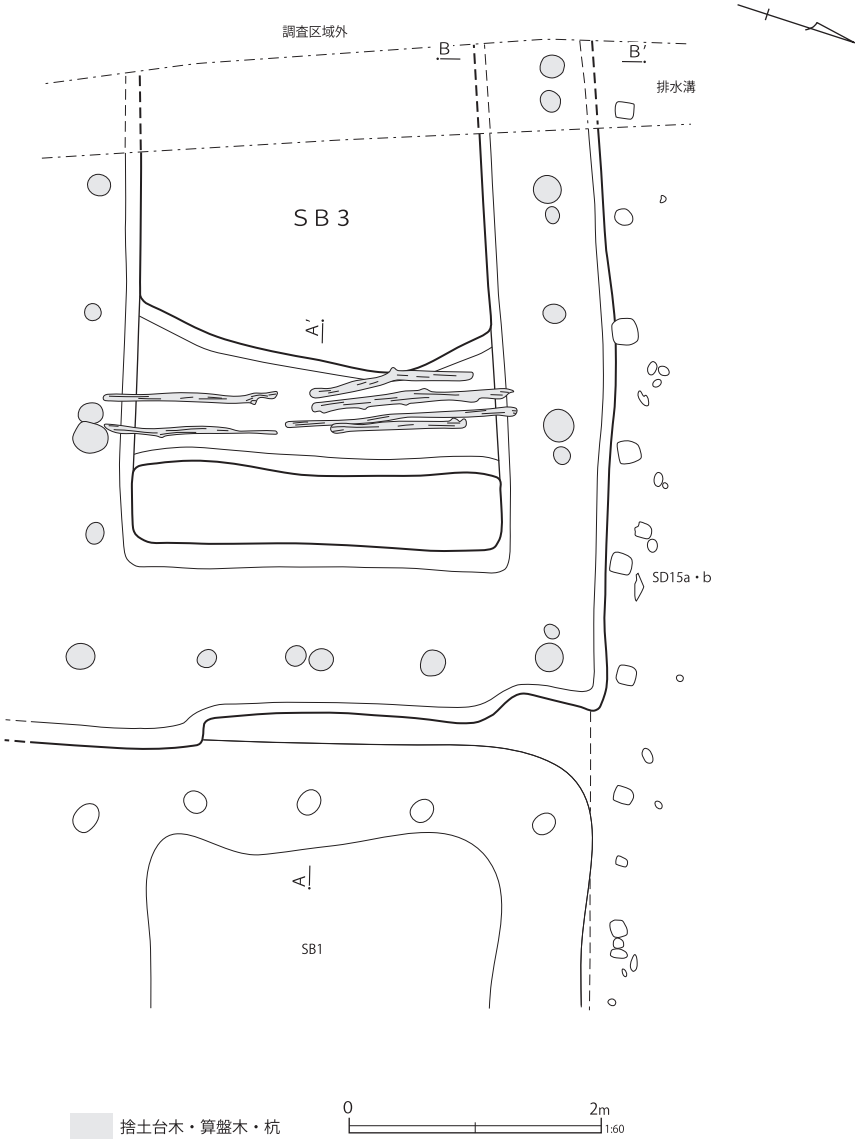
Ⅰ　暗褐色土　同色の粘性土小ブロック・細砂微量
Ⅱ　灰黄褐色土　炭化物少量　Ⅰ層土が微量混入する
Ⅲ　灰白色細砂　砂は一様　土取り後の埋戻しか
Ⅳ　暗褐～灰黄褐色土　粘性強　しまり弱
Ⅴ　灰白色細砂　As-A あるいは川砂　角礫多い　第８地点の「第二面」を覆う土に近い　溢水によって堆積した砂か
Ⅵ　灰黄褐色土　炭化物・細砂微量　粘性弱　しまりあり
Ⅶ　暗褐色土　細砂少量
Ⅷ　暗褐色土　細砂少量　埋戻しか
Ⅸ　灰黄褐色土　細砂含む　埋戻しか
Ⅹ　灰黄褐色土　砂質土　粘土ベースに細砂が大量に混入している　埋戻しか
Ⅺ　暗褐色土　砂質土

第 33 図　第３号建物跡（１）

も染付の一部が残る。底部は蛇の目凹形高台になる。６は肥前系磁器の油壷で、外面に色絵が施される。７は瓦質土器の十能で、把手部分である。把手の上面は丁寧なミガキ、下面は砂目をヘラナデで消している。中は中空である。断面は灰黄色で胎土の混入物は少ないが、若干の雲母粒を含む。

出土した磁器をみてみると、２・３の他に酸化コバルト染付の製品はみられなかった。このほか、碍子が１点出土しているが、混在の可能性もある。全体的には栗橋８期までの陶磁器が主体であり、構築は栗橋９期の早い段階と考えられる。

（捨杭検出状況）



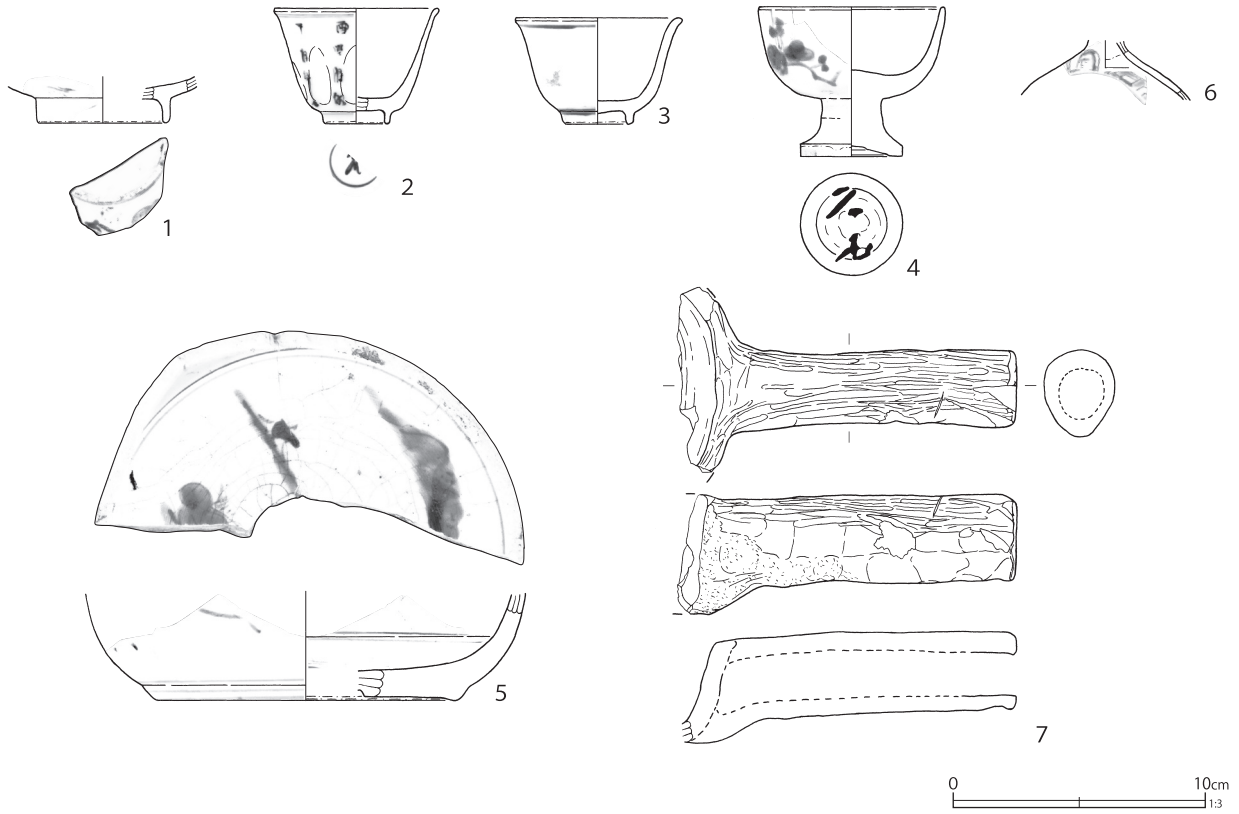
第 34 図　第３号建物跡（２）

なお、構築土層まで含めたセクションの観察（第33図A-A'）では、第１号建物跡より本跡が新しいものと観察されているが、遺物の年代観からみれば本跡のほうが古い遺構と思われる。

第36図は瓦類である。前述のように、建物の中央付近を南北につなぐ基礎内の上層に瓦が多く敷き詰められていた。これらの中には、軒桟瓦片15点（うち、軒丸瓦部分のみ１点、中心飾りの残る軒平瓦部分７点）と軒丸瓦片３片が認められた。

図示したのは全て軒桟瓦である。１・２・７・８は丸瓦部に梅鉢文を表すものである。軒平部の瓦当部には、７弁の中心飾りの両側に、強く渦を巻く唐草を表す。本跡におけるこのタイプの軒平部分の破片は、図示したものが全てであった。

３～６は、軒平部瓦当部の唐草のアウトラインが、瘤を持つように波打つものである。４のみ中心飾りが少し異なっているが、これらのタイプは、図示したものを含めて６点（中心飾り４点）が確認された。本跡の出土瓦の中で最も数が多



第35図　第３号建物跡出土遺物（１）

第12表　第３号建物跡出土遺物観察表（１）（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	-	[1.8]	(5.0)	-	5	普通	白	SB3	肥前系　内外面施釉　外面色絵（緑）	
2	磁器	坏	(6.4)	4.5	(2.3)	-	35	普通	白	SB3	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	
3	磁器	坏	(6.4)	4.1	2.4	-	45	普通	白	SB3	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	
4	磁器	仏飯器	(7.2)	5.9	4.0	-	40	普通	白	SB3	肥前系　内外面施釉　外面染付　墨書	
5	磁器	鉢	-	[4.2]	(11.6)	-	20	普通	白	SB3	肥前系　内外面施釉（内面上位青磁釉）・染付　蛇の目凹形高台	
6	磁器	油壺	-	[2.0]	-	-	5	普通	白	SB3	肥前系　外面施釉・色絵（赤・緑・紫）	72-5
7	瓦質土器	十能	-	[4.7]	-	AHI	20	普通	灰黄	SB3	上部ミガキ　把手中空	

い。５・６にみられるように、「○」の刻印が認められるものがある。

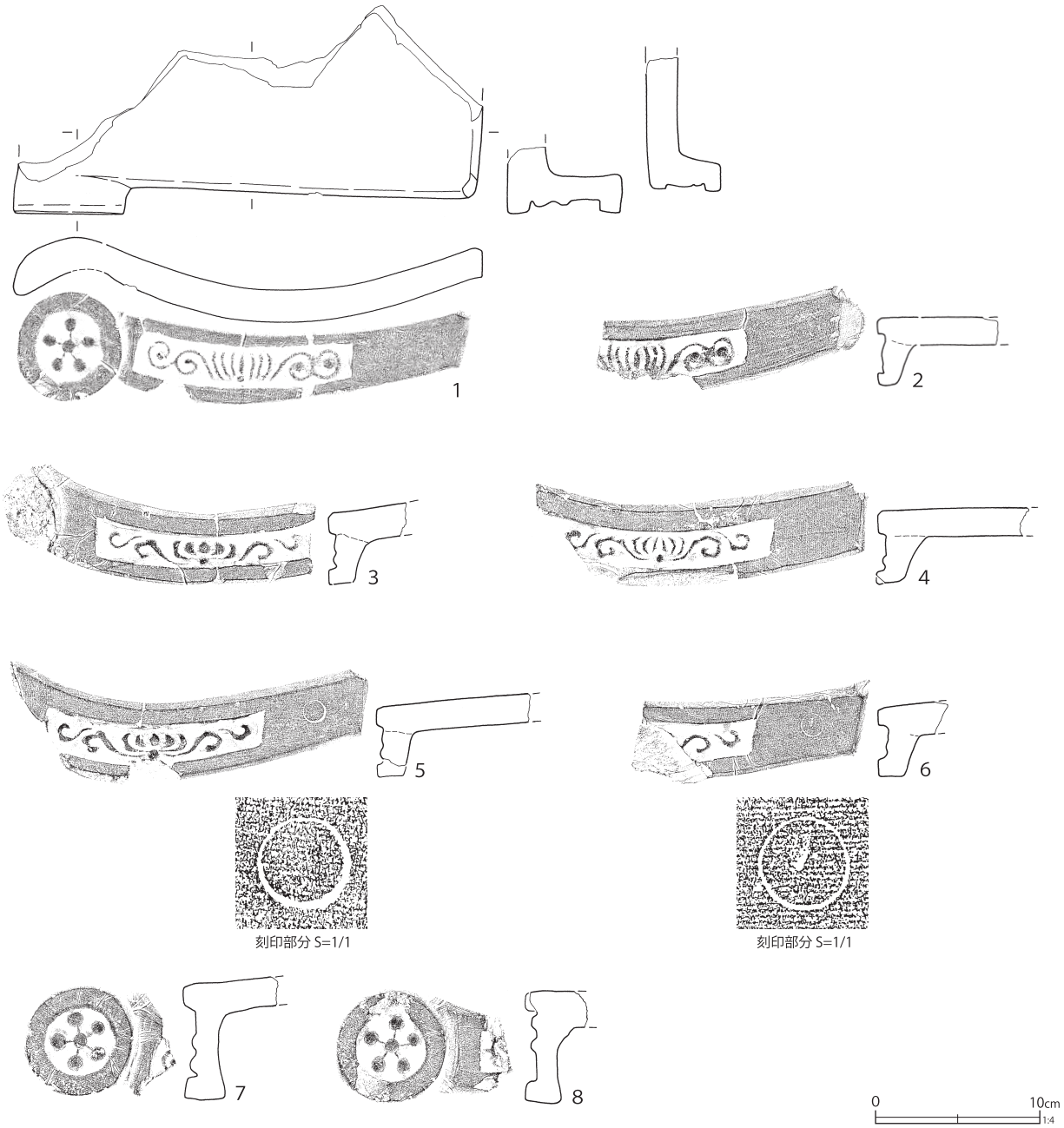
このほか、石製品で玉髄製火打石１点（４g）と粘板岩製砥石１片（58g）が出土しているが図示し得なかった。

第４号建物跡（第37～41図）

Ｅ７－Ｊ５～７グリッド（第３区画）に位置する。『絵図』の「旅籠屋　百姓　喜右衛門」に該当する。平面形長方形に布掘り状の掘方を巡らすが、四隅は途切れており、南側の基礎は北側の基礎より短い。長軸10.38m、短軸5.54m、深さ0.44mで、各々の基礎内に捨土台を配する。

捨土台の下には、やや間隔を開けて横木を配し、算盤地業をしている。また、３本一組で捨杭が打たれている。

捨土台の上には、六箇所に石が乗った状態であった。基礎上面から掘り込まれた第70号土壙は、セクションの状況から石材の抜き取りを行っ

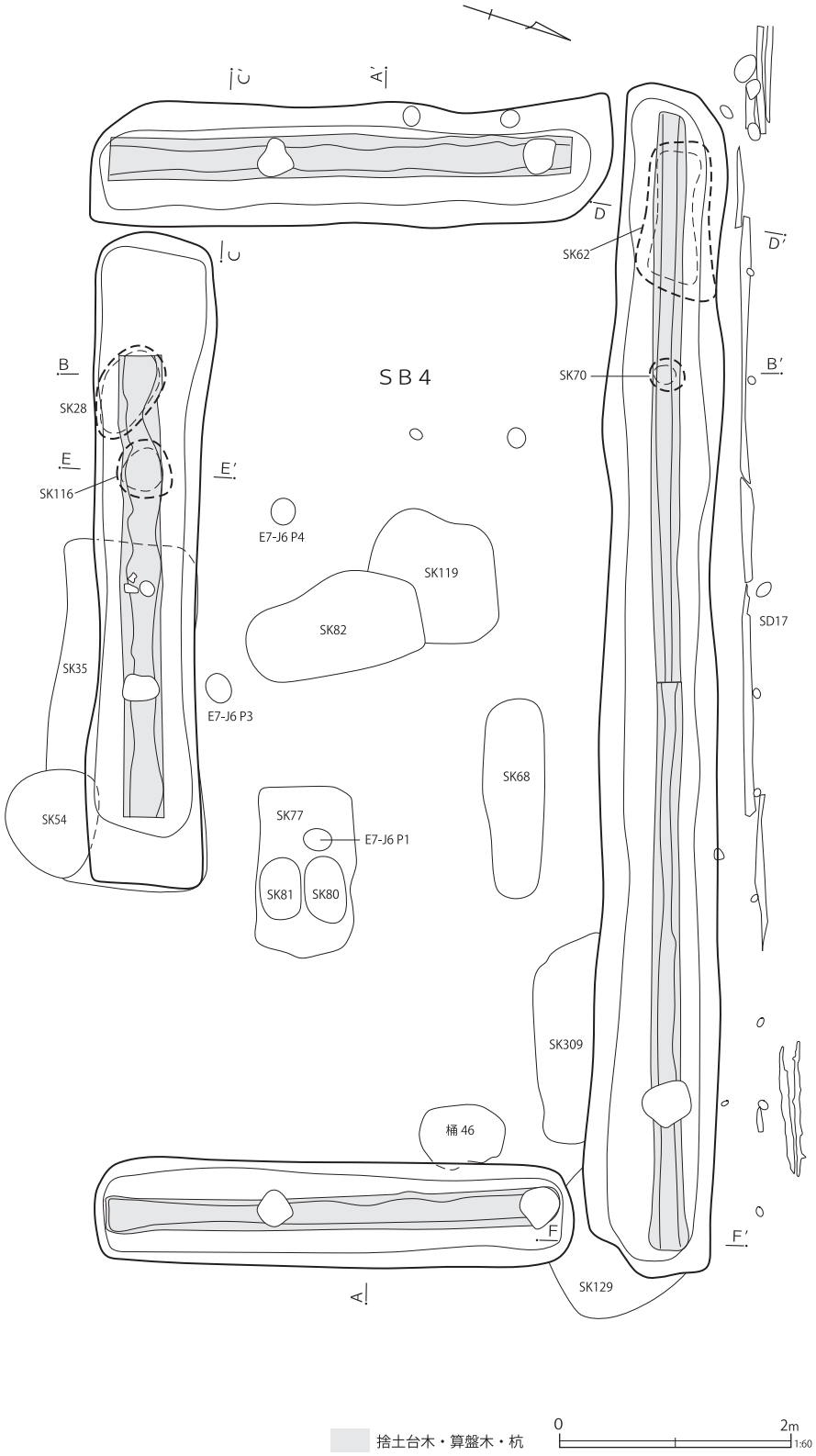


第 36 図　第 3 号建物跡出土遺物（2）

第 13 表　第 3 号建物跡出土遺物観察表（2）（第 36 図）

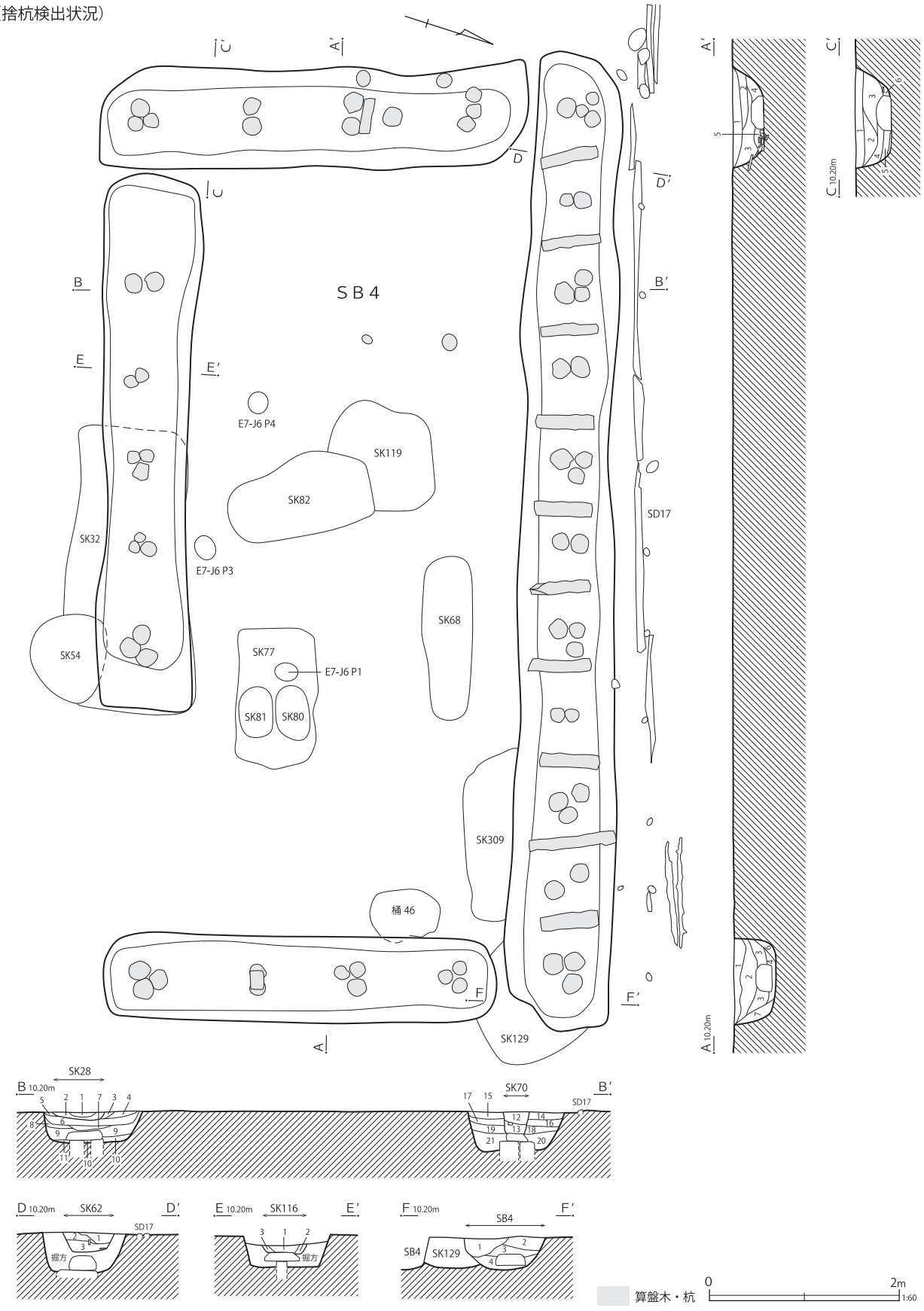
番号	種別	器種	長さ	幅	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	[12.7]	28.5	6.5	AIK	普通	灰白	SB3	梅鉢文　胎土軟質	247-5
2	瓦	軒桟瓦	[7.5]	[15.0]	-	AIK	良好	灰白	SB3	胎土硬質	247-6
3	瓦	軒桟瓦	[5.8]	[19.0]	-	ACIK	普通	灰白	SB3		247-7
4	瓦	軒桟瓦	[9.5]	[21.0]	-	AIK	良好	灰白	SB3		247-8
5	瓦	軒桟瓦	[10.0]	[22.0]	-	AIK	良好	灰白	SB3	刻印「○」　胎土硬質	247-9
6	瓦	軒桟瓦	[5.0]	[14.3]	-	AIK	良好	灰白	SB3	刻印「○」　胎土硬質	247-10
7	瓦	軒桟瓦	[6.1]	[6.5]	6.6	AIK	普通	灰白	SB3	梅鉢文　胎土軟質	247-11
8	瓦	軒桟瓦	[3.9]	[11.3]	6.7	AHIK	普通	灰白	SB3	梅鉢文　胎土軟質	248-1

（捨土台木検出状況）



第 37 図　第 4 号建物跡（1）

（捨杭検出状況）



第38図　第4号建物跡（2）

第４号建物跡・第28・62・70・116号土壙

A-A'
1　オリーブ灰色土　細砂少量　焼土・炭化物微量　埋戻し土に流入土が混ざる (SB4)
2　オリーブ灰色土　細砂含む　炭化物微量　埋戻し (SB4)
3　オリーブ灰色土　細砂少量　２層より僅かに暗い　埋戻し (SB4)
4　灰色土　細砂少量 (SB4)
5　暗褐色土　細砂・炭化物微量 (SB4)
6　オリーブ灰色土　細砂含む　地表付近からの崩落 (SB4)
7　灰色土　粘質　細砂少量　崩落土 (SB4)

B-B'
1　暗褐色土　粘質　炭化物多量　白色粒子少量　粘性・しまりあり (SK28)
2　暗褐色土　粘質　１層より明るい　炭化物・白色粒子少量　５㎝ほどの玉石含む　粘性・しまりあり (SK28)
3　暗灰色土　粘質　炭化物粒子・褐色粒子少量　粘性弱　しまり強 (SB4)
4　暗灰色土　粘質　３層より明るい　炭化物粒子・褐色粒子多量　粘性あり　しまり強 (SB4)
5　暗灰色土　粘質　３層より明るい　炭化物多量　褐色粒子少量　粘性・しまりあり (SB4)
6　暗灰色土　粘質　４層より暗い　炭化物少量　白色粒子多量　粘性・しまりあり (SB4)
7　黒褐色土　炭化物少量 (SB4)
8　にぶい黄褐色土　細砂多量 (SB4)
9　灰黄褐色土　黒褐色土の小ブロック少量　炭化物 (φ１～２㎜) 微量 (SB4)
10　黒褐色土　オリーブ灰色土の小ブロック少量　炭化物 (φ１～２㎜) 微量 (SB4)
11　オリーブ灰色土　黒褐色土の小ブロック少量　10層と同一の可能性もある (SB4)
12　暗褐色土　粘質　炭化物少量　褐色粒子多量　粘性あり　しまり弱 (SK70)
13　暗褐色土　粘質　12層より暗い　炭化物粒子・褐色粒子多量　粘性あり　しまり弱 (SK70)
14　暗褐色土　粘質　褐色粒子多量　φ５～10㎝ほどの石　粘性ありしまり強 (SB4)
15　暗褐色土　14層より明るい　褐色粒子少量　φ５～10㎝ほどの石粘性あり　しまり強 (SB4)
16　暗褐色土　砂礫層　褐色粒子多量　φ５～10㎝ほどの礫　粘性弱しまりあり (SB4)
17　暗褐色土　粘質　褐色砂粒多量　礫 (φ５～10㎝) 少量　粘性・しまりあり (SB4)
18　暗灰色土　粘質　炭化物少量　粘性あり　しまり強 (SB4)
19　暗灰色土　18層より暗い　粘質　炭化物粒子・褐色粒子少量　粘性あり　しまり強 (SB4)
20　暗灰色土　18層より明るい　粘質　炭化物粒子・白色粒子少量　粘性・しまり強 (SB4)
21　暗灰色土　20層より暗い　粘質　炭化物粒子・白色粒子少量　粘性・しまり強 (SB4)

C-C'
1　にぶい黄褐色土　オリーブ灰色土に炭化物少量 (SB4)
2　暗褐色土　炭化物少量 (SB4)
3　にぶい黄褐色土　炭化物微量 (SB4)
4　にぶい黄褐色砂　細砂　酸化鉄混入土 (SB4)
5　灰色粘質土　細砂少量 (SB4)
6　暗褐色土　黒褐色土に暗褐色土小ブロックが多量に混ざったもの (SB4)

D-D'
1　暗褐色土　砂質　粘土ブロック多量　褐色細粒　粘性弱　しまりあり (SK62)
2　暗褐色土　粘質　１層より暗い　褐色砂粒多量　粘性・しまりあり (SK62)
3　暗褐色土　粘質　２層より暗い　褐色砂粒多量　粘性あり しまり強 (SK62)

E-E'
1　暗褐色土　粘質　褐色粒子多量　粘性弱　しまりあり　基礎石の抜き取り穴と考えられる (SK116)
2　暗灰色土　粘質　褐色粒子少量　粘性・しまりあり (SK116)
3　暗灰色土　粘質　２層より暗い　褐色粒子多量　粘性・しまりあり (SK116)

F-F'
1　黒褐色土　細砂や２層土と混ざって SK129 覆土が混ざる 埋戻したあと叩いているらしい　しまりあり (SB4)
2　暗褐色土　亜円礫少量　細砂微量　埋戻したあと叩いいているらしい しまりあり (SB4)
3　にぶい黄褐色土　細砂含む　埋戻し (SB4)
4　暗褐色土　オリーブ灰色砂質土少量　埋戻し (SB4)

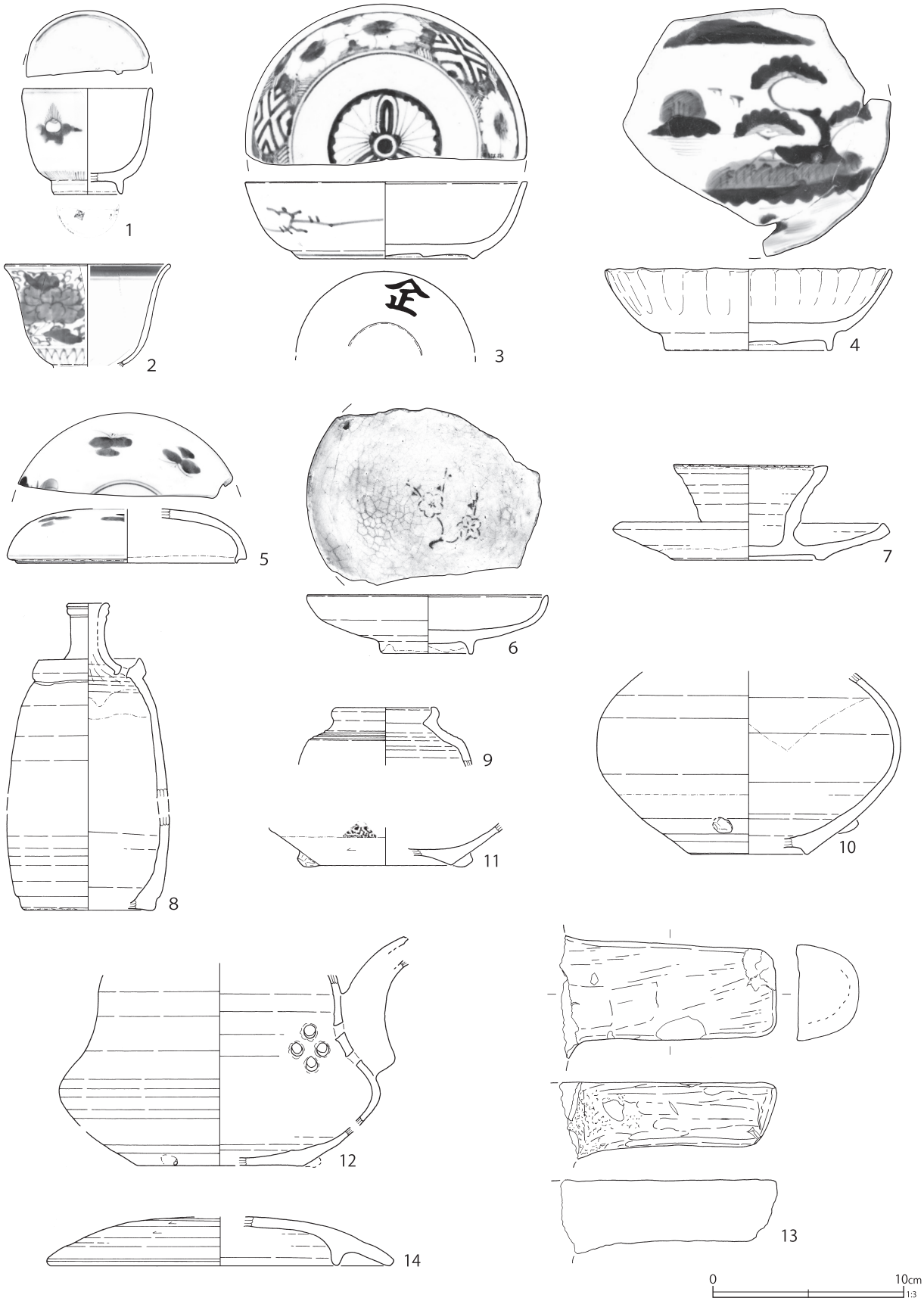
第39図　第４号建物跡（３）

た際の痕跡と判断される。第28・62・116号土壙についてもその可能性を否定し得ないので、第38図に位置と断面図を掲げた。

第40図は出土した陶磁器類である。

１は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗で、外面に宝珠文などを、内面口縁部に四方襷文を染付する。高台内には四角枠内に変形字を書いた裏銘が染付される。２は肥前系磁器の猪口で、口縁部が大きく端反形態になる。外面に崩れた花唐草文を染付し、内面口縁部は濃みで幅広く圏線を巡らす。３は肥前系磁器の皿で、蛇の目凹形高台の露体部に「㐂」の墨書がある。４も肥前系磁器の皿で、高い蛇の目状高台を有す。内面に一枚絵で松樹を中心とした山水文を描く。５は肥前系磁器の蓋で、蝶文を染付する。

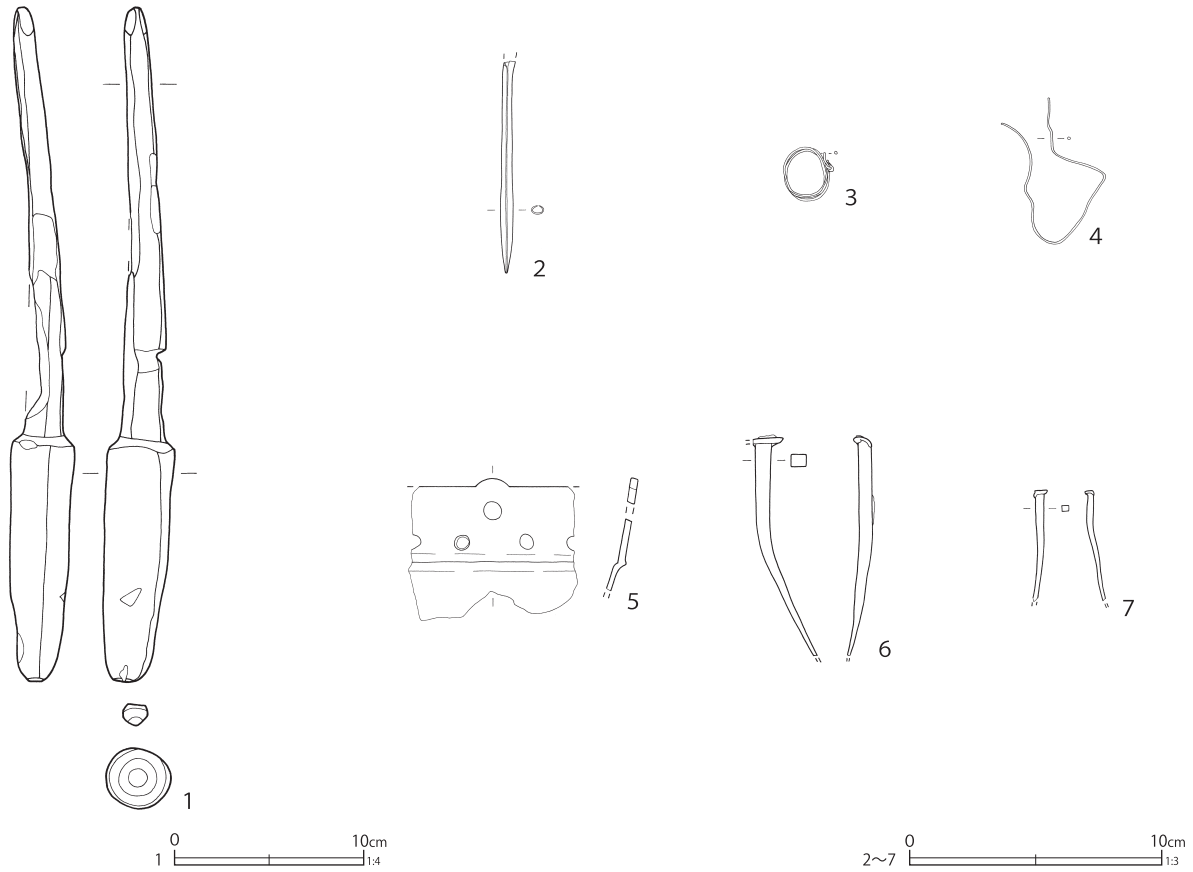
６は瀬戸美濃系陶器の摺絵皿である。灰釉は黄色味が強く、高台畳付きを除き全面施釉される。内底面に青の呉須絵で梅樹文を摺絵する。７は瀬戸美濃系陶器の灯火具で、高い受けが付く。受けの内底面は窯内での付着物が多く、凸凹している。受けの口唇部は、二次敲打後に煤の付着がみられる。褐色を帯びた灰釉が施される。８は瀬戸美濃系陶器の油徳利で、把手は欠失する。施釉される柿釉は、光沢が強く色も淡い。直接接合しない底部・頸部破片からの図上復元である。９は瀬戸美濃系陶器の水注で、黄色味の強い不透明の灰釉が施される。頸部に沈線が密集して巡る。10は陶器の青緑釉土瓶で、高台の抉り込みが比較的深い。露体部にうっすらと煤の付着がみられる。11は松岡系陶器と考えられる土瓶底部である。褐色の鮫肌釉を施釉する。体部下位の露体部はケズリ、底部は回転ケズリを回転ナデで消す。12は施釉土器質の陶器で、鉄釉土瓶である。鉄釉は内外面に施釉される。吉見系陶器と思われる。体



第 40 図　第 4 号建物跡出土遺物（1）

第 14 表　第 4 号建物跡出土遺物観察表（1）（第 40 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(6.6)	5.5	3.5	-	45	普通	白	SB4	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（湯呑形碗）	
2	磁器	猪口	(8.4)	[5.4]	-	-	30	普通	白	SB4	肥前系　内外面施釉・染付	
3	磁器	皿	14.4	4.0	9.1	-	55	普通	白	SB4	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目凹形高台　墨書「企」	72-6
4	磁器	皿	(14.8)	4.3	8.6	-	60	普通	白	SB4	肥前系　内外面施釉　内面染付　口紅　蛇の目状高台	
5	磁器	蓋	-	[2.8]	(11.4)	-	40	普通	白	SB4	肥前系　内外面施釉　外面染付	
6	陶器	皿	(12.4)	3.0	4.6	G	60	普通	灰白	SB4	瀬戸美濃系　内外面灰釉　内面摺絵	
7	陶器	灯火具	7.8	5.0	7.8	I	90	普通	灰白	SB4	瀬戸美濃系　内外面灰釉　口縁部煤付着・二次敲打	
8	陶器	油徳利	1.9	(16.0)	(6.4)	I	35	良好	にぶい黄橙	SB4	瀬戸美濃系　外面柿釉・底部拭き取り	
9	陶器	水注	(5.0)	[3.0]	-	IK	5	普通	灰白	SB4	瀬戸美濃系　外面灰釉	
10	陶器	土瓶	-	[9.5]	(6.0)	K	25	普通	灰白	SB4	外面青緑釉　外面下位少量煤付着	
11	陶器	土瓶	-	[2.2]	(6.8)	EK	10	普通	灰白	SB4	松岡系　外面鮫肌釉	72-7
12	陶器	土瓶	-	[11.9]	(8.8)	EI	20	普通	にぶい黄橙	SB4	吉見系　内外面鉄釉　施釉土器質	72-8
13	瓦質土器	十能	-	[4.0]	-	CI	35	普通	灰黄	SB4	底部砂目　燻す	
14	土師質土器	蓋	-	[2.5]	(17.6)	H	20	普通	にぶい橙	SB4		73-1



第 41 図　第 4 号建物跡出土遺物（2）

第15表　第４号建物跡出土遺物観察表（２）（第41図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	不明品	35.5	3.5	3.2	－	－	－	芯持材	SB4		
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
2	銅製品	笄	長さ［8.4］幅0.5 厚さ0.4 重さ3.6							SB4	中空 鍍金あり	
3	銅製品	針金	縦2.1 横2.0 厚さ0.1 重さ0.8							SB4	径1.5㎝の棒状品に括り付けられていた痕跡を残す	
4	銅製品	針金	縦5.8 横4.2 厚さ0.1 重さ0.5							SB4	東	
5	鉄製品	鍋	縦［5.6］横［6.7］厚さ0.3 重さ50.0							SB4	南 把手受部	
6	鉄製品	釘	長さ［8.6］幅0.6 厚さ0.5 重さ7.7							SB4	南	
7	鉄製品	釘	長さ［4.4］幅0.3 厚さ0.2 重さ1.4							SB4		

部は大きく屈曲する。

13は瓦質土器の十能で、把手部分の破片である。下面の砂目痕をヘラナデで消す。胎土に角閃石が多く含まれる。14は土師質土器の蓋で、火消壺に伴う可能性がある。上面は縁部を幅広く回転ナデするが、中心付近は回転ケズリである。胎土に角閃石は包含されない。

出土遺物の中に19世紀後半の遺物はほとんどみられない。唯一、同一個体の土管３片が出土しているが、後世の混在の可能性もある。総体的に見ると、磁器の湯呑形碗が複数あり、瀬戸美濃系磁器の陽刻状型押し角皿も１点認められる。以上の遺物の様相は栗橋８期の構築を想定させる。

ただし、重複関係にあって本跡より古い第129号土壙からは、酸化コバルト染付の磁器急須が出土している。この重複関係を重視するならば、建物の構築も栗橋９期前半以降に降ることになる。

第41図１は出土した棒状の木製品であるが、用途は不明である。

２～７は金属製品で、２は銅製品の笄、３・４は針金、５は鉄鍋の耳部分、６・７は鉄製品の釘である。

第５号建物跡（第42～45図）

第５号建物跡はＥ７－Ｊ５・Ｆ７－Ａ５グリッド（第３区画）に位置する。『絵図』の「旅籠屋百姓　喜右衛門」に該当する。

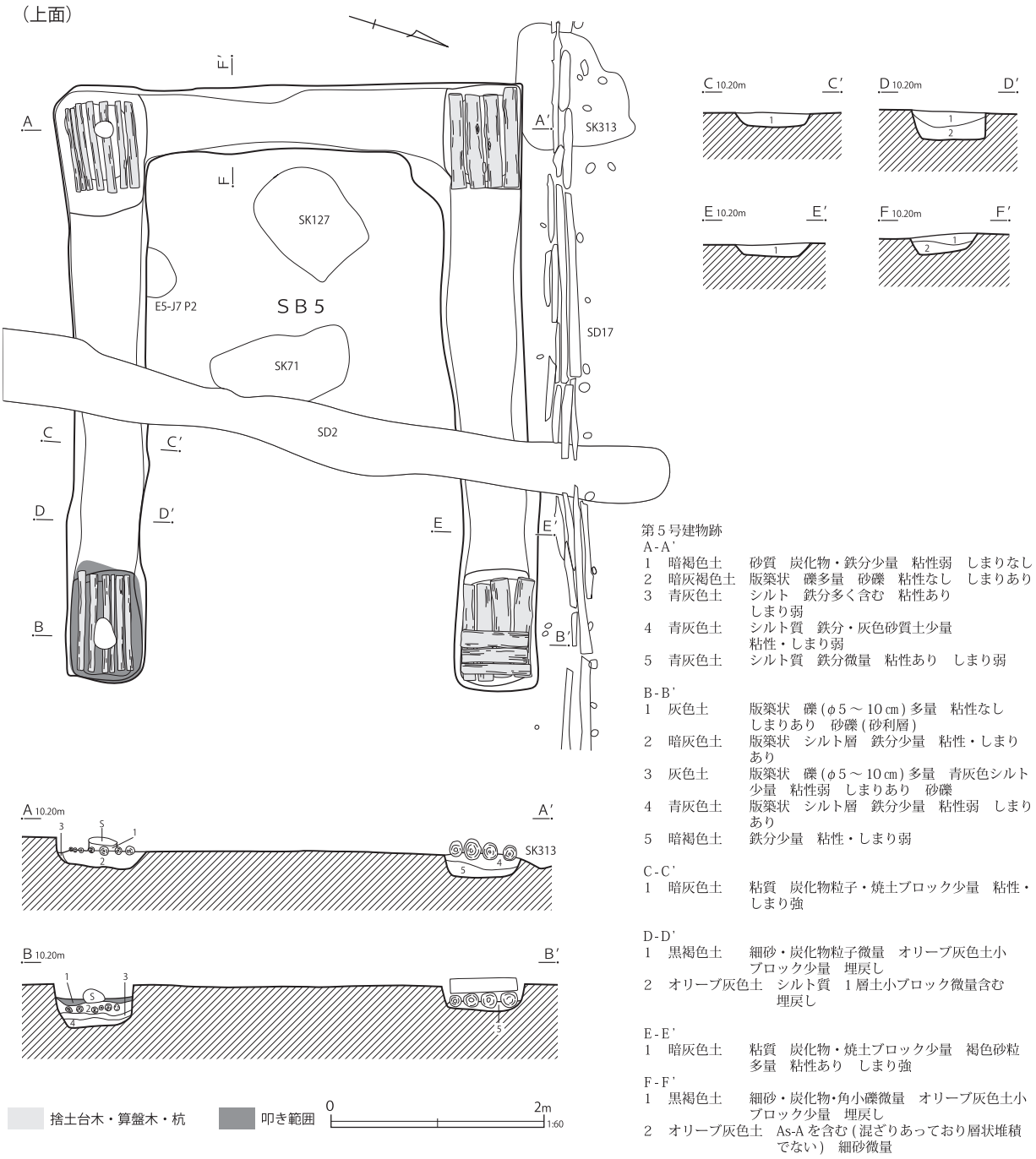
基礎は布掘り状のもので、平面形は東側に開放する「コ」の字形である。長軸5.70m、短軸4.55m、検出面からの深さ0.40mである。長軸方位はN-73°-Eである。

基礎の四隅は約100㎝×70㎝の方形に深く掘り込まれており、丸太を組んで捨土台としている。南側ではこの丸太の上に河原石状の石材が据えられており、北辺のコーナーもこれと同じような構造であったと考えられる。ただし、北辺コーナー部の丸太は、南辺コーナー部の丸太より太く、北東隅部では、掘方長軸方向に並べられた丸太の上に直交する方向の丸太が重ねられているなど、北側と南側で、基礎構造に差がみられる。

なお南東隅の部分のみ、丸太材の直上に砂利が充填され、石材周囲の土層が叩き締められたように硬化していた。南側のコーナーは丸太が細く、砂利で叩き締めながらかさ上げして、北側コーナー部の基礎と高さを合せていた可能性があろう。

第44図には出土した陶磁器類を示した。

１は肥前系磁器の小丸碗で、やや大振りで薄手である。外面は秋草文に昆虫文の染付と思われる。２は瀬戸美濃系磁器の蓋で、端反碗に伴うものである。やや歪んでいる。釉薬は光沢が強い。３は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、薄手のものである。高台は特に薄く作られる。外面に鶴と思われる鳥を染付する。４は瀬戸美濃系磁器の坏で、端反のものである。内底面に草文を染付する。５は瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒杯で、端反になるものである。



第５号建物跡

A-A'

1　暗褐色土　砂質　炭化物・鉄分少量　粘性弱　しまりなし

2　暗灰褐色土　版築状　礫多量　砂礫　粘性なし　しまりあり

3　青灰色土　シルト　鉄分多く含む　粘性あり　しまり弱

4　青灰色土　シルト質　鉄分・灰色砂質土少量　粘性・しまり弱

5　青灰色土　シルト質　鉄分微量　粘性あり　しまり弱

B-B'

1　灰色土　版築状　礫（φ５～10㎝）多量　粘性なし　しまりあり　砂礫（砂利層）

2　暗灰色土　版築状　シルト層　鉄分少量　粘性・しまりあり

3　灰色土　版築状　礫（φ５～10㎝）多量　青灰色シルト少量　粘性弱　しまりあり　砂礫

4　青灰色土　版築状　シルト層　鉄分少量　粘性弱　しまりあり

5　暗褐色土　鉄分少量　粘性・しまり弱

C-C'

1　暗灰色土　粘質　炭化物粒子・焼土ブロック少量　粘性・しまり強

D-D'

1　黒褐色土　細砂・炭化物粒子微量　オリーブ灰色土小ブロック少量　埋戻し

2　オリーブ灰色土　シルト質　１層土小ブロック微量含む　埋戻し

E-E'

1　暗灰色土　粘質　炭化物・焼土ブロック少量　褐色砂粒多量　粘性あり　しまり強

F-F'

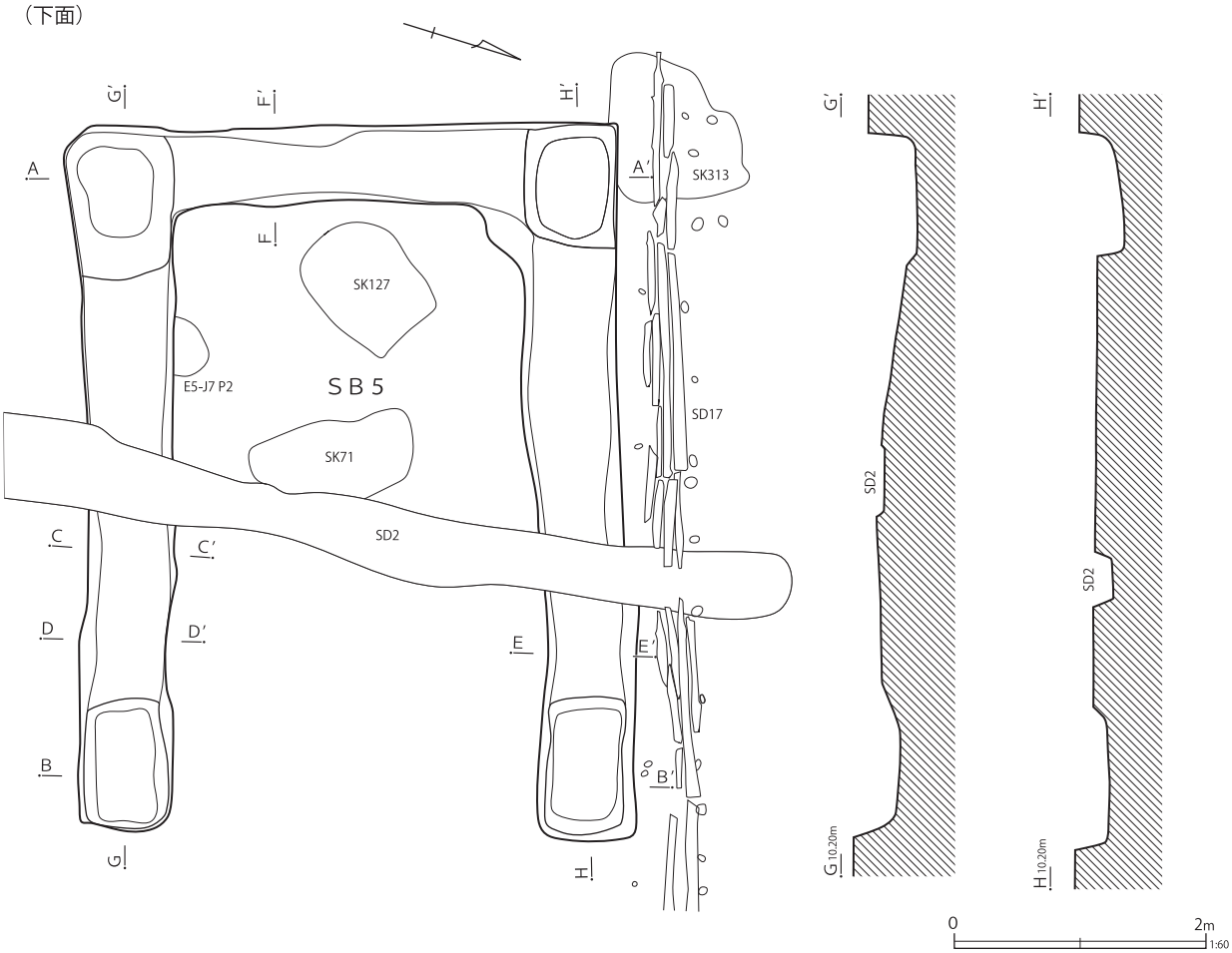
1　黒褐色土　細砂・炭化物・角小礫微量　オリーブ灰色土小ブロック少量　埋戻し

2　オリーブ灰色土　As-A を含む（混ざりあっており層状堆積でない）　細砂微量

第 42 図　第５号建物跡（１）

６は瀬戸美濃系陶器の灯火具で、高い受部を有すものである。黄色味の強い灰釉が施されるが、一部は使用時の熱により黒化する。７は瀬戸美濃系陶器の花生で、灰釉・鉄釉を掛け分ける。底部に墨書がある。８は京都信楽系陶器の燗徳利で、鳶口状の注ぎ口を有す。

９は松岡系陶器の土瓶で、水色の海鼠釉を施す。10は京都信楽系陶器の土瓶で、極めて薄手である。外面に鉄絵で菊花とみられる花文を描く。注口部を焼き継ぎで補修する。11・12は青緑釉土瓶の蓋と身である。いずれも青緑釉は濃い緑色で光沢が強い。胎土は緻密で混入物が少な



第 43 図　第５号建物跡（２）

い。

13は瓦質土器の丸火鉢である。外面は上位ヨコナデ、下位は三段のケズリである。底部はナデで調整するようである。全体に橙色味が強く、一見、土師質土器のようであるが、使用の被熱によって赤変している可能性もある。内面中位～口縁部の一部に煤が付着する。胎土には赤色粒子・軽石粒子がやや目立ち、角閃石が少量含まれる。

このように、出土した陶器には青緑釉土瓶や、松岡系の海鼠釉土瓶などの土瓶類が数種類含まれている。非掲載資料にも青緑釉土瓶の破片が複数認められ、また、瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗がみられることから、栗橋７期の構築と推定される。

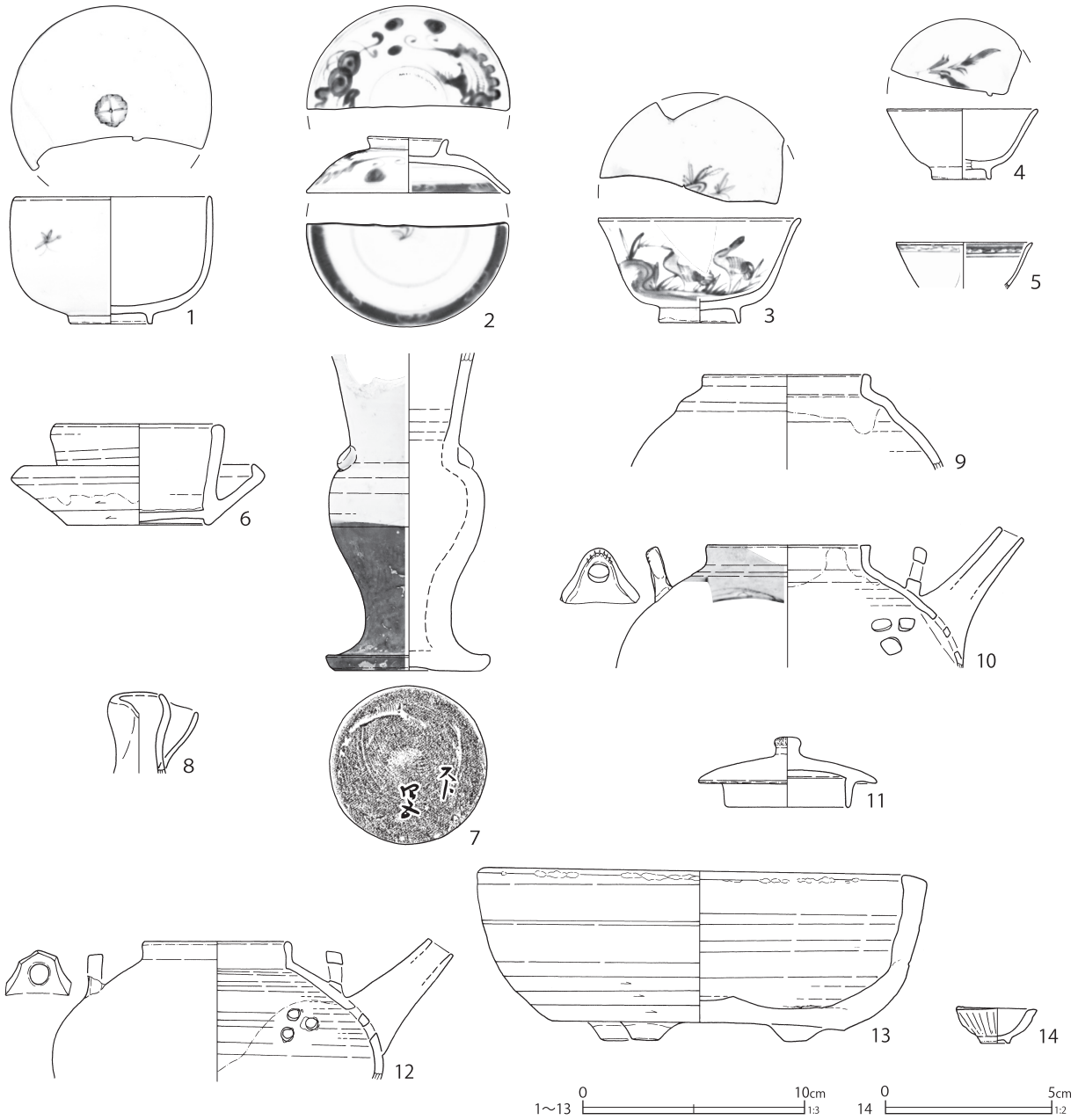
第45図には木製品・金属製品を一括して示した。１・２は木製品の下駄と浮子である。２の浮子には、上下から貫通しない穿孔が認められる。３・４は銅製品の針金、５は雪駄の尻鉄である。６～10は鉄製品の釘、11～15は金属製品の銭貨で寛永通寶の新寛永である。

第６号建物跡（第46～54図）

Ｅ７-Ｇ５・６、Ｈ５・６グリッド（第７区画）に位置する。『絵図』の「旅籠屋　百姓　七兵衛」に該当する。東側が調査区外であるが、平面形は東西に長い「ロ」の字形で、布掘り状の掘方内に横木状の算盤木・捨土台を据え、その上に樽を等間隔に据えている。所謂「樽地業建物」である。

基礎の規模は、長軸で7.02m以上、短軸で5.88m、深さは1.03m以上である。

基礎は最下位に捨杭を打っていたようだが、記

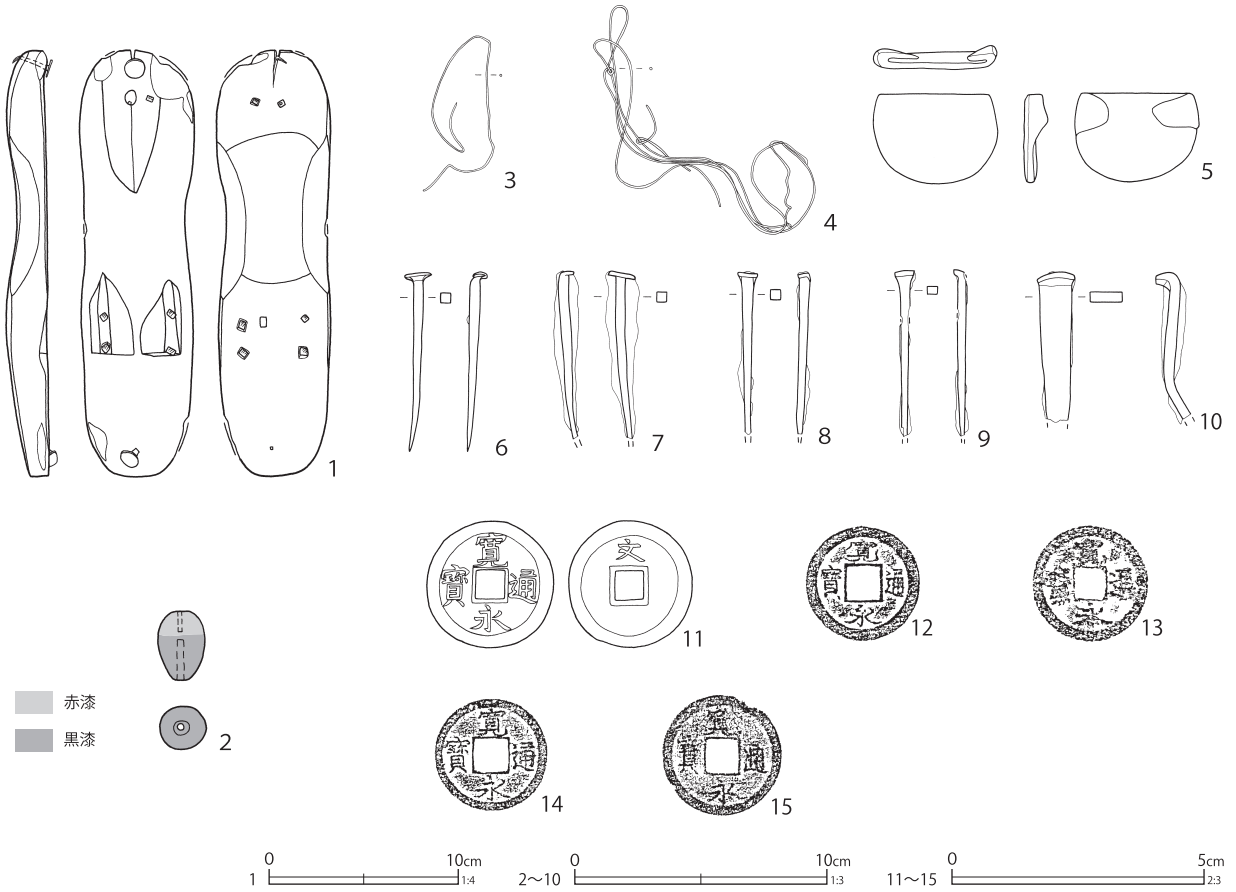


第 44 図　第５号建物跡出土遺物（１）

第 16 表　第５号建物跡出土遺物観察表（１）（第 44 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	8.6	5.7	3.5	-	60	普通	白	SB5	肥前系　内外面施釉・染付（小丸碗）	
2	磁器	蓋	3.4	2.5	9.1	-	50	普通	白	SB5	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（端反碗の蓋）	
3	磁器	碗	(8.8)	4.6	(3.6)	-	40	普通	白	SB5	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（端反碗）	
4	磁器	坏	(6.6)	3.1	(2.6)	-	30	良好	白	SB5	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面染付	
5	磁器	坏	(6.0)	[2.0]	-	-	5	良好	白	SB5	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（卵殻手酒杯）	
6	陶器	灯火具	7.3	4.5	6.5	E	100	普通	灰白	SB5	瀬戸美濃系　内外面灰釉　一部黒化（使用による）	
7	陶器	花生	-	[14.2]	6.4	DI	80	普通	灰白	SB5	瀬戸美濃系　底部糸切痕（右）・墨書　灰釉・鉄釉掛け分け	73-2
8	陶器	燗徳利	2.0	[3.6]	-	H	5	普通	灰白	SB5	京都信楽系　内外面透明釉	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
9	陶器	土瓶	(7.2)	[4.2]	-	DIK	15	普通	灰黄褐	SB5	松岡系　外面海鼠釉	73-3
10	陶器	土瓶	(7.2)	[6.3]	-	H	15	良好	灰白	SB5	京都信楽系　外面透明釉・鉄絵　注口部煤付着	73-4
11	陶器	蓋	-	3.1	5.5	HI	60	普通	灰白	SB5	外面青緑釉　最大径 8.0 ㎝　（青緑釉土瓶の蓋）	
12	陶器	土瓶	6.3	[6.1]	-	H	45	普通	灰白	SB5	外面青緑釉	
13	瓦質土器	火鉢	18.6	7.4	13.1	CFHI	100	普通	淡橙	SB5	底部ナデ調整　やや酸化炎焼成　口縁部に若干の二次敲打	
14	磁器	紅坏	2.4	1.1	0.9	2.9	-	良好	白	SB5	北基礎　肥前系　型成形　内外面施釉	



第 45 図　第５号建物跡出土遺物（２）

第 17 表　第５号建物跡出土遺物観察表（２）（第 45 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	下駄	22.5	6.1	－	－	2.1	－	柾目	SB5	無眼下駄（鋲２・鉄釘１・木釘６）	
2	木製品	浮子	2.7	－	－	1.8	－	－	分割材	SB5	上部赤漆　下部黒漆	
番号	種別	器種	法量							遺構名	備考	図版
3	銅製品	針金	縦 6.1 横 2.8 厚さ 0.08 重さ 0.3							SB5		
4	銅製品	針金	縦 9.0 横 8.8 厚さ 0.1 重さ 2.7							SB5	北側基礎	
5	鉄製品	尻鉄	縦 3.5 横 4.9 厚さ 0.9 重さ 24.5							SB5	雪駄の尻鉄	276-10
6	鉄製品	釘	長さ 7.1 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 4.2							SB5		
7	鉄製品	釘	長さ [6.6] 幅 (0.4) 厚さ (0.4) 重さ 9.9							SB5		
8	鉄製品	釘	長さ [6.4] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 4.8							SB5		
9	鉄製品	釘	長さ [6.6] 幅 0.4 厚さ 0.3 重さ 3.6							SB5		
10	鉄製品	釘	長さ [5.9] 幅 1.3 厚さ 0.4 重さ 17.0							SB5		
11	銅製品	銭貨	径 25.3 厚さ 1.3 重さ 2.9							SB5	寛永通寶（新）背文	
12	銅製品	銭貨	径 22.9 厚さ 0.9 重さ 2.2							SB5	寛永通寶（新）	

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
13	銅製品	銭貨	径 22.1 厚さ 0.8 重さ 1.5	SB5	寛永通寳（新）	
14	銅製品	銭貨	径 22.4 厚さ 0.9 重さ 2.0	SB5	寛永通寳（新）	
15	銅製品	銭貨	径 23.9 厚さ 1.0 重さ 2.6	SB5	寛永通寳（新）	

録の不備から図化できなかった。下層には枕木状の丸太を敷き詰めているが、西辺・南辺では掘方の方向に沿った長い丸太を用いている。北辺では、同じように配された長い丸太の上に、掘方方向と直行する短い丸太を載せて二段構造としている。

これらの丸太材の上に樽を設置して、その間および樽内をシルト質土、砂、砂利などで充填しているが、土層の様子には各辺によって若干の相違が認められる。

南辺では、厚さ10cm弱のシルト質土と砂利の層が７枚程度互層にになっている。樽は下位に埋められた丸太よりも35～45cmほど上に設置され、丸太と接していない。

南辺の樽（樽１～３）は、外径45～50cm程度、基礎上面側は後世に破損していて遺存が悪い。最も破損が少ない樽３の側板は、長さ61cmであった。各樽は逆位に据えられており、樽１～３の全てに落ち込んだ底板ないし蓋板が遺存していた。このうち樽６の蓋板は、３枚の板材を組み合わせるもので、径45.0cm、厚み3.1cm、径5.0cmの穿孔がある。

各樽の側面には店印とみられる墨書があるが、建物に転用される前の段階で書かれたものと考えられる。樽１には、カドに三角（△）、樽２には井桁（⊗）、樽３には、三角の中に一（△）が墨書される。樽内は主に砂利を充填していたが、所々にシルトの薄層を挟んで版築状に固められていた。

一方、西辺では、褐色味を帯びた砂（第48図の５層）を中心にシルト質土（６層）・砂利（７層）を互層にしている。砂は厚さ10cm程とやや厚く、その間に薄くシルト・砂利層を挟むような構造である。下位の一部には、やや瓦片を多く含む砂利層（８層）もみられる。

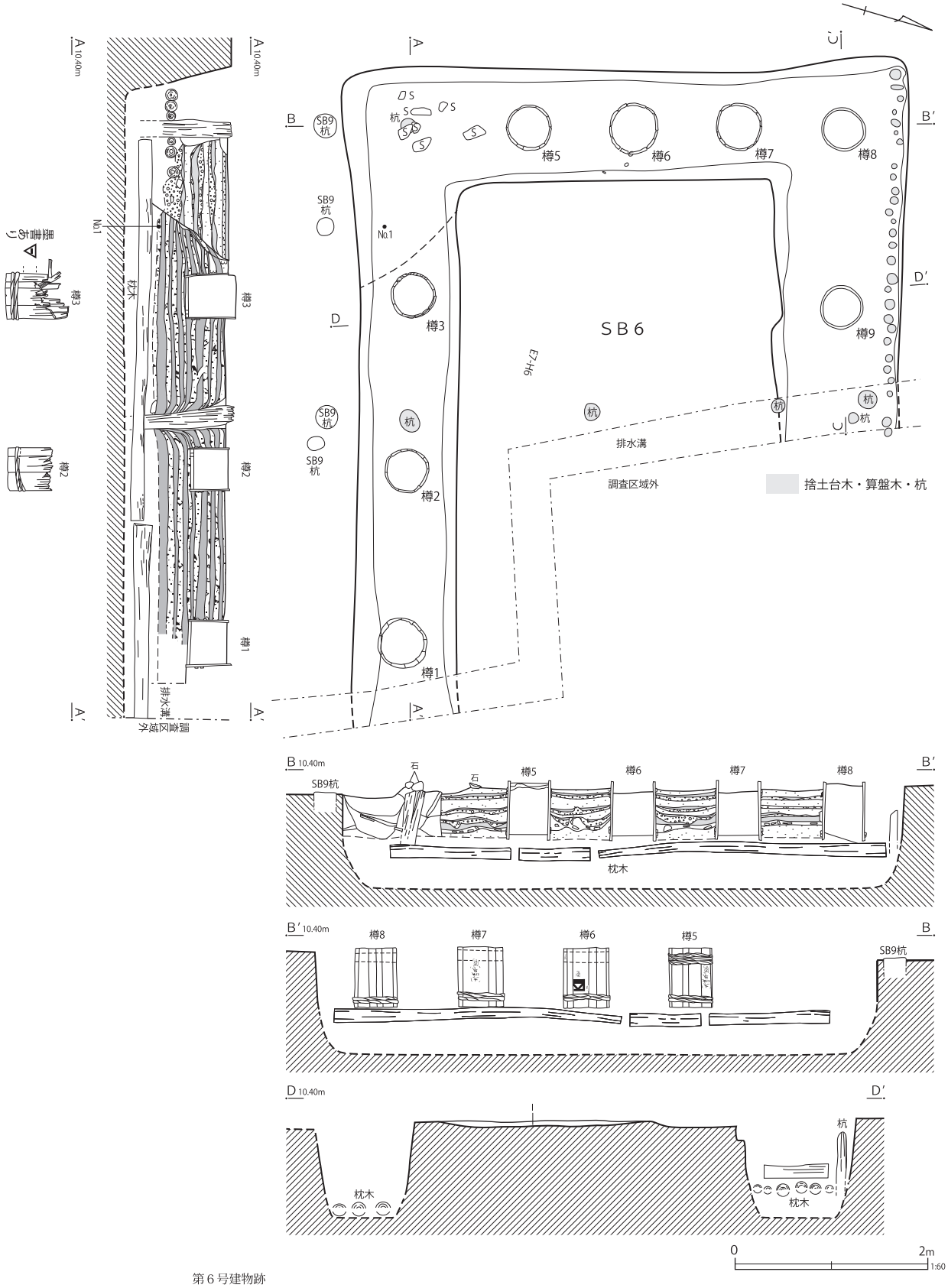
西辺の樽（樽５～７）は、南辺の樽に比べて、あきらかに遺存状況が良く、ほぼ完存した状態の物が多い。これは北辺の樽も同様である。外径は45～48cm、高さは62～63cmである。

樽５～8の側板は、いずれも長さ61～62cmであるが、幅は6.4cm～26.8cmと差が大きい。厚みは最も厚い上下端部で2.7～3.2cm前後だが、中心部は薄く1.0～1.6cm程度である。

底板ないし蓋板は径45cm前後、厚み３cm前後で、径4.0cm前後の孔を有す。一部に幅６～７cmの手斧とみられる工具痕を有す。

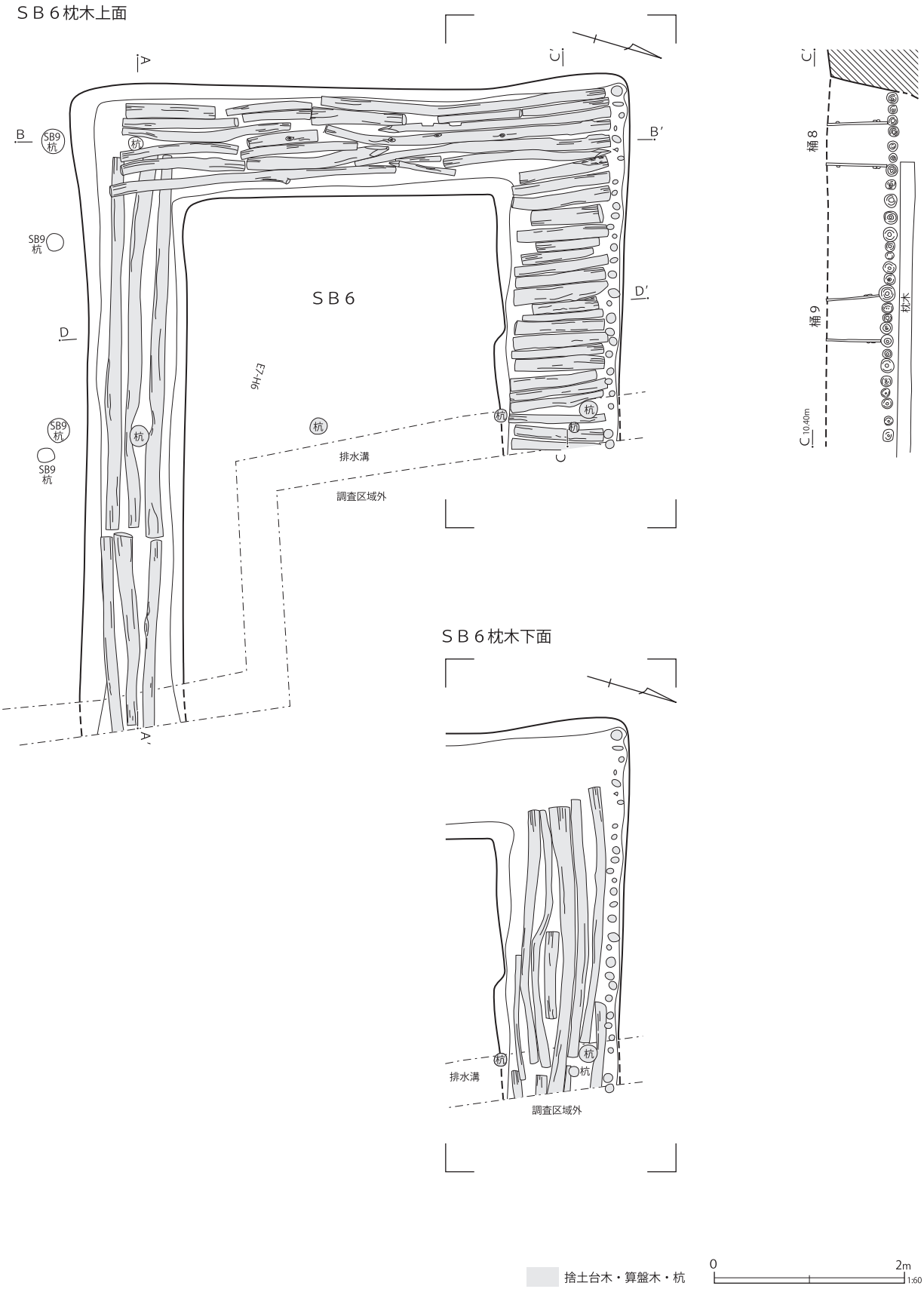
樽の外側には、墨痕や焼印がみられるものがある。樽５では「大和屋改誥」と店印らしい墨書がある。樽６では、四角と三角を組み合わせ、下に「一」を書く店印らしい墨書（△）があり、加えて小さく「□□屋（大和屋ヵ）」「改誥」の焼印がある。樽７では大きく「大和屋改誥」の焼印がある。樽８にも「大和屋改誥」の焼印と、判読出来ない墨書がある。このように、西辺では主に「大和屋改誥」の焼印が見られたが、大和屋については未詳である。なお、栗橋宿跡第３地点出土の荷札に「大和屋傳右衛門」「久喜中町」の墨書を有すものがある（『栗橋宿跡Ⅰ』第141号土壙、栗橋４～５期）。

基礎の土層は各辺で様相に相違がみられ、加えて各々の土層の重複関係もみられる。つまり、樽の遺存が悪い南辺基礎の西端で、西辺の基礎がそれを掘り込んで構築している状況であった。一時期に各辺を別々に構築した結果の可能性もあろうが、南辺と西辺で樽の遺存状態がまったく異なる。従って、基礎の原形を保持したまま、西辺～

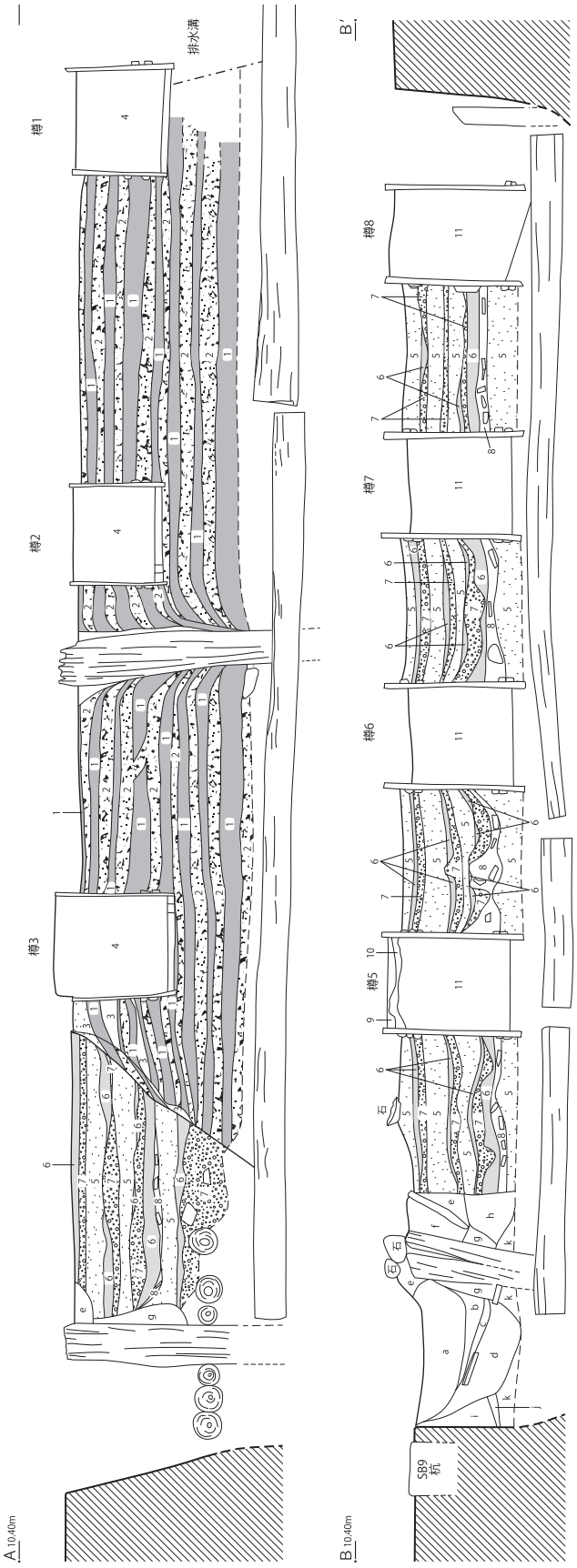


第６号建物跡
Ⅰ　灰白色砂　25 ㎜前後の厚さで褐鉄の堆積砂が帯状・フラットに入る　最下層は暗灰色シルト質土 (1 ㎝厚)　SB6 掘方に切られている
確認面は不整形　SB6 施工時の踏み固めの影響による硬化面か　粘性なし　しまり極強

第 46 図　第６号建物跡（１）



第 47 図　第 6 号建物跡（2）



第６号建物跡

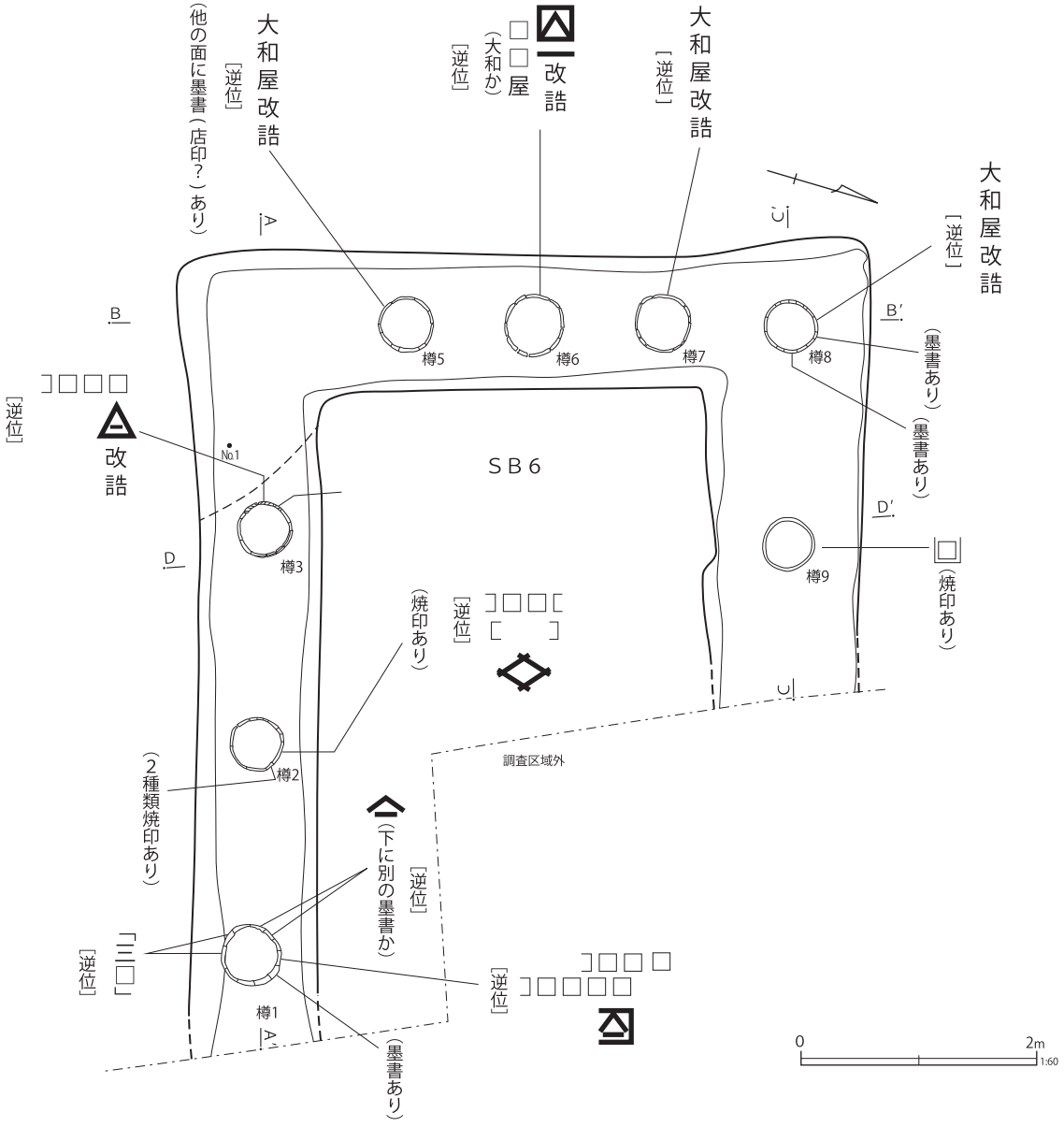
1　シルト質土
2　砂利
3　砂
4　砂利
5　淡灰褐色砂　粘性なし　しまり強　全体に水の含浸により褐鉄が集積して茶色く変色している
6　灰白色土　シルト質　炭化物粒子（φ１～３㎜）少量　僅かに灰白色シルト質ブロックを含有する　粘性ややあり　しまりあり
7　小円礫・砂利　φ15～50㎜大の円礫　砂利が帯状に敷かれている　扁平小円礫は粗い黒灰色砂と混成している　（同時に運搬、流し込まれたものか）
8　瓦片・砂利
9　白色砂
10　白色砂・砂利
11　砂利

a　灰褐色土　砂質　扁平な小円礫（φ１～３㎝）・黒灰色砂に小円礫（φ５～７㎜）を混土する　砂質土は含水により褐鉄が帯状に堆積する
b　灰褐色土　砂質　砂質土のみの均質な堆積土　円礫の含有なし　粘性・しまりなし
c　暗灰褐色土　シルト質　下層に板材片含む　粘性あり　しまり強
d　暗灰褐色土　砂質　ｃのシルトブロックを含有　不整形円礫（河底礫）を含む
e　黄灰褐色土　砂質　小円礫（φ10～15㎜・φ10～20cm）の礫片を栗石として含む　樽地業の樽除去後の埋土と考えられる樽地業内のものと同質の砂質土、シルト質土、砂利層が混土している
f　灰褐色土　砂質　ｅ層とほぼ同時の埋土だが、やや栗石の含有少ない
g　灰白色土　砂質　ややシルト質で粒子やや細かく均質　粘性・しまりあり
h　明灰褐色土　砂質　灰褐色シルト質土の混土層　樽除去後の埋土と考えられる　樽地業内のものと同質の砂質土とシルト質土と砂利層が混土している
i　暗灰褐色土　砂質　ｋ層に相似するがやや粒子が粗いため砂質土とした均質な堆積
J　暗灰色土　シルト質　幅10～15㎜厚で北から南方向へやや下降して堆積する　粘性ややあり　しまりあり　ｋ層より粘性弱い
k　暗灰白色土　シルト質　粘性ややあり　しまりやや強

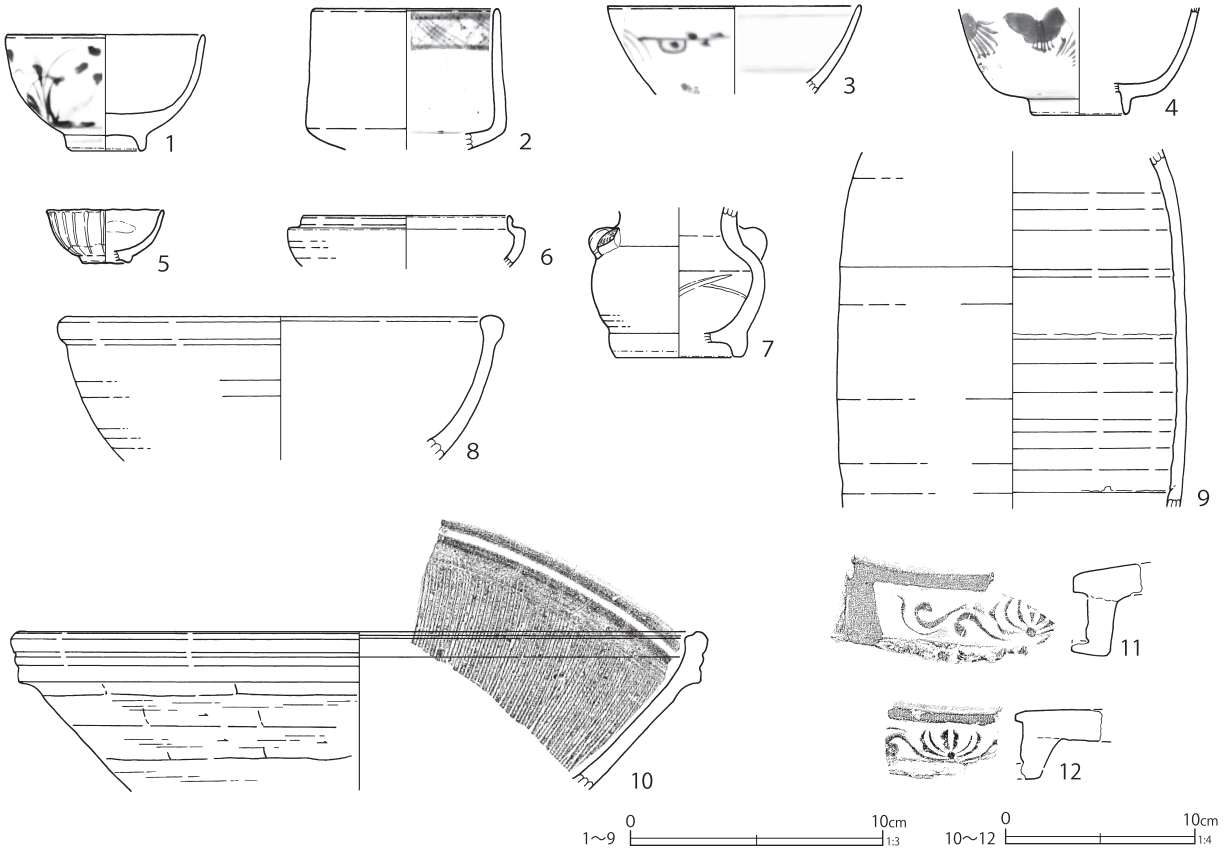
1　シルト質土
2　砂利
5　淡灰褐色砂
6　灰白色土
7　小円礫・砂利

0　1m
1:30

第48図　第６号建物跡（３）



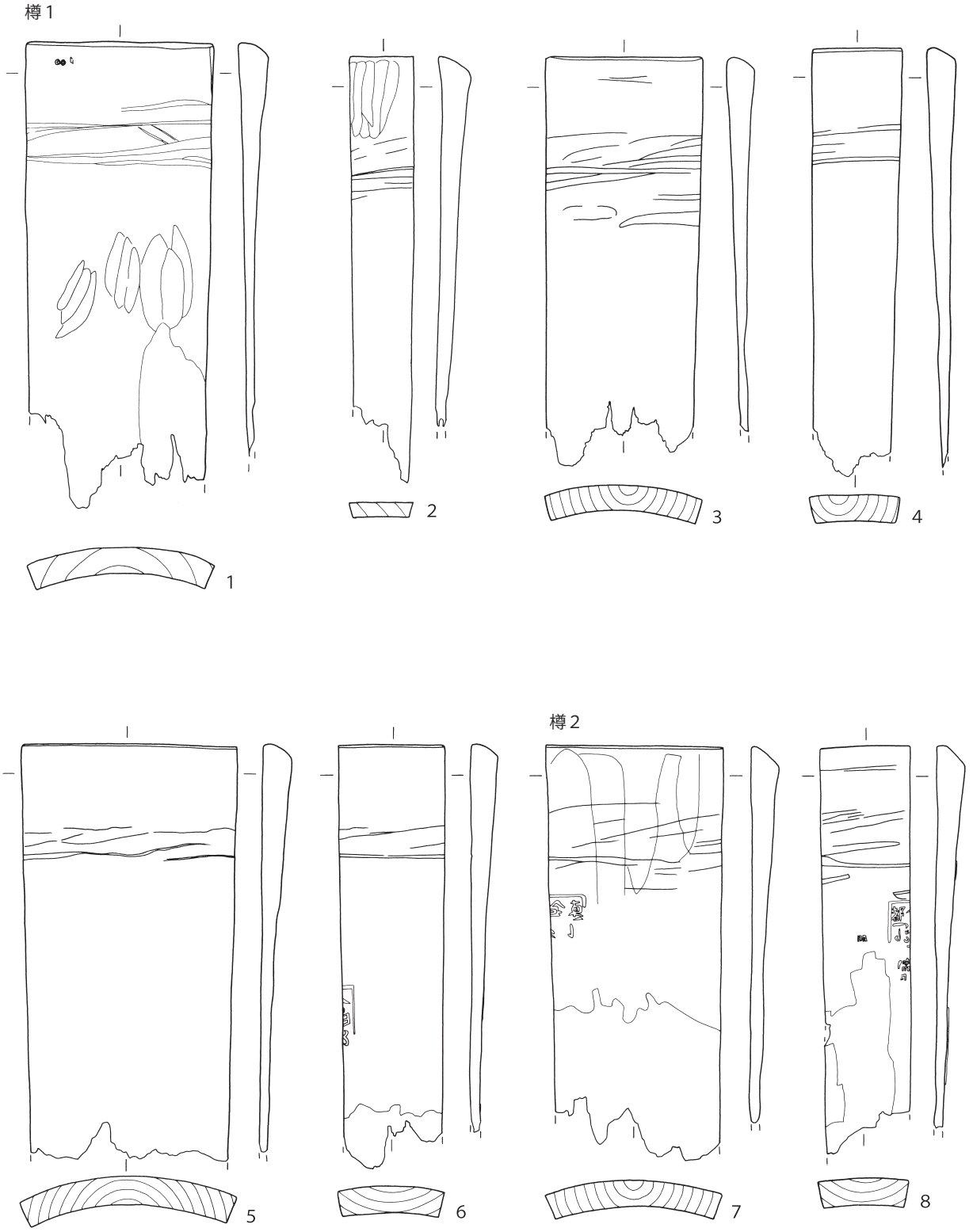
第 49 図　第 6 号建物跡（4）



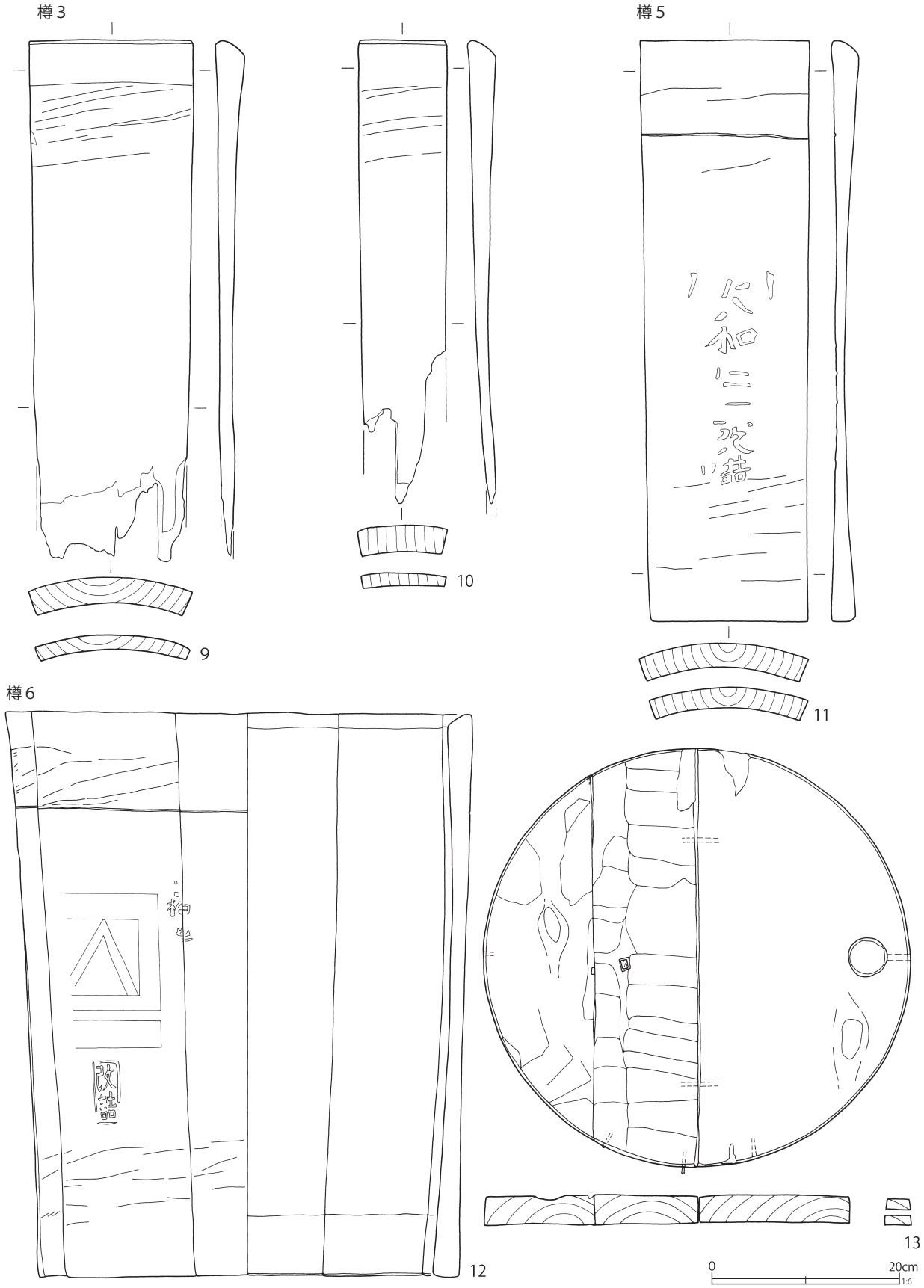
第 50 図　第 6 号建物跡出土遺物（1）

第 18 表　第 6 号建物跡出土遺物観察表（1）（第 50 図）

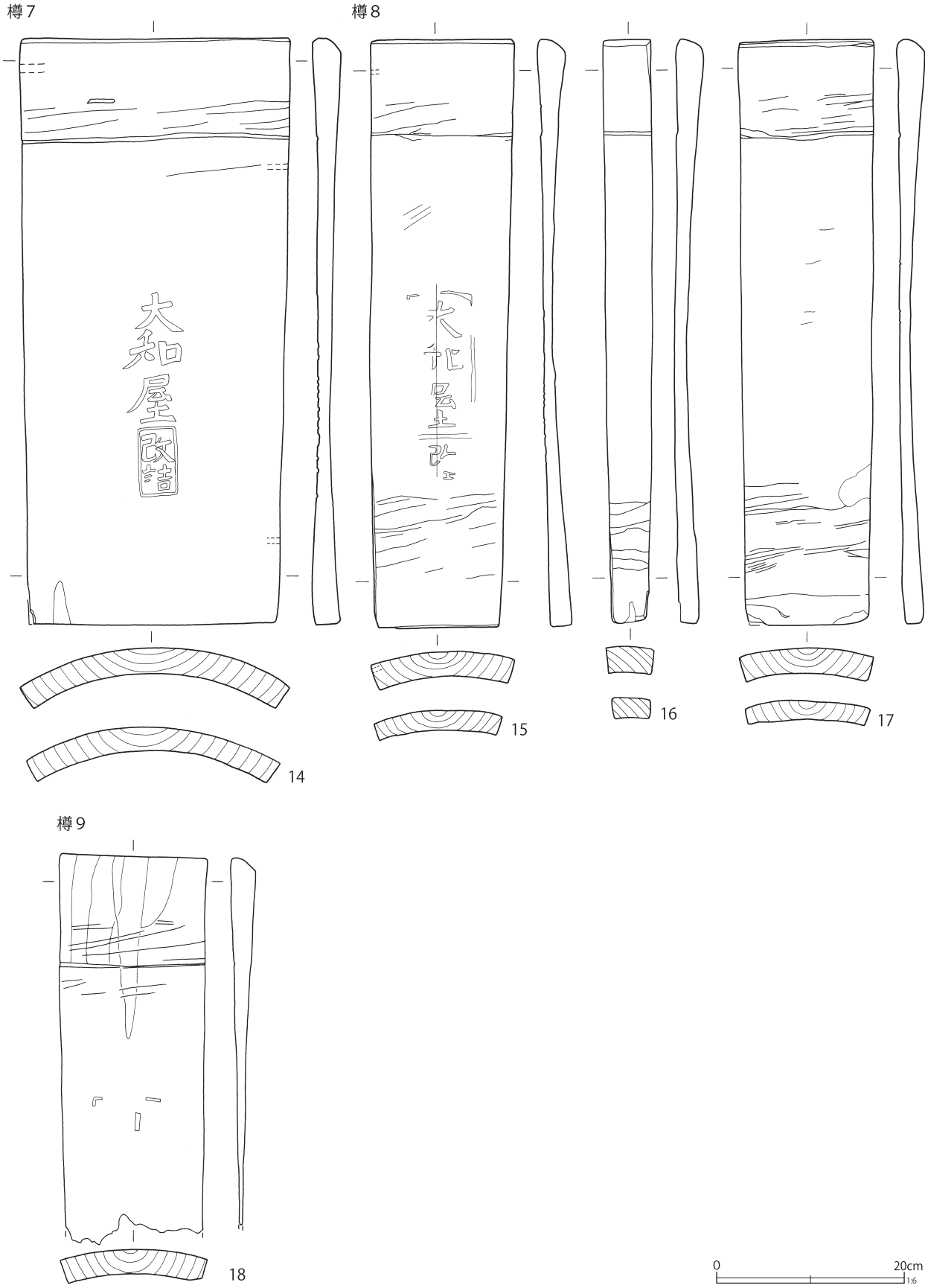
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(7.6)	4.5	2.6	-	55	普通	白	SB6	肥前系　内外面施釉　外面染付	
2	磁器	碗	(7.2)	[5.5]	-	-	20	普通	白	SB6	基礎下　肥前系　内外面施釉(外面青磁釉)内面染付　（筒形碗）	
3	磁器	碗	(9.9)	[3.4]	-	-	10	良好	白	SB6	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　（広東碗）	
4	磁器	碗	-	[4.2]	(3.6)	-	25	普通	白	SB6	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付　（端反碗）	
5	磁器	紅坏	(4.5)	2.1	(1.8)	-	40	普通	白	SB6	基礎下　肥前系　型成形　内外面施釉	73-5
6	磁器	合子	8.0	[2.0]	-	-	5	普通	白	SB6	西辺掘方　瀬戸美濃系　内外面施釉	
7	磁器	花生	-	[5.8]	(4.8)	-	15	良好	白	SB6	肥前系　外面青磁釉	
8	陶器	片口鉢	17.0	5.6	-	I	20	普通	灰白	SB6	西辺掘方（桶外）　瀬戸美濃系　内外面灰釉　被熱	
9	陶器	徳利	-	(14.0)	-	GK	30	普通	灰白	SB6	樽 5・西辺掘方・北辺掘方接合　瀬戸美濃系　外面灰釉	
10	陶器	擂鉢	(35.4)	[8.3]	-	DE	20	良好	赤橙	SB6	西辺掘方（桶外）　堺明石系　内面擂目	
11	瓦	軒桟瓦	[3.7]	[12.1]	-	AIK	-	普通	灰白	SB6	胎土軟質	
12	瓦	軒桟瓦	[5.2]	[6.3]	-	AIK	-	良好	灰白	SB6		



第 51 図　第 6 号建物跡出土遺物（2）



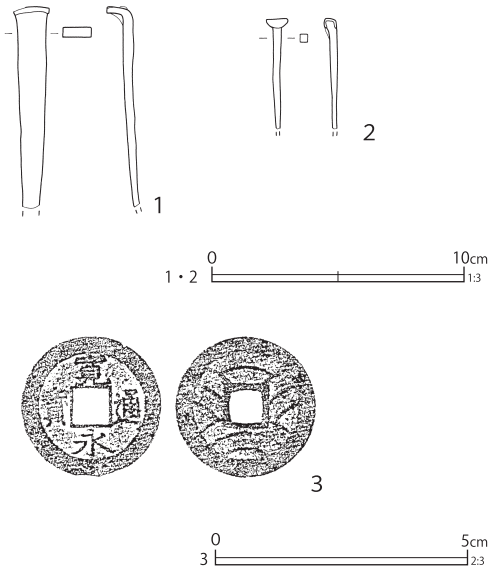
第52図　第6号建物跡出土遺物（3）



第 53 図　第 6 号建物跡出土遺物（4）

第 19 表　第６号建物跡出土遺物観察表（２）（第 51 ～ 53 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径		遺構	備考	図版
1	木製品	樽	[46.5]	18.7	2.5	－	－	－	板目	SB6	側板 木釘貫通 加工痕 墨書 表面黒色付着物	294-2
2	木製品	樽	[42.4]	6.6	2.9	－	－	－	板目	SB6	側板 表面加工痕 墨書 表面黒色付着物	294-3
3	木製品	樽	[41.6]	16.0	2.7	－	－	－	板目	SB6	側板 墨書	294-4
4	木製品	樽	[43.5]	9.2	2.8	－	－	－	板目	SB6	側板 墨書	294-5
5	木製品	樽	[41.6]	21.8	2.9	－	－	－	板目	SB6	側板 墨書 裏面黒色塗料	294-6
6	木製品	樽	[43.0]	10.9	2.8	－	－	－	板目	SB6	側板 墨書 焼印	294-7
7	木製品	樽	[41.0]	18.0	2.6	－	－	－	板目	SB6	側板 裏面黒色付着物 焼印 墨書	294-8
8	木製品	樽	[40.6]	9.9	2.8	－	－	－	板目	SB6	側板 裏面黒色付着物 焼印 墨書	
9	木製品	樽	[55.3]	17.2	2.6	－	－	－	板目	SB6	側板 墨書「△」裏面黒色塗料	294-9
10	木製品	樽	[49.0]	9.6	2.7	－	－	－	柾目	SB6	側板 墨書「△」裏面黒色塗料	294-10
11	木製品	樽	61.6	17.9	2.6	－	－	－	板目	SB6	側板 焼印「大和屋」「改誥」裏面黒色塗料	
12	木製品	樽	－	－	－	50.4	46.0	60.6	板目	SB6	側板 11 枚　タガ一部残存　外面焼印 内面黒色付着物	
13	木製品	樽	45.1	46.2	3.2	－	－	－	板目	SB6	底板　栓孔１　木栓孔２	
14	木製品	樽	62.4	28.4	2.8	－	－	－	板目	SB6	側板 表面焼印「大和屋改誥」裏面黒色塗料 側面に木釘	
15	木製品	樽	62.2	15.2	3.0	－	－	－	板目	SB6	側板 側面木釘１ 表面焼印「大和屋改誥」墨書 工具痕 裏面黒色塗料 黒色付着物	294-11
16	木製品	樽	61.8	5.0	2.8	－	－	－	板目	SB6	側板 表面墨書か 裏面黒色塗料 墨書あり 黒色付着物	294-12
17	木製品	樽	62.0	14.4	3.0	－	－	－	板目	SB6	側板 表面墨書 裏面黒色塗料 黒色付着物	294-13
18	木製品	樽	[38.8]	15.6	2.8	－	－	－	板目	SB6	側板 焼印 黒色塗料	



第 54 図　第６号建物跡出土遺物（５）

北辺の改修が行われた可能性が高い。なお、南西隅の桶は一箇所遺存しておらず、代りに太い松杭が打ち込まれている。これも改修時の工事の痕跡と考えられる。

このほか、北辺掘方の北側壁に沿って密に杭列が打ち込まれている。このような杭列は西側に隣接する第８号建物跡の北辺にも認められる。往来道（合ノ道）に接する部分の掘方の崩落を防ぐために、工事の過程で打ち込まれた「土留め」状の施設の可能性がある。

第50～54図に出土遺物を示した。第50図１～10は陶磁器類である。

１は肥前系磁器の小型の碗である。波佐見系のもので、外面に崩れた草花文を染付する。２は肥前系磁器の筒形碗で外面を青磁釉とし、内面口縁

第 20 表　第６号建物跡出土遺物観察表（３）（第 54 図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	鉄製品	釘	長さ [8.0] 幅 1.1 厚さ 0.4 重さ 17.4	SB6	南基礎掘方樽外	
2	鉄製品	釘	長さ [4.4] 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 1.6	SB6	南基礎掘方樽外	
3	銅製品	銭貨	径 28.1 厚さ 1.1 重さ 4.4	SB6	南基礎掘方樽外 寛永通寳（新）11 波	

部に四方襷文を、底体部境に二重圏線を染付する。３は瀬戸美濃系磁器の広東碗で、外面は樹文、内面口縁部は一重圏線を染付する。４は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、外面に蝶などの昆虫文の染付が見られる。５は肥前系磁器の紅坏で、貝殻状の筋を有すものだが、筋の間隔は開く。６は瀬戸美濃系磁器の合子と思われる。７は肥前系磁器の花生で、外面に青磁釉を掛ける。波佐見系の磁器で、やや小型のものである。

８は瀬戸美濃系陶器の片口鉢、９は瀬戸美濃系陶器の徳利（一升徳利）である。いずれもかなり細かく割れており、９は西辺基礎・北辺基礎・樽５から出土した破片が接合している。10は堺明石系陶器の擂鉢で、内面に一単位９条の擂目がみられる。

これらのうち、２・５は基礎下の検出とされており、掘方内基礎構造（捨土台）の下からの出土と考えられる。

出土遺物の大半は18世紀後半のものであるが、遺物総量は多いとは言い難い。この頃の遺物には、８・９の瀬戸美濃系陶器片口鉢・徳利にみられるように、基礎内の根固めに伴い、破砕して入れられたものを含む。また、樽７内部からは、砂利とともに五合徳利の体部が出土しているが、周縁が摩耗し、河原に投棄された陶器のようになっている。他の砂利とともに採集されたものと思われる。一方で、基礎内から一括で取り上げられた遺物に、瀬戸美濃系磁器の広東碗（３）や端反碗（４）・湯呑形碗（非掲載）・合子（６）が各１点みられ、改修時期に関する可能性がある。基礎内一括で出土した最新段階の陶磁器は、瀬戸美濃系磁器の急須で赤絵・金彩が施された近代のものであるが、これは後世の混在であろう。

このように基礎内には18世紀後半の遺物が多く、構築は栗橋５期以前、改修は栗橋６～７期と推定しておく。

瓦類の出土は多くはなかった。軒桟瓦は６片で、このうち軒丸部分のみの破片が1点、中心飾りの残る軒平部分は３点のみであった。第50図11・12は軒桟瓦の瓦当部分である。なお非掲載の瓦に、11と同じ構成の文様のものがもう一点確認される。

第51～53図は樽基礎の構成材である。出土状態では上下逆さに設置されているが、図面上は樽としての使用時の上下（正位置）で示す。

１～６が樽１の側板である。既述のように側板は上下が厚く、中位で薄くなっており、この点は以下に図示する側板も同様である。６に「大和屋」焼き印の一部が残る。７・８は樽２の側板で、焼き印部分を示す。９・10は樽３である。ここまでに示した樽１～３は、設置した時の上方向の遺存状態が悪く、半分近くを欠損した状態である。

11・14は樽５・７の側板である。いずれも「大和屋　改誥」の焼き印がある。12・13は樽６の全体を図化して示す。

15～17は樽８の側板である。「大和屋　改誥」の焼き印があるもので、店印らしい墨書の一部もみえる。18は樽９の側板で焼き印の一部らしいものが残る。このように、樽５～８に「大和屋」の焼き印がみられるが、建物材に転用される前に用いられていた場所の屋号であり、本跡に直接関係するものでは無いだろう。

第７号建物跡（第55～61図）

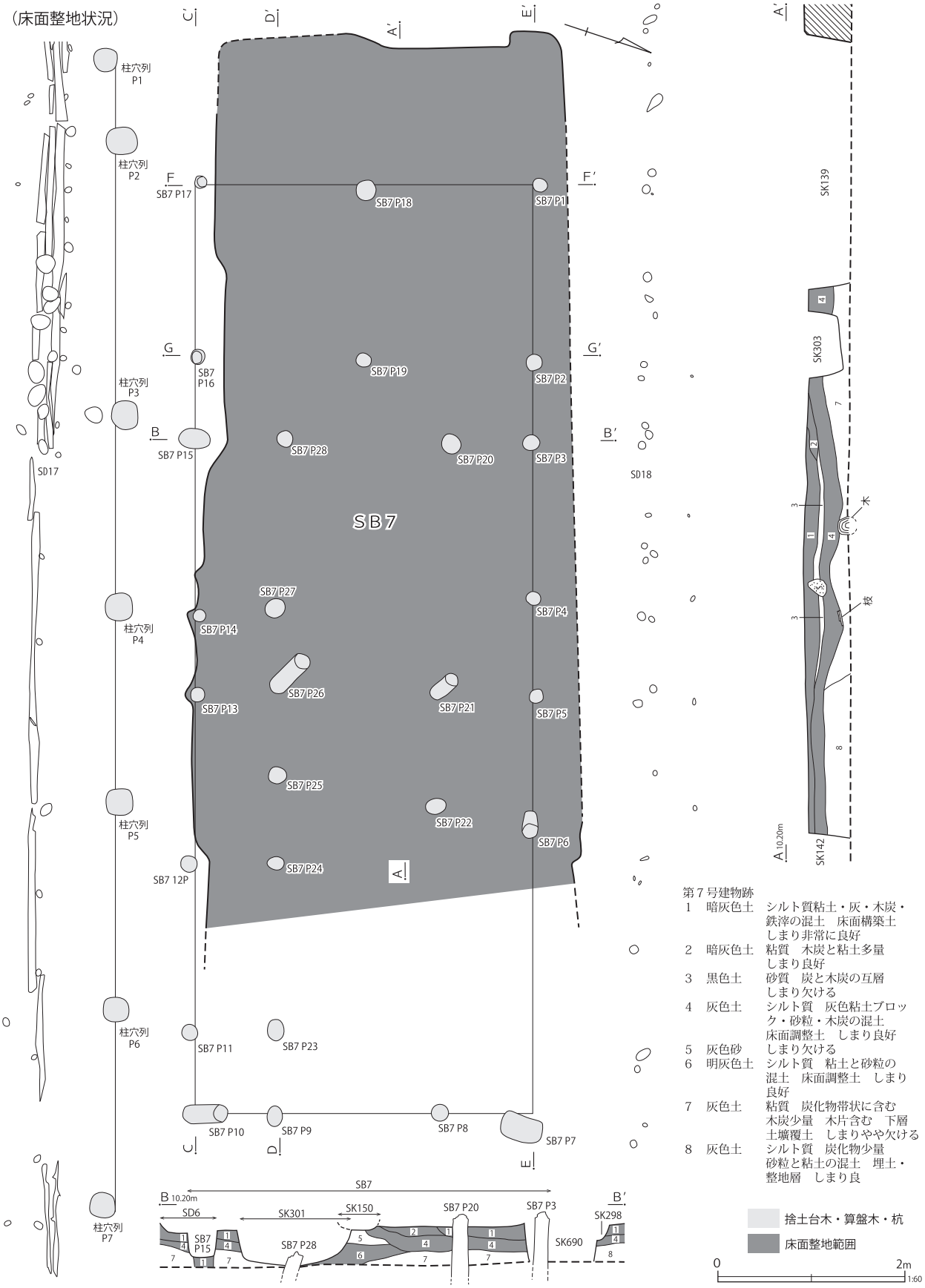
Ｅ７-Ｉ５・６、Ｊ５・６グリッド（第４区画）に位置する。『絵図』の「鍛冶屋　百姓　幸次郎」に該当する。既述してきた第１～６号建物跡は、布掘り状の掘り込みを有す構造であるが、本跡は柱穴状の杭と、下位の整地層から成る。

建物の範囲には土壙が密集しており、調査の進展上、全ての杭を把握し得たものではない。それでも、遺存している杭を把握し、桁行9.9m、梁間3.6mほどの建物跡を想定して図示した。

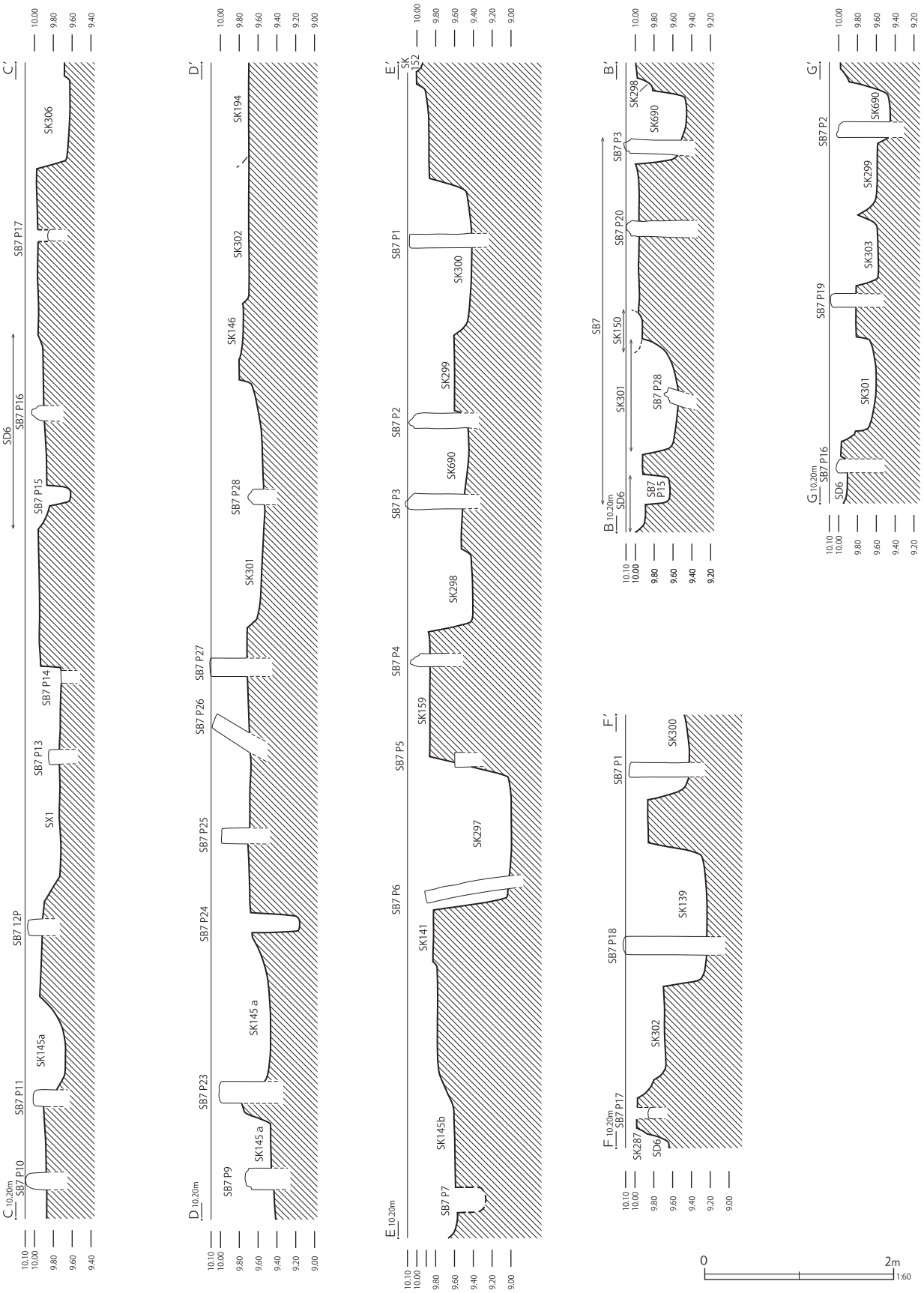
杭は径12～20㎝程度のもので、上端が切断・

（杭検出状況）

第 55 図　第 7 号建物跡（1）

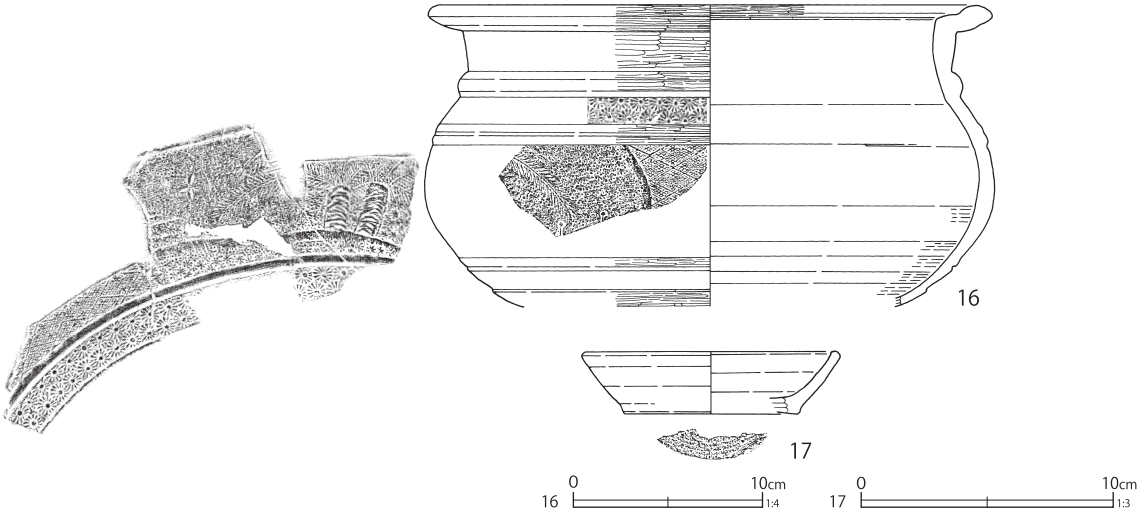


第 56 図　第７号建物跡（２）



第 57 図　第 7 号建物跡（3）

第 58 図　第 7 号建物跡出土遺物（1）



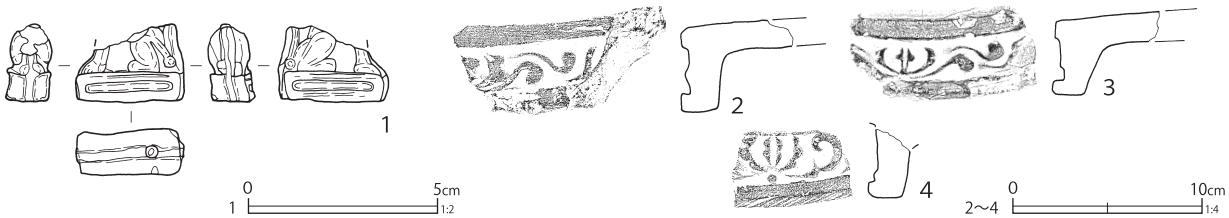
第59図　第７号建物跡出土遺物（２）

第21表　第７号建物跡出土遺物観察表（１）（第58・59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	9.6	5.2	3.6	-	85	普通	白	SB7	整地層　瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（端反碗）	73-6
2	磁器	碗	12.3	5.9	4.5	-	80	普通	白	SB7	整地層　肥前系　内外面施釉・染付　内面蛇の目状釉剥ぎ	
3	磁器	碗	(10.8)	5.8	4.0	-	50	普通	白	SB7	整地層　瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（端反碗）	
4	磁器	碗	6.8	5.7	3.1	-	55	普通	白	SB7	整地層　肥前系　内外面施釉　外面染付（湯呑形碗）	
5	磁器	坏	(6.6)	2.6	2.8	-	60	普通	白	SB7	整地層　瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付　内面上絵付（金）	73-7
6	磁器	坏	8.0	4.3	3.7	-	95	普通	白	SB7	整地層　瀬戸美濃系　内外面施釉　外面銅版転写染付	
7	磁器	猪口	7.8	6.0	6.2	-	95	普通	白	SB7	整地層　肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目状高台	
8	磁器	鉢	(13.8)	5.3	(6.4)	-	25	普通	白	SB7	整地層　瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付　蛇の目状高台	
9	陶器	鉢	(11.3)	[2.7]	-	-	10	良好	白	SB7	整地層　京都信楽系か　内外面灰釉・鉄釉掛け分け　内面櫛目	74-1
10	陶器	餌入れ	3.6	2.7	3.1	EK	100	普通	灰白	SB7	整地層　瀬戸美濃系　底部離糸切　内外面灰釉　底部に赤色物質　少量煤付着	
11	陶器	徳利	-	[12.3]	6.8	IK	85	普通	灰白	SB7	整地層　瀬戸美濃系　外面柿釉・底部拭き取り	
12	陶器	土瓶	-	[6.0]	7.6	DIK	15	普通	暗赤褐	SB7	整地層　松岡系　外面海鼠釉　底面窯道具痕	73-8
13	陶器	土瓶	7.0	10.7	7.4	I	95	良好	灰白	SB7	整地層　外面糠白釉（貫入多い）　煤付着	74-2
14	陶器	蓋	(7.1)	1.5	(6.2)	EI	40	普通	灰黄	SB7	整地層　吉見系か　上面鉄釉　施釉土器質	74-3
15	陶器	甕	(56.4)	[50.2]	-	DEGI	40	普通	橙	SB7	常滑	74-4
16	瓦質土器	火鉢	(28.4)	[16.0]	-	ADEI	35	良好	灰黄褐	SB7	整地層　外面施文、一部ミガキ　燻す	74-5
17	かわらけ	小皿	(10.0)	2.4	(6.8)	CHI	30	普通	浅黄橙	SB7	整地層　底部糸切痕　胎土粉質	

加工されている物が多い。これらは標高10.1m程で上端面がほぼ同じ高さになっているので、掘立柱建物では無く、土台建物の捨杭であると考えられる（第57図参照）。また、梁間方向の二箇所には大引きが渡されていたと思われ、建物跡の大部分は床を貼った構造であったと推定される。杭同士の間隔は、概ね180cmないし、半分の90cmで揃っている。

なお、建物から３尺程離れて、南側に柱穴列が認められた。付属施設である可能性があるが、建

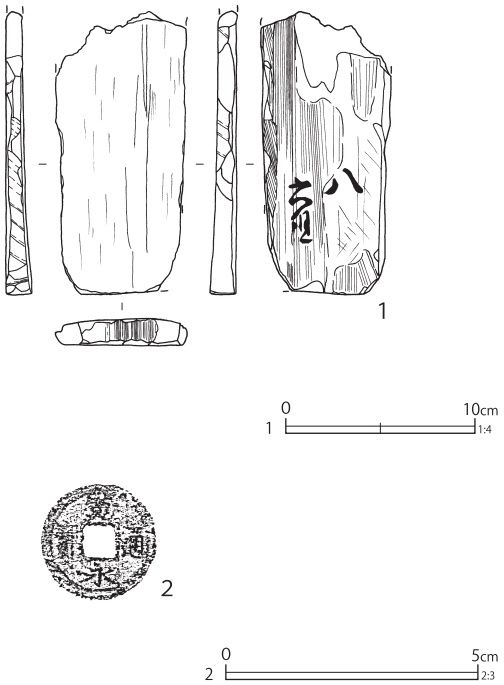


第 60 図　第７号建物跡出土遺物（３）

第 22 表　第７号建物跡出土遺物観察表（２）（第 60 図）

番号	種別	器種	幅	高さ	厚さ	重さ	胎土	焼成 / 色調	遺構	備考	図版
1	土製品	人形	2.9	[2.1]	1.3	6.3	A K	良好 / 褐灰	SB7	整地層　狛犬か　左右合二枚型成形 中実　雲母付着	242-2
番号	種別	器種	長さ	幅	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
2	瓦	軒桟瓦	[5.8]	[11.0]	-	AEIK	普通	灰白	SB7	整地層	248-2
3	瓦	軒桟瓦	[5.6]	[10.3]	-	AEI	良好	灰	SB7	整地層	248-3
4	瓦	軒桟瓦	[2.2]	[7.0]	-	DEHI	普通	灰白	SB7	整地層	248-4

物と柱間が合わず、全長もより長いことから、同時期に建てられたものでは無いかもしれない。西側のＰ１～Ｐ２間が約90㎝、Ｐ２～Ｐ３間が約300㎝であるが、それより東側の柱穴は、芯々の間隔が約210㎝に揃っている。



第 61 図　第７号建物跡出土遺物（４）

建物範囲とほぼ一致して、整地層が認められた。調査時にはこれを床面調整土として調査しており、建物跡と一体化した整地と考えていた。しかし、前述のように第７号建物跡の基礎土台は、標高10.1m付近と想定されるので、整地層より若干高い。建物の大部分に床板を貼る構造を想定すれば、整地層は床面の調整としては、厚く丁寧である。従って整地層は、杭が検出された建物跡より先行する土地利用に伴うものであろうが、便宜上この項で記述する。

整地層（第56図）は大きく、上層（１層）と下層（４層）に分けられ、東西セクション（第56図A-A’）では炭・砂を多く交える間層が確認できる。このような断面観察からは、一時期の構築ではなく、二時期以上の構築の可能性も考慮されよう。上層（１層）の整地層は粘土質で灰・炭に加えて鉄滓が多く混ざっていた。これらの状況から、整地層は第７号建物跡構築前の、鍛冶行為に伴うものと考えるのが妥当であろう。

第 23 表　第７号建物跡出土遺物観察表（３）（第 61 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	砥石	[14.9]	[6.9]	1.4	199.9	ホルンフェルス	SB7	整地層　ノコギリ痕 幅広工具痕 裏面墨書	283-14
番号	種別	器種	法量					遺構	備考	図版
2	銅製品	銭貨	径 23.5 厚さ 1.7 重さ 2.7					SB7	E7I6Gr 寛永通寶（新）	

このような遺構の検出状況から、出土遺物の大半は、整地層に伴うもので、建物構築以前の遺物と考えられる。第58・59図は出土した陶磁器類である。

１は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、外面の多くを濃み塗りして、墨弾きで草文を描く。２は肥前系磁器の粗製碗で、口縁部が端反になる。内底面は蛇の目状釉剥ぎされ、周囲に二重圏線、中心に五弁花文をコンニャク印判で染付する。外面には崩れた草文を三単位染付している。３は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、厚手でサイズも少し大きい。外面に草花文、内面口縁部に渦文、底部に「□化年製（成化年製か）」の銘を染付する。４は肥前系磁器の湯呑形碗で、外面に山水楼閣文、内面口縁部に角渦文を染付する。

５は瀬戸美濃系磁器の酒杯で、口縁部が開き坏型を呈するものである。内面には金彩で文字「ナカダ／御□水」と松文を絵付けする。高台内には「大日本永楽造」銘款を有す。類例は、栗橋宿跡第６地点の第４号土壙（第456集『栗橋宿跡Ⅲ』117図18）や、栗橋宿本陣跡遺構外（第460集『栗橋宿本陣跡Ⅱ』358図１）がある。簡単に物を描いて地名を付すパターンの酒杯で、判じ絵と思われる。中田を見ず待つ（渡し先である中田を見ずいつまでも居てほしい）の意であろうか。

なお「中田」と記すものは『本陣跡Ⅱ』にも報告例があり、「中田」「酒井製」、亀甲に貫の醤油樽が描かれる。中田宿の醤油醸造業、酒井貫一郎商店（酒貫）を示すものである。酒井家は天保５年（1834）の文書には名が見える。

６は瀬戸美濃系磁器の坏で、口縁部が端反になり、腰が張る。外面に銅版転写染付が施される。７は肥前系磁器の猪口で、外面に斜格子・市松文の繰り返し、内面口縁部に崩れた四方襷文、底部に昆虫文を染付する。蛇の目状高台は低く、釉薬の拭き取りも雑である。８は瀬戸美濃系磁器の鉢で、高台は蛇の目状高台である。外面に草・鳥文、内底面に著しく崩れた環状松竹梅文を酸化コバルト染付で描く。

９は小破片から復元した陶器の鉢で、小型のものである。胎土は灰白色で緻密、表裏面に灰釉と明るい色調の鉄釉を掛け分ける。内面下位に擂目状に櫛目が見える。胎土・釉などから、京都信楽系陶器と考えられるが、詳細な器種は判然としない。一見、櫛目を有す灯明皿のような破片であるが、復元した器形からすれば、小型擂鉢の可能性もあろう。

10は瀬戸美濃系陶器の餌入れで、内外面とも黄色味の強い灰釉が施される。11は、瀬戸美濃系陶器のぺこかん徳利で、外面は柿釉、底部の釉は拭き取られる。体部の窪みは対向して二箇所である。12は松岡系陶器の土瓶で、外面に濃い水色の海鼠釉が掛けられる。内面も釉が回っており、茶色味を帯びた鉄釉状に発色するほか、一部に海鼠釉が散る。底部・体部下位は直接の接点が無いが、図上復元した。刳り底状の底部内に環状に窯道具痕が残る。底部は回転ケズリ後に周縁に沿って回転ナデを施す。13は陶器の土瓶で、外面に細かい貫入が多い糠白釉を施す。釉は僅かに緑色味を帯び、透明感に乏しいが光沢はある。内面は下位に薄く釉が回る。底部は明瞭な渦巻き状のロクロナデで、体部へと及ぶ。外面露体部には煤が付着している。胎土は灰白色・緻密で混入鉱物は極めて少ない。大堀相馬系陶器の可能性が高い。

14は施釉土器質の土瓶蓋である。上面に漆黒で光沢があまり無い鉄釉が施される。下面から側面にかけてはケズリ整形である。吉見系陶器に類似するが、扁平なつまみに類例があるのか、精査の必要がある。

16は薄手の火鉢で、硬質・瓦質のものである。口縁部から頸部にかけてと、体部下位の突帯にミガキが施される。突帯間には、細かい型押し文が施される。胎土はやや粉っぽく、微細な雲母

粒とともに、径５㎜以下の長石・石英をやや多く含む特徴がある。17は薄手のかわらけで、胎土が粗い北武蔵地域在地のものである。

第60図１は土製品人形類の狛犬で、左右合わせの型成形である。２～４は軒桟瓦である。瓦類のうち、確認し得た軒瓦の全てを示した。

第61図１は砥石で、ノコギリ状工具痕と刃幅の広い工具痕跡を端部に残している。墨書が認められる。２は銭貨で寛永通寶である。

このほか、整地層中から多量の鉄滓と鞴の羽口などの鍛冶関連遺物が出土している。これらのうち、土製品の鞴の羽口を、周辺遺構の鍛冶関連遺物と一括して第586～602図に掲載した。

整地層および建物跡の時期については、遺構の重複関係と、整地層内の出土遺物の様相から推測するしかないが、重複遺構については新旧関係が判然としないものがほとんどである。

整地層内の遺物は、栗橋７期頃の瀬戸美濃系磁器端反碗や、陶器の青緑釉土瓶がやや多い印象であるが、近代以降の遺物も一定量含まれている。

遺構の時期を絞り込むのが難しいが、整地層の形成は栗橋７期頃、建物跡はそれ以降と考えておきたい。

第８号建物跡（第62～83図）

Ｅ７-Ｇ４・５、Ｈ４・５グリッド（第７区画）に位置する。『絵図』の「旅籠屋　百姓　七兵衛」に該当する。建物の規模は、長軸9.76ｍ、短軸5.85ｍ、深さ1.30ｍであるが、掘方の南部～西部に、やや浅くテラス状の掘り込みが認められ、その範囲を加えると長軸10.19ｍ、短軸6.62ｍとなる。

長軸方位はN-73°-Eである。基礎中心軸から桁行7.29ｍ（約24尺）、梁行3.60ｍ（約12尺）の建物が想定される。基礎は算盤地業の上に樽を逆さに八箇所配する、所謂「樽地業建物」である。

基礎の平面形は概ね、東西に長い「ロ」の字形であるが、各辺のコーナーが若干の張り出しを有す。北西隅は西側へ、北東隅は東側へ、南西隅は南側へ、南東隅は南側へ、僅かに張り出す。また、各辺の深さも異なっており、北辺が最も深く、東辺が最も浅くなっている。

なお、長軸方向の北辺・南辺では同じ基礎の中でも深さに差異がみられる。こういった状況から、基礎の各辺を一定の計画レベルまで掘り下げて構築されたのではなく、底面をその都度調整しながら、各辺を順次掘削したものと思われる。

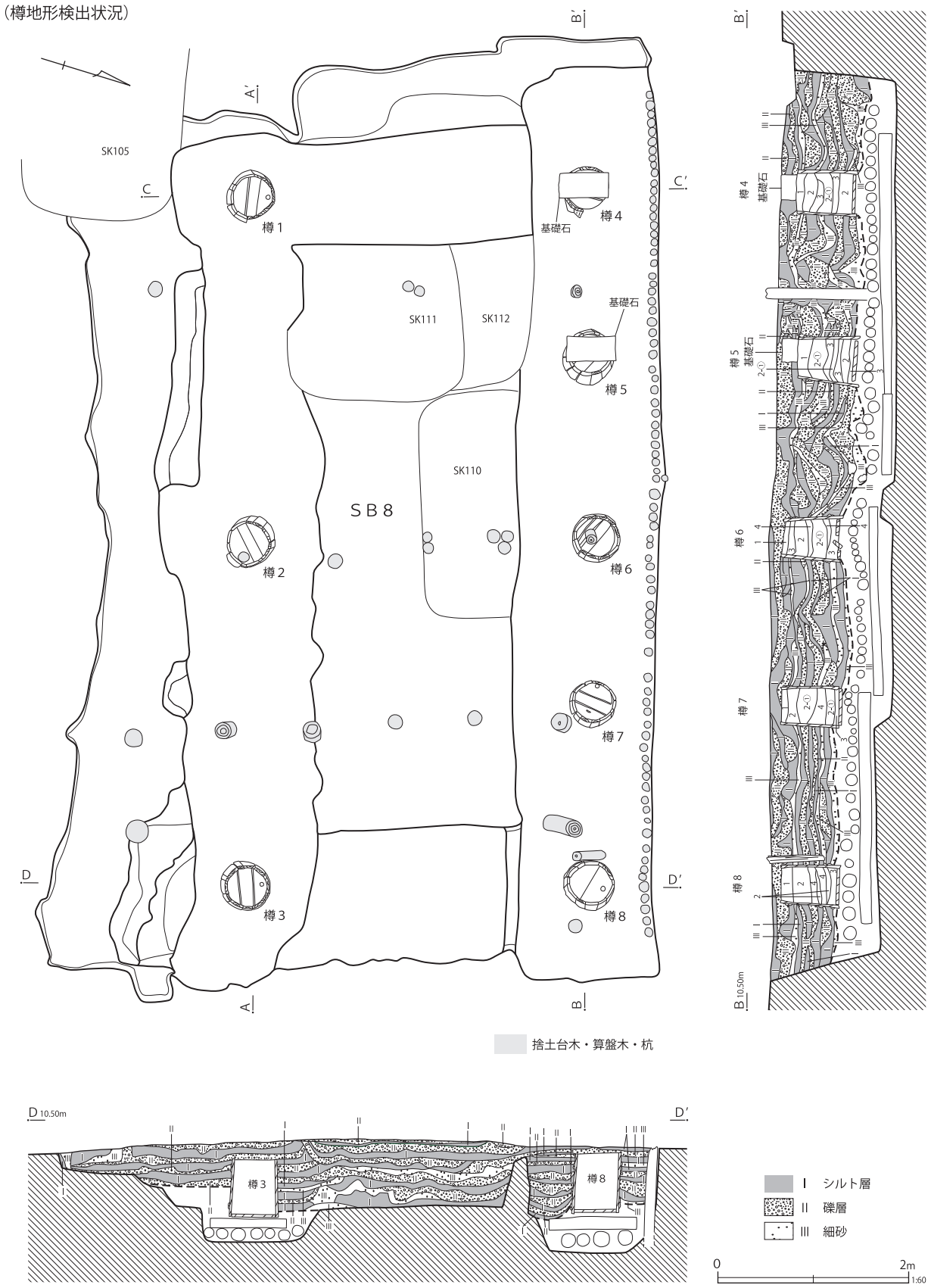
北辺・西辺・南辺の掘方底面には捨土台の長い丸太を設置し、長軸方向に密集して並べている。なお、最も浅い東辺には、こういった地業はみられない。

底面の丸太の上には、枕木状の横木を載せて算盤地業を行う。これも北辺・西辺・南辺の掘方内にみられる。

算盤地業のさらに上には樽が倒立の状態で据えられ、周囲はシルト・礫・砂の互層で版築状に叩き絞められている。樽が設置されていたのは、北辺と南辺のみで、北辺は約1.8ｍ間隔で五箇所、南辺は3.6ｍ間隔で三箇所が設置される。全ての樽に、落とし込まれた底板が遺存していた。

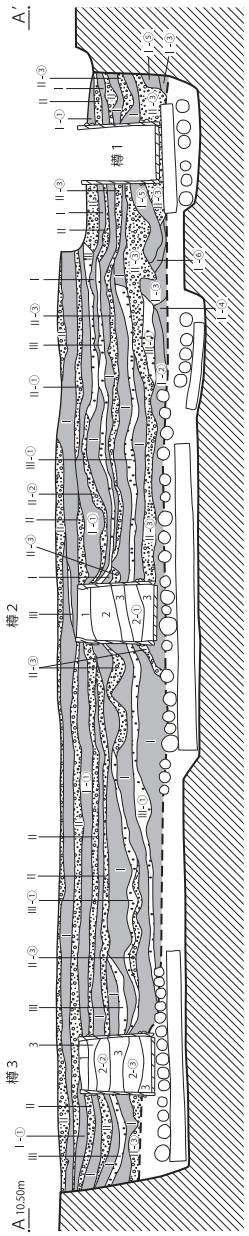
樽内部には礫を中心に砂・シルトなどが交互に充填されていた。樽内の土層は最上層が砂と礫の混土層である。下位の土層については、樽の位置によって若干の差が見られ、北辺基礎の東側の樽（樽６～８）は、礫と砂の互層であった。一方、北辺基礎の西側と南辺基礎の樽（樽２～５）では、礫とシルトの互層であった。

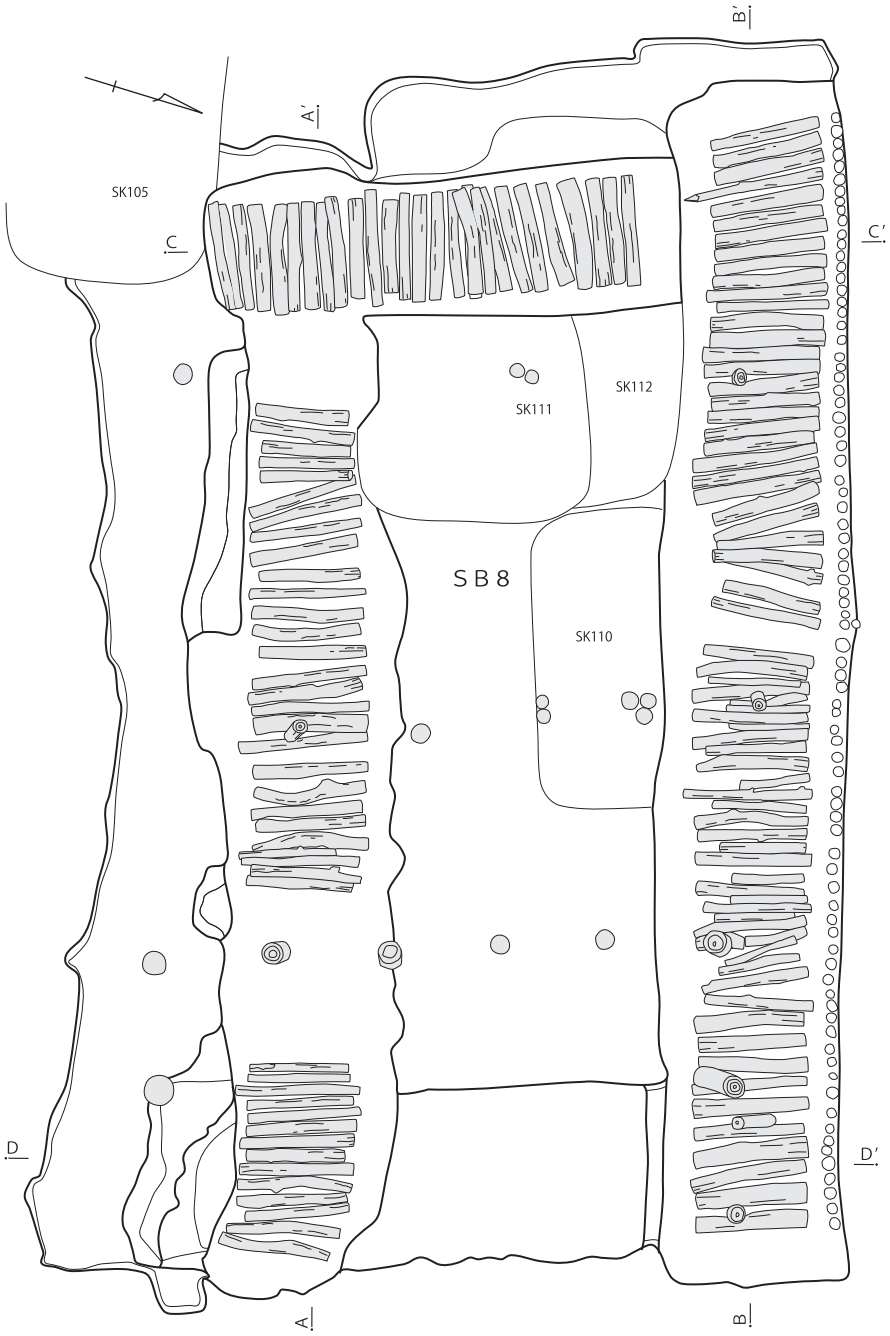
最下層はいずれもシルト層としているようだが、樽４は礫層であった。なお、樽１は調査中に土層が崩落して充分な記録ができなかったが、最下層は礫層であったと観察されている。従って、北・南の各辺のうち、一番西側の樽のみ、最下層を礫層としていたことになる。このような差異が意図的な行為によるものか、偶発的な行為によるものなのかは判然としない。



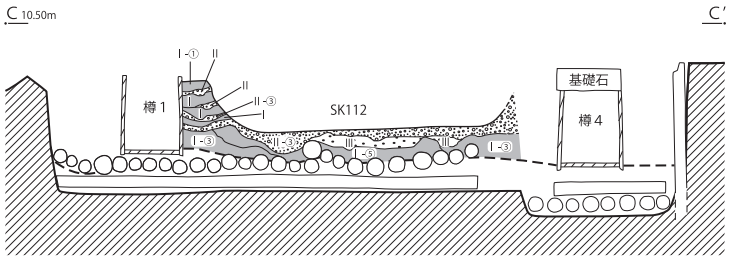
第62図　第8号建物跡（1）

（上面算盤木検出状況）





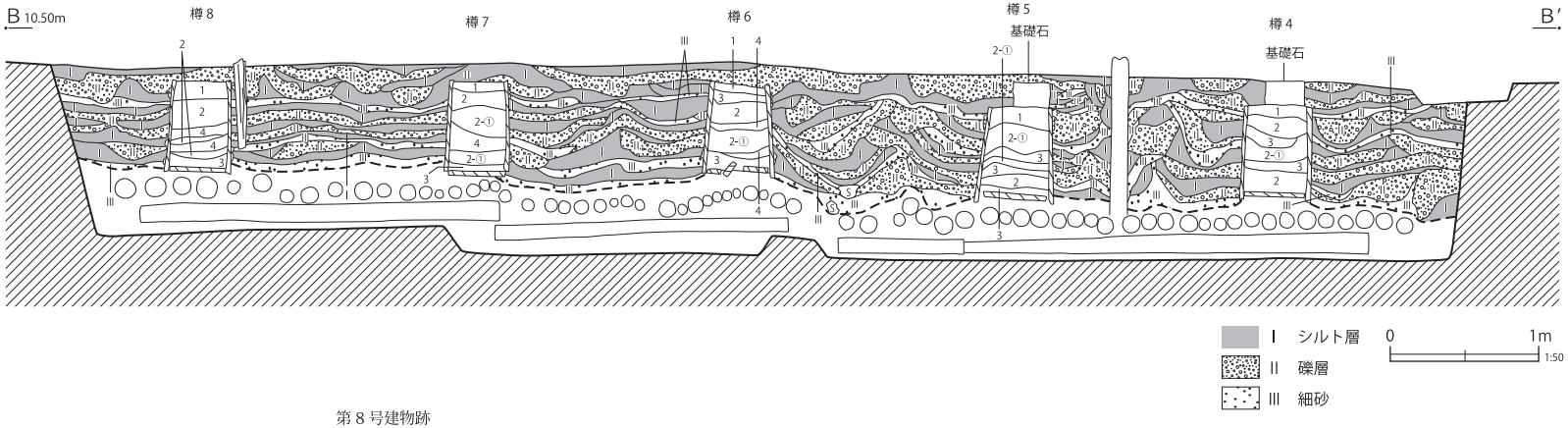
捨土台木・算盤木・杭



Ⅰ　シルト層
Ⅱ　礫層
Ⅲ　細砂

0　2m
1:60

第 63 図　第 8 号建物跡（2）



第 8 号建物跡

A-A'・C-C'

Ⅰ	シルト層	灰褐色シルト　As-a 含む　炭化物 (φ2 ～ 3 ㎜) 少量
Ⅰ-①	シルト層	Ⅰより小礫含む
Ⅰ-②	シルト層	Ⅰよりやや礫含む
Ⅰ-③	シルト層	Ⅰ-②より灰色粘土ブロック含む
Ⅰ-④	シルト層	Ⅰ-③より灰色粘土ブロックやや多い
Ⅰ-⑤	シルト層	Ⅰ-③よりブロック不明瞭で全体に混ざる
Ⅰ-⑥	シルト層	Ⅰ-③よりブロック小さく多い
Ⅱ	礫層	礫 (φ5 ～ 40 ㎜) 多く含む　中心はφ10 ～ 20 ㎜程度　円礫・チャート多い　鉄分のしみあり
Ⅱ-①	礫層	Ⅱに比して礫少ない　シルトを基調とする　中心は 5 ㎜程度のやや破砕した礫
Ⅱ-②	礫層	Ⅱに比して礫少ない　シルトを基調とする
Ⅱ-③	礫層	Ⅱに比してやや礫少なく小礫は少ない
Ⅲ	砂層	砂を多く含む　鉄で固まった細砂
Ⅲ-①	砂層	Ⅲより鉄分少なく軟質だが水分による影響で本来はⅢに同じ

B-B'

Ⅰ	シルト層	硬くしまる　均質　水分を含むとかなり柔らかくなる
Ⅱ	礫層	円礫でφ5 ～ 40 ㎜・φ20 ～ 30 ㎜が目立つ
Ⅲ	細砂	硬くしまる　鉄分により錆色　シルトブロック (φ5 ～ 40 ㎜) 多少含む

D-D'

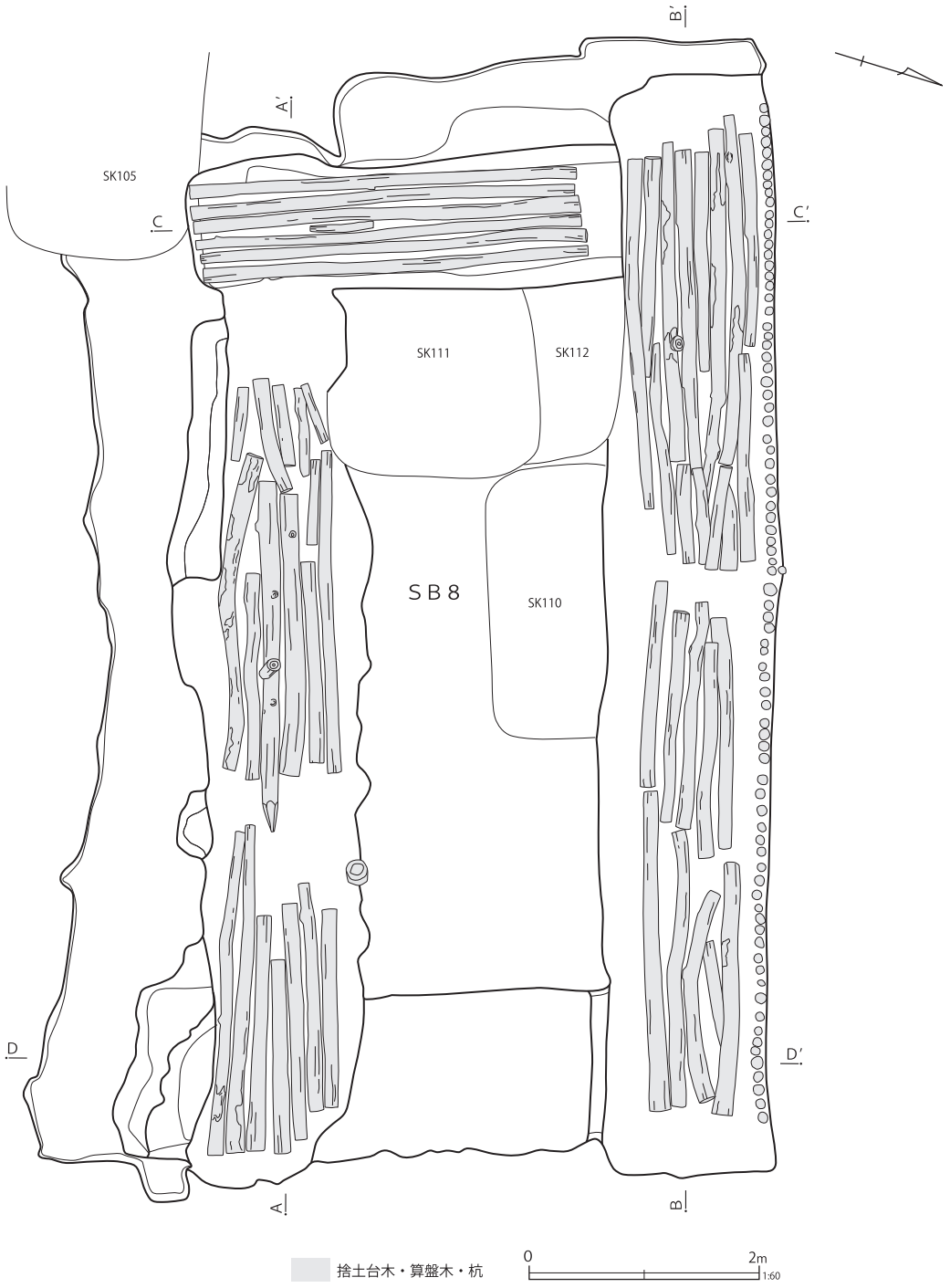
Ⅰ	シルト層	硬くしまる
Ⅱ	礫層	φ5 ～ 40 ㎜やや小さい礫が主体 (φ5 ～ 20 ㎜主体)
Ⅲ	砂層	砂を多く含む　鉄分で固まった細砂

樽内

1	砂・礫混土層	
2	礫層	φ10 ～ 50 ㎜小さめの礫
2-①	礫層	2 より鉄分による赤化著しい
2-②	礫層	2 より板状の石を細かくしたような石が目立つ　中央付近には大きめの石が置いたような状態で出土
2-③	礫層	2-②より鉄分による赤化著しい
3	灰褐色土	シルト層
4	灰褐色砂	細砂層

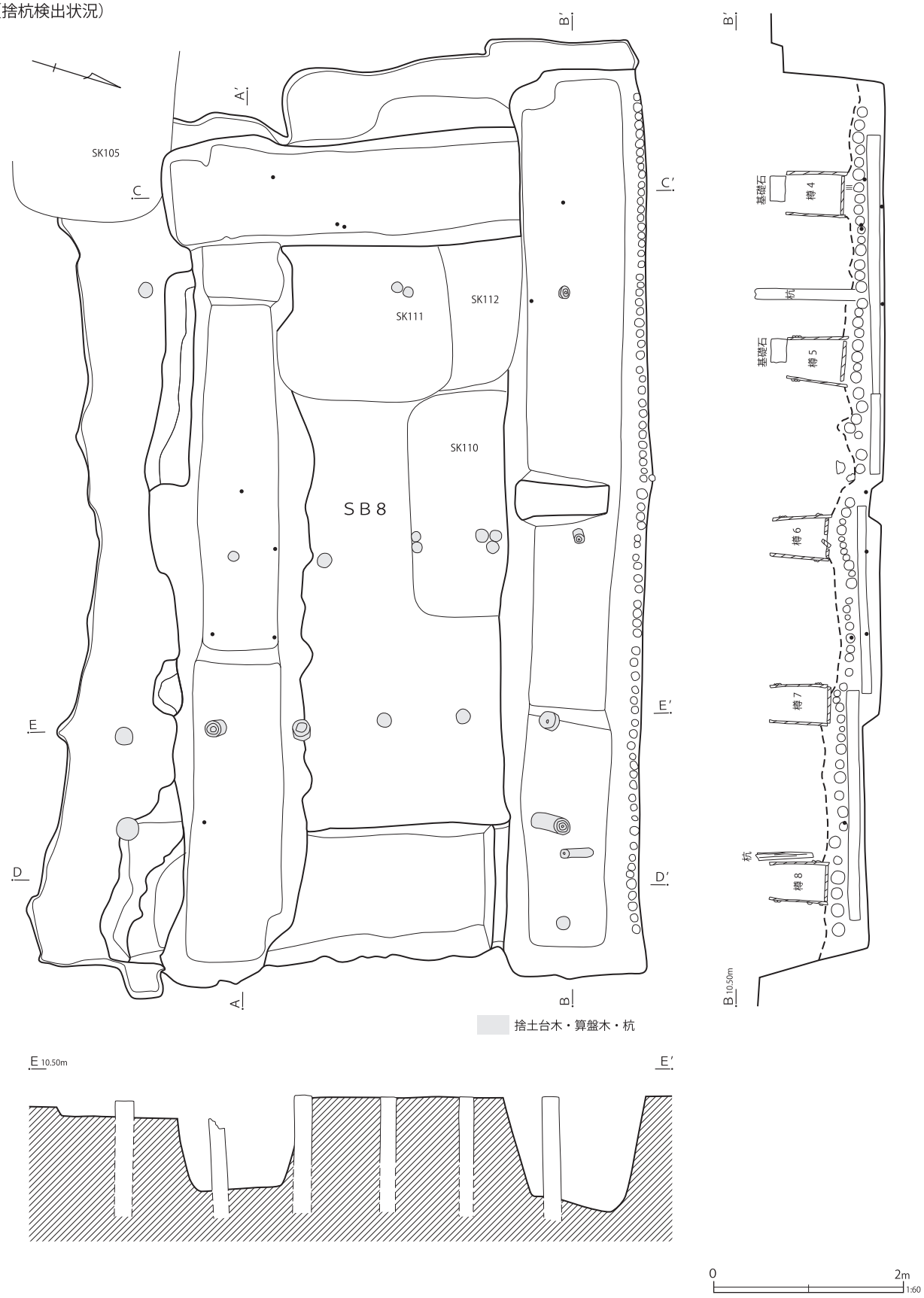
第 64 図　第 8 号建物跡（3）

（下面算盤木検出状況）

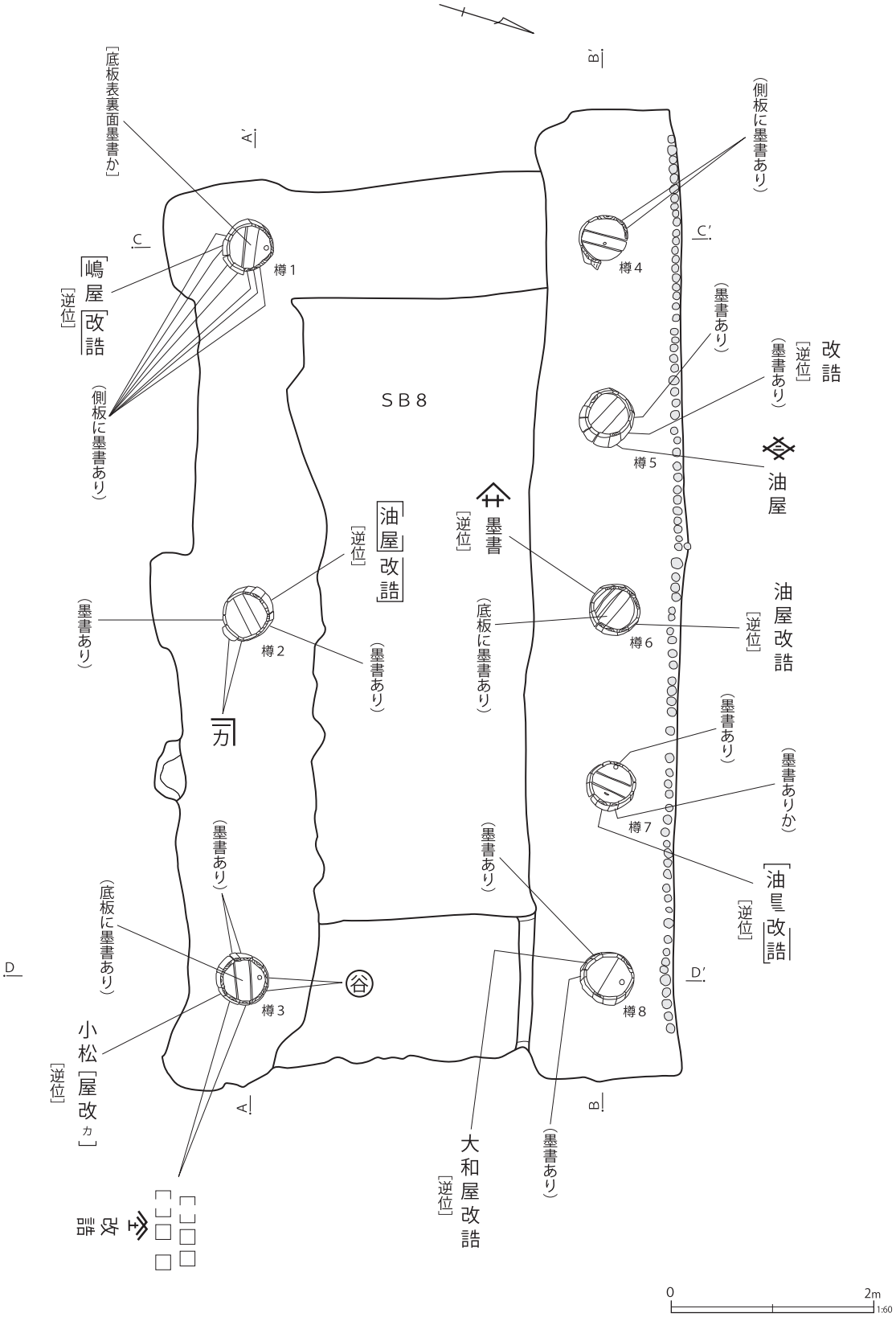


第 65 図　第 8 号建物跡（4）

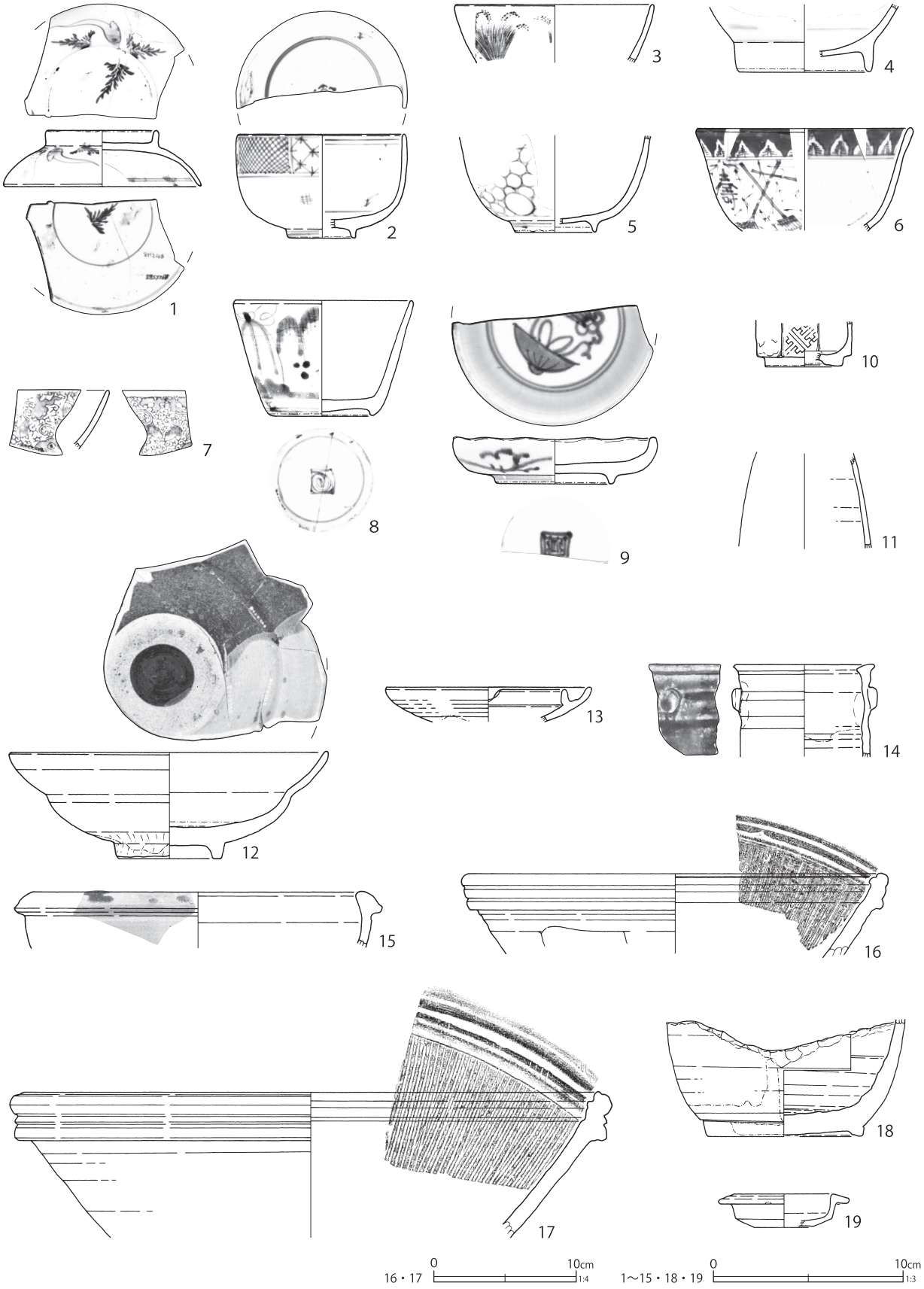
（捨杭検出状況）



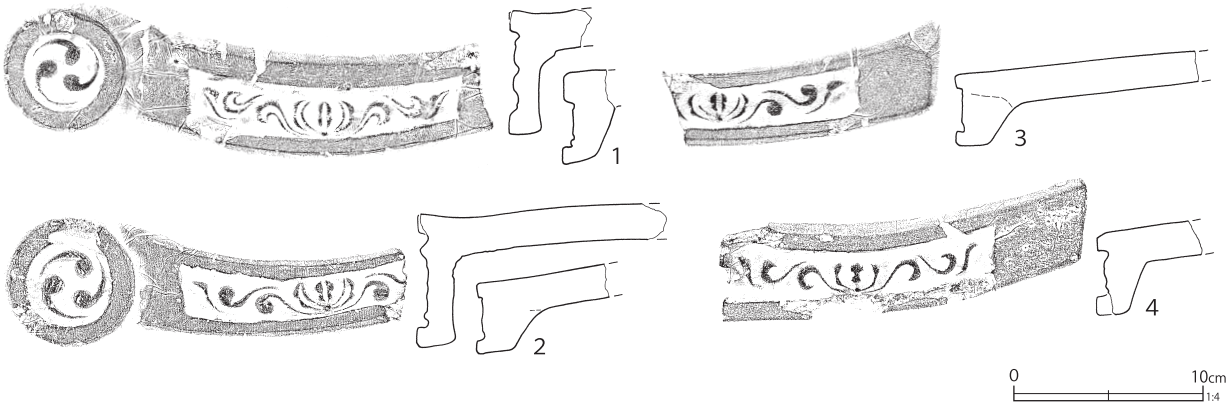
第66図　第8号建物跡（5）



第 67 図　第 8 号建物跡（6）



第 68 図　第 8 号建物跡出土遺物（1）



第 69 図　第８号建物跡出土遺物（２）

第 24 表　第８号建物跡出土遺物観察表（１）（第 68 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	蓋	(5.8)	2.9	(10.3)	-	40	普通	白	SB8	肥前系　内外面施釉・染付　（広東碗の蓋）	
2	磁器	碗	(8.6)	5.4	(3.4)	-	45	普通	白	SB8	肥前系　内外面施釉・染付　（小丸碗）	
3	磁器	碗	(10.3)	[3.0]	-	-	5	普通	白	SB8	肥前系　内外面施釉　外面染付　（広東碗）	
4	磁器	碗	-	[3.5]	(6.8)	-	20	普通	白	SB8	肥前系　内外面施釉・染付　（広東碗）	
5	磁器	碗	-	[5.0]	(4.1)	-	15	良好	白	SB8	肥前系　内外面施釉　外面染付	
6	磁器	碗	(11.0)	[5.4]	-	-	15	良好	白	SB8	肥前系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕	
7	磁器	碗	-	[3.0]	-	-	5	普通	白	SB8	瀬戸美濃系　内外面施釉・銅版転写染付	
8	磁器	猪口	9.1	6.0	5.2	-	85	普通	白	SB8	肥前系　内外面施釉　外面染付	
9	磁器	皿	(10.3)	2.4	(5.9)	-	45	普通	白	SB8	肥前系　内外面施釉（内面体部青磁釉）・染付	
10	磁器	香炉	-	[2.2]	(4.0)	-	10	良好	白	SB8	肥前系　外面鉄釉・型押施文	74-6
11	磁器	燗徳利	-	[4.9]	-	-	5	普通	白	SB8	瀬戸美濃系　内外面施釉	
12	陶器	鉢	(16.5)	5.5	5.3	IK	60	良好	灰白	SB8	肥前系　内面銅緑釉・鉄釉掛け分け　蛇の目状釉剥　外面透明釉	
13	陶器	灯明皿	(10.6)	[1.8]	-	I	5	普通	褐灰	SB8	瀬戸美濃系　内外面柿釉	
14	陶器	香炉	(7.0)	[4.8]	-	EI	10	普通	灰白	SB8	瀬戸美濃系　内外面鉄釉	74-7
15	陶器	片口鉢	(17.0)	[2.9]	-	I	5	良好	灰黄	SB8	内外面灰釉　口縁部鉄釉	
16	陶器	擂鉢	(28.6)	[5.6]	-	DE	5	普通	赤	SB8	堺明石系　内面擂目	
17	陶器	擂鉢	(40.0)	[10.2]	-	DEIK	5	良好	赤	SB8	堺明石系　内面擂目	
18	陶器	徳利	-	[6.1]	7.9	IK	30	普通	黄淡	SB8	瀬戸美濃系　外面灰釉・底部拭き取り　口縁部二次的な敲打	
19	陶器	蓋	(4.8)	[1.7]	(2.9)	I	30	良好	明褐灰	SB8	上面柿釉	

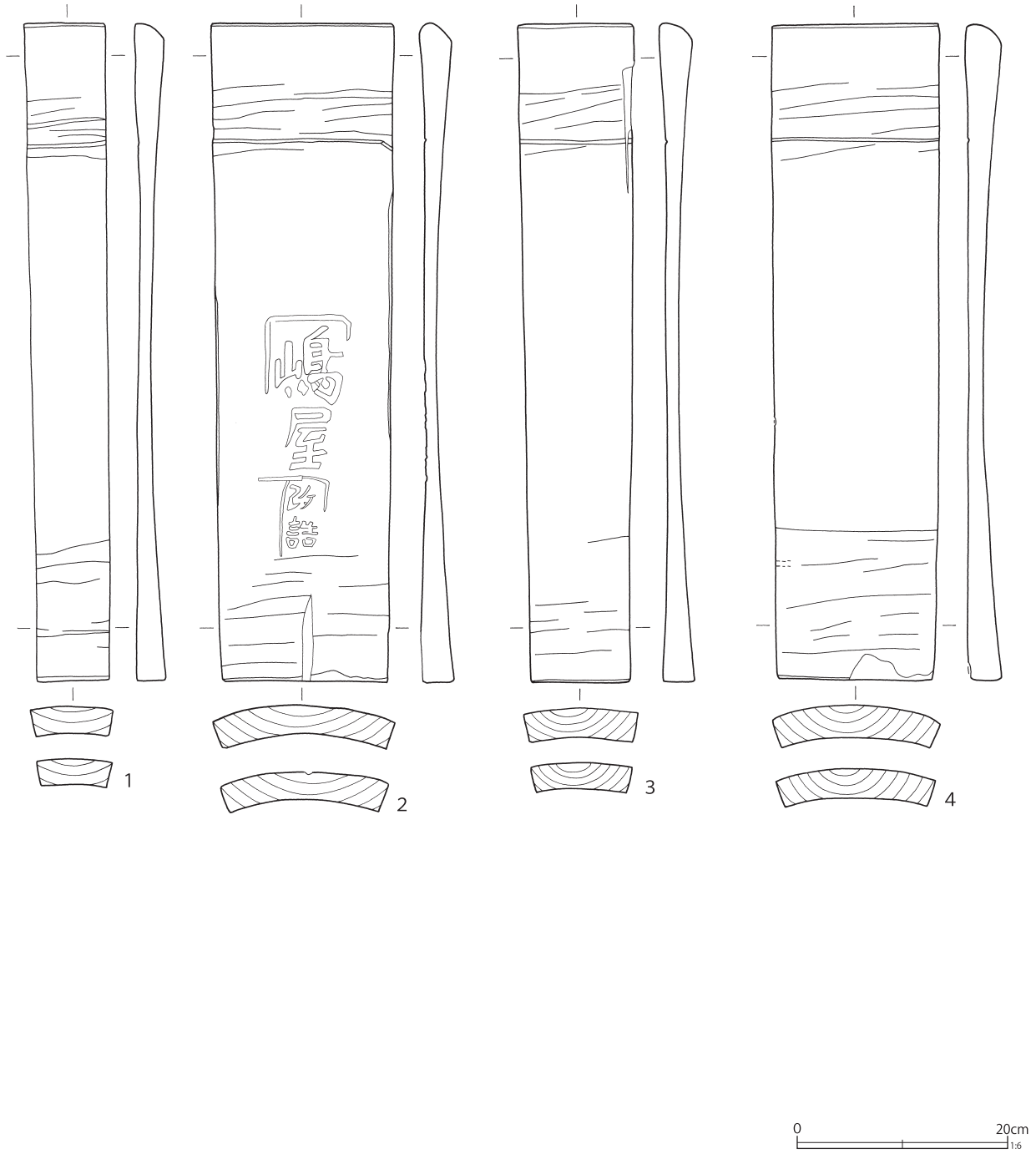
第 25 表　第８号建物跡出土遺物観察表（2）（第 69 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	[5.3]	[26.2]	6.3	AIK	普通	灰白	SB8	右巻き	248-5
2	瓦	軒桟瓦	[18.4]	[21.4]	6.8	AIK	良好	灰	SB8	右巻き　胎土硬質	248-6
3	瓦	軒桟瓦	[13.0]	[14.4]	-	AIK	良好	灰白	SB8	胎土硬質	248-7
4	瓦	軒桟瓦	[6.7]	[19.8]	-	AIK	良好	灰白	SB8	胎土硬質	248-8

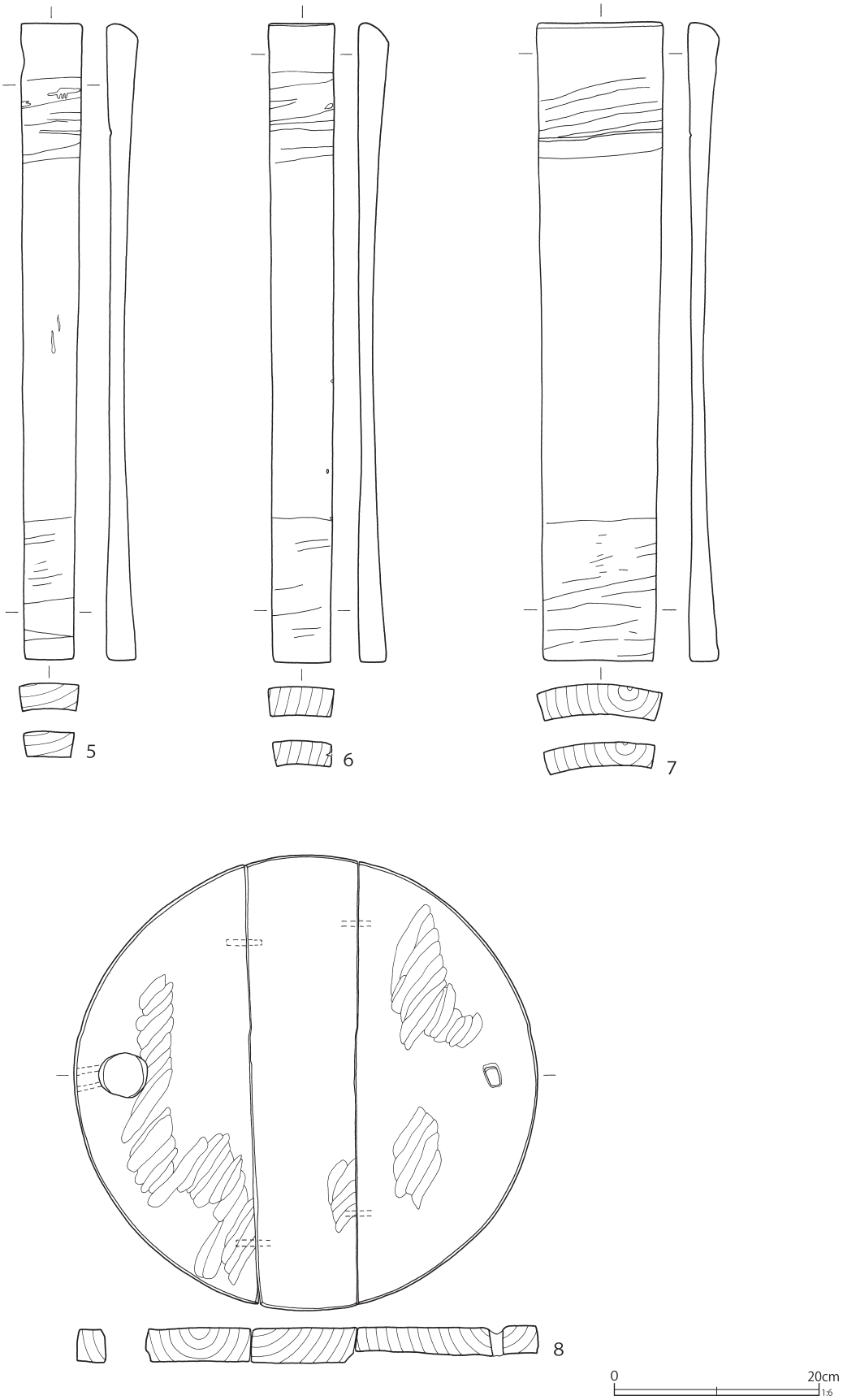
北辺の二基の樽の直上には、方形の石材（約50×25×15cm）が遺存していた。樽地業の上に載せた基礎の石材と思われる。

用いられた樽の構成材の大きさについて、第27表に示した。第83図には、その側板の規格性を示した。当然ながら側板の長さは規格的で多くが60.5cm～62.0cmの範囲に収まる。幅は５～20cm強と個体差が大きい。厚みは最も厚い端部で2.5～3.0cm程とこれも規格的である。なお、第82図には第６号建物跡基礎の樽材の一部（樽

樽1

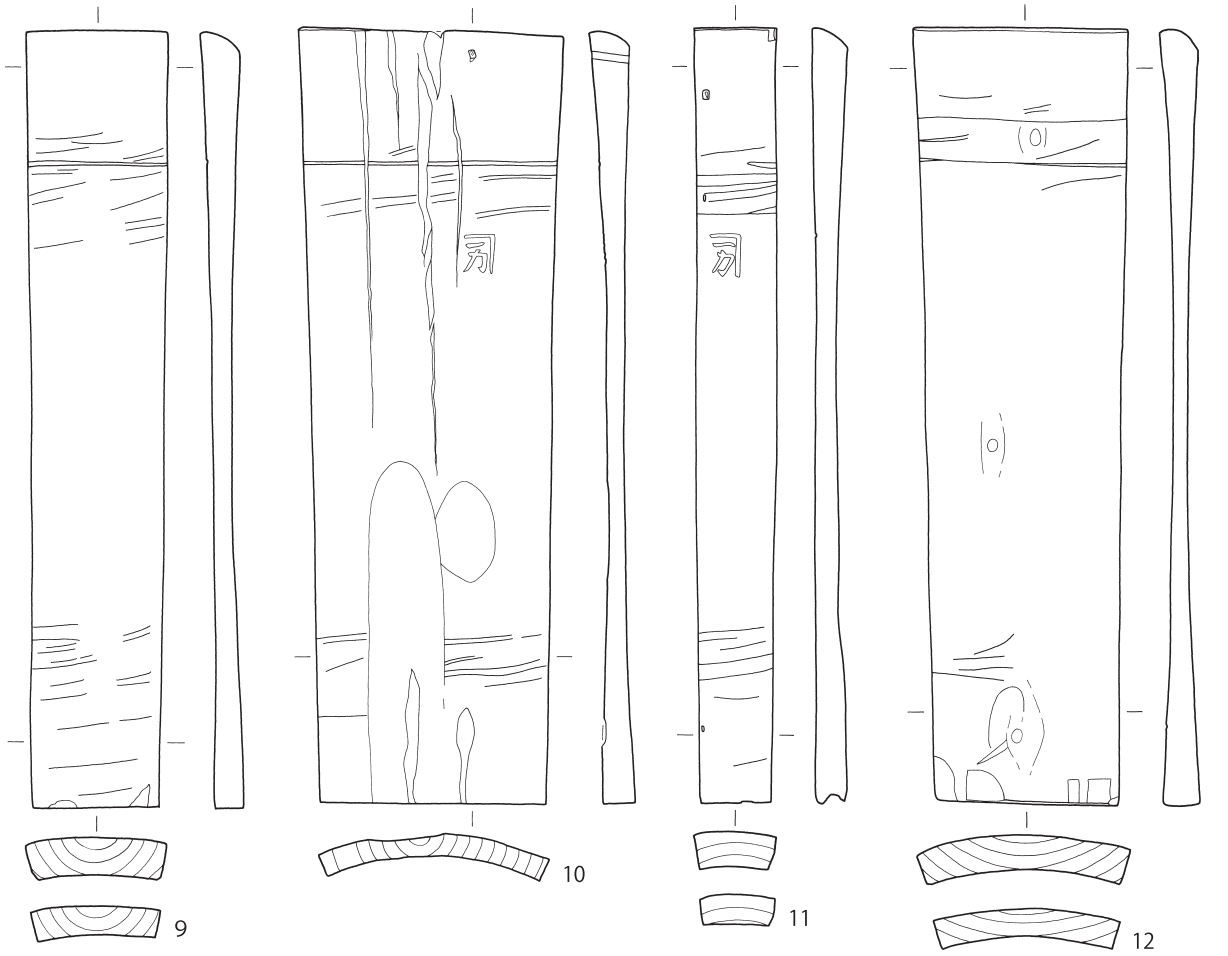


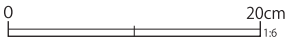
第 70 図　第 8 号建物跡出土遺物（3）



第 71 図　第 8 号建物跡出土遺物（4）

樽2





第 72 図　第 8 号建物跡出土遺物（5）

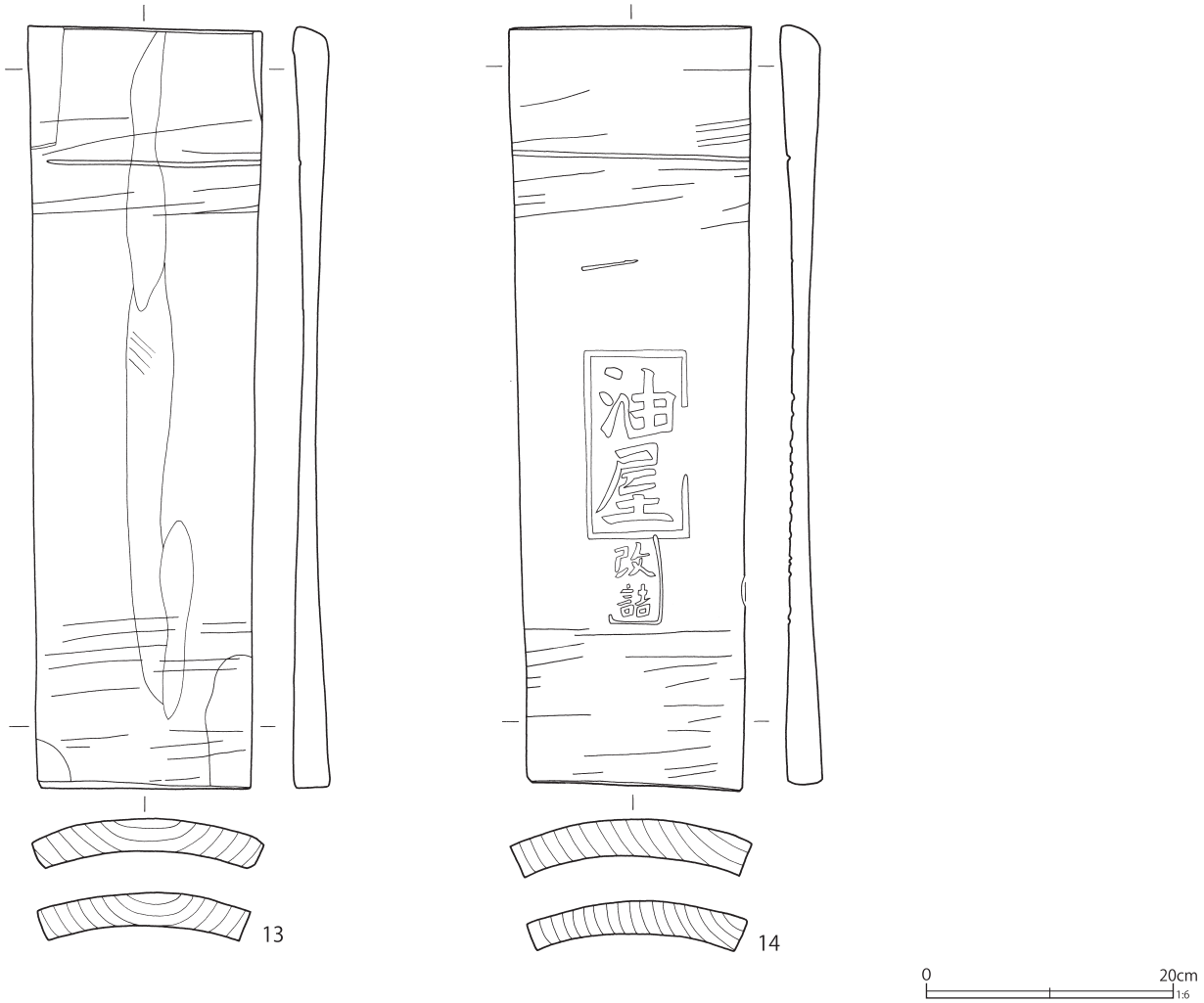
５・７）も参考に示した。

樽の側面には墨書や焼き印がみられるものがあるが、樽の内側にも反故紙を貼付けており、全体に文字の痕跡が認められた。その状態で保存するに至らなかったが、出土時点で撮影した写真を写真図版39・40に示す。

第68図は出土した陶磁器類である。

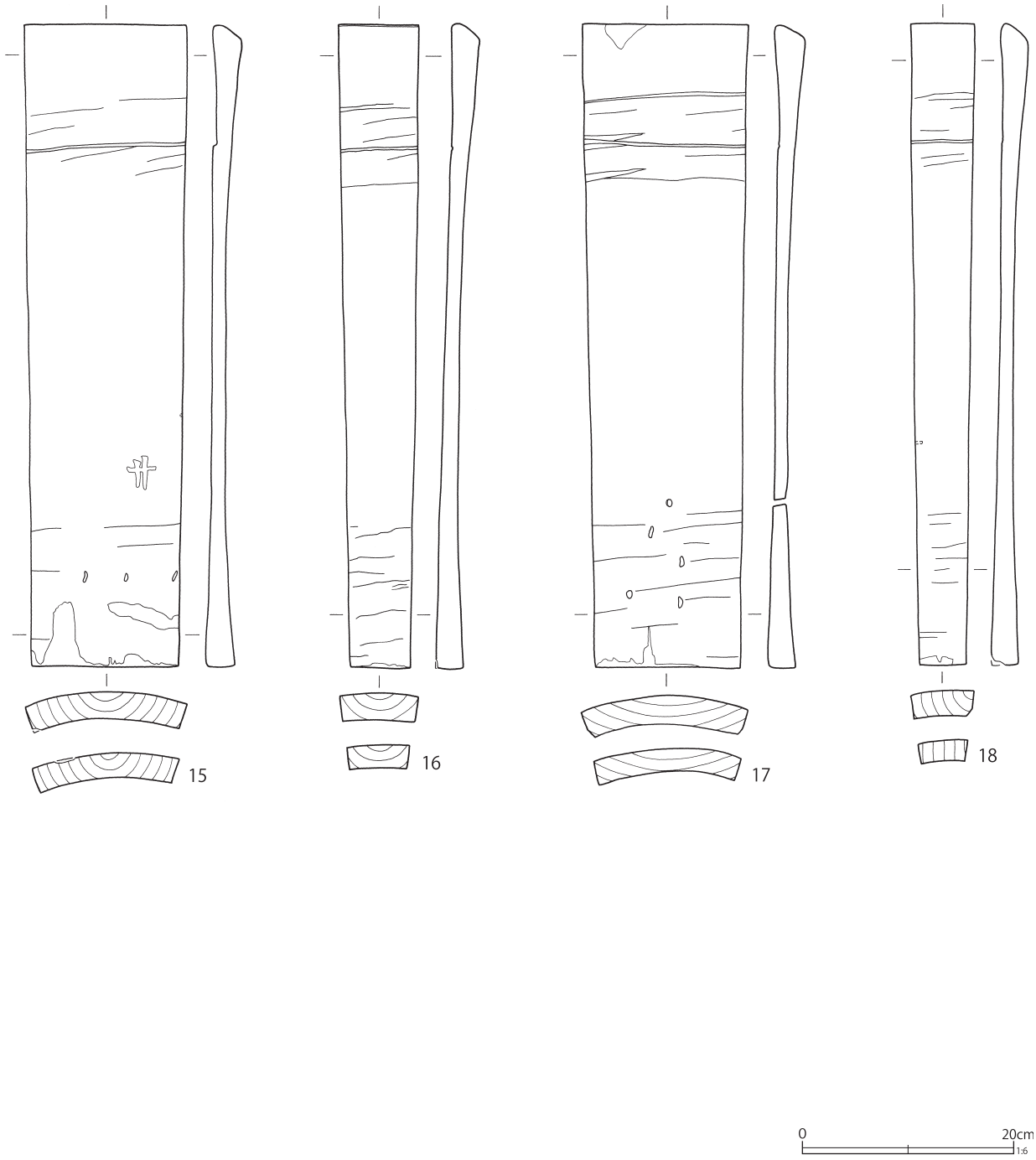
１は肥前系磁器蓋で、広東碗に伴うものである。内外面に大根の文様を染付する。２は磁器碗の小丸碗である。外面上位は区画内に斜格子・市松文を交互に染付する。下位にも井桁状文が点々と染付される。内面口縁部と底面周囲は二重圏線、底面中心には五弁花文を染付する。

３・４は肥前系磁器の広東碗である。３は稲束文を染付する。５は肥前系磁器の碗で、口縁部を欠損するが端反碗の可能性が高い。外面に集合的に円文を染付している。６は肥前系磁器の端反碗で、外面に「壽」文や箒などを染付で描く。焼き継ぎ痕がみられる。７は瀬戸美濃系磁器の平碗の細片で、内外面とも銅版転写染付が施される。後世の混在と思われるが、最新段階の資料として取上げた。８は肥前系磁器の猪口で、やや大振りのものである。外面に梅樹・草花文を染付する。高台内には方形枠に渦福文を染付する。９は肥前系磁器の小型の皿で、内面体部は青磁釉が施される。口縁部は弱く輪花形に作っている。外面に太

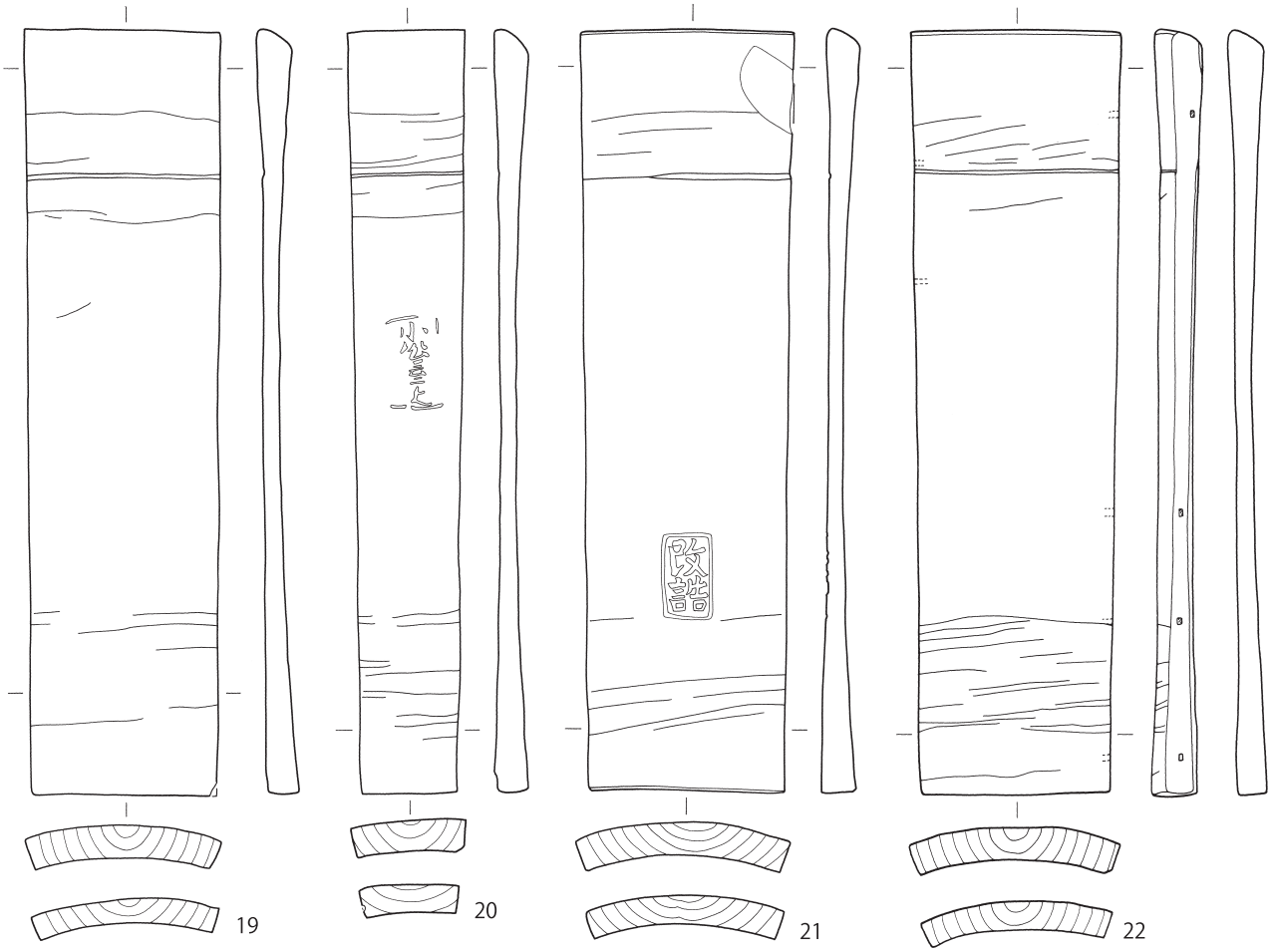


第 73 図　第８号建物跡出土遺物（６）

樽３



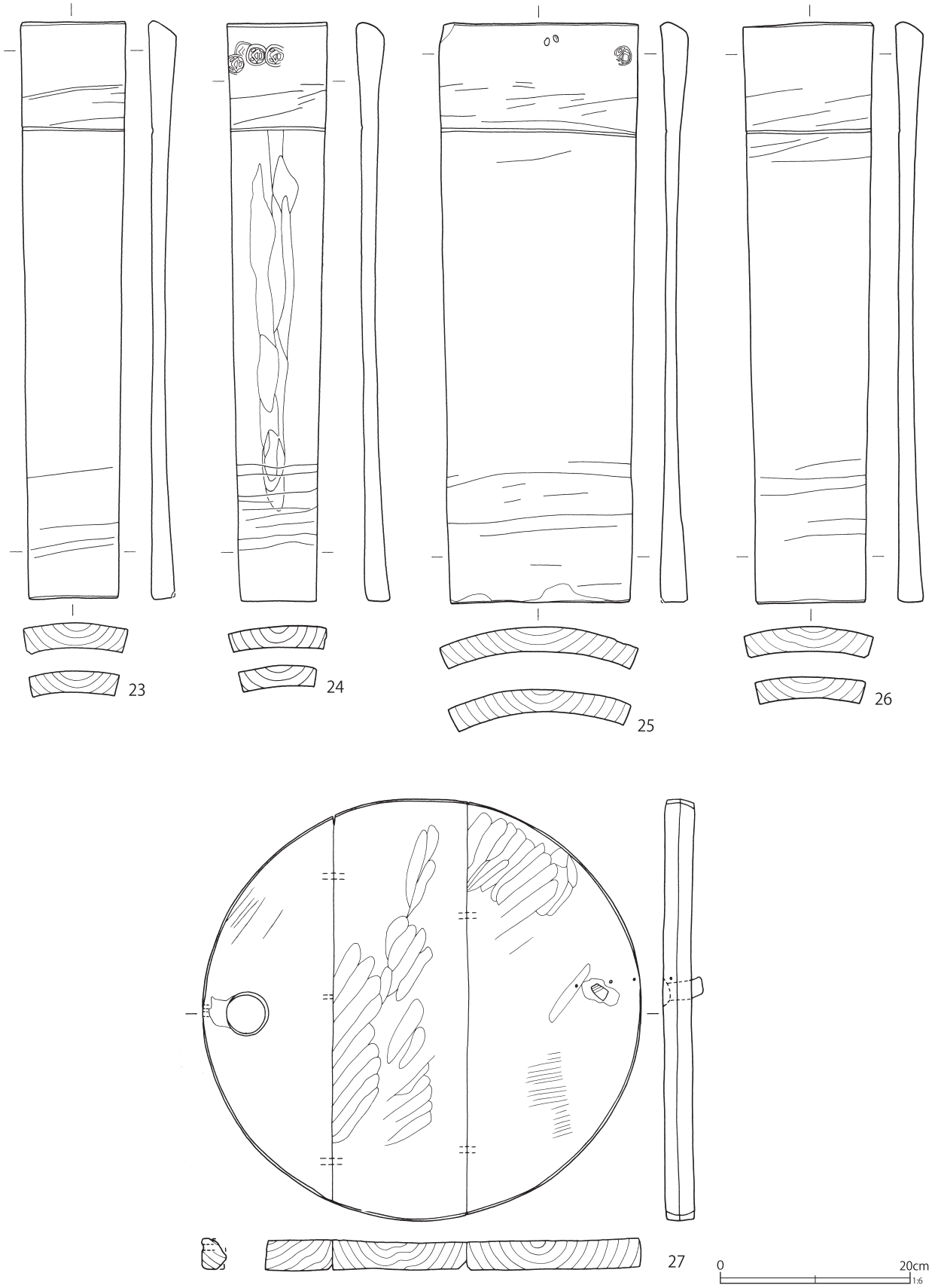
第 74 図　第８号建物跡出土遺物（７）



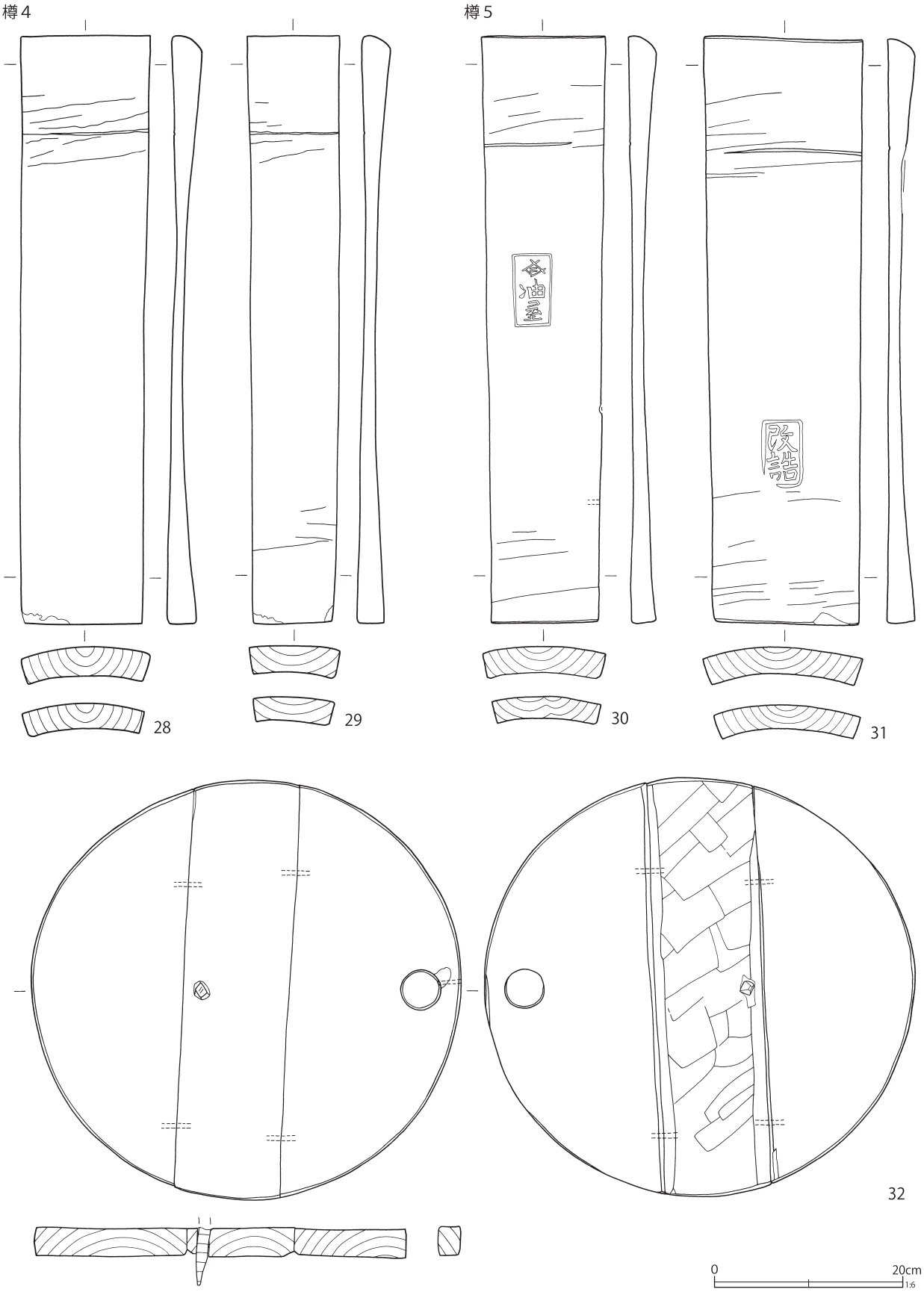
部分拓本 S=1/2

0 20cm
1:6

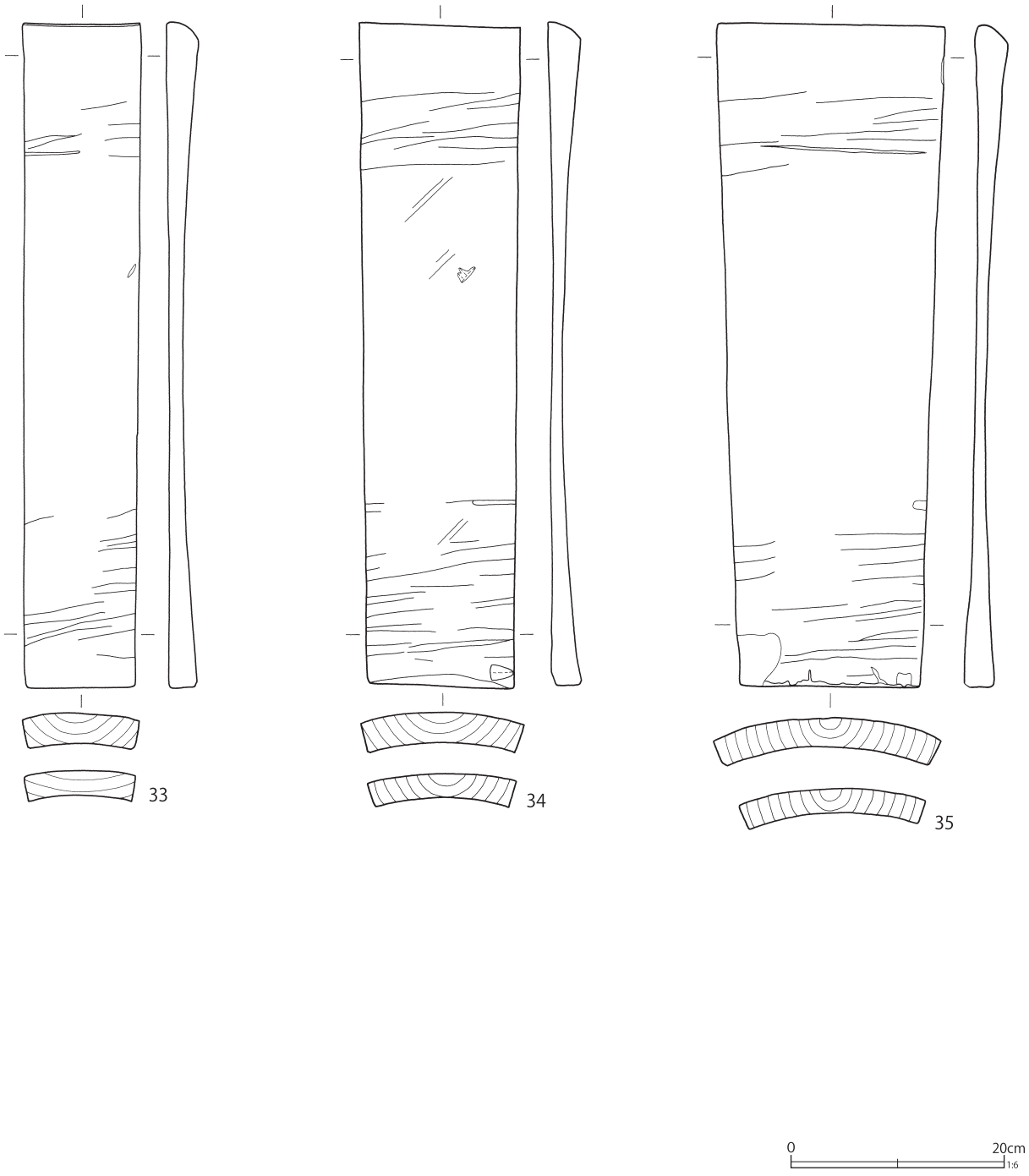
第 75 図　第８号建物跡出土遺物（８）



第 76 図　第 8 号建物跡出土遺物（9）



第 77 図　第 8 号建物跡出土遺物（10）

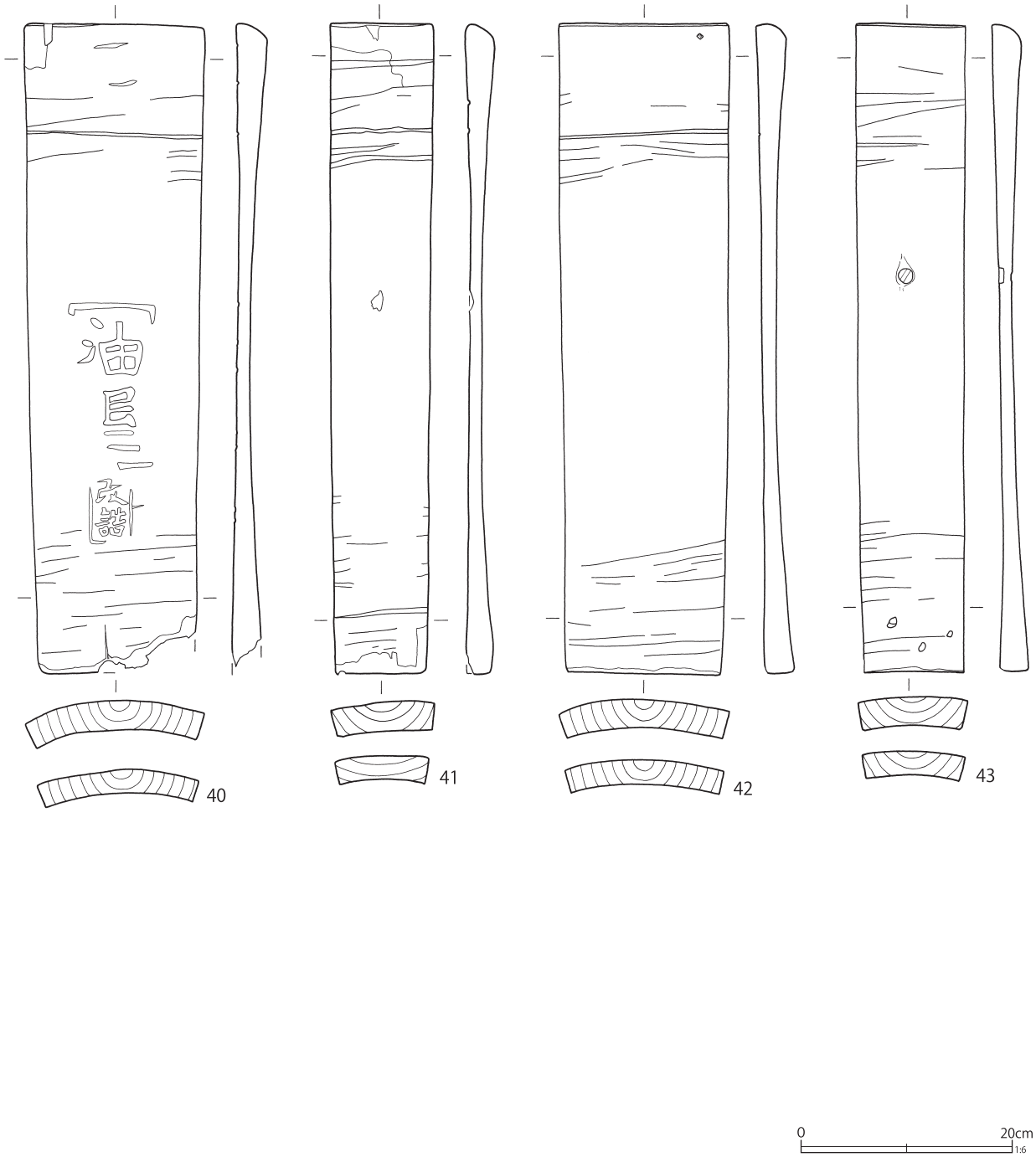


第 78 図　第 8 号建物跡出土遺物（11）

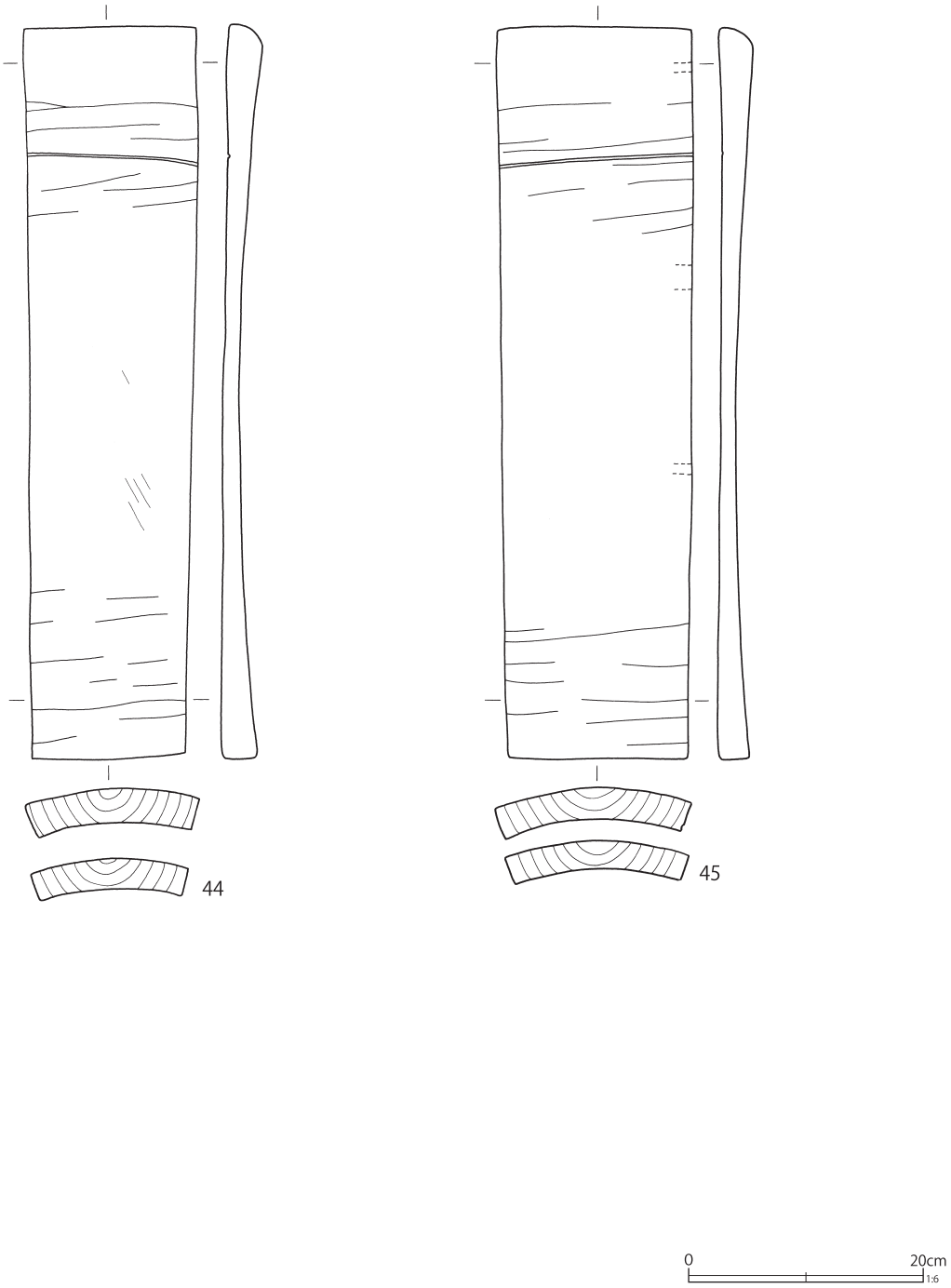
樽６

第 79 図　第８号建物跡出土遺物（12）

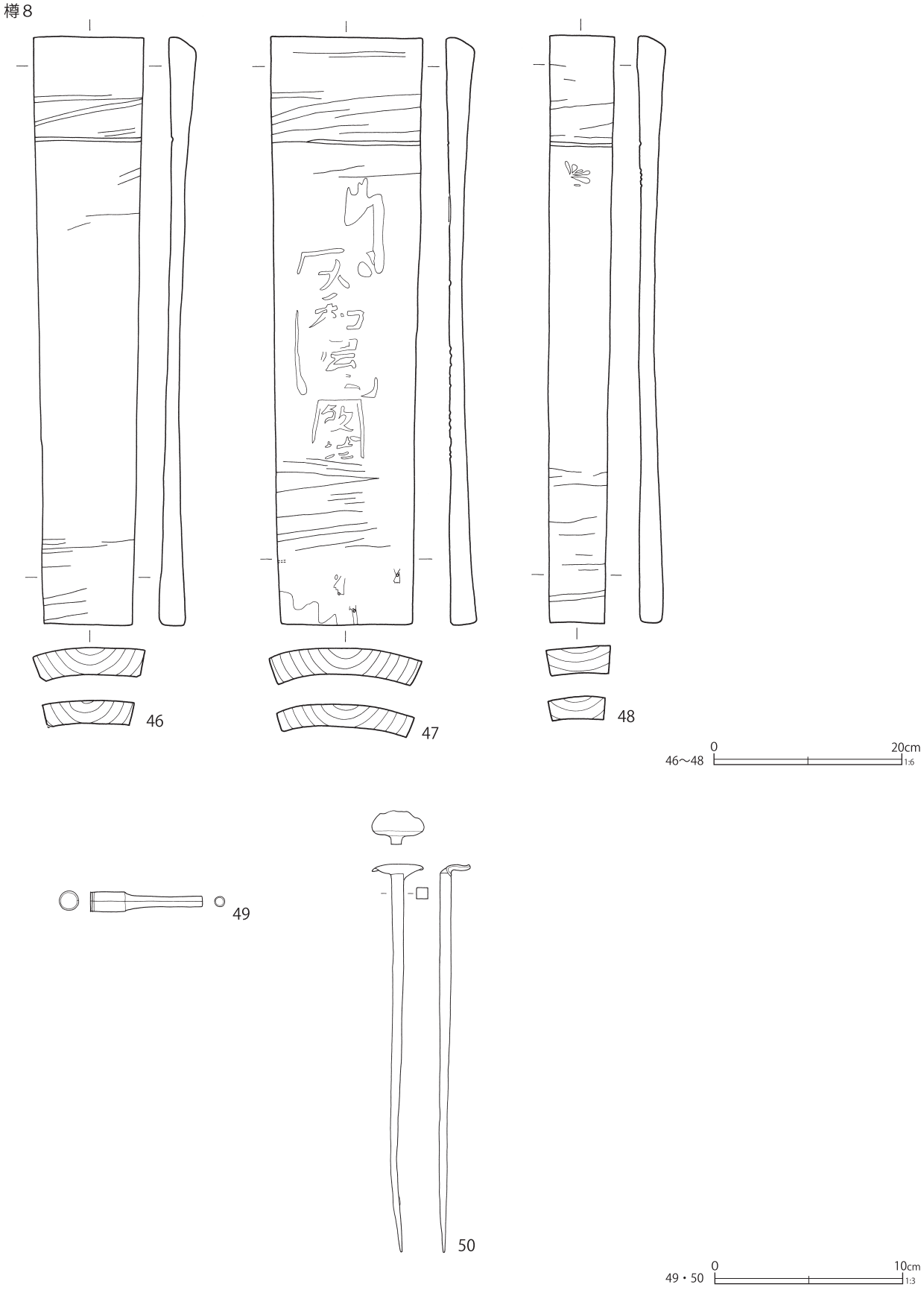
樽７



第 80 図　第８号建物跡出土遺物（13）



第 81 図　第 8 号建物跡出土遺物（14）



第 82 図　第 8 号建物跡出土遺物（15）

第 26 表　第８号建物跡出土遺物観察表（３）（第 70 ～ 82 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径		遺構	備考	図版
1	木製品	樽	62.0	7.7	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 墨書 裏面黒色塗料 付着物	
2	木製品	樽	62.2	17.3	3.0	－	－	－	板目	SB8	側板 表面焼印「嶋屋」「改誥」墨書 裏面黒色塗料 付着物	
3	木製品	樽	62.2	10.8	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 片面墨書 裏面黒色塗料 裏面付着物	
4	木製品	樽	62.2	15.8	3.0	－	－	－	板目	SB8	側板 片面墨書 表裏面黒色塗料 裏面付着物	
5	木製品	樽	61.8	5.8	2.4	－	－	－	板目	SB8	側板 表面朱書 タガ残 タガ痕 裏面黒色塗料	294-14
6	木製品	樽	62.0	6.4	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面朱書 タガ残 タガ痕 裏面黒色塗料 釘孔３	294-14
7	木製品	樽	62.0	12.2	3.1	－	－	－	板目	SB8	側板 表裏面黒色塗料 朱で墨書 溝 タガ跡 裏面底板の圧痕	294-14
8	木製品	樽	－	－	3.5	44.6	－	－	板目	SB8	底板　径４㎝の孔 表面加工痕 木釘孔６箇所うち５箇所木釘残 表裏面墨書か 黒色塗料	
9	木製品	樽	61.2	11.1	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 裏面黒色塗料 付着物	295-1
10	木製品	樽	61.2	18.2	1.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 焼印「万」裏面黒色塗料 付着物	295-2
11	木製品	樽	61.2	6.5	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 焼印「万」穴３裏面黒色塗料	
12	木製品	樽	61.3	16.8	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 裏面黒色塗料	
13	木製品	樽	61.4	18.8	2.9	－	－	－	板目	SB8	側板 片面墨書 表面加工痕 裏面黒色塗料	295-3
14	木製品	樽	61.5	19.6	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 焼印「油屋」「改誥」裏面黒色塗料	
15	木製品	樽	60.5	15.2	2.5	－	－	－	板目	SB8	側板 墨書 表裏面黒色塗料	
16	木製品	樽	60.6	7.6	2.4	－	－	－	板目	SB8	側板 墨書 表裏面黒色塗料	
17	木製品	樽	60.5	15.6	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 孔５	
18	木製品	樽	60.4	6.1	2.3	－	－	－	板目	SB8	側板	
19	木製品	樽	60.4	15.4	2.5	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 裏面黒色塗料	
20	木製品	樽	60.4	9.1	2.5	－	－	－	板目	SB8	側板 焼印［小松［屋ヵ］改］表面墨書 裏面黒色塗料	295-4
21	木製品	樽	60.4	17.0	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 焼印「改誥」表裏面黒色塗料	295-4
22	木製品	樽	60.7	16.6	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 裏面黒色塗料 表面黒色塗料 孔６ 木釘残３	
23	木製品	樽	60.4	11.0	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 片面墨書 表裏面黒色塗料	295-4
24	木製品	樽	60.5	10.2	2.3	－	－	－	板目	SB8	側板 焼印「㊀」４ 裏面黒色塗料	
25	木製品	樽	60.6	20.8	2.4	－	－	－	板目	SB8	側板 木釘 孔 焼印「㊀」表裏面黒色塗料 裏面付着物	
26	木製品	樽	60.6	13.6	2.4	－	－	－	板目	SB8	側板 表裏面黒色塗料 裏面付着物	
27	木製品	樽	45.0	46.8	3.2	－	－	－	板目	SB8	底板 黒色塗料 孔２ 木釘 鋸痕 チョウナ痕	
28	木製品	樽	62.0	13.6	3.0	－	－	－	板目	SB8	側板 墨書 裏面黒色塗料	295-5
29	木製品	樽	62.0	9.8	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 墨書 裏面黒色塗料	295-6
30	木製品	樽	62.0	13.0	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 焼印「※ 油屋」裏面黒色塗料	
31	木製品	樽	62.0	16.8	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 焼印「改誥」裏面黒色塗料	
32	木製品	樽	－	－	3.0	46.1	－	－	板目	SB8	底板 栓穴の横、方形（５×５㎜）の孔 １貫通 木釘残	
33	木製品	樽	62.0	11.0	3.0	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 表面黒色塗料	
34	木製品	樽	61.6	15.0	3.0	－	－	－	板目	SB8	側板 表面 加工痕 表面黒色塗料	
35	木製品	樽	61.6	21.4	2.7	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 黒色塗料 木釘残存 裏面に貫通 表面加工あり	
36	木製品	樽	61.5	21.0	3.0	－	－	－	板目	SB8	側板 墨書［介］裏面黒色塗料・付着物	
37	木製品	樽	61.1	10.0	2.9	－	－	－	板目	SB8	側板 表裏面・側面黒色塗料	
38	木製品	樽	61.2	11.9	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面墨書 裏面黒色塗料 付着物	
39	木製品	樽	61.3	14.3	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面焼印「油屋」「改誥」墨書 裏面黒色塗料 付着物	
40	木製品	樽	61.0	17.0	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 焼印「油屋」「改誥」墨書 黒色塗料	

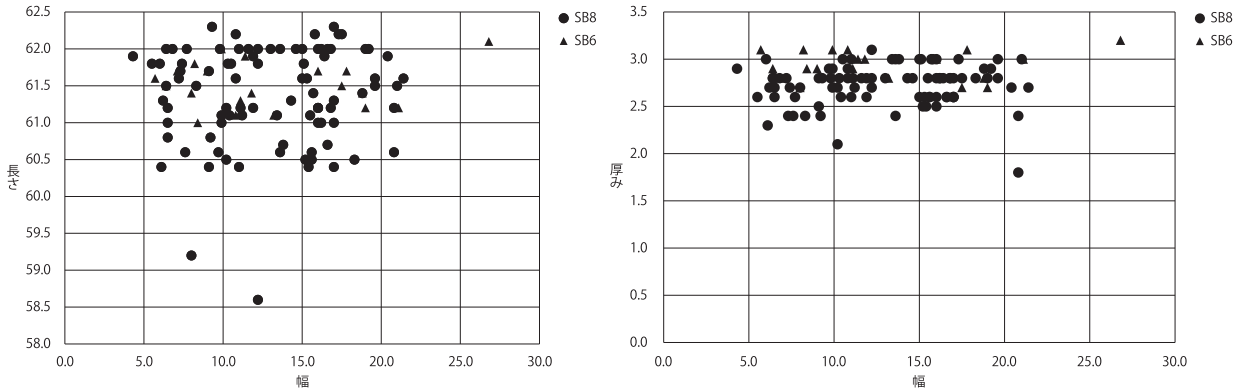
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径		遺構	備考	図版
41	木製品	樽	60.8	9.2	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 裏面・両側面墨書 底板圧痕	295-7
42	木製品	樽	61.2	16.0	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 木釘１ 表裏面墨書 裏面黒色塗料 朱付着	295-8
43	木製品	樽	61.2	10.2	2.7	－	－	－	板目	SB8	側板 節に木栓 裏面黒色塗料	
44	木製品	樽	62.0	14.6	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 表面一部に墨書か 表裏面黒色塗料	
45	木製品	樽	62.0	16.6	2.6	－	－	－	板目	SB8	側板 木釘孔３ 裏面黒色塗料	
46	木製品	樽	62.0	11.6	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 裏面黒色塗料 表裏墨書	295-9
47	木製品	樽	62.0	16.0	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 孔４ 裏面黒色塗料 焼印「大和屋」「改詰」	
48	木製品	樽	62.0	6.8	2.8	－	－	－	板目	SB8	側板 焼印 表面黒色塗料か 裏面黒色塗料 墨書	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
49	銅製品	煙管	長さ 6.0 小口径 1.0 口付径 0.5 重さ 5.7							SB8	吸口	273-1
50	鉄製品	釘	長さ 20.5 幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 26.3							SB8		

第 27 表　第８号建物跡基礎の樽部材の計測表

樽番号	現地取上げ№	部位	長さ	幅	厚み		孔径	挿図番号	備考
					端部	中央			
樽 1	No,1	側板	61.8	5.5	2.6	1.1		図化無し	
	No,2	側板	61.9	20.4	2.7	1.1		図化無し	
	No,3	側板	62.0	7.7	2.6	1.1		第 70 図 1	
	No,4	側板	62.2	17.3	3.0	1.0		第 70 図 2	
	No,5	側板	62.2	10.8	2.8	1.0		第 70 図 3	
	No,6	側板	62.2	15.8	3.0	1.2		第 70 図 4	
	No,7	側板	61.8	6.0	3.0	1.3		第 71 図 5	
	No,8	側板	62.0	6.4	2.8	1.2		第 71 図 6	
	No,9	側板	62.0	12.2	3.1	1.1		第 71 図 7	
	No,10	側板	62.0	15.0	2.6	1.1		図化無し	
	No,11	側板	62.3	17.0	2.8	1.2		図化無し	
	No,12	側板	62.3	9.3	2.8	1.1		図化無し	
	No,13	側板	62.0	16.2	2.8	1.2		図化無し	
	No,14	底板 3 枚組	径 44.6				4.0　2.4 × 1.5	第 71 図 8	
	No,15								
	No,16								
樽 2	No,1	側板	60.5	18.3	2.8	1.5		図化無し	
	No,2	側板	60.7	13.8	3.0	1.8		図化無し	
	No,3	側板	61.2	11.1	2.8	1.4		第 72 図 9	
	No,4	側板	61.2	20.8	1.8	1.3		第 72 図 10	
	No,5	側板	61.2	6.5	2.8	1.5		第 72 図 11	
	No,6	側板	61.3	17.0	2.6	1.0		第 72 図 12	
	No,7	側板	61.4	18.8	2.9	1.1		第 73 図 13	
	No,8	側板	61.5	8.3	2.4	1.3		図化無し	
	No,9	側板	61.5	19.6	3.0	1.3		第 73 図 14	
	No,10	側板	60.6	15.6	2.6	1.4		図化無し	
	No,11	側板	60.6	9.7	2.9	1.5		図化無し	
	No,12	底板 3 枚組	径 44.6				4.0　3.0 × 1.0	図化無し	
	No,13								
	No,14								
樽 3	No,1	側板	60.5	15.2	2.5	1.3		第 74 図 15	
	No,2	側板	60.6	7.6	2.4	1.2		第 74 図 16	
	No,3	側板	60.5	15.6	2.6	1.1		第 74 図 17	
	No,4	側板	60.4	6.1	2.3	1.2		第 74 図 18	
	No,5	側板	60.4	15.4	2.5	1.2		第 75 図 19	
	No,6	側板	60.4	9.1	2.5	1.2		第 75 図 20	
	No,7	側板	60.4	17.0	2.6	1.0		第 75 図 21	
	No,8	側板	60.4	11.0	2.6	1.2		第 76 図 23	

樽番号	取上げ№	部位	長さ	幅	厚み		孔径	実測番号	備考
					端部	中央			
樽 3	No, 9	側板	60.7	16.6	2.6	1.2		第 75 図 22	
	No, 10	側板	60.5	10.2	2.1	1.2		第 76 図 24	
	No, 11	側板	60.6	20.8	2.4	1.0		第 76 図 25	
	No, 12	側板	60.6	13.6	2.4	1.4		第 76 図 26	
	No, 13	底板 3 枚組	径 46.8				46.0　4.0 × 2.2	第 76 図 27	
	No, 14								
	No, 15								
樽 4	No, 1	側板	61.8	7.4	2.7	1.5		図化無し	
	No, 2	側板	62.0	13.6	3.0	1.0		第 77 図 28	
	No, 3	側板	62.0	9.8	2.8	1.2		第 77 図 29	
	No, 4	側板	61.7	9.1	2.8	1.4		図化無し	
	No, 5	底板 3 枚組	径 46.1				4.4　2.0 × 1.7	第 77 図 32	
	No, 6								
	No, 7								
樽 5	No, 1	側板	61.0	16.0	2.5	1.2		図化無し	
	No, 2	側板	61.1	15.5	2.8	1.3		図化無し	
	No, 3	側板	58.6	12.2	2.8	1.2		図化無し	
	No, 4	側板	59.2	8.0	2.7	1.3		図化無し	
	No, 5	側板	62.0	13.0	2.8	1.1		第 77 図 30	
	No, 6	側板	62.0	16.8	2.8	1.1		第 77 図 31	
	No, 7	側板	62.0	11.0	3.0	1.3		第 78 図 33	
	No, 8	側板	62.2	17.5	2.8	1.2		図化無し	
	No, 9	側板	61.8	10.3	2.8	1.4		図化無し	
	No, 10	側板	61.7	7.3	2.4	1.2		図化無し	
	No, 11	側板	61.6	15.0	3.0	0.9		第 78 図 34	
	No, 12	側板	61.6	21.4	2.7	1.0		第 78 図 35	
	No, 13	底板 3 枚組	径 46.0				3.7　3.6 × 2.0	図化無し	
	No, 14								
	No, 15								
樽 6	No, 1	側板	61.5	21.0	3.0	1.3		第 79 図 36	
	No, 2	側板	61.1	9.9	2.9	1.3		第 79 図 37	
	No, 3	側板	61.2	16.0	3.0	1.6		図化無し	
	No, 4	側板	61.0	9.9	2.7	1.5		図化無し	
	No, 5	側板	61.1	13.4	3.0	1.6		図化無し	
	No, 6	側板	61.2	11.9	2.8	1.5		第 79 図 38	
	No, 7	側板	61.3	14.3	2.8	1.4		第 79 図 39	
	No, 8	側板	61.6	10.8	2.9	1.4		図化無し	
	No, 9	側板	61.4	15.7	3.0	1.6		図化無し	
	No, 10	側板	61.8	10.5	3.0	1.4		図化無し	
	No, 11	側板	61.8	15.1	3.0	1.6		図化無し	
	No, 12	側板	61.8	12.2	2.7	1.7		図化無し	
	No, 13	底板 4 枚組	径 46.0				4.2	図化無し	
	No, 14								
	No, 15								
	No, 16								
樽 7	No, 1	側板	62.0	14.6	2.8	1.2		第 81 図 44	
	No, 2	側板	62.0	16.6	2.6	1.3		図化無し	
	No, 3	側板	61.9	4.3	2.9	1.4		第 81 図 45	
	No, 4	側板	61.0	6.5	2.6	1.2		図化無し	
	No, 5	側板	61.0	17.0	2.6	1.1		第 80 図 40	
	No, 6	側板	60.8	9.2	2.4	1.0		第 80 図 41	
	No, 7	側板	61.0	16.2	2.8	1.1		図化無し	
	No, 8	側板	60.8	6.5	2.7	1.3		図化無し	
	No, 9	側板	61.1	11.2	2.7	1.3		図化無し	
	No, 10	側板	61.2	16.8	2.8	1.2		図化無し	

樽番号	取上げNo.	部位	長さ	幅	厚み		孔径	実測番号	備考
					端部	中央			
樽７	No, 11	側板	61.3	6.2	2.7	1.2		図化無し	
	No, 12	側板	61.2	16.0	2.6	1.1		第 80 図 42	
	No, 13	側板	61.2	10.2	2.7	1.1		第 80 図 43	
	No, 14	底板 3 枚組	径 44.7				4.5　5.0 × 3.2	図化無し	
	No, 15								
	No, 16								
樽８	No, 1	側板	62.0	11.6	2.8	1.2		第 82 図 46	
	No, 2	側板	62.0	16.0	2.8	1.3		第 82 図 47	
	No, 3	側板	62.0	6.8	2.8	1.5		第 82 図 48	
	No, 4	側板	62.0	19.0	2.8	1.4		図化無し	
	No, 5	側板	61.9	11.9	2.6	1.3		図化無し	
	No, 6	側板	61.6	15.3	2.6	1.3		図化無し	
	No, 7	側板	61.1	10.4	2.6	1.4		図化無し	
	No, 8	側板	61.9	16.4	2.8	1.4		図化無し	
	No, 9	側板	61.5	6.4	2.8	1.6		図化無し	
	No, 10	側板	62.0	19.2	2.9	1.6		図化無し	
	No, 11	側板	61.6	7.2	2.8	1.6		図化無し	
	No, 12	側板	61.6	19.6	2.8	1.4		図化無し	
	No, 13	底板 2 枚組	径 45.0				4.1　1.5 × 1.1	図化無し	
	No, 14								



第 83 図　第８号建物跡基礎の樽側板の長さ・幅・厚み

い一重唐草文、内底面には二重圏線内に宝文を染付する。高台内には二重方形枠を伴う「筒江」銘を染付している。

10は肥前系磁器の香炉と思われる。体部を八角形に整えるもので、外面に型押し文・赤茶色味が強い鉄釉が施される。内面は露胎である。高台は幅広く畳付は露胎である。11は瀬戸美濃系磁器の燗徳利の破片である。

12は肥前系陶器の鉢で、外面に透明釉、内面に銅緑釉と茶色味を帯びた鉄釉を掛け分けする。内面は蛇の目状釉剥ぎされる。肥前内野山上窯系のものである。13は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。受部の切り込みはU字形である。14は瀬戸美濃系陶器の香炉であろう。内外面にこげ茶色の鉄釉、体部は三段に屈曲し、外面にボタン状の貼付文がある。15は陶器の片口鉢の破片で、地方窯系と思われる。内外面に薄く灰釉を施し口縁部に鉄釉を散らす。16・17は堺明石系陶器である。16はやや小型で、内面の擂目は一単位10条、17は一単位８条の擂目が施される。18は瀬戸美濃系陶器の徳利で、上部を打ち欠いており、対向する二箇所を浅いU字形に二次整形する。19は柿釉を施した陶器の蓋である。

ところで、基礎の下位から出土した遺物にはか

なり古い時期の陶磁器が多い。細片が多くほとんど図示し得なかったが、肥前系磁器の一重網目文碗・瀬戸美濃系陶器の志野皿・丹波系陶器擂鉢・土師質土器の常陸系焙烙などがみられ、17世紀後半～18世紀初期の遺物が認められる。これらは基礎の掘り込みが深いため、下層から攪拌されて混在したものであろう。

一括で取り上げられた遺物にも、肥前系陶器の呉器手碗や三島手鉢・瀬戸美濃系陶器の尾呂徳利や天目茶碗など古手の遺物が多い印象であるが、肥前系磁器の雪輪草花文碗・くらわんか手碗・京都信楽系陶器の色絵丸碗・瀬戸美濃系陶器せんじ碗・掛け分け碗・腰錆碗など18世紀中頃までの陶磁器に加え、肥前系磁器小丸碗や筒形碗、広東碗・瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿など18世紀後半のものも認められる。まとまりのある遺物群としては、肥前系磁器の端反碗あたりが最新段階の遺物であろう。瀬戸美濃系磁器の燗徳利や地方窯系陶器とみられる片口鉢の破片が混在であるならば、建物の構築時期は栗橋６期頃とみられる。布掘り状基礎を伴う例としては、第６号建物跡とともに、栗橋宿跡の中でも古い建物と位置づけられる。

なお、本跡を掘り込んでいる第110～112号土壙は、いずれも酸化コバルト染付の磁器を最新とする組成で、明治前半期頃の遺構と考えられる。従って第８号建物跡は、遅くとも明治前期には廃絶している。もう一基、重複する土壙の第105号土壙は、19世紀前葉（栗橋７期）頃の火災処理遺構である。この土壙も建物跡より新しいものと捉えられているが、重複範囲が狭く検討の余地があろう。あるいは、布掘り基礎の外にみられる捨杭を建て替えの痕跡とみて、第８号建物跡の範囲に二時期にわたる建物基礎が重複している可能性も考慮される。

第69図には瓦を示した。第８号建物跡からは、８点の軒桟瓦（軒丸部のみの破片３点、中心飾りの残る軒平部の破片４点）、３点の軒丸瓦が出土している。図示したのは軒桟瓦で、中心飾りが残っているものは全て示した。４と同じ構成の瓦当文を有すものがもう１点出土している。

第70図～82図までは、出土した木製品で、主に樽地業に用いられた樽の側板と底板である。焼印があるものを中心に示したが、図示しなかったものについては第27表に大きさ等をまとめて示した。

第70・71図１～８は樽１の部材で、側面に「嶋屋改誥」の焼印がある。底板は３枚の板から構成されており、各々は埋め込まれた木釘で繋がれる。

第72・73図９～14には樽２の側板を示す。10・11に「万」ないし「万」の店印と思われる焼印があり、14には各々独立した方形枠内に「油屋」「改誥」の焼印がある。

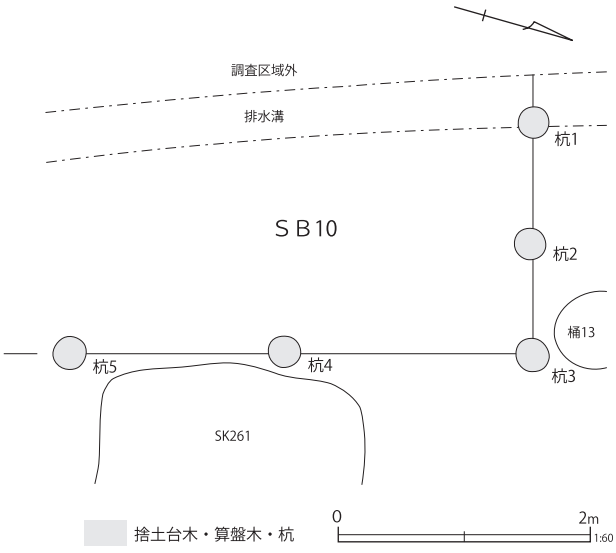
第74～76図15～27までは樽３の構築材で、全ての部材を示したものである。15の側板に「卄」の焼印、20の側板に方形枠を伴う「小松［屋ヵ］改」の焼印、21に方形枠に「改誥」の焼印、24・25には上部に「㊀」の焼印がみられる。底板は３枚の板から構成される。製作当初に穿たれた円形の孔とは別に、やや粗雑な穿孔がみられ、そこに木の栓が遺存している。栓の有無はともかく、この粗雑な穿孔は、本跡から出土した樽底のほぼ全てに認められ、唯一、樽６のみ認められなかった。これらは第27表に示したように楕円形をしているものが多いが、製品として組みあがった樽底に二次的に開けた穴であったため、このような歪な形状になったものであろう。用途についてははっきりしない。

第77図28・29・32は樽４で、側板２点と底板を示した。底板には、樽３同様に、通常の円形の孔とは別の二次的な穿孔があり、栓が遺存している。

第77図30・31と第78図は樽５の部材で、30に

SK689
SK204
杭7
SK326
杭8
杭9
SK331
杭10
E7-H5
P1
SK338
SB8
SK223
SK267
SB9
杭11
杭1
SK222
杭2
杭12
SB6
杭6
杭5
杭4
杭3
杭13
捨土台木・算盤木・杭
SK338
C 10.30m
SK204
SB8
D 10.30m
SB6
E 10.30m
杭12
0
2m
1:60

第 84 図　第 9 号建物跡



第 85 図　第 10 号建物跡

は方形枠に「〆油屋」の焼印、31には方形枠に「改誥」の焼印が認められる。

第79図36～39は樽６の部材で、39には「油屋」、方形枠に「改誥」の焼印が認められる。

第80・81図40～45は樽７の部材で、各々独立した方形枠を伴い「油屋」「改誥」の焼印がある。

第82図46～48は樽８の部材で、各々独立した方形枠に「大和屋」「改誥」の焼印がある。

このように、本跡に転用された樽には、「嶋屋」１例、「油屋」４例、「大和屋」１例の焼印が認められ、一部判読できないが、「小松屋」と思われる焼印もある。このうち「嶋屋」「油屋」は『絵図』に名前が見られるが、焼印の屋号と同じ場所を示すものかは確証がない。実際、「油屋」は、栗橋宿内に同じ屋号を名乗る店が複数存在している。もっとも接近するのは、第７地点の「油屋幸七」である。

なお、「大和屋」焼印は第６号建物跡の西辺の樽にみられる焼印である。既述のように第６号建物跡の基礎は改修が加えられた形跡があり、西辺の樽は新しい段階のものと考えられる。第６・８号建物跡は、同じ敷地内に連なる建物跡であり、樽地業建物とする点や、往来道側に土留めらしい杭列を打ち込む点など、工法にも類似点がある。第８号建物跡の構築と第６号建物跡の改修が同時期に行われていた可能性もあろう。

第82図49・50は金属製品である。49は煙管の吸口、50は鉄釘である。

第９号建物跡（第84図）

Ｅ７-Ｈ５・６グリッド、第６号建物跡の南側に位置する。第６区画（区画Ｖ）にあたるが、北側の一部が第７区画（区画Ｕ）にかかっている。第６区画は、『絵図』の「青物屋　百姓　庄次郎」に該当する。

調査当初は建物平面形が把握できず、「Ｌ」字状の木杭列として認識されていた。整理の過程で西方の杭を建物の一部と推定し、長軸6.64ｍ、短軸3.62ｍの建物跡として示す。

建物は捨杭（松杭）が検出されたのみであり、土台建物と考えられる。重複遺構との新旧関係は不明で、時期も明らかではない。

第10号建物跡（第85図）

Ｅ７-Ｆ４・Ｇ４グリッド、第８区画（区画Ｔ）の西側に検出された杭列で、土台建物跡の捨杭（松杭）と思われる。第８区画は『絵図』の「湯屋　百姓　甚五右衛門」に該当する。西側が調査区外に延びる。北辺に杭が三箇所、約90㎝間隔、東辺に杭が二箇所、約180㎝間隔で並んで検出された。

建物は捨杭（松杭）が検出されたのみであり、土台建物と考えられる。重複遺構との新旧関係は不明で、時期も明らかではない。

２ 埋設桶

埋設桶は26基が検出された。位置、規模等の基本的な情報は第28表にまとめた。

以下に、個別に埋設桶の様相を示したい。

第１号埋設桶（第86図）

Ｆ７−Ａ６グリッド、第１区画（区画AA）に位置する。径71cmの掘方内に径53cmの桶を正位に据えており、底板も遺存する。全ての側板は木裏を内側に向け、幅は不揃いで厚みもない。底板上面には手斧のような工具痕が残る。下面側は平滑で工具痕等は確認できなかった。

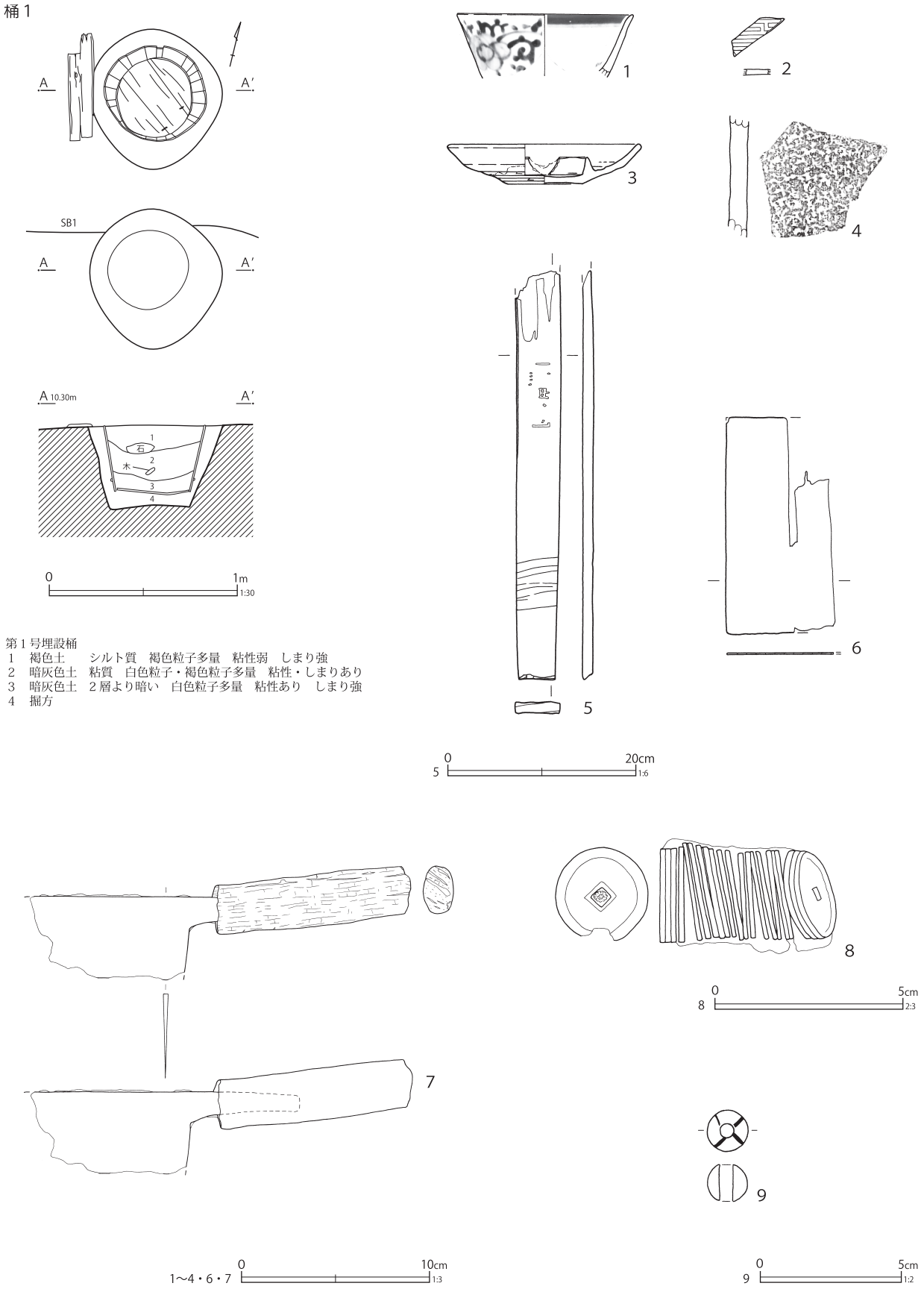
検出面で、西側に板材が据え置かれたような状態で見出されているが、埋設桶と関連するものか否かは確証がない。また、第１号建物跡と重複するものの、土層などでの重複関係は把握されていない。

第86図１～４は出土した陶磁器類である。１は瀬戸美濃系磁器の端反碗である。外面に唐草・花文、内面口縁部に濃みで圏線を染付する。２は瀬戸美濃系磁器の壽文皿の底部細片である。３は瀬戸美濃系陶器の灯明皿である。柿釉はやや暗色味を帯びるが光沢は強い。受部は小さく径4.6cm、上端部は釉剥ぎされる。切り込みはU字状である。外面下位の釉は拭き取られるが、重ね焼き痕はみられない。４は瓦質土器の火鉢で筒形を呈するものである。外面に施文がありミガキも施されている。

瀬戸美濃系磁器の型押壽文皿（２）が含まれ、栗橋８期までの様相を示す。非掲載遺物でも、掘方内から京都信楽系陶器の透明釉灯明皿が、桶内からは白土染付の土瓶片が出土している。桶内から１点だけ瀬戸美濃系磁器の皿で、型紙摺絵染付を施すものが出土している。建物跡からの混入の可能性もあるが、最終廃絶が９期に降る可能性も残る。いずれにしても、陶磁器の様相からみる限り、本跡は第１号建物跡が構築される前に機能していた遺構と考えるのが妥当であろう。

第 28 表　第一面埋設桶一覧表　単位：m

番号	区画	グリッド	外径	高さ	内径	深さ	掘方径	深さ	備考
1	1	F7-A6	0.53	0.35	0.40	0.35	0.71	0.44	SB1 重複
3	2	F7-A6	0.45	0.36	0.47	0.36	0.85	0.36	SD15a 重複
4	2	F7-A6	0.53	0.26	0.43	0.26	0.67	0.30	SK21 より新　SD16 重複
5	2	F7-A5	0.85	0.54	0.75	0.50	1.36	0.63	SD1 より古　SD16 重複
6	2	F7-B5	0.46	0.20	0.44	−	0.75	0.21	SD15a 重複
7	6	E7-H5/6	0.50	0.15	0.36	−	0.64	0.19	
8	4	E7-I6	0.63	0.27	0.67	0.20	1.03	0.23	底板に修理痕あり　SK145a 重複
9	8	E7-G4	0.45	0.08	0.42	0.10	0.52	0.13	SK261 より新
10	9	E7-F4	0.43	−	−	−	0.56	(0.28)	SD23 重複
11	6	E7-I4	0.41	0.14	0.33	0.15	0.53	0.23	SD19 重複
12	6	E7-I5	0.47	0.13	0.38	−	0.59	0.18	SD19 重複
13	8	E7-F4	0.50	0.41	0.42	0.38	0.72	0.43	
14	7	E7-H4	0.45	0.27	0.38	0.27	0.60	0.31	(新) E7-H4 P1 ＞焼土＞桶 14（古）
15	7	E7-H4	−	0.10	0.40	0.15	0.57	0.28	E7-H4 P2 より古
16	9	E7-E5	0.50	−	−	−	0.77	0.06	SK345/346 より新
17	3	F7-A5	0.52	0.38	0.40	0.35	0.56	0.45	桶 18 と隣接
18	3	F7-A5	−	0.30	−	0.30	0.60	0.35	桶 17 と隣接
19	3	E7-J4	0.50	0.40	0.40	0.34	0.62	0.40	
20	6	E7-H6	−	−	−	−	0.57	−	SD19 重複　底板径 0.36m 底板遺存
21	6	E7-I4	−	−	−	−	0.55	0.31	SD19 重複　タガ径 0.45m
22	6	E7-I5	−	−	0.40	0.30	0.60	0.40	SD19 重複
23	6	E7-I5	−	−	−	−	0.70	0.25	SD19・SK175 重複
45	2	F7-A7	−	−	−	−	0.73	0.20	底板遺存
46	3	E7-J6	−	−	−	−	0.90	0.30	SB4 重複
47	6	E7-H6,I6	−	−	−	−	1.16	0.15	SD19 重複
48	4	E7-J4	−	−	0.40	−	0.55	0.43	SK149 より古　SK156 より新



第1号埋設桶
1　褐色土　　シルト質　褐色粒子多量　粘性弱　しまり強
2　暗灰色土　粘質　白色粒子・褐色粒子多量　粘性・しまりあり
3　暗灰色土　2層より暗い　白色粒子多量　粘性あり　しまり強
4　掘方

第86図　第1号埋設桶・出土遺物

第 29 表　第１号埋設桶出土遺物観察表（第 86 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(9.0)	[3.3]	-	-	5	良好	白	桶１	掘方　瀬戸美濃系　内外面施釉・染付（端反碗）	
2	磁器	皿	-	[0.3]	-	-	5	良好	白	桶１	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面型押壽文（壽文皿）	
3	陶器	灯明皿	9.9	2.1	4.0	I	80	普通	灰白	桶１	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　外面煤付着	75-1
4	瓦質土器	火鉢	-	[6.4]	-	EI	5	良好	灰白	桶１	掘方　外面施文・ミガキ　燻す	
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
5	木製品	桶	43.8	4.9	1.2	－	－	－	板目	桶１	側板 焼印３文字	
6	木製品	経木	11.4	[5.8]	0.05	－	－	－	柾目	桶１	墨書両面 第 241 表 2	295-10
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
7	鉄製品	包丁	長さ [20.2] 刃長 [8.2] 刃幅 4.4 背幅 0.2 重さ 49.9							桶１	切先欠 木柄付き	275-1
8	銅製品	銭貨	径 25.0(1 枚) 厚さ 47.0 重さ 68.6							桶１	寛永通寶含む 21 枚 内部紐残存	279-6
9	硝子製品	簪の玉	径 1.4 高さ 1.3 孔 0.5 重さ 4.2							桶１	被熱（白化）	280-2

第86図７・８は金属製品で、７は包丁で木製の柄が残る。８は錆着した状態の銭貨である。21枚すべて銅銭で、銭名は判別できないが、寛永通寶が含まれる。内部に紐が残っている。

第86図９は硝子製品の玉類で、簪の飾りであろう。被熱して白化している。

第３号埋設桶（第87図）

Ｆ７−Ａ６グリッド、第２区画（区画Ｚ）に位置し、地境溝である15ａ号溝跡と一部重複する。

径85cmの掘方内に、径45cmの桶を据えているが遺存状態は良く無い。下位に底板らしい部材が一部依遺存するが元位置を保っていないようである。

第87図１～５は出土した陶磁器類である。

１は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗で、木型打込による施文後に染付を施す。２は瀬戸美濃系磁器の坏で、端反形のものである。３は瀬戸美濃系磁器の燗徳利で、酸化コバルト染付で竹林を描く。４は備前系陶器の広口壺で、体部に指頭による窪みが二箇所みられる。内面に刷毛塗り状に塗土される。このタイプは「胴丸形」と分類されるもので、幕末頃から確認される（鈴木2014）。

５は瓦質土器の手焙りで、硬質・瓦質のものである。外面にトビガンナ状施文がみられ、区画線内にミガキを施す。胎土には角閃石が含まれる。掘方からの出土である。

掘方内の遺物に、酸化コバルト染付の磁器（平碗・皿・坏・急須）がみられ、本跡の構築は栗橋９期の前半とみて良いだろう。

第87図６は木製品の杓子である。７は器種不明の銅製品である。作りは煙管に類似している。

第４号埋設桶（第87図）

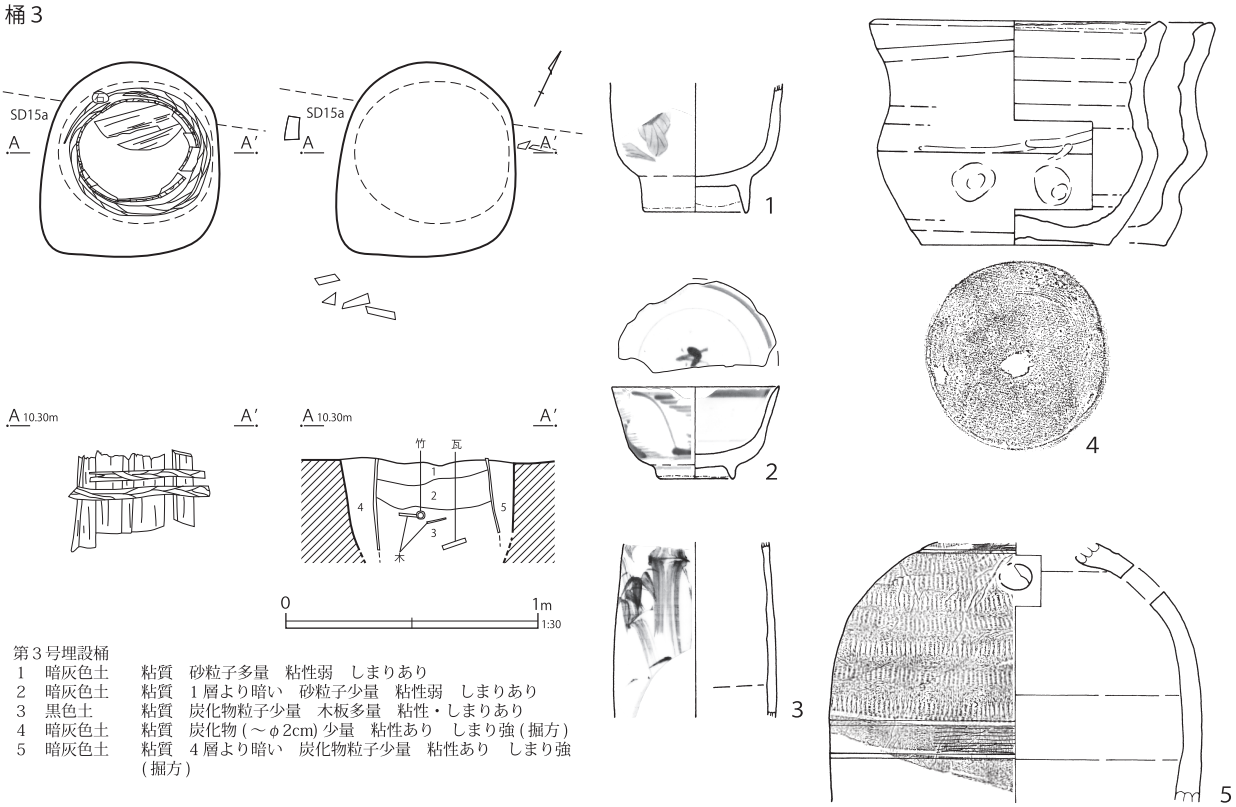
Ｆ７−Ａ６グリッド、第２区画（区画Ｚ）に位置する。径67cmの掘方内に、径53cmの桶を据えている。地境の第16号溝跡と一部重複している。

出土遺物は無いが、第21号土壙を壊しており、より新しい。第21号土壙は酸化コバルト染付の磁器製品を多く出土した土壙であり、栗橋９期の古い段階に帰属する。従って本跡はそれ以降に構築されたものである。

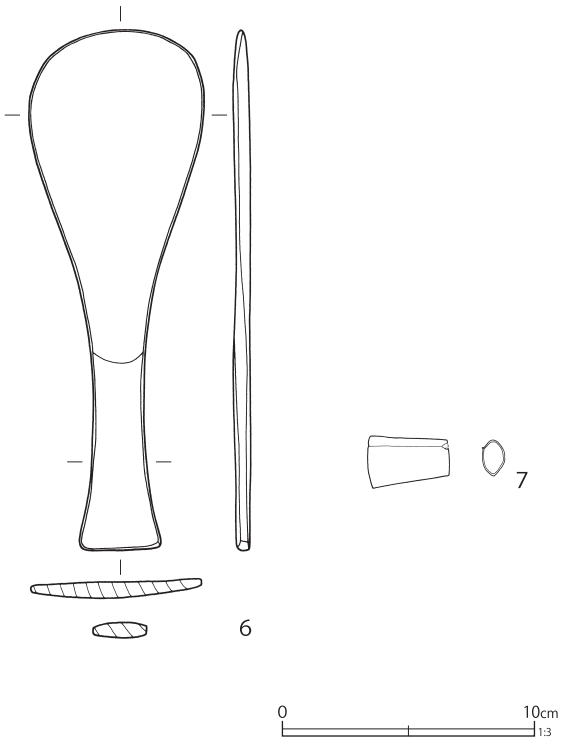
第５号埋設桶（第88図）

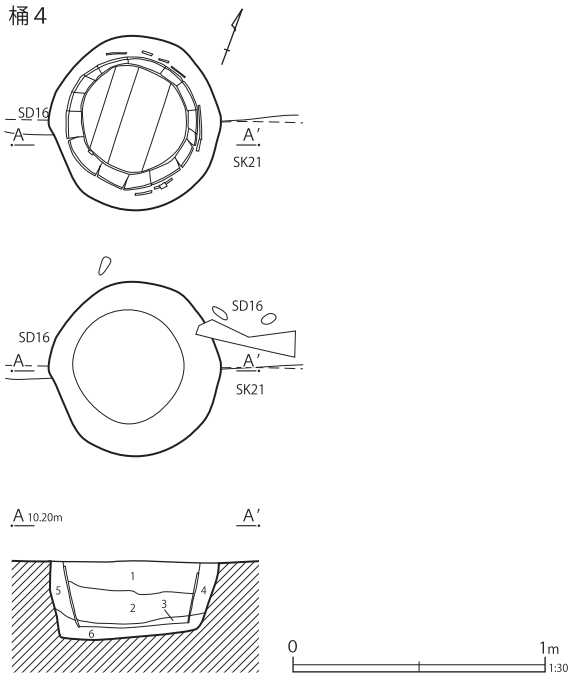
Ｆ７−Ａ５グリッド、第２区画（区画Ｚ）に位置する。径136cmの掘方内に、径85cmの桶を据えている。大型の埋設桶である。地境の第16号溝跡と一部重複している。また、掘方の一部を第１号溝跡に掘り込まれている。

第88図１～８は出土した陶磁器類である。１は掘方内、２・３は桶内部から出土したもの、他



第３号埋設桶
1　暗灰色土　粘質　砂粒子多量　粘性弱　しまりあり
2　暗灰色土　粘質　１層より暗い　砂粒子少量　粘性弱　しまりあり
3　黒色土　粘質　炭化物粒子少量　木板多量　粘性・しまりあり
4　暗灰色土　粘質　炭化物 (～φ2cm) 少量　粘性あり　しまり強 (掘方)
5　暗灰色土　粘質　４層より暗い　炭化物粒子少量　粘性あり　しまり強 (掘方)

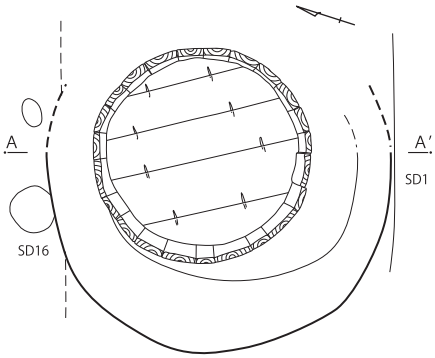


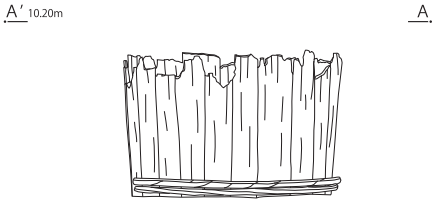


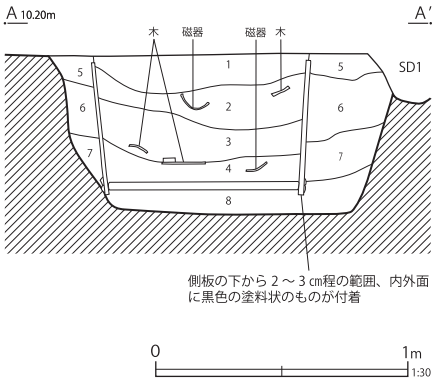
第４号埋設桶
1　灰褐色土　粘質　褐色粒子少量　粘性弱　しまり強
2　暗灰褐色土　粘質　褐色粒子多量　粘性あり　しまり強
3　褐色土　砂層　褐色粒子・白色粒子多量　粘性なし　しまりあり
4　暗褐色土　粘質　炭化物粒子少量　粘性・しまりあり (掘方)
5　暗褐色土　粘質　４層より暗い　炭化物粒子多量　粘性・しまりあり (掘方)
6　暗灰褐色土　粘質　炭化物粒子多量　粘性あり　しまり強 (掘方)

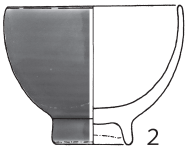
第 87 図　第３・４号埋設桶・出土遺物

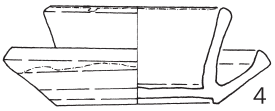
桶５

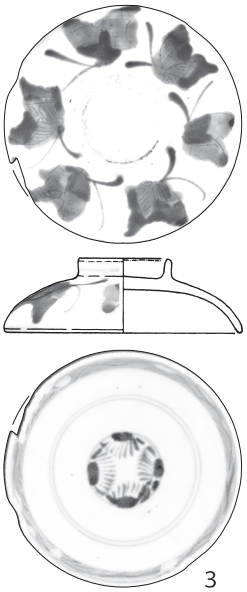


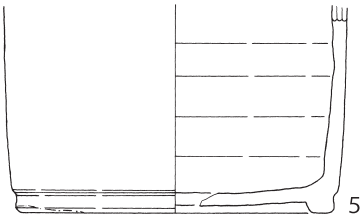


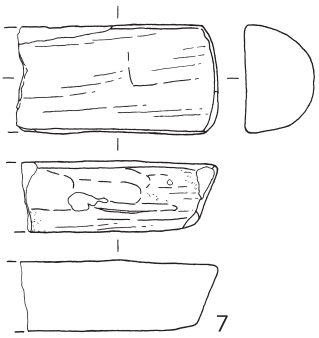


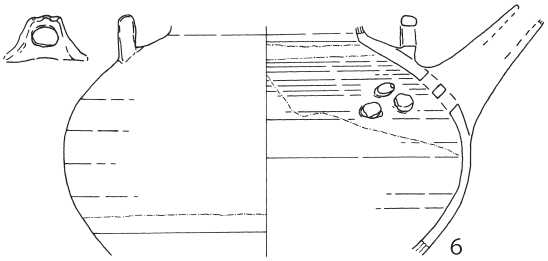


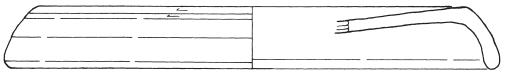






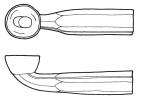


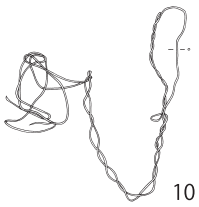


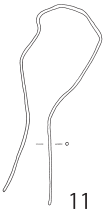


第５号埋設桶

１	埋戻し土	
２	灰黄褐色土	砂質　細砂微量　オリーブ灰色土ブロック少量　埋戻し
３	にぶい黄褐色土	粘質　細砂微量　炭化物粒子（φ１～２㎜、３%）　埋戻し
４	暗褐色土	シルト質ベースに細砂少量
５	暗褐色土	砂質　炭化物粒子（φ１～２㎜、１%）（掘方）
６	灰オリーブ色土	砂質　炭化物粒子（φ１～２㎜、１%）　７層土小ブロック少量（掘方）
７	暗褐色土	炭化物粒子（φ１～２㎜、３%）　灰オリーブ色土小ブロック少量（掘方）
８	灰オリーブ色土	砂質　暗褐色土小ブロック少量　水平調整のために土を敷いている（掘方）







8　0　10cm　1:4　　1～7・9～13　0　10cm　1:3　　14　0　5cm　2:3

第 88 図　第５号埋設桶・出土遺物

第 30 表　第３号埋設桶出土遺物観察表（第 87 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	-	[5.1]	(3.9)	-	40	良好	白	桶３	掘方　瀬戸美濃系　内外面施釉　外面木型打込施文・染付　（湯呑形碗）	
2	磁器	坏	(6.6)	3.6	(2.9)	-	40	良好	白	桶３	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付	
3	磁器	燗徳利	-	[6.8]	-	-	10	良好	白	桶３	掘方　瀬戸美濃系　内外面施釉　酸化コバルト染付	
4	陶器	広口壺	11.0	8.9	7.4	EI	100	普通	灰白	桶３	掘方　備前系　内面塗土　口唇部・底部に重ね焼き痕　体部窪み二箇所	75-2
5	瓦質土器	手焙り	-	[10.2]	-	CE	15	良好	灰	桶３	外面トビガンナ状施文・ミガキ　燻す	
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
6	木製品	杓子	20.5	6.9	0.6	－	－	－	板目	桶３	裏面黒色	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
7	銅製品	不明	長さ 2.1 幅 3.2 厚さ 0.08 重さ 3.4							桶３	煙管の一部か	

第 31 表　第５号埋設桶出土遺物観察表（第 88 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	坏	(6.0)	6.0	(3.6)	-	40	普通	白	桶５	掘方　瀬戸美濃系　内外面施釉　型紙摺絵染付	
2	磁器	坏	6.8	5.5	3.0	-	80	普通	白	桶５	桶内部　瀬戸美濃系　内外面施釉（外面瑠璃釉単彩）　口紅	75-3
3	磁器	蓋	3.4	2.9	9.2	-	95	良好	白	桶５	桶内部　瀬戸美濃系　内外面施釉・木型打込施文、染付	75-4
4	陶器	灯火具	6.9	3.9	6.3	-	100	普通	灰白	桶５	瀬戸美濃系　内外面灰釉	75-5
5	陶器	火入れか	-	[8.2]	(12.0)	IK	15	普通	黄灰	桶５	外面灰釉　底部二次穿孔　（植木鉢転用）	
6	陶器	土瓶	-	[9.9]	-	K	40	良好	灰白	桶５	大堀相馬系か　外面糠白釉	75-6
7	瓦質土器	十能	-	[2.9]	-	CIK	10	普通	灰白	桶５	把手部分	
8	瓦質土器	蓋	(22.6)	3.3	(25.4)	CFHI	25	普通	灰白	桶５	上面砂目　燻す　内面少量煤付着	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
9	銅製品	煙管	長さ 5.1 火皿径 1.4 × 1.35 小口径 1.0 × 0.9 重さ 6.6							桶５	堀方 雁首 六角	273-1
10	銅製品	針金	縦 7.7 横 7.3 厚さ 0.05 重さ 1.2							桶５	桶内	
11	銅製品	針金	縦 7.9 横 4.0 厚さ 0.1 重さ 1.2							桶５	桶内	
12	銅製品	針金	縦 6.0 横 1.9 厚さ 0.07 重さ 0.3							桶５	桶内	
13	銅製品	針金	縦 2.7 横 1.0 厚さ 0.07 重さ 0.1							桶５	桶内	
14	銅製品	銭貨	径 23.5 厚さ 1.1 重さ 2.5							桶５	寛永通寶（新）	

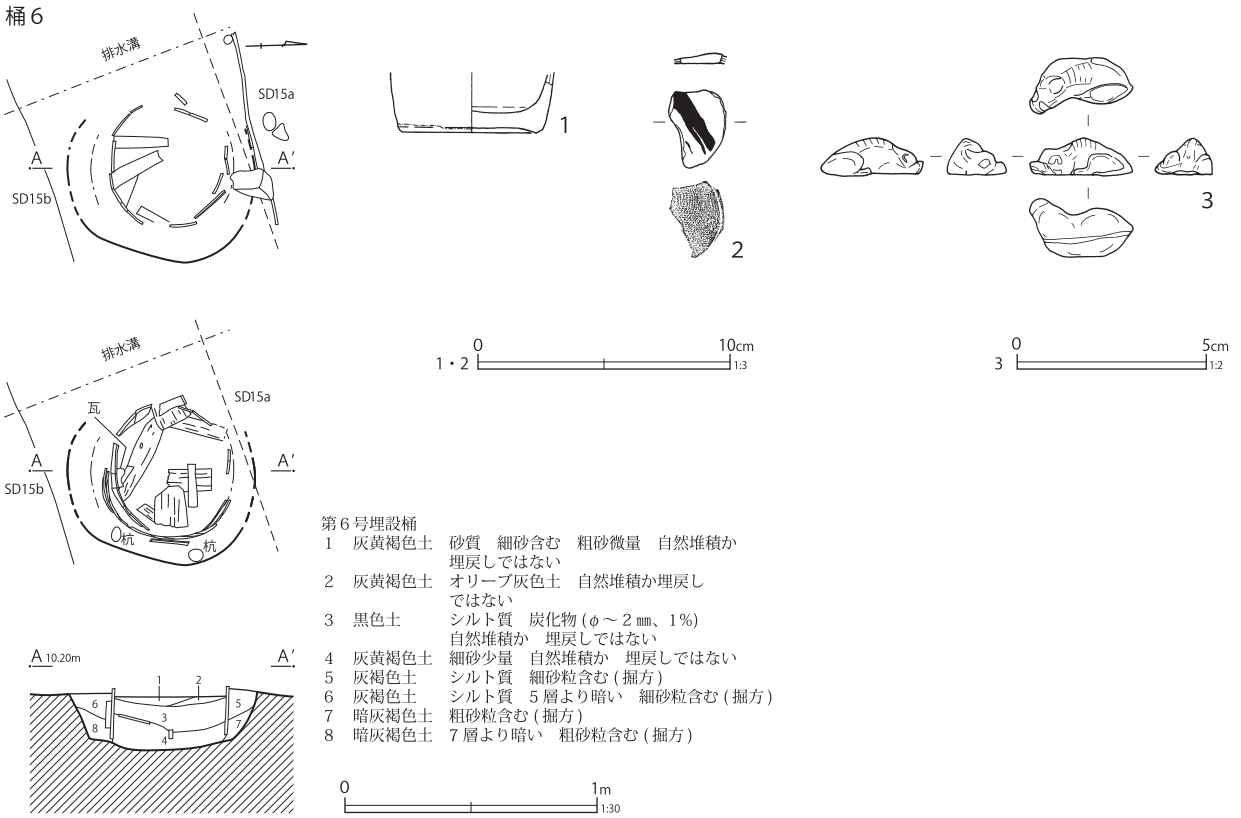
は一括で取上げられたものである。

１は瀬戸美濃系磁器の坏で、小型の丸腰筒形のものである。型紙摺絵染付が施される。２は瀬戸美濃系磁器の坏で、外面は瑠璃釉単彩とするものである。３は瀬戸美濃系磁器の丸碗蓋で、外面に木型打込で蝶を、内面口縁部にも木型打込で鋸歯状文を施文後に染付を施す。内面中心の染付は圏線内に菊文らしい花文を染付するが、こちらは木型打込の施文はしていない。

４は瀬戸美濃系陶器の灯火具で、高い受部を有す灯明皿である。５は産地不詳の陶器で、地方窯産の可能性が高い。灰釉は光沢が強い。胎土は緻密・硬質である。火入れ・香炉の類と推定するが、別器種の可能性もある。底部に二次穿孔があり、植木鉢に転用されている。

６は陶器土瓶で、外面に不透明の糠白釉が施される。大堀相馬系陶器であろうか。内面は上位に細かい筋状の回転ナデ痕がみられる。下位は透明釉が流れこんでおり、ナデの痕跡は上位ほど細かくはない。７は瓦質土器の十能で、把手の部分の破片である。上面は弱いヘラナデによって丁寧に調整、側面はナデによる調整である。胎土に角閃石を多く含む。８は瓦質土器の火消壺の蓋である。上面は細かい砂目である。

これらの出土遺物のうち、１の磁器坏の時期がやや降るが、掘方の出土であり、重複遺構からの



第 89 図　第６号埋設桶・出土遺物

第 32 表　第６号埋設桶出土遺物観察表（第 89 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	燗徳利	-	[2.4]	5.2	-	15	良好	白	桶６	掘方　瀬戸美濃系　内外面施釉（外面酸化クロム青磁釉）	
2	かわらけ	小皿	-	[0.4]	-	AH	5	普通	灰白	桶６	江戸在地系　底部糸切痕・墨書　胎土粉質	
番号	種別	器種	幅／長	高さ	厚さ	重さ	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
3	土製品	人形	1.5 /2.7	－	1.0	2.4	A K	良好	明赤褐	桶６	江戸在地系　牛　左右合二枚型成形　中実　雲母付着	242-3

混在も疑われる。桶内から出土した物も含めて、全体的には栗橋８期頃の遺物が多く、廃絶は栗橋９期はじめ頃と考えられる。

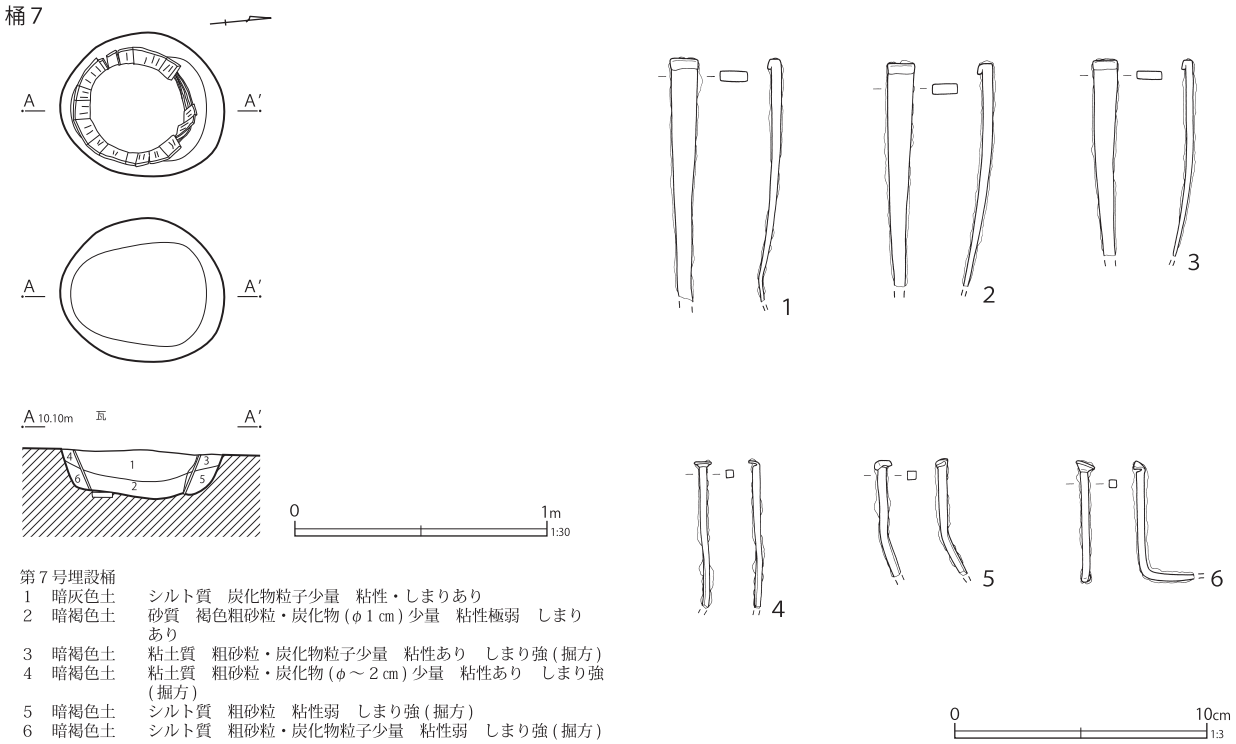
第88図９～14は金属製品である。９は煙管、10～13は銅線（針金）である。14は寛永通寶の新寛永である。このほか、土製品の人形が出土しているが細片で図化に堪えなかった。

第６号埋設桶（第89図）

Ｆ７-Ｂ５グリッド、第２区画（区画Ｚ）に位置する。径75㎝の掘方内に、径46㎝の桶を据えている。タガは外れており、遺存状態はあまり良好とは言えない。地境の第15ａ号溝跡と一部重複している。桶内の覆土は４層に分かれ、調査時の所見ではいずれも埋め戻しではなく、自然堆積の可能性があると観察された。比較的長期にわたって開口していたものであろうか。

第89図１・２は出土した陶磁器類である。１は掘方からの出土である。瀬戸美濃系磁器の燗徳利で、外面は酸化クロム青磁釉が施される。２はかわらけの底部で墨書がある。

遺物の大部分は掘方の出土であった。瀬戸美濃系磁器に燗徳利の比較的大きな破片や、大型の長筒丸腰形の坏のものが含まれる。これらの遺物が重複遺構からの混在でなければ、本跡は栗橋９期



第７号埋設桶
1　暗灰色土　シルト質　炭化物粒子少量　粘性・しまりあり
2　暗褐色土　砂質　褐色粗砂粒・炭化物（φ１㎝）少量　粘性極弱　しまりあり
3　暗褐色土　粘土質　粗砂粒・炭化物粒子少量　粘性あり　しまり強（掘方）
4　暗褐色土　粘土質　粗砂粒・炭化物（φ～２㎝）少量　粘性あり　しまり強（掘方）
5　暗褐色土　シルト質　粗砂粒　粘性弱　しまり強（掘方）
6　暗褐色土　シルト質　粗砂粒・炭化物粒子少量　粘性弱　しまり強（掘方）

第 90 図　第７号埋設桶・出土遺物

第 33 表　第７埋設桶出土遺物観察表（第 90 図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	鉄製品	釘	長さ［9.6］幅 1.1 厚さ 0.4 重さ 16.2	桶７		
2	鉄製品	釘	長さ［8.7］幅 1.0 厚さ 0.4 重さ 14.2	桶７		
3	鉄製品	釘	長さ［7.7］幅 0.9 厚さ 0.3 重さ 10.4	桶７		
4	鉄製品	釘	長さ［5.8］幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 2.8	桶７		
5	鉄製品	釘	長さ［4.6］幅 0.35 厚さ 0.35 重さ 2.5	桶７		
6	鉄製品	釘	長さ［4.7］幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 4.1	桶７		

の遺構であろう。

第89図３は土製品の人形で、牛を象ったものである。

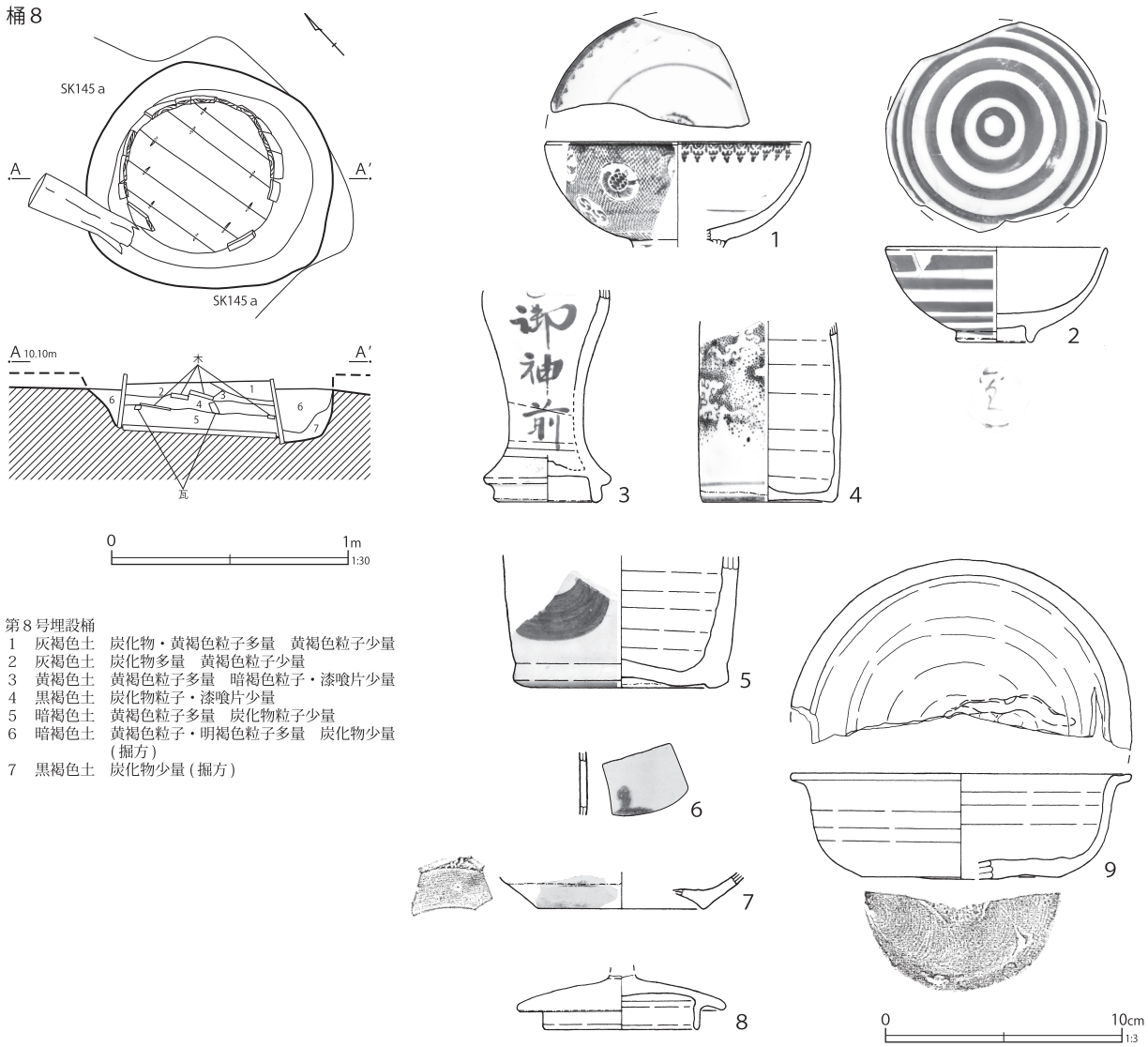
第７号埋設桶（第90図）

Ｅ７-Ｈ５・６グリッド、第６区画（区画Ｖ）の東部に位置し、さらに東側には第２号井戸跡が位置する。径64㎝の掘方内に、径50㎝の桶を正位で据えている。底板は検出されていない。また、上部は削平されているものと考えられる。覆土は二層に分かれ、上層はシルト質、下層は砂質である。

第90図１～６は出土した鉄製品である。全て鉄釘である。大小２タイプあり、長い方が10㎝弱、短い方が５㎝程度である。

このほか、陶磁器類が出土している。桶内からは、いずれも細片だが瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿、京都信楽系陶器の透明釉灯明皿、産地不詳の青緑釉土瓶が出土している。栗橋７～８期頃の様相である。

掘方内からは、肥前系磁器の筒形碗が出土している。中位に横帯状に鉄釉帯を巡らし、上下に条線を密に施すタイプで、肥前（長崎）瀬古窯跡等に出土例のあるものである（長崎市埋文調査協議会2000）。19世紀初頭頃に多くみられる。他に一括で、数点の陶磁器・土器が出土しているが、これらも栗橋７期を降る様相ではない。



第８号埋設桶
1　灰褐色土　炭化物・黄褐色粒子多量　黄褐色粒子少量
2　灰褐色土　炭化物多量　黄褐色粒子少量
3　黄褐色土　黄褐色粒子多量　暗褐色粒子・漆喰片少量
4　黒褐色土　炭化物粒子・漆喰片少量
5　暗褐色土　黄褐色粒子多量　炭化物粒子少量
6　暗褐色土　黄褐色粒子・明褐色粒子多量　炭化物少量（掘方）
7　黒褐色土　炭化物少量（掘方）

第 91 図　第 8 号埋設桶・出土遺物

第 34 表　第８号埋設桶出土遺物観察表（第 91 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(11.0)	[4.4]	-	-	20	良好	白	桶８	瀬戸美濃系　内外面施釉・型紙摺絵染付	
2	磁器	碗	(9.2)	4.0	2.9	-	75	良好	白	桶８	瀬戸美濃系　内外面施釉・色絵（赤）	75-7
3	磁器	御神酒徳利	-	[8.9]	4.0	-	65	普通	白	桶８	肥前系　外面施釉・上絵付（赤）「御神前」	75-8
4	磁器	燗徳利	-	[7.6]	5.4	-	30	良好	白	桶８	瀬戸美濃系　外面施釉・型紙摺絵染付	
5	陶器	徳利	-	[5.5]	7.5	EI	30	普通	灰白	桶８	内外面灰釉　外面鉄絵（文字）	
6	陶器	燗徳利	-	[3.1]	-	K	5	良好	灰白	桶８	掘方　外面灰釉・鉄絵（文字）	
7	陶器	土瓶	-	[1.5]	(7.0)	I	5	良好	灰白	桶８	内面灰釉　外面鮫肌釉	
8	陶器	蓋	-	[2.2]	(6.4)	IK	50	普通	灰白	桶８	大堀相馬系か　上面糠白釉　最大径 8.8 ㎝	
9	瓦質土器	仕切盤	(14.2)	[4.4]	8.4	AHI	45	普通	灰白	桶８	江戸在地系　底部糸切痕（左）　仕切盤欠失　胎土粉質　燻す	76-1

以上より、埋設桶は栗橋５期以降のある時期に構築されたものと考えられる。おそらくは栗橋７期に機能したものであろう。

第８号埋設桶（第91図）

Ｅ７−Ｉ６グリッド、第４区画（区画Ｘ）に位置し、第145a号土壙と重複する。新旧関係について明確な記録が無いが、底板が遺存することから、本跡のほうが新しいものであろう。

径103㎝の掘方内に、径63㎝の桶を据えており、比較的大型の埋設桶である。底板も掘方の底面に接して検出されている。上部は削平されているものと考えられる。桶内の覆土は色調などから５層に分層され、中位に板材や瓦等が出土している。

第91図１～９は出土した陶磁器である。１は瀬戸美濃系磁器の丸碗で、型紙摺絵染付が施されている。２は瀬戸美濃系磁器の小型の碗で、赤絵で同心円状に上絵付けを施す。３は肥前系磁器の御神酒徳利で、赤の上絵付けで「御神前」銘を書く。高台に若干の砂が付着している。４は瀬戸美濃系磁器の燗徳利で、型紙摺絵染付が施されている。

５は鉄絵で文字を書く陶器の徳利である。底部の釉薬を拭き取っている。６は陶器燗徳利の小破片で、外面に文字が鉄絵で書かれる。「高瀬屋」の「高」の字と思われる。７は陶器土瓶の底部で、やや赤みの強い鮫肌釉が施される。内面には灰釉が流れ込み、釉の厚い部分は青白いうのふ釉状に発色する。胎土は灰白色で緻密である。大堀相馬系陶器であろうか。８は陶器の土瓶蓋で、上面に糠白釉を施釉する。大堀相馬系陶器の可能性が高い。

９は小型の瓦質土器仕切り盤である。硬質・瓦質のものである。底部の糸切痕は細かく、左回転である。胎土は細かい雲母を多く含み、粉っぽい。江戸在地系土器である。

非掲載遺物には、酸化コバルト染付を施す磁器が数点認められる。栗橋９期の様相であり、１・４に図示した型紙摺絵染付の碗や燗徳利を廃絶段階と考えて良いであろう。

掘方の遺物には酸化コバルト染付の磁器は見られないが、各種の土瓶破片や、体部が丸い卵殻手酒杯が含まれるため、おそらく栗橋９期はじめ頃の構築で、廃絶は前述のとおりやや降るものと推定される。

このほか、出土した瓦類には軒桟瓦の軒丸部分破片が１点含まれている。右巻き三つ巴文で珠文の無いタイプのものである。

第９号埋設桶（第92図）

Ｅ７−Ｇ４グリッド、第８区画（区画Ｔ）に位置し、第261号土壙（18世紀末以降）の覆土を掘り込んで構築されている。また、南側に近接して第10号建物跡の松杭が検出されている。

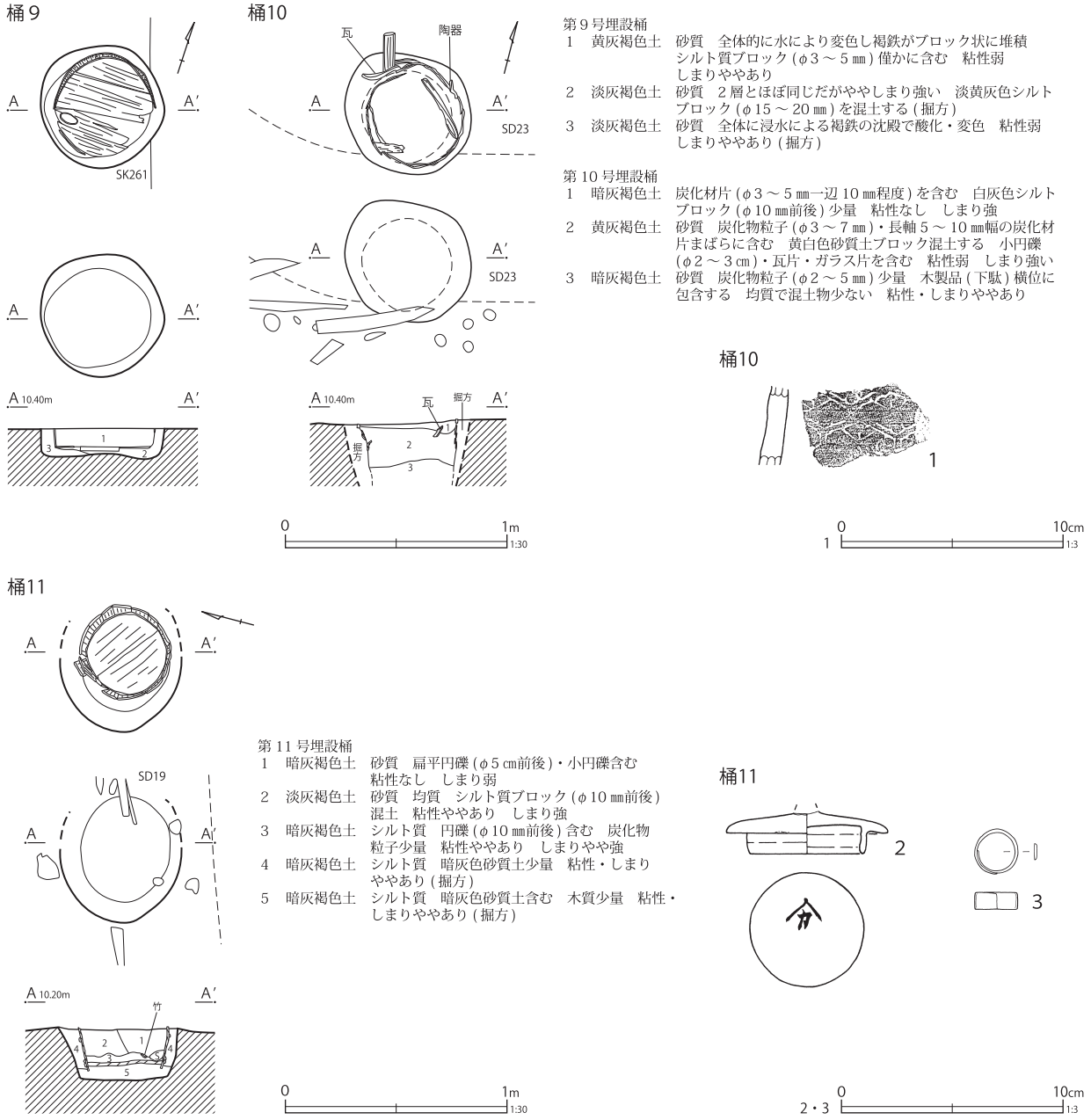
遺構は、径52㎝の掘方内に、径45㎝の桶を据えている。桶は底板が遺存するが、側板の遺存は僅かで上部が大きく削平されている物と考えられる。桶内の覆土は砂質土で、鉄分の沈殿が多く見られた。鉄分の沈殿は桶の外側の掘方にも及ぶ。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は絞り込めなかった。

第10号埋設桶（第92図）

Ｅ７−Ｆ４グリッド、第９区画（区画Ｓ）に位置し、地境溝である第23号溝跡と接近しており、溝を構成する側板材の裏側に、桶材が一部接するような状態で検出された。重複関係は明らかではない。径56㎝の掘方内に、径43㎝の桶を据えている。桶材の遺存状態は悪く、タガが遺存するのみで、側板は確認できない。底板の遺存も確認できていない。

第92図１は、出土した瓦質土器火鉢の破片である。外面にローラーによると思われるスタンプ文が施文される。燻されているが断面はやや橙色味を帯びる。胎土には一定量の角閃石とともに、極めて微細な雲母を少量含んでいる。



第9号埋設桶
1　黄灰褐色土　砂質　全体的に水により変色し褐鉄がブロック状に堆積　シルト質ブロック（φ3～5㎜）僅かに含む　粘性弱　しまりややあり
2　淡灰褐色土　砂質　2層とほぼ同じだがややしまり強い　淡黄灰色シルトブロック（φ15～20㎜）を混土する（掘方）
3　淡灰褐色土　砂質　全体に浸水による褐鉄の沈殿で酸化・変色　粘性弱　しまりややあり（掘方）

第10号埋設桶
1　暗灰褐色土　炭化材片（φ3～5㎜一辺10㎜程度）を含む　白灰色シルトブロック（φ10㎜前後）少量　粘性なし　しまり強
2　黄灰褐色土　砂質　炭化物粒子（φ3～7㎜）・長軸5～10㎜幅の炭化材片まばらに含む　黄白色砂質土ブロック混土する　小円礫（φ2～3㎝）・瓦片・ガラス片を含む　粘性弱　しまり強い
3　暗灰褐色土　砂質　炭化物粒子（φ2～5㎜）少量　木製品（下駄）横位に包含する　均質で混土物少ない　粘性・しまりややあり

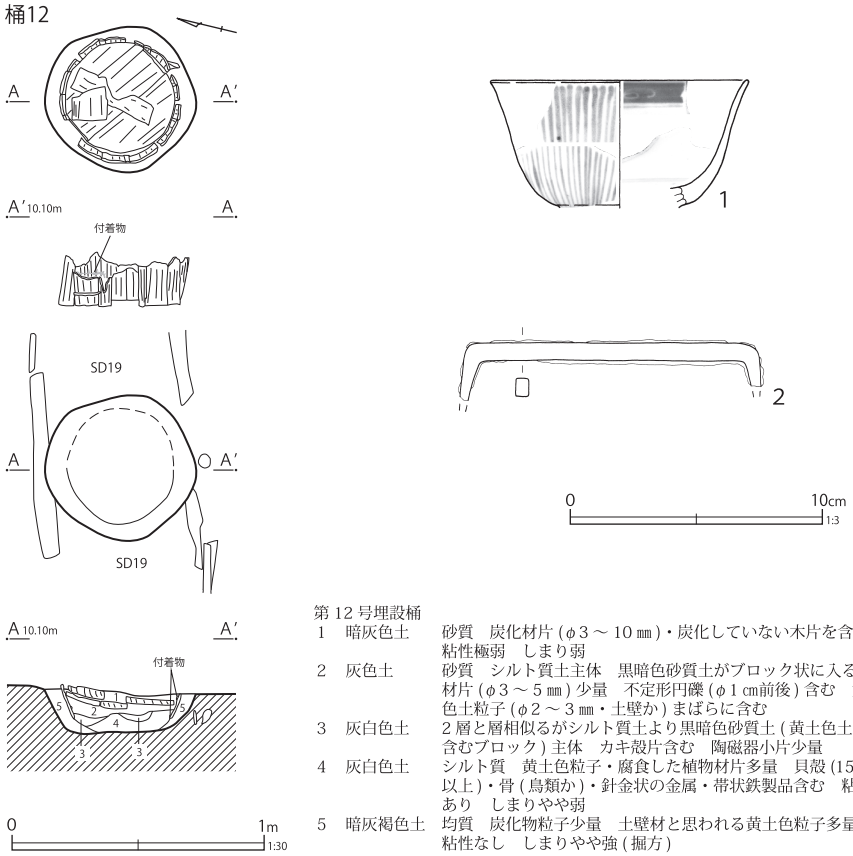
第11号埋設桶
1　暗灰褐色土　砂質　扁平円礫（φ5㎝前後）・小円礫含む　粘性なし　しまり弱
2　淡灰褐色土　砂質　均質　シルト質ブロック（φ10㎜前後）混土　粘性ややあり　しまり強
3　暗灰褐色土　シルト質　円礫（φ10㎜前後）含む　炭化物粒子少量　粘性ややあり　しまりやや強
4　暗灰褐色土　シルト質　暗灰色砂質土少量　粘性・しまりややあり（掘方）
5　暗灰褐色土　シルト質　暗灰色砂質土含む　木質少量　粘性・しまりややあり（掘方）

第92図　第9・10・11号埋設桶・出土遺物

第35表　第10・11号埋設桶出土遺物観察表（第92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦質土器	火鉢	-	[3.4]	-	ACEHI	5	普通	にぶい赤褐	桶10	外面施文　燻す	
2	陶器	蓋	-	[1.9]	(5.0)	K	85	良好	灰白	桶11	外面青緑釉　内面墨書「分」　最大径7.2	76-2
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
3	銅製品	環金具	径2.0×1.9 幅0.75 厚さ0.1 重さ4.3							桶11		

図示した以外に、瀬戸美濃系磁器の燗徳利や端反りの坏・急須などが出土しているが、酸化コバルト染付は認められない。陶器では所謂「すず徳利」と呼ばれる地方窯産陶器の徳利体部が見られる。桶内からは、土製品の土管片・硝子片が出土している。以上より、本跡の廃絶は9期と考えら



第 12 号埋設桶

1	暗灰色土	砂質　炭化材片 (φ３～10 ㎜)・炭化していない木片を含む　粘性極弱　しまり弱
2	灰色土	砂質　シルト質土主体　黒暗色砂質土がブロック状に入る炭化材片 (φ３～５㎜) 少量　不定形円礫 (φ１㎝前後) 含む　黄土色土粒子 (φ２～３㎜・土壁か) まばらに含む
3	灰白色土	２層と層相似るがシルト質土より黒暗色砂質土 (黄土色土粒子含むブロック) 主体　カキ殻片含む　陶磁器小片少量
4	灰白色土	シルト質　黄土色粒子・腐食した植物材片多量　貝殻 (15 ㎜以上)・骨 (鳥類か)・針金状の金属・帯状鉄製品含む　粘性あり　しまりやや弱
5	暗灰褐色土	均質　炭化物粒子少量　土壁材と思われる黄土色粒子多量　粘性なし　しまりやや強 (掘方)

第 93 図　第 12 号埋設桶・出土遺物

第 36 表　第 12 号埋設桶出土遺物観察表（第 93 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(10.0)	[4.9]	-	-	15	普通	白	桶 12	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕　上下接点ない２破片から図上復元	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
2	鉄製品	鎹	長さ [12.0] 幅 0.7 厚さ 0.6 重さ 36.7							桶 12		

れる。

なお、非掲載遺物の瀬戸美濃系磁器坏（卵殻手酒杯）の内面に江戸絵付けで「笠甚」の銘を有すものがみられた。

このほか、桶内部から軒桟瓦の瓦当部が１点出土している。

第11号埋設桶（第92図）

Ｅ７－Ｉ４グリッド、第６区画（区画Ｖ）に位置し、地境溝の第19号溝跡と重複する。径53㎝の掘方内に、径41㎝の桶を据えている。底板は完存しているが、上位は削平されているものとみられる。桶内の覆土は上層は砂質土、下層はシルト質土である。

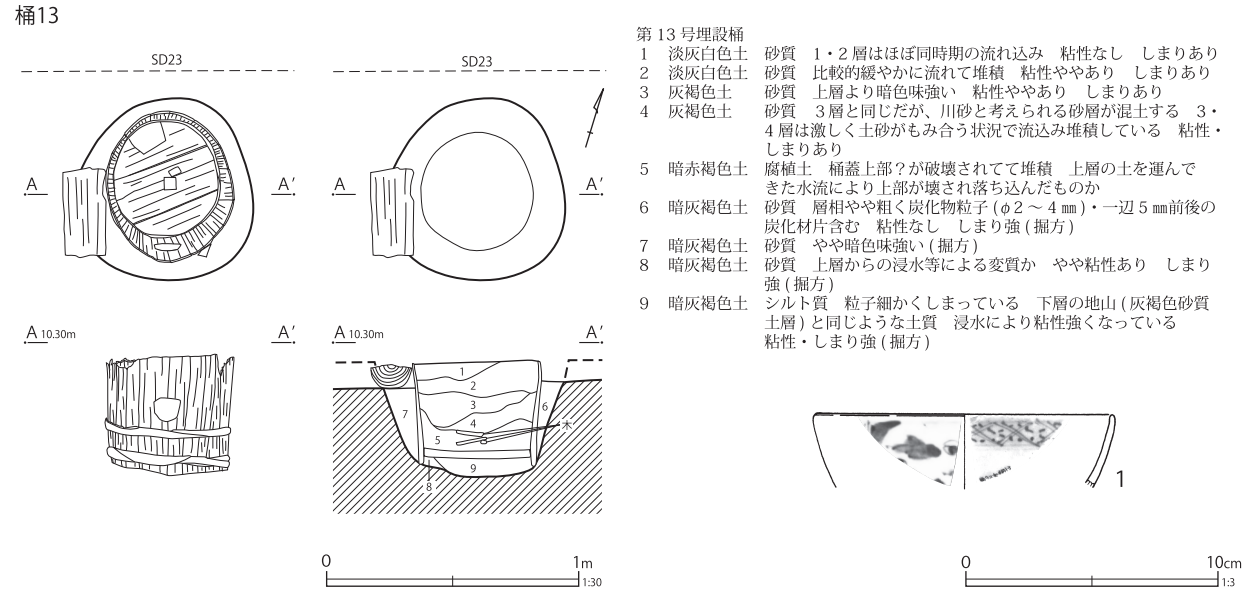
第92図２は出土した陶器で、青緑釉土瓶の蓋である。内面に「分」の店印が墨書される。

陶磁器の出土は少なかったが、瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗や産地不詳陶器の青緑釉土瓶がみられ、栗橋７期以降の構築と考えられる。

第92図３は金属製品で、銅製の環金具である。

第12号埋設桶（第93図）

Ｅ７－Ｉ５グリッド、第６区画（区画Ｖ）に位置し、地境溝の第19号溝跡と全体が重複する。径59㎝の掘方内に、径47㎝の桶を据えている。



第13号埋設桶
1　淡灰白色土　砂質　1・2層はほぼ同時期の流れ込み　粘性なし　しまりあり
2　淡灰白色土　砂質　比較的緩やかに流れて堆積　粘性ややあり　しまりあり
3　灰褐色土　砂質　上層より暗色味強い　粘性ややあり　しまりあり
4　灰褐色土　砂質　3層と同じだが、川砂と考えられる砂層が混土する　3・4層は激しく土砂がもみ合う状況で流込み堆積している　粘性・しまりあり
5　暗赤褐色土　腐植土　桶蓋上部？が破壊されてて堆積　上層の土を運んできた水流により上部が壊され落ち込んだものか
6　暗灰褐色土　砂質　層相やや粗く炭化物粒子(φ2～4㎜)・一辺5㎜前後の炭化材片含む　粘性なし　しまり強(掘方)
7　暗灰褐色土　砂質　やや暗色味強い(掘方)
8　暗灰褐色土　砂質　上層からの浸水等による変質か　やや粘性あり　しまり強(掘方)
9　暗灰褐色土　シルト質　粒子細かくしまっている　下層の地山(灰褐色砂質土層)と同じような土質　浸水により粘性強くなっている　粘性・しまり強(掘方)

第94図　第13号埋設桶・出土遺物（1）

第37表　第13号埋設桶出土遺物観察表（1）（第94図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(11.6)	[2.9]	-	-	5	良好	白	桶13	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕	

調査時に天地逆（逆位）で埋設されたものと観察されている。下位（桶の口側）から10㎝強上位に、赤褐色の付着物が数ミリの帯状に認められた。

底板は完存しており、逆位で埋設されたものなら下位に落とし込まれたものとみられる。上位は大きく削平されているものとみられ、桶内の覆土はほとんど残っていなかった。底板下の掘方内は、腐食した植物質・木材で埋められており、銅線・帯状鉄製品や貝類・動物遺体を含んでいた。

第93図１は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、焼き継ぎ痕がみられるものである。内面口縁部は濃み塗りの染付後に墨弾きで模様を描き、外面は縦格子状の文を染付する。上下で接点の無い２破片から図上復元して示した。２は鉄製品の鋏である。

非掲載の陶磁器には瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗の口縁部細片が認められた。口縁部外面に木型打込で角渦文を描き染付するもので、本跡の構築は栗橋８期以降と推定される。

第13号埋設桶（第94図）

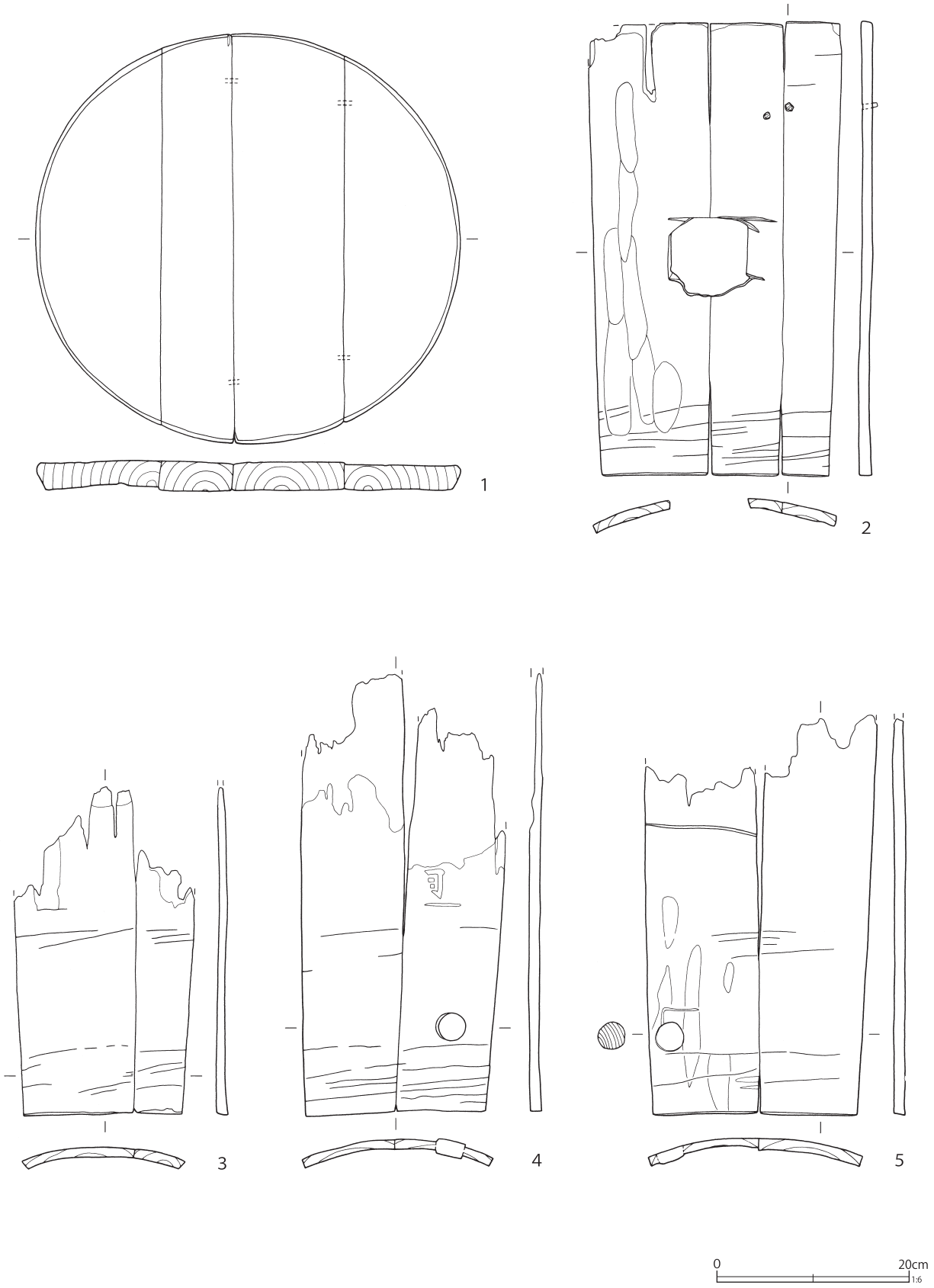
Ｅ７−Ｆ４グリッド、第８区画（区画Ｔ）に位置する。径72㎝の掘方内に、径50㎝の桶を据えている。

桶の検出面とレベルを合せて、西側に半裁した丸太が据えられていた。半裁面を上にしている。検出状況から埋設桶に伴う施設と考えられる。

桶の遺存状態は比較的良好で、高さ40㎝強が遺存する。底板も遺存していた。桶内の覆土は、洪水等により自然埋没したものと理解された。ただし覆土上位の砂層は、便槽遺構に度々認められる砂による埋め戻しの可能性も考慮するべきであろう。

出土した遺物は僅かであった。

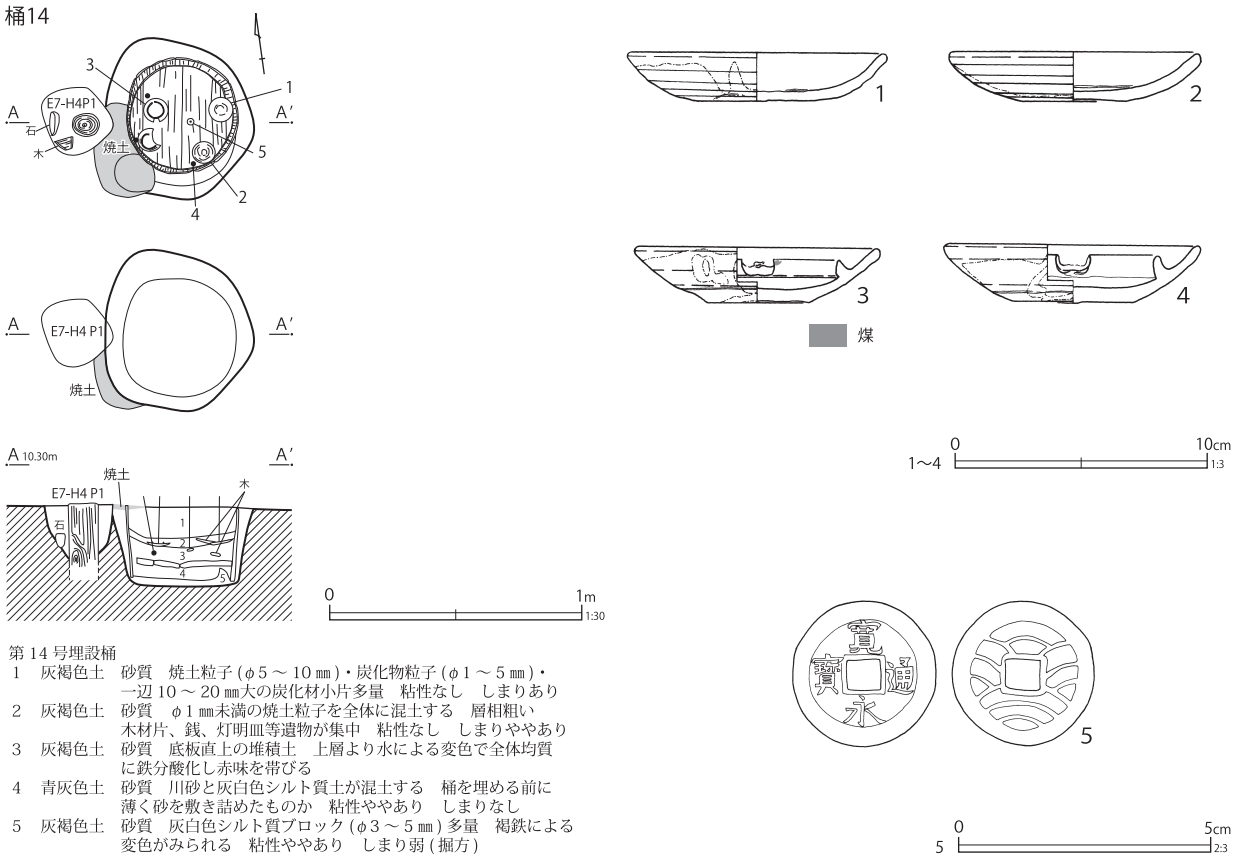
陶磁器では第94図１に図示した瀬戸美濃系磁器の丸碗がみられ、19世紀の埋没であることが分かる。このほかに瀬戸美濃系陶器柿釉灯明皿（油皿）のやや大きな破片が１片、肥前系磁器小丸碗と江戸在地系土器焙烙の細片が各１片出土し



第 95 図　第 13 号埋設桶出土遺物（2）

第 38 表　第 13 号埋設桶出土遺物観察表（２）（第 95 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	樽	40.5	43.3	3.1	－	－	－	板目	桶 13	１～５は同一の樽　底板　第 241 表 3	295-11
2	木製品	樽	34.3	19.0	1.0	－	－	－	板目	桶 13	１～５は同一の樽　側板　表面墨書	
3	木製品	樽	[46.6]	21.6	1.7	－	－	－	板目	桶 13	１～５は同一の樽　側板　栓遺存 焼印・表面墨書	
4	木製品	樽	[41.8]	22.5	1.3	－	－	－	板目	桶 13	１～５は同一の樽　側板　栓遺存 焼印	
5	木製品	樽	47.7	25.6	1.2	－	－	－	板目	桶 13	１～５は同一の樽　側板　中央に孔 貫通　木釘２　第 241 表 5	295-13



第 14 号埋設桶
1　灰褐色土　砂質　焼土粒子 (φ５～ 10 ㎜)・炭化物粒子 (φ１～５㎜)・
一辺 10 ～ 20 ㎜大の炭化材小片多量　粘性なし　しまりあり
2　灰褐色土　砂質　φ１㎜未満の焼土粒子を全体に混土する　層相粗い
木材片、銭、灯明皿等遺物が集中　粘性なし　しまりややあり
3　灰褐色土　砂質　底板直上の堆積土　上層より水による変色で全体均質
に鉄分酸化し赤味を帯びる
4　青灰色土　砂質　川砂と灰白色シルト質土が混土する　桶を埋める前に
薄く砂を敷き詰めたものか　粘性ややあり　しまりなし
5　灰褐色土　砂質　灰白色シルト質ブロック (φ３～５㎜) 多量　褐鉄による
変色がみられる　粘性ややあり　しまり弱 (掘方)

第 96 図　第 14 号埋設桶・出土遺物

第 39 表　第 14 号埋設桶出土遺物観察表（第 96 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	灯明皿	9.9	1.9	4.4	I	100	普通	灰白	桶 14	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
2	陶器	灯明皿	9.5	1.9	4.0	EIK	95	普通	灰白	桶 14	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
3	陶器	灯明皿	9.9	2.2	4.0	H	95	普通	灰白	桶 14	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
4	陶器	灯明皿	(9.8)	2.2	4.7	EK	80	普通	灰白	桶 14	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
5	銅製品	銭貨	径 28.9 厚さ 1.7 重さ 4.8							桶 14	寛永通寶（新）11 波	

たのみであった。

第95図に示したのは、樽の構築材である。

第14号埋設桶（第96図）

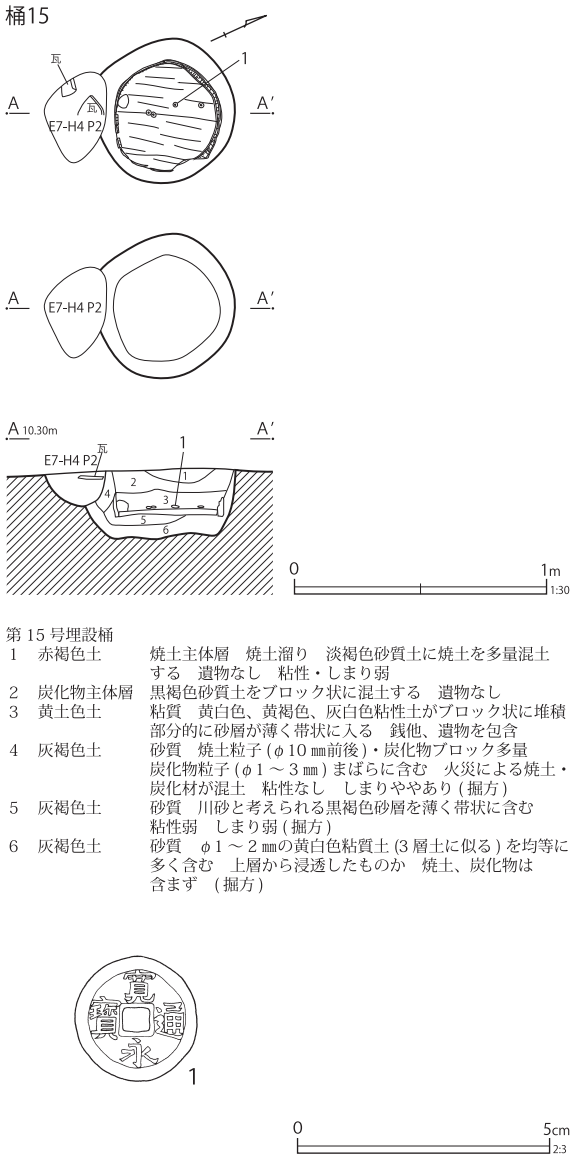
Ｅ７−Ｈ４グリッド、第７区画（区画U）に位置し、第８号建物跡の西側に近接する。径60㎝の掘方内に、径45㎝の桶を据えている。桶の廃絶後に上面に焼土層が認められる。これは、この区画の調査区西壁にみられる焼土層に対応するものと考えられ、第105・121号土壙の被熱遺物に関わる火災痕跡と考えられる。第105・121号土壙の被熱遺物は、19世紀第Ⅱ四半期（栗橋７期）に位置付けられるので、本跡はそれを遡るものであろう。

桶の遺存は比較的良好で、桶の高さは27㎝である。桶内の堆積土は砂質土で、大きく３層に分かれる。中層に集中して陶器灯明皿や銭貨が出土した。

第96図に出土した陶磁器を示す。

１〜４までは、覆土中層から出土した瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿で、１・２は油皿、３・４は受皿である。１は、光沢があまり無い柿釉が施釉され、内面底部に径4.6㎝、外底面に径4.6㎝程のの環状重ね焼き痕がみられる。２は光沢のあまり無い柿釉が、ムラ無く施釉されており、内面底部に径4.6㎝、外底面に径4.0㎝程のの環状重ね焼き痕がみられる。３・４はいずれも赤みが強く光沢の鈍い柿釉を施釉し、受部の切り込みが、箱型に近いU字形をする点、体部下位の釉の拭き取りに際して、底部の釉薬が拭え切れていない点など、類似点が多い。３の受部上端径は6.4㎝、外面の環状重ね焼き痕の径は6.2㎝、４の受部上端径は6.8㎝、外面の環状重ね焼き痕は径6.7㎝である。

第96図には、出土した金属製品を示す。５は



第 15 号埋設桶
1　赤褐色土　焼土主体層　焼土溜り　淡褐色砂質土に焼土を多量混土する　遺物なし　粘性・しまり弱
2　炭化物主体層　黒褐色砂質土をブロック状に混土する　遺物なし
3　黄土色土　粘質　黄白色、黄褐色、灰白色粘性土がブロック状に堆積部分的に砂層が薄く帯状に入る　銭他、遺物を包含
4　灰褐色土　砂質　焼土粒子 (φ10 ㎜前後)・炭化物ブロック多量炭化物粒子 (φ1 〜 3 ㎜) まばらに含む　火災による焼土・炭化材が混土　粘性なし　しまりややあり (掘方)
5　灰褐色土　砂質　川砂と考えられる黒褐色砂層を薄く帯状に含む粘性弱　しまり弱 (掘方)
6　灰褐色土　砂質　φ1 〜 2 ㎜の黄白色粘質土 (3 層土に似る) を均等に多く含む　上層から浸透したものか　焼土、炭化物は含まず　(掘方)

第 97 図　第 15 号埋設桶・出土遺物

寛永通寶の四文銭である。桶のほぼ中央部、桶内堆積土の中層から出土している。

なお、本跡の西側に隣接して捨杭を打ち込んだピット（Ｅ７−Ｈ４ピット１）が認めれ、焼土層を掘り込んでいる。従って、本跡が廃絶して焼土層が形成され、その後、ピットが掘り込まれたことになる。このピット１からは、本跡と同様に遺存状態の良い陶器の灯明皿がまとまって出土して

第 40 表　第 15 号埋設桶出土遺物観察表（第 97 図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 24.4 厚さ 1.5 重さ 2.4	桶 15	寛永通寶（新）	

いるほか、銭貨の塊が出土している。

第15号埋設桶（第97図）

Ｅ７-Ｈ４グリッド、第７区画（区画U）に位置する。第14号埋設桶のさらに西側に位置し、両者は約1.8m離れている。径57cmの掘方内に、径40cm強の桶を据えている。桶材の遺存は悪いが、底板は完存していた。後述するように、底板直上から銭貨がまとまって出土している。

桶内の覆土は大きく３層に分かれるが、そのうち最上層は焼土主体層であり、第７区画の火災に伴って形成された層の可能性もあるが、後述する文久永寶の出土を重視すれば別の要因で堆積した焼土層とみられる。

なお、本跡の南側に隣接してピット（Ｅ７-Ｈ４グリッドピット２）が認めれ、本跡を掘り込んでいる。

出土遺物は極めて少なく、陶磁器の出土はみられなかった。第97図１は底板上から出土した銭貨（寛永通寶）である。底板直上からは図示したものも含めて計４点の銭貨が出土した。内訳は寛永通寶（新寛永）１点、文久永寶１点、銭種不明２点である。

第16号埋設桶（第98図）

Ｅ７-Ｅ５グリッド、第９区画（区画Ｓ）に位置する。第345号土壙および第346号土壙を壊して構築されている。径77cmの掘方内に、径50cmの桶を据えているが、遺存状態は悪く、上位は大きく削平されている。底板も残っていない。

第98図１～３には出土した陶磁器を示した。

１は瀬戸美濃系磁器の坏で、体部は丸みを帯びて立ち上がる。酸化コバルト染付で同心円状に圏線を巡らす。

２・３は瓦質土器である。２は大型の竈の口縁部片で、外面に櫛歯波状文を施文する。３は焜炉の口縁部破片で、硬質・瓦質のものである。外面口縁部に沈線を巡らせ、沈線より上はミガキ、下は亀甲文状の施文が施される。

非掲載の陶磁器には、瀬戸美濃系磁器の酸化クロム青磁釉の坏がみられる。本跡の帰属時期は栗橋９期の比較的早い段階と思われる。

第98図４は種別不明の銅製品である。円板を薄板で包み周囲を折り返している。表面に文様が施されるが判別できない。

このほかに流紋岩製砥石の破片が出土している。

第17号埋設桶（第99図）

Ｆ７-Ａ５グリッド、第３区画（区画Ｙ）の西側調査区際に位置する。第18号埋設桶と南北に並んで検出されている。径56cmの掘方内に、径52cmの桶を据えている。

桶の遺存は比較的良好で、高さ38cmが残存し、底板も完存していた。桶内の覆土は暗灰色のシルト質土で４層に分かれるが、変化は漸移的である。

出土遺物は少ない。

第99図１・２には陶磁器を示す。１は肥前系磁器の端反碗で、薄手のものである。外面に山水文を染付する。２は瓦質土器の火鉢で、硬質・瓦質のものである。外面に沈線区画を入れて、その中に横位のミガキを施す。その下にはトビガンナ状の施文がみられる。胎土に角閃石が含まれる在地の製品で、おそらく輪高台状の脚台が付くタイプであろう。

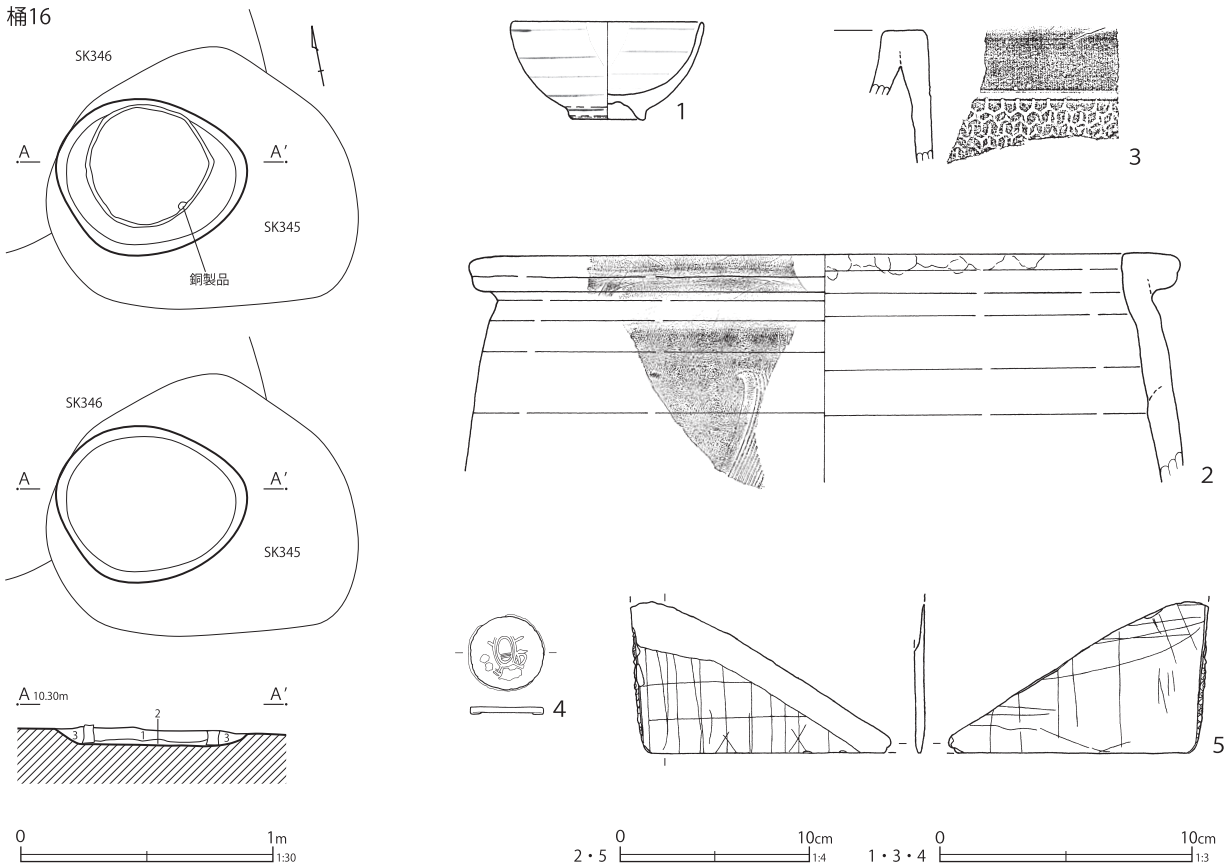
このほか、掘方内から肥前系磁器広東碗と瀬戸美濃系磁器の端反碗の細片が、桶内からも肥前系磁器広東碗や瓦質土器の火鉢破片が出土している。遺物からみれば、本跡は栗橋６～７期に帰属する可能性が高い。

第99図３は金属製品で煙管の吸い口である。

この他に軒桟瓦１点が掘方から出土している。

第18号埋設桶（第99図）

Ｆ７-Ａ５グリッド、第３区画（区画Ｙ）の西側調査区際に位置する。第17号埋設桶と南北に並んで検出されている。径60cmの掘方内に、径

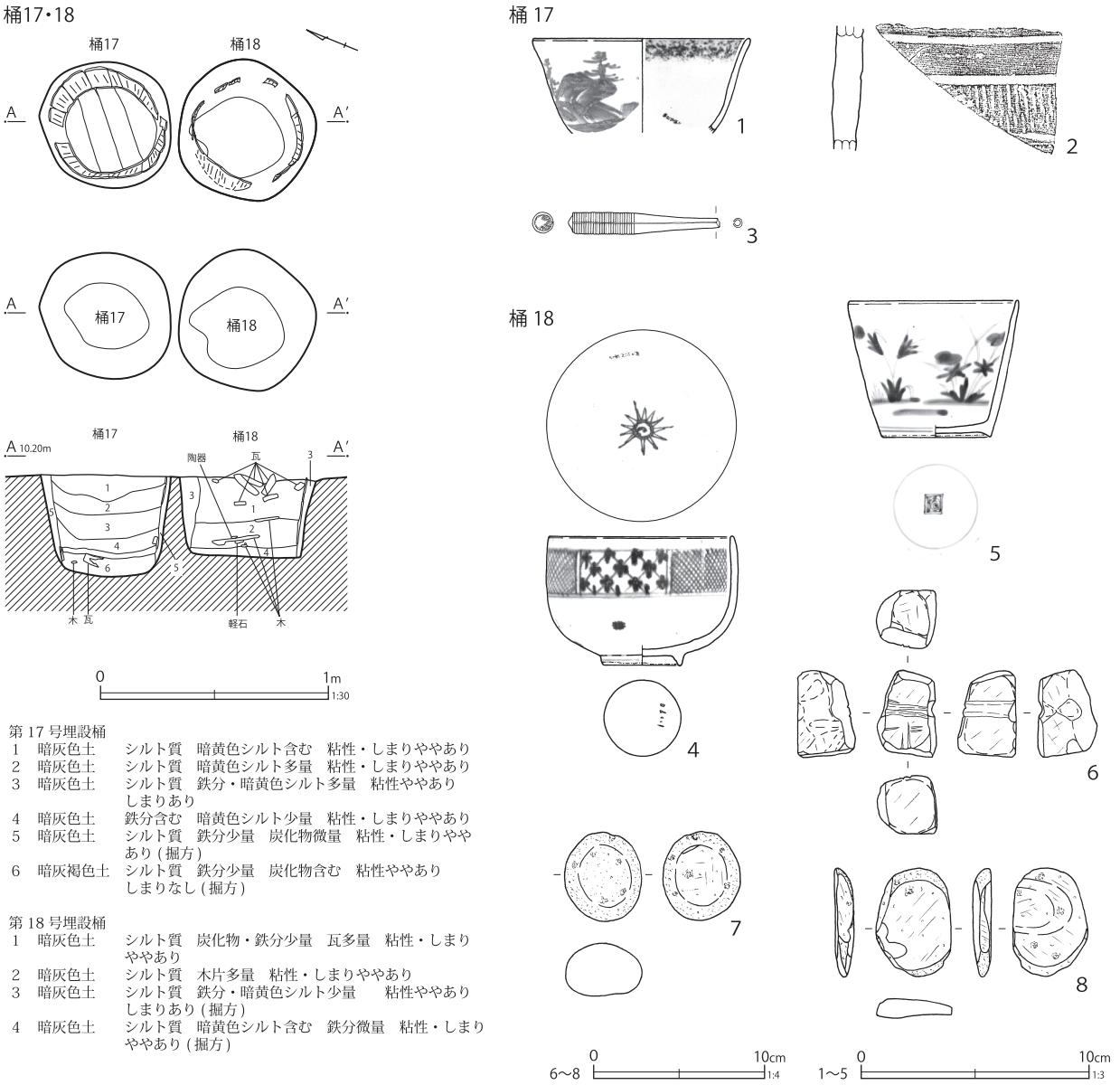


第 16 号埋設桶
1　暗灰褐色土　砂質　橙褐色焼土粒子（φ1～5㎜）・炭化物（φ1㎜前後）含む　土壁片と考えられる　白灰色シルト土ブロック（φ1㎝前後）包含　遺物包含
2　暗灰褐色土　砂質　1層より黄白色粘土粒子（φ1～3㎜大）を多く含む
3　灰褐色土　砂質　均質　粘性なし　しまりややあり

第 98 図　第 16 号埋設桶・出土遺物

第 41 表　第 16 号埋設桶出土遺物観察表（第 98 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	坏	(7.4)	3.8	2.8	-	40	良好	白	桶 16	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付	
2	瓦質土器	竈	(34.0)	[12.1]	-	CI	5	良好	灰白	桶 16	外面櫛歯波状文施文　燻す　煤付着　口縁部内側二次敲打	
3	瓦質土器	焜炉	-	[5.2]	-	CEHI	5	普通	褐灰	桶 16	外面施文　一部ミガキ	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
4	銅製品	不明	径 2.9 厚さ 0.3 重さ 6.2							桶 16	文様不明	
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材			遺構	備考	図版
5	石製品	石板	[8.0]	[13.0]	0.5	74.8	粘板岩			桶 16	両面罫線 側面工具痕	



第 17 号埋設桶
1　暗灰色土　シルト質　暗黄色シルト含む　粘性・しまりややあり
2　暗灰色土　シルト質　暗黄色シルト多量　粘性・しまりややあり
3　暗灰色土　シルト質　鉄分・暗黄色シルト多量　粘性ややあり　しまりあり
4　暗灰色土　鉄分含む　暗黄色シルト少量　粘性・しまりややあり
5　暗灰色土　シルト質　鉄分少量　炭化物微量　粘性・しまりややあり (掘方)
6　暗灰褐色土　シルト質　鉄分少量　炭化物含む　粘性ややあり　しまりなし (掘方)

第 18 号埋設桶
1　暗灰色土　シルト質　炭化物・鉄分少量　瓦多量　粘性・しまりややあり
2　暗灰色土　シルト質　木片多量　粘性・しまりややあり
3　暗灰色土　シルト質　鉄分・暗黄色シルト少量　粘性ややあり　しまりあり (掘方)
4　暗灰色土　シルト質　暗黄色シルト含む　鉄分微量　粘性・しまりややあり (掘方)

第 99 図　第 17・18 号埋設桶・出土遺物

50㎝程度の桶を据えたものと思われるが、桶材の遺存は悪く、底板も確認できなかった。

桶内の覆土は暗灰色のシルト質土で上下２層に分かれる。上層には瓦がまとまって出土しており、軒桟瓦も１点含まれていた。

第99図４・５は出土した陶磁器である。４は肥前系磁器の小丸碗で、外面は上位の方形枠内に斜格子・市松状文を表し、下位にも井桁状文を散らすように染付している。内底面には崩れた火焔宝珠文を染付する。焼き継ぎ痕がみられ、赤で「二三」の焼き継ぎ印もある。５は肥前系磁器の猪口で、外面に秋草文を染付する。高台内には二重方形枠に渦福文を染付する。

非掲載遺物に、瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗口縁部破片がみられ、本跡の廃絶は栗橋７期以降とみられる。

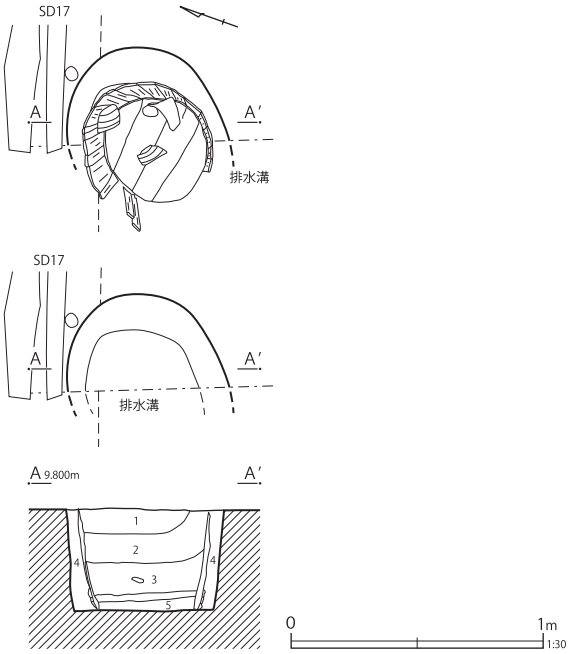
第19号埋設桶（第100・101図）

Ｅ７－Ｊ４グリッド、第３区画（区画Ｙ）の北西隅、調査区際に位置する。径62㎝の掘方内に、径50㎝の樽を据えたものである。西部は調

第 42 表　第 17・18 号埋設桶出土遺物観察表（第 99 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(9.3)	[4.1]	-	-	10	不良	白	桶 17	肥前系　内外面施釉・染付　(端反碗)	
2	瓦質土器	火鉢	-	[5.3]	-	CEFI	5	良好	灰白	桶 17	外面トビガンナ状施文・ミガキ	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
3	銅製品	煙管	長さ [6.4] 小口径 0.9 口付径 0.4 重さ 6.9							桶 17	吸口 口付一部欠損 内部羅宇残存	273-1
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
4	磁器	碗	7.9	5.6	3.3	-	95	普通	白	桶 18	肥前系　内外面施釉・染付　(小丸碗)　焼き継ぎ痕・焼き継ぎ印	76-3
5	磁器	猪口	7.3	5.9	4.6	-	95	普通	白	桶 18	肥前系　内外面施釉　外面染付	76-4
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材			遺構	備考	図版
6	石製品	砥石	5.1	3.5	3.4	69.7	砂岩			桶 18	刃物痕 砥面 6	280-3
7	石製品	磨石	5.2	4.5	3.1	36.6	角閃石安山岩			桶 18	多孔質 自然面遺存 使用面 1	284-1
8	石製品	磨石	6.3	4.5	1.1	14.9	角閃石安山岩			桶 18	多孔質 自然面遺存 使用面 4	284-1

桶19



第 19 号埋設桶
1　暗灰色土　シルト質　灰色砂少量　粘性・しまりややあり
2　暗灰色土　シルト質　鉄分・炭化物少量　粘性・しまりややあり
3　暗灰褐色土　シルト質　木質多量　炭化物少量　粘性・しまりややあり
4　暗灰褐色土　シルト質　炭化物・暗黄砂少量　粘性・しまりややあり (掘方)
5　暗灰褐色土　シルク質　黄色シルト少量　粘性・しまりややあり (掘方)

第 100 図　第 19 号埋設桶

査の際に掘削した排水溝に壊されていたが、全体的に桶材の遺存は良く、底板も遺存している。

桶内の覆土は暗灰色～暗灰褐色のシルト質土で３層に分かれるが、変化は漸移的である。北側が地境である第17号溝跡に近接している。

第101図１～10には樽の構築材を図示する。６の側板に孔を有す。11に瀬戸美濃系陶器の坏を示す。内外面ともに光沢の強い灰釉が施される。胎土は良く還元している。外面に少量煤が付着している。このほかには掘方内から産地不詳の陶器土瓶片が出土したのみであった。12は金属製品で鉄釘である。

第20号埋設桶（第102図）

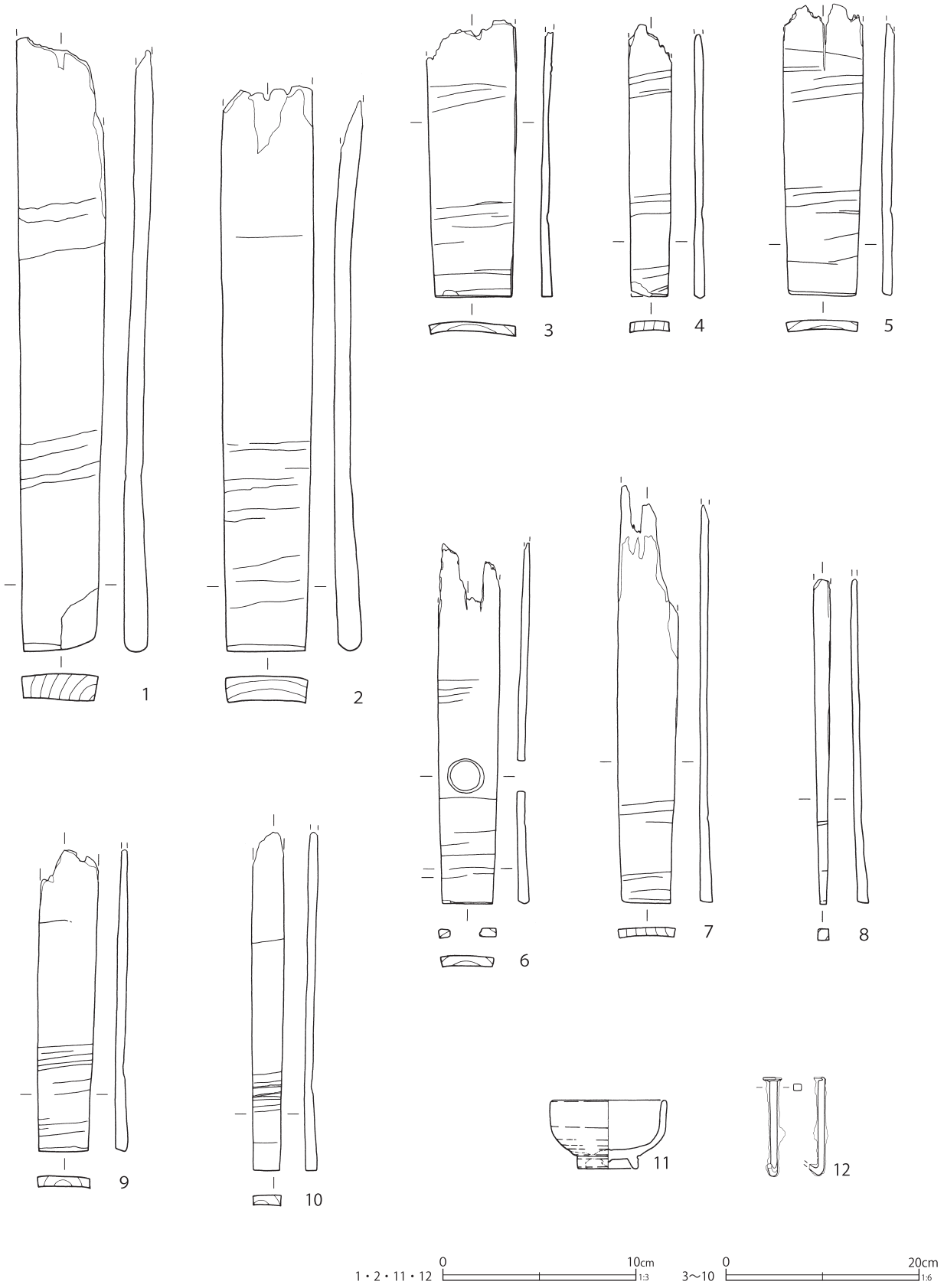
Ｅ７-Ｈ６グリッド、第６区画（区画Ｖ）に位置し、地境溝の第19号溝跡と重複する。第２号井戸跡に近接する。

径36㎝の底板が遺存するが、側板の遺存はなく、底板下の掘方のみが検出された状況である。遺存する掘方径は57㎝で、砂質土で充填されていた。

陶磁器類は少数の出土に留まり、破片のみであったため、図示には至らなかった。その内容は、肥前系磁器皿の体部細片と筒形碗の体部、瀬戸美濃系磁器碗類の高台部細片、瀬戸美濃系陶器柿釉甕の胴部細片、地方窯産と思われる灰釉燗徳利体部・鉄釉土瓶体部、それに江戸在地系土器焙烙の底部細片である。これらの陶磁器の様相からは、栗橋８～９期前半に帰属する可能性が高い。第102図１には寛永通寶の新寛永を示す。

第21号埋設桶（第103図）

Ｅ７-Ｉ４グリッド、第６区画（区画Ｖ）と第５区画（区画W）を分かつ地境溝・第19号溝跡の中に重複して見つかった埋設桶である。東側



第 101 図　第 19 号埋設桶出土遺物

第 43 表　第 19 号埋設桶出土遺物観察表（第 101 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	樽	[31.8]	3.9	1.4	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
2	木製品	樽	[29.2]	4.2	1.4	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
3	木製品	樽	[28.6]	9.0	1.1	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
4	木製品	樽	[28.5]	4.0	1.0	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
5	木製品	樽	[30.5]	7.5	1.1	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
6	木製品	樽	[37.7]	6.1	1.1	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
7	木製品	樽	[44.0]	5.9	1.4	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
8	木製品	樽	[34.1]	1.1	1.2	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
9	木製品	樽	[31.6]	5.5	1.3	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
10	木製品	樽	[35.5]	3.0	1.3	－	－	－	板目	桶 19	側板　墨書	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
11	陶器	坏	(5.7)	3.5	3.0	I	60	良好	灰白	桶 19	瀬戸美濃系　内外面灰釉　少量煤付着	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
12	鉄製品	釘	長さ［5.1］幅 0.4 厚さ 0.35 重さ 3.9							桶 19		

1.5mに第11号埋設桶が近接する。

遺存していたのはタガのみであったが、径55㎝の掘方が検出されている。覆土上層には砂が多く含まれている。検出状況から、本跡は第19号溝跡と関連して用いられたものと推定される。

なお、第19号溝跡は特に埋設桶との重複が多く、西側から東側に、第21・11・23・22・12・47・20号埋設桶との重複が認められる。

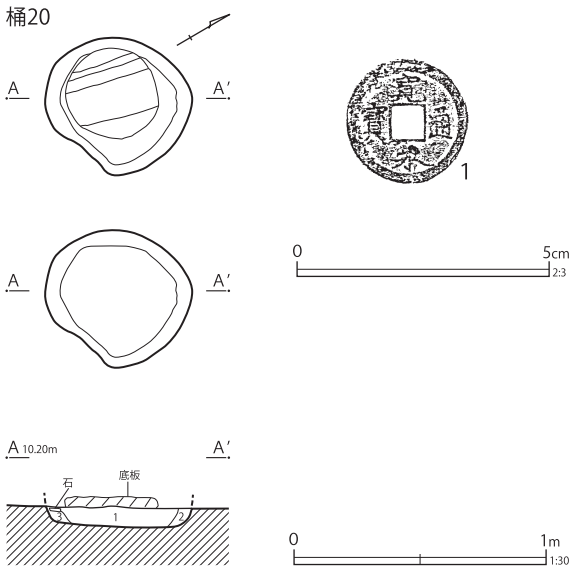
出土した陶磁器は２片のみで、瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒杯底部と、産地不詳陶器の青緑釉土瓶体部片であった。これらが掘方から出土しているので、本跡の構築は栗橋７期以降と考えられる。

第22号埋設桶（第103図）

Ｅ７－Ｉ５グリッド、第６区画（区画Ｖ）に位置し、地境溝の第19号溝跡に重複する。西側1.0mの位置に第23号埋設桶が近接する。

遺構は径60㎝の掘方内に、径40㎝程の桶を据えたものである。上部の側板の状況がやや悪いが、底板は遺存していた。

第103図１は出土した瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗で、外面上位に濃み塗りでグラデーション風の染付を施し、下位には漢詩文と思われる文字を染付する。

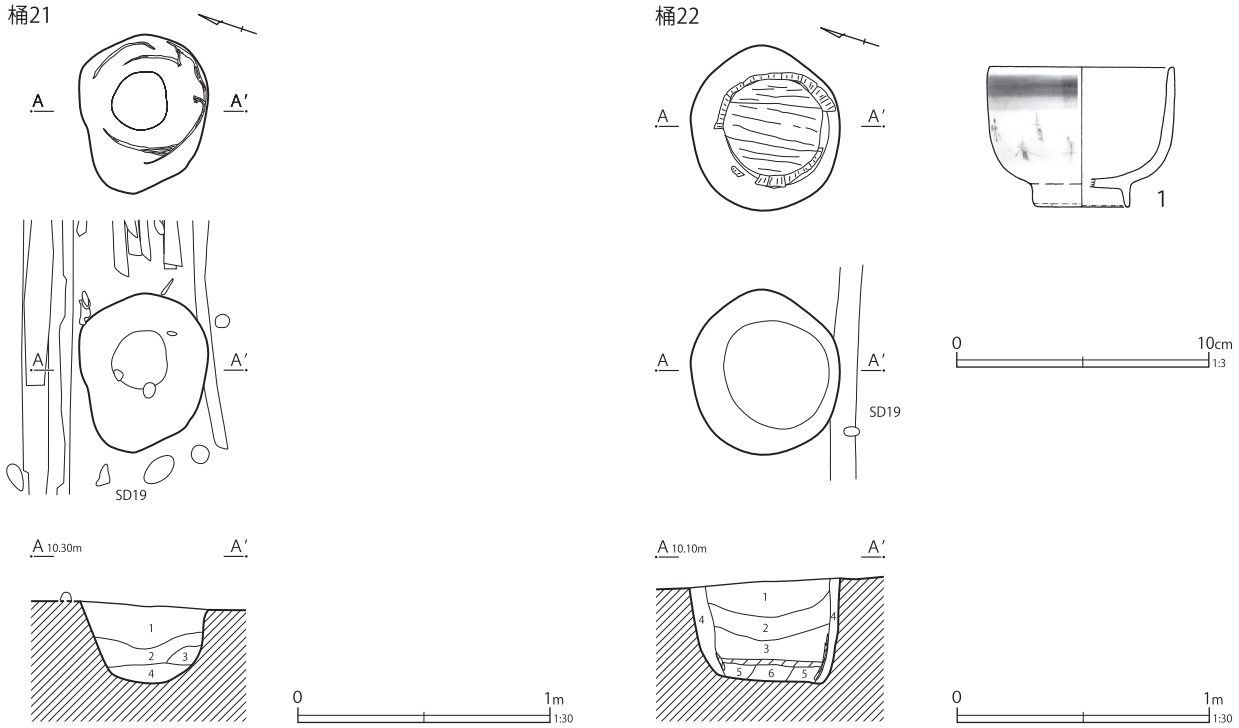


第 20 号埋設桶
1　灰色土　砂質　暗灰褐色土少量　粘性弱　しまりややあり（掘方）
2　灰色土　砂質　暗灰色土微量　粘性弱　しまりややあり（掘方）
3　暗灰色土　シルト質　砂含む　炭化物少量　粘性・しまりややあり（掘方）

第 102 図　第 20 号埋設桶・出土遺物

第 44 表　第 20 号埋設桶出土遺物観察表（第 102 図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 24.4 厚さ 1.0 重さ 2.7	桶 20	寛永通寳（新）	



第 21 号埋設桶
1　暗灰色土　砂質　灰色砂多く含む　粘性少ない　しまり弱
2　暗灰色土　砂質　灰色砂少量含む　粘性少ない　しまりややあり
3　暗灰褐色土　砂質　暗灰色砂少量　粘性・しまりややあり
4　暗灰褐色土　砂質　灰色砂微量　粘性・しまりややあり

第 22 号埋設桶
1　暗灰褐色土　砂質　炭化物少量　粘性弱　しまりややあり
2　暗灰褐色土　砂質　灰色砂少量　粘性弱　しまりややあり
3　暗灰褐色土　砂質　木質・灰色砂少量　粘性弱　しまりややあり
4　暗灰褐色土　砂質　白色粒子微量　粘性弱　しまりややあり
5　暗灰褐色土　砂質　木質多く含む　灰色砂少量　粘性弱　しまりややあり
6　青灰色土　砂質　木質少量　粘性弱　しまりややあり

第 103 図　第 21・22 号埋設桶・出土遺物

第 45 表　第 22 号埋設桶出土遺物観察表（第 103 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(7.0)	5.5	(3.5)	-	35	良好	白	桶 22	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付 (湯呑形碗)	

掲載した以外に、肥前系磁器広東碗の蓋や、瀬戸美濃系陶器の内面白化粧・外面折れ枝梅花文を施す端反碗片、堺明石系陶器擂鉢片が出土している。土器類では瓦質土器の焙烙・十能、江戸在地系土器の風口がみられる。

遺物が少ないが、陶磁器から栗橋７期以降の遺構と推定される。

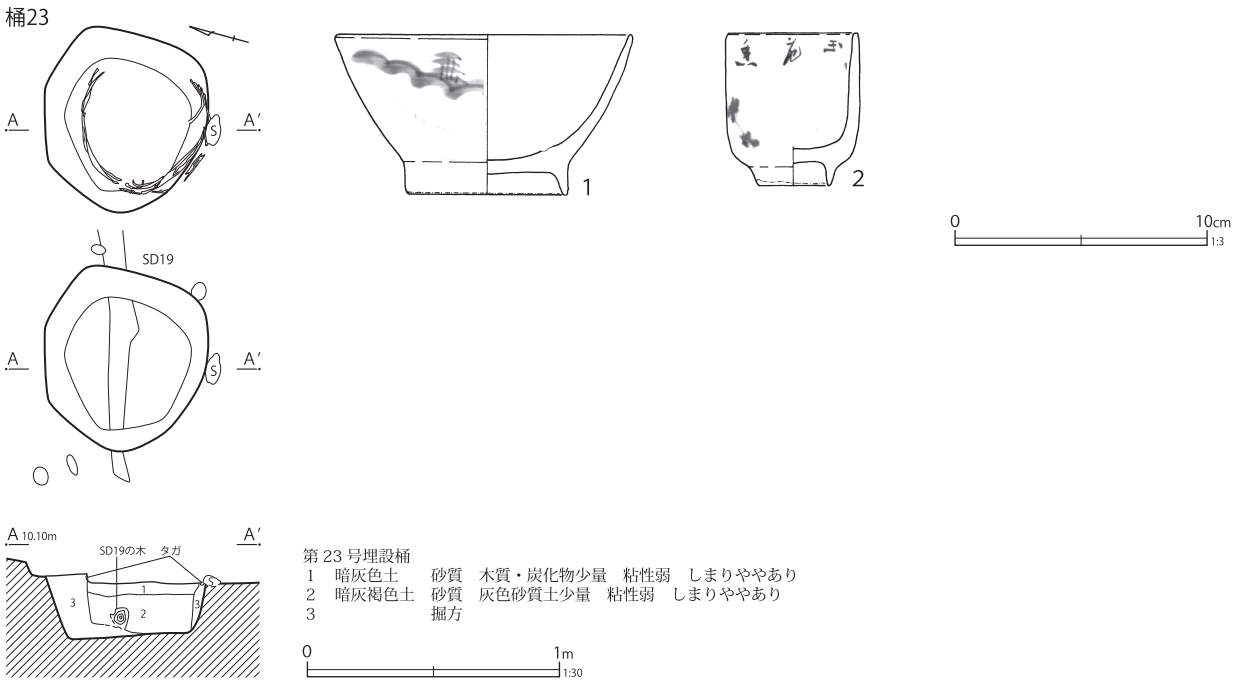
第23号埋設桶（第104図）

Ｅ７−Ｉ５グリッド、第６区画（区画Ｖ）に位置し、地境溝の第19号溝跡および第175号土壙と重複する。東側１ｍの位置に第22号埋設桶が近接する。

タガの検出により埋設桶と認定されたもので、側板・底板は遺存していない。径70㎝の掘方が検出されており、覆土は砂質土である。

掘方の下位に第19号溝跡の構築材が検出されている。従って埋設桶はこの構築材より新しいと考えられる。ただし溝跡は何度も改修されていたと考えられるので、本跡が改修後の溝跡と関連する可能性は充分にある。

第104図１は肥前系磁器の広東碗で、外面に山水文を染付する。内底面に三箇所のピン痕が残る。２は瀬戸美濃系磁器の坏で筒形の湯呑である。外面は酸化クロム青磁釉、白盛や緑色・黒色で絵付けされている。外面上位に濃み塗りでグラデーション風に染付を施し、下位には漢詩文と思



第104図　第23号埋設桶・出土遺物

第46表　第23号埋設桶出土遺物観察表（第104図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	11.5	6.3	6.1	-	70	普通	白	桶23	掘方　肥前系　内外面施釉　外面染付　内底面ピン痕３（広東碗）	
2	磁器	坏	(4.9)	6.0	(2.8)	-	45	良好	白	桶23	掘方　瀬戸美濃系　内外面施釉（外面酸化クロム青磁釉）　外面上絵付（緑・黒・白盛）	

われる文字を染付する。いずれも掘方からの出土である。

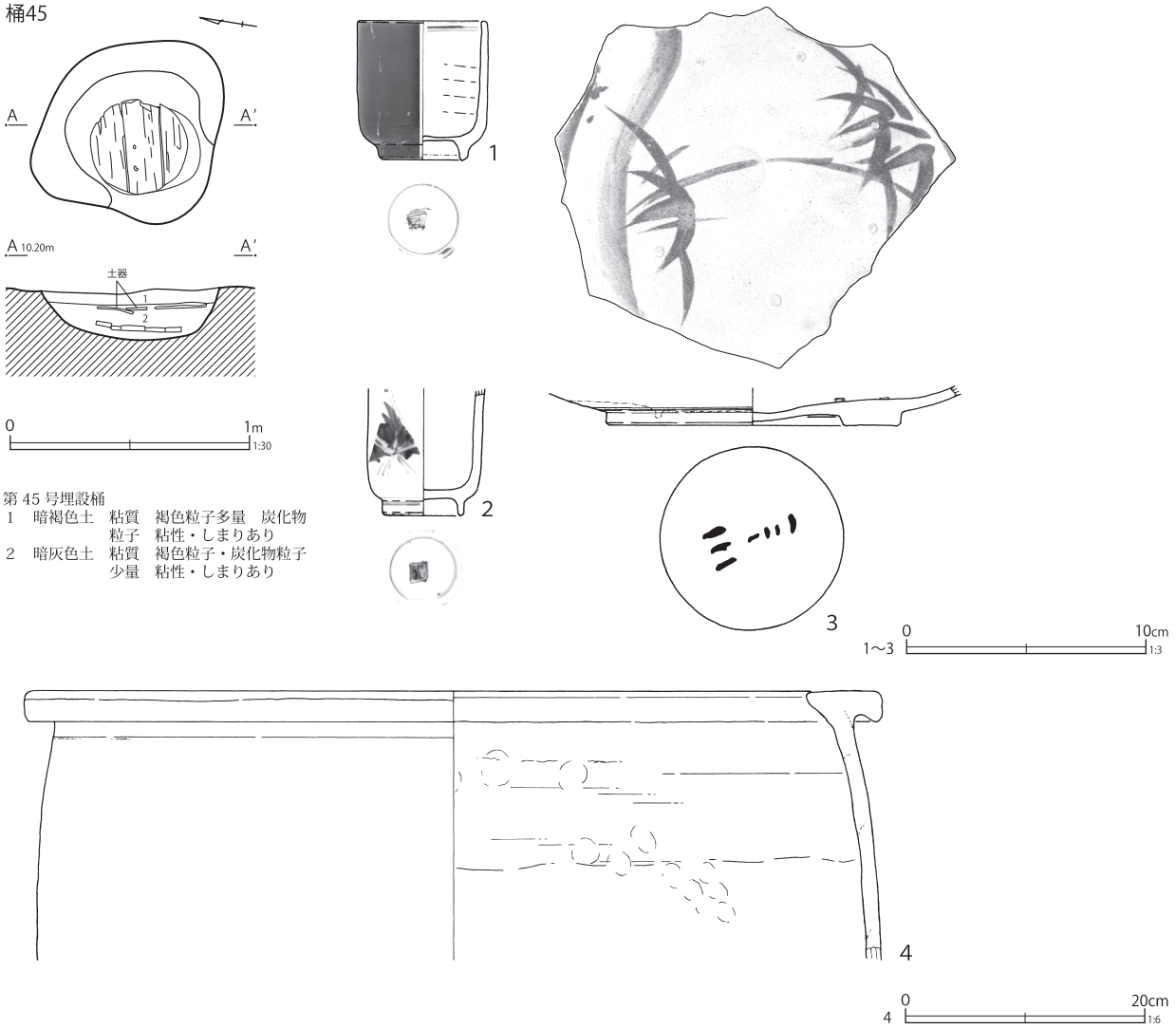
このほか、肥前系磁器坏の底部、瀬戸美濃系磁器端反碗の底部、京都信楽系陶器小杉碗、瀬戸美濃系陶器植木鉢の細片が出土している。掘方からは、肥前系磁器筒形碗口縁部、八角鉢口縁部、瀬戸美濃系陶器灯明皿口縁部、徳利体部、擂鉢細片、産地不明陶器の焼酎甕細片、瓦質土器火消壺の蓋などが出土している。なお、掘方から出土した瓦質土器十能が、第22号埋設桶の出土品と接合している。

陶磁器は栗橋７期頃のものが多いが、２の磁器坏や焼酎甕の細片から、栗橋９期でも古い段階の遺構と考えられる。

第45号埋設桶（第105図）

Ｆ７−Ａ７グリッド、第２区画（区画Ｚ）の東側に位置する。調査時には土壙として調査したが、底面中央付近から桶の底板が検出されており、整理段階で、埋設桶に変更したものである。掘方は径73㎝、粘質土が覆土であった。

第105図１～４は出土した陶磁器類である。１・２は瀬戸美濃系磁器の筒形の坏で、１は外面を酸化コバルト単彩で施釉し、高台内に崩れた銘を有す。２は酸化コバルトで外面に花文を染付する。高台内にも銘を染付する。３は産地不詳の陶器皿で、蛇の目状の幅広い削り出し高台を有すものである。内面は灰釉が施釉され、７つのピン痕状になる窯道具痕（重ね焼き痕）がみられる。高台内に墨書がみられる。細片で図化できなかった



第 105 図　第 45 号埋設桶・出土遺物

第 47 表　第 45 号埋設桶出土遺物観察表（第 105 図）

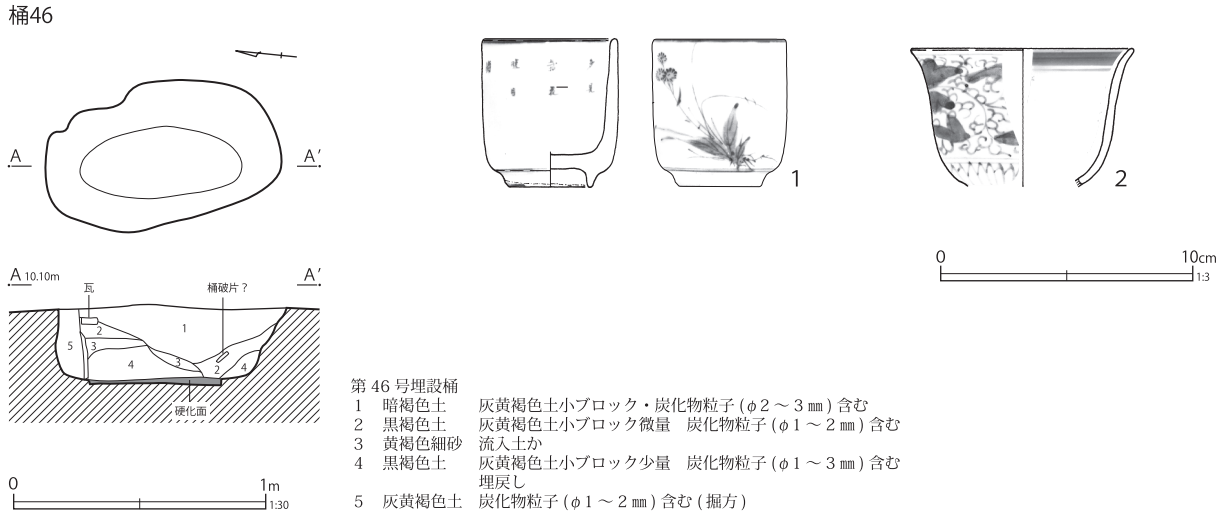
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	坏	5.1	5.8	3.2	-	70	良好	白	桶 45	瀬戸美濃系　内外面施釉（外面瑠璃釉単彩）・酸化コバルト染付	76-5
2	磁器	坏	-	[5.2]	(3.1)	-	30	良好	白	桶 45	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	
3	陶器	皿	-	[1.6]	11.9	I	60	普通	淡黄	桶 45	内外面灰釉　内面呉須絵・目跡 7　墨書	76-6
4	土師質土器	甕	(70.6)	[22.8]	-	CGHI	20	普通	浅黄橙	桶 45		

が、瀬戸美濃系磁器の皿に型紙摺絵染付が施されたものが１片認められた。このほか非掲載の陶磁器類としては、瀬戸美濃系磁器の壽文皿、酸化コバルト染付を施す燗徳利・急須や端反の坏、地方窯系とみられる産地不詳陶器の柿釉甕等が出土している。遺構の時期は栗橋９期である。

第46号埋設桶（第106図）

Ｅ７-Ｊ６グリッド、第３区画（区画Ｙ）の東東側に位置し、第４号建物跡の基礎に囲まれた中に所在する。

調査時には土壙として調査したが、桶底板とみられる木材が検出されており、掘方埋土が分層・

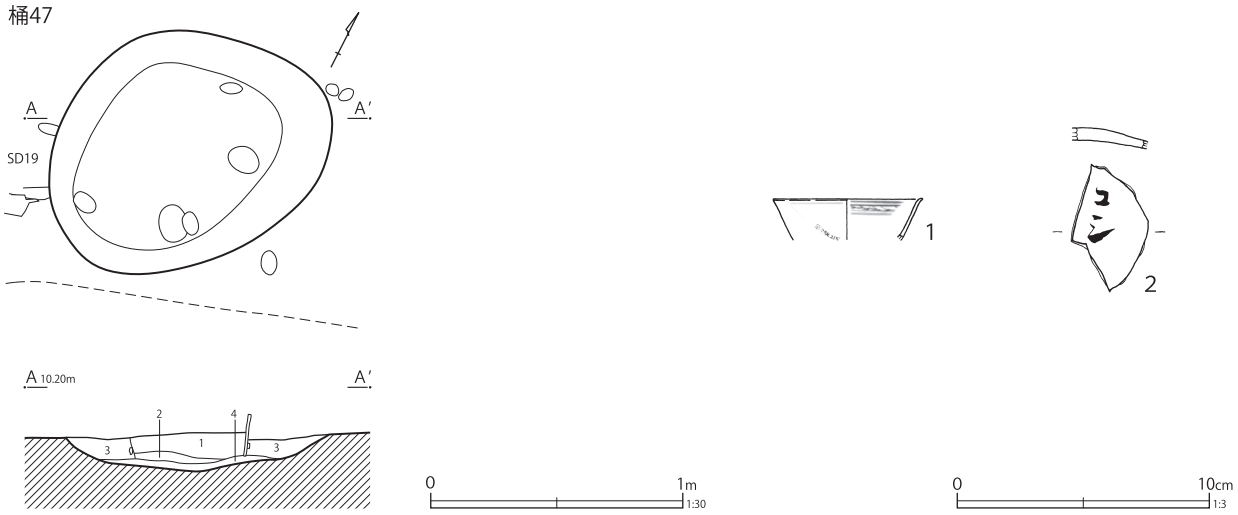


第 46 号埋設桶
1　暗褐色土　灰黄褐色土小ブロック・炭化物粒子 (φ2 ～ 3 ㎜) 含む
2　黒褐色土　灰黄褐色土小ブロック微量　炭化物粒子 (φ1 ～ 2 ㎜) 含む
3　黄褐色細砂　流入土か
4　黒褐色土　灰黄褐色土小ブロック少量　炭化物粒子 (φ1 ～ 3 ㎜) 含む
埋戻し
5　灰黄褐色土　炭化物粒子 (φ1 ～ 2 ㎜) 含む (掘方)

第 106 図　第 46 号埋設桶・出土遺物

第 48 表　第 46 号埋設桶出土遺物観察表（第 106 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	坏	5.0	5.9	(3.1)	-	95	良好	白	桶 46	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面酸化コバルト染付	76-7
2	磁器	碗	(8.7)	[5.4]	-	-	15	普通	白	桶 46	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付	

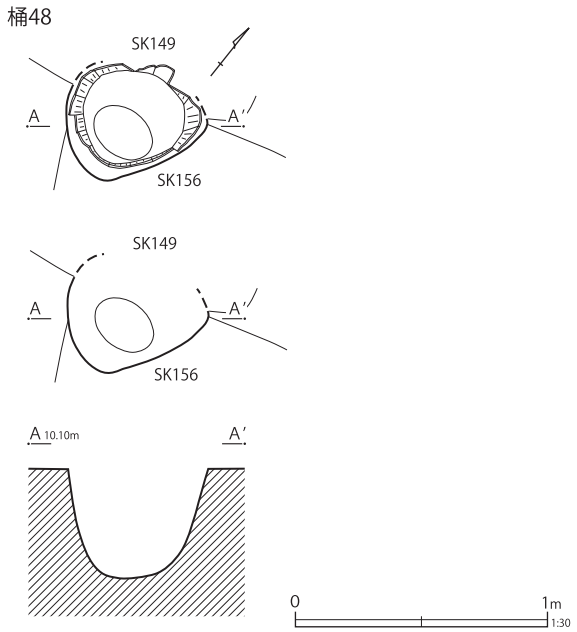


第 47 号埋設桶
1　黒褐色土　炭化物粒子 (φ2 ～ 4 ㎜、2%) 埋戻し (廃絶時)
2　オリーブ灰色土　砂質　砂細粒多量　桶内への流入土か
3　暗褐色土　炭化物粒子 (φ1 ～ 2 ㎜、3%)　埋戻し
4　暗褐色土　オリーブ灰色土小ブロック少量　底面をならす　埋戻し

第 107 図　第 47 号埋設桶・出土遺物

第 49 表　第 47 号埋設桶出土遺物観察表（第 107 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	坏	(6.0)	[1.7]	-	-	5	普通	白	桶 47	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　(卵殻手酒杯)	
2	陶器	土瓶	-	[0.9]	-	IK	5	良好	灰白	桶 47	内面鉄釉　底部墨書	76-8



第 108 図　第 48 号埋設桶

注記されている点から、整理段階で埋設桶に変更した。掘方は長軸90cmほどで、平面形は少し歪な楕円形である。

覆土は上層が大きく掘り込まれているようで、その下に桶の覆土とみられる黒褐色土・黄褐色砂などの堆積が認められた。底面付近が強く硬化しており、桶のあたりであると思われる。

第106図１・２は出土した陶磁器類である。

１は瀬戸美濃系磁器の筒形の坏で、酸化コバルトで外面に秋草と漢詩の一部「多見栽花悦目儔」を染付する。２は、瀬戸美濃系磁器の端反形になる碗であるが、形態からすれば猪口とした方が妥当かもしれない。外面に唐草文と先端が尖る蓮弁が染付けられる。

非掲載の陶磁器には、瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒杯がある。また、陶器の土瓶細片が複数認められる。栗橋９期でも前半の様相と考えられる。

第47号埋設桶（第107図）

Ｅ７-Ｈ６、Ｉ６グリッド、第６・５区画（区画Ｖ・Ｗ）境付近に位置し、地境溝の第19号溝跡と重複する。第19号溝跡には複数の埋設桶が重複して検出されており、本跡の東に第20号埋設桶、西に第12号埋設桶が検出されている。

本跡も土壙として調査されたものであったが、桶材が遺存しており、整理段階で埋設桶に変更して扱った。底板は検出されていない。

掘方は径1.16ｍと大きく、ほぼ中心に径45cmほどの桶が埋設されていた。桶内の覆土は黒褐色土で廃絶時の埋め戻しと観察されており、その下に砂質土の堆積が認められる。従って、桶内の下層に砂が堆積していた可能性が高い。

第107図１・２は出土した陶磁器類である。

１は瀬戸美濃系磁器の坏で、口縁部が端反になる卵殻手酒杯の破片である。内外面とも口縁部に沿って染付が認められる。２は陶器の土瓶で、内面に鉄釉が掛かる。外面には墨書がみられる。

このほか、肥前系磁器の広東碗や、堺明石系陶器の擂鉢片が出土している。

時期の絞り込みが難しいが、陶磁器の細片に、薄手の型成形の鉄釉土瓶の体部があり、また、地方窯系陶器に、長頸の徳利のものとみられる体部片があるので、栗橋８期頃の帰属とみるのが妥当であろう。

第48号埋設桶（第108図）

Ｅ７-Ｊ４グリッド、第４区画（区画Ｘ）の西側、調査区際付近に位置し、第149・156号土壙と重複している。

桶の側板は遺存していたが、底板は確認されていない。

掘方は径55cmで、径40cm強の桶が据えられていた。遺物は出土しなかった。遺構の重複関係は、型紙摺絵染付の磁器を含む第149号土壙より古く、19世紀中葉頃と思われる第156号土壙より新しい。従って本跡は栗橋９期の比較的古い段階に帰属する可能性が高い。

３ 井戸跡

井戸跡は４基が検出された。位置、規模等の基本的な情報は第50表にまとめた。基数が少ないので、遺構図は第109図にまとめ、その後に各井戸跡ごとに遺物図面を示した。

なお、第１・２・４号井戸跡の最終的な埋没時期はかなり降るが、構築時期が遡る可能性も考慮して取り上げた。

第１号井戸跡（第109～112図）

Ｅ７－Ｊ６グリッド、第３区画（区画Ｙ）の東側に位置する。第４号溝跡と重複し、これを掘り込んでいる。また、第４号建物跡の範囲とも重複しているが、建物掘方との直接的な重複関係は無い。

本跡の廃絶時期は、20世紀前葉と思われるが、構築時期はより遡る可能性があること、町場の区画の変遷を考える上で参考になることから、掲載・記録しておく。

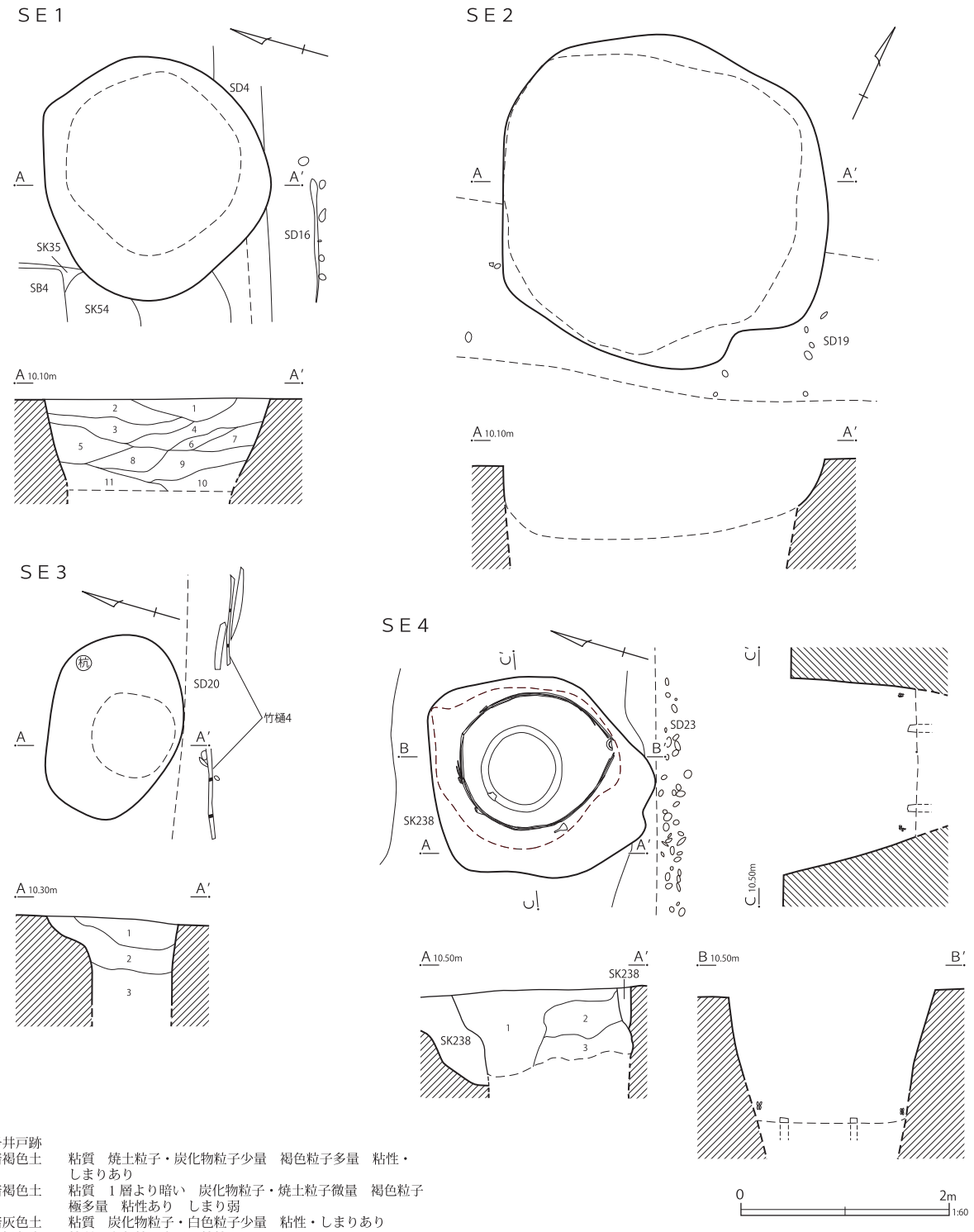
規模は掘方の径が2.15ｍである。覆土は埋め戻し土と思われる粘質土が堆積するが、安全面の問題から下層までは調査していない。

第110～112図に出土遺物を示した。第110図は陶磁器類である。１は瀬戸美濃系磁器の坏で、酸化クロム青磁釉を施し、外面にしのぎ状施文が施されるものである。高台内は露胎で渦巻き状にケズリが施される。２は瀬戸美濃系磁器の坏で、平たい形態のものである。外面に型紙摺絵染付が施される。３は瀬戸美濃系磁器の体部が丸みを帯びる坏で、内面の瓢箪の中に「サッテ」銘を金彩で書く。４は瀬戸美濃系磁器の皿で、平面形が隅の切れる方形を呈する、型成形の皿と思われる。焼き継ぎがみられる。５は京都信楽系陶器の小杉碗で、体部～底部の一部が被熱によって黒化している。６は産地不詳の陶器坏で、外面に呉須絵・鉄絵で松を描く。高台内は露胎、胎土は緻密で硬質である。７は瓦質土器の植木鉢で、底部に僅かに糸切痕が残るが、最終的にはナデで調整している。内面はロクロナデ、口縁部は内外面ともにヨコナデ、外面中位は弱いナデで調整し、外面下位はケズリをヨコナデで消す。断面は中心が黒っぽい黄灰色を呈し、周囲はにぶい黄橙色である。内外面は燻して黄灰色である。胎土には角閃石が多量に含まれる。８は土師質土器の火鉢としたが、別器種の可能性も否定できない。胎土に雲母・長石・石英を多量に含み、三河産ないしは真壁産の可能性が考えられる。外面に縦格子状の施文を有す。９は瓦質土器の火消壺で、硬質・瓦質のものである。胎土に角閃石を一定量含む。10は瓦質土器の焙烙で、やや酸化炎焼成である。口縁部はヨコナデ、外面下位は粗いナデで仕上げる。小破片からの反転復元であり、復元径が若干前後する可能性もある。胎土には角閃石がやや多量に含まれる。11は土師質土器の焙烙で、丸底のものである。外面下位はケズリが施される。器壁は厚手で胎土に角閃石が一定量含まれる、在地の製品である。なお、煤の付着はみられない。

掲載した以外の陶磁器では、磁器の平碗・坏などに、緑・青・茶・橙色など、多色の呉須で絵付けをした物が目立つ。緑色呉須で「北山」の銘款を有す坏もある。産地不詳陶器の緑釉方形植木鉢・朱泥の大型急須（ないしは水差し）、統制番

第 50 表　第一面井戸跡一覧表　単位：m

番号	区画	グリッド	外径	高さ	内径	深さ	掘方径	深さ	備考
1	3	E7-J6	－	－	－	－	2.15	(0.95)	SD4・SK54 重複
2	6	E7-H6	－	－	－	－	3.10	(0.70)	SD19 重複 （二面 SD12・SK410/514 より新）
3	7	E7-H4	－	－	－	－	1.75	(1.00)	
4	9	E7-F4/5	0.80	(0.10)	0.65	－	2.15	(1.00)	タガ径 1.30 × 1.50（表中数字はコンクリ枠の径）　SK238/324 より新 SD23 重複



第１号井戸跡

1	暗褐色土	粘質　焼土粒子・炭化物粒子少量　褐色粒子多量　粘性・しまりあり
2	暗褐色土	粘質　１層より暗い　炭化物粒子・焼土粒子微量　褐色粒子極多量　粘性あり　しまり弱
3	暗灰色土	粘質　炭化物粒子・白色粒子少量　粘性・しまりあり
4	暗褐色土	粘質　白色粒子多量　粘性・しまりあり
5	暗灰褐色土	粘質　白色粒子多量　粘性あり　しまり強
6	暗灰色土	粘質　炭化物粒子・焼土粒子　褐色粒子多量　粘性・しまり強
7	暗灰色土	粘質　６層より明るい　炭化物少量　褐色粒子多量　粘性・しまりあり
8	暗灰色土	粘質　６層より明るい　炭化物多量　焼土粒子少量　粘性・しまりあり
9	暗灰褐色土	粘質　炭化物粒子・焼土粒子・白色粒子少量　粘性・しまりあり
10	暗灰色土	粘質　炭化物・焼土粒子少量　白色粒子多量　粘性強　しまりあり
11	暗灰褐色土	粘質　炭化物粒子少量　白色粒子多量　粘性・しまり強

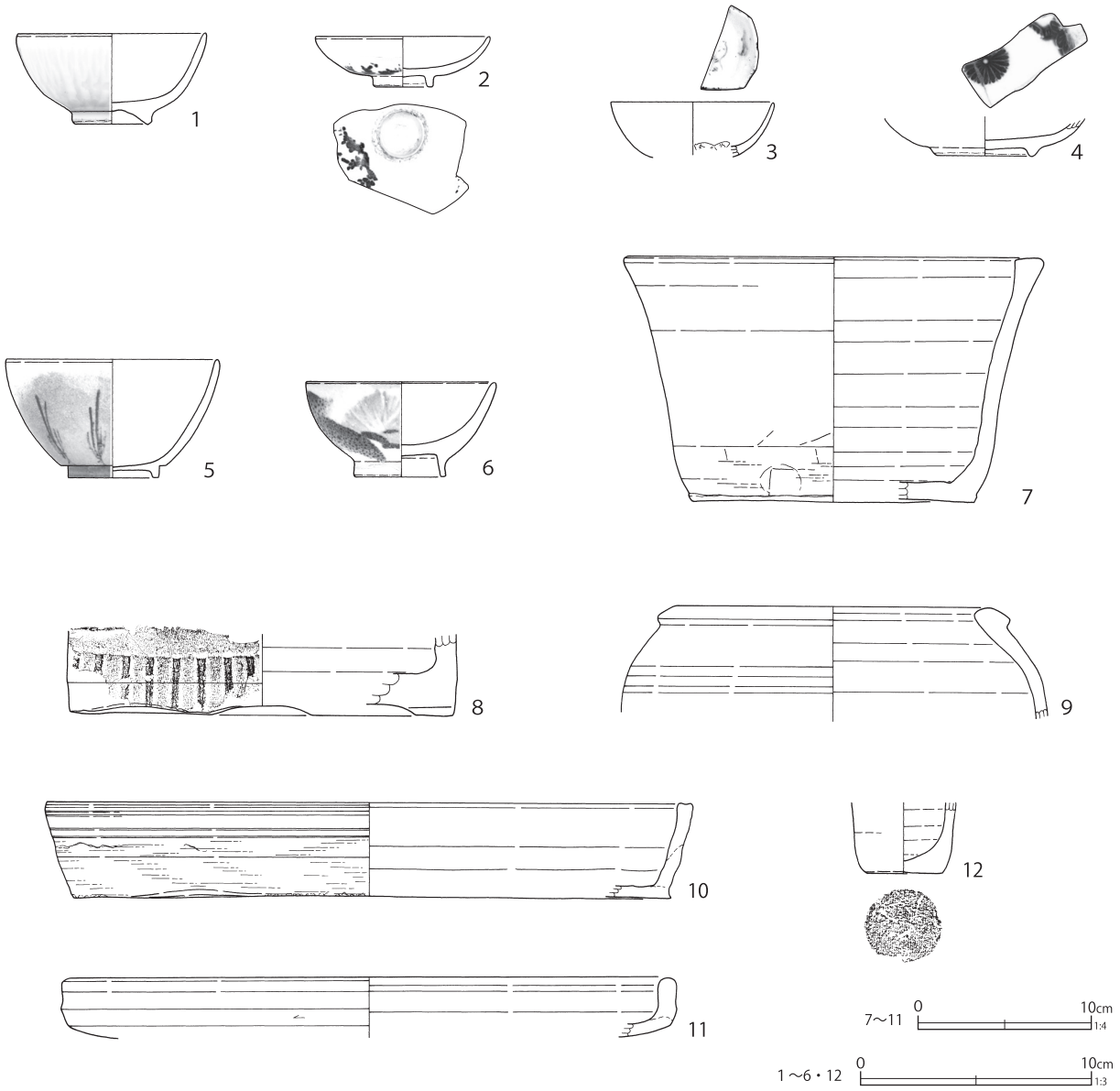
第３号井戸跡

1	暗褐色土	焼土塊多量　炭化物（φ３～10㎜）僅か
2	暗褐色土	焼土塊１層より大きい　炭化物少量
3	黒褐色土	礫少量　炭化物含む

第４号井戸跡

1	暗灰色土	砂質　帯状鉄製品・鉄線・プラ片・ガラス片・ゴム片含む　短期間の埋土
2	黄灰色土	砂質　１層土がブロック状に混入
3	暗灰色土	砂質　１層とほぼ同じ層相　ガラス瓶片・鉄線等含む　シジミ殻集中あり

第 109 図　第１～４号井戸跡



第 110 図　第 1 号井戸跡出土遺物（1）

第 51 表　第 1 号井戸跡出土遺物観察表（1）（第 110 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	坏	(8.0)	3.8	3.0	-	75	普通	白	SE1	瀬戸美濃系　内外面酸化クロム青磁釉　外面しのぎ状施文	
2	磁器	坏	(7.4)	2.1	2.3	-	50	普通	白	SE1	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面型紙摺絵染付	
3	磁器	坏	(7.0)	[2.3]	-	-	10	良好	白	SE1	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面上絵付(金)	
4	磁器	皿	-	[1.8]	(4.0)	-	15	普通	白	SE1	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面陽刻状施文・染付　焼き継ぎ痕	
5	陶器	碗	(9.0)	5.0	3.9	I	45	普通	灰白	SE1	京都信楽系　内外面透明釉　外面鉄釉(小杉碗)　被熱・黒化	
6	陶器	坏	(8.0)	4.0	(3.8)	K	75	良好	灰白	SE1	内外面施釉　外面呉須絵・鉄絵	
7	瓦質土器	植木鉢	(23.7)	14.1	(16.2)	CFHIK	35	普通	にぶい黄橙	SE1	底部糸切後ナデ調整　燻す	
8	土師質土器	火鉢	-	[4.7]	(21.0)	ADE	15	普通	にぶい赤褐	SE1	三河系か　外面施文	
9	瓦質土器	火消壺	(18.0)	[6.4]	-	CI	5	普通	褐灰	SE1	燻す	
10	瓦質土器	焙烙	(37.2)	5.4	(34.2)	CEHI	10	普通	灰白	SE1	やや酸化炎焼成　底部シワ状痕　小破片からの反転復元	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
11	土師質土器	焙烙	(34.6)	[3.4]	(34.9)	CEHI	5	普通	灰白	SE1	底部シワ状痕	
12	土師質土器	焼塩壷	-	[3.0]	3.2	A	20	普通	橙	SE1	底部糸切痕（左）　胎土粉質　被熱・赤変	

号の刻印を有す磁器の急須、格子目状の細かいローラー文を施す瓦質土器火消壷の蓋などがみられる。

第111図１には、木製品の下駄を示す。表裏面に焼印があり、「㊝」と読める。

第112図１～６は金属製品であり、３は三ツ矢サイダーの王冠である。三ツ矢サイダーは明治42年に「三ツ矢シャンペンサイダー」として販売を開始している。４は瓶の蓋で、キューピーマヨネーズのスクリューキャップである。キューピーマヨネーズは大正14年に販売を開始している。この他に、軒桟瓦の軒丸部が１点出土している。８珠文・右巻き三つ巴文のものである。

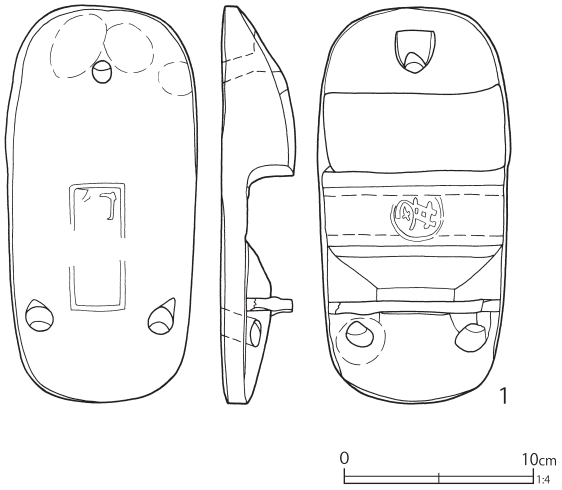
本跡の構築時期は定かではないが、廃絶時期はかなり新しい段階である。おそらく、第４号建物跡が廃絶後に本跡が構築されたものと推定される。

第２号井戸跡（第109図・第113～121図）

Ｅ７-Ｈ６グリッド、第６区画（区画Ｖ）の東側に位置する。北側は地境溝の第19号溝跡と重複する。調査区内でも比較的遺構の分布が少ない場所に位置する。規模は掘方の径が3.10ｍである。覆土は安全面の問題から下層までは調査していない。

第113～115図に出土した陶磁器類を示す。１は肥前系磁器の大碗で、外面に若杉文と鶴、内面底部に二重圏線と環状松竹梅文を染付する。２は肥前系磁器の広東碗で内外面に僅かに煤が付着する。外面に山水文、内面口縁部に二重圏線、底部の圏線内に鷺文を染付する。３は肥前系磁器の端反碗で、焼き継ぎ痕のあるものである。絵付けは丁寧で、内外面に花文や蝶が染付される。４は瀬戸美濃系磁器の碗で、端反形になるが、口縁部が大きく歪む。意図的なものか、偶然歪んだものか判断し難い。透明釉と鉄釉を掛け分けている。５は瀬戸美濃系磁器の碗で、飯碗タイプのものである。外面に絵付けがみられる。６・７は瀬戸美濃系磁器の坏で、蛇の目状高台内を露胎とするものである。６は色絵で、松竹梅や菊花文を外面に表す。７は酸化クロム青磁釉に草花・鶉文を色銅版で染付する。８は瀬戸美濃系磁器の坏で、ゴム印版で漢詩を染付する。

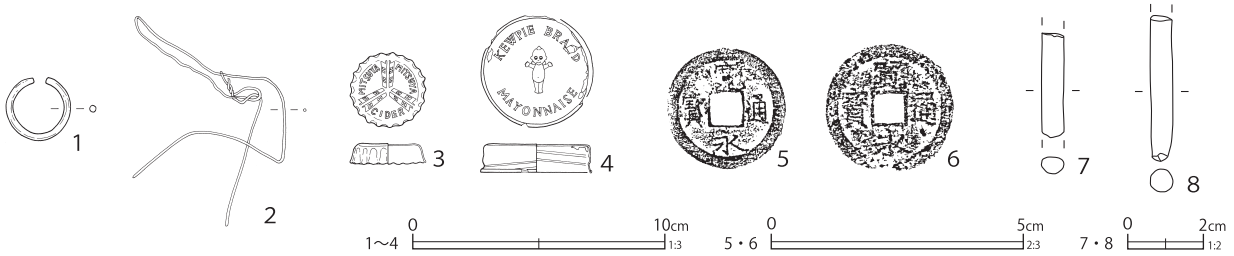
９は肥前系磁器の皿で、口縁部が輪花状のものである。口縁部と底部には接点が無かったが、明らかに同一個体であり、図上で復元して示す。外面は太い一重の唐草、内面には微塵唐草様の鹿の子文、底部に崩れた環状松竹梅文を染付する。蛇



第 111 図　第１号井戸跡出土遺物（２）

第 52 表　第１号井戸跡出土遺物観察表（２）（第 111 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	高さ	口径 / 径	厚さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	下駄	20.9	10.2	3.8	―	―	―	板目	SE1	後歯下駄　焼印「㊝」	



第 112 図　第 1 号井戸跡出土遺物（3）

第 53 表　第 1 号井戸跡出土遺物観察表（3）（第 112 図）

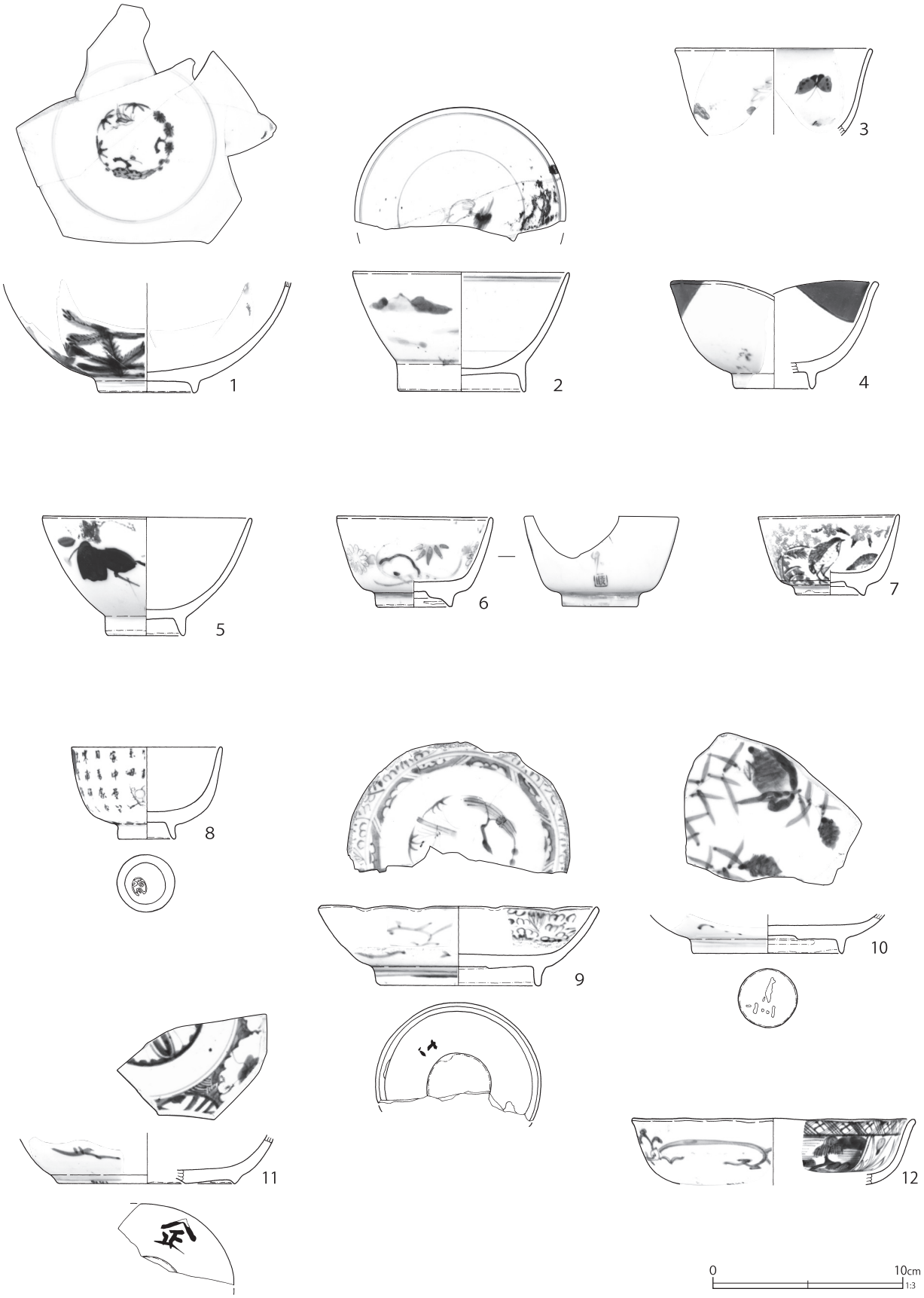
番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	環金具	径 2.5 × 2.4 厚さ 0.25 重さ 3.0	SE1		
2	銅製品	針金	縦 8.3 横 6.0 厚さ 0.1 重さ 3.4	SE1		
3	鉄製品	王冠	径 3.0 × 2.9 高さ 0.8 厚さ 0.05 重さ 3.2	SE1	「MITSUYA CIDER」	278-7
4	鉄製品	瓶の蓋	径 4.4 高さ 1.1 厚さ 0.04 重さ 5.8	SE1	「KEWPIE BRA(N)D MAYONNAISE」	278-7
5	銅製品	銭貨	径 24.1 厚さ 0.9 重さ 2.4	SE1	寛永通寳（新）	
6	銅製品	銭貨	径 25.8 厚さ 1.3 重さ 3.2	SE1	寛永通寳（新）	

番号	種別	器種	長さ	径	重さ	石材	遺構	備考	図版
7	石製品	石筆	[2.7]	0.7	1.8	滑石	SE1	白色不透明	284-2
8	石製品	石筆	[3.8]	0.6	3.2	滑石	SE1	白色不透明	284-2

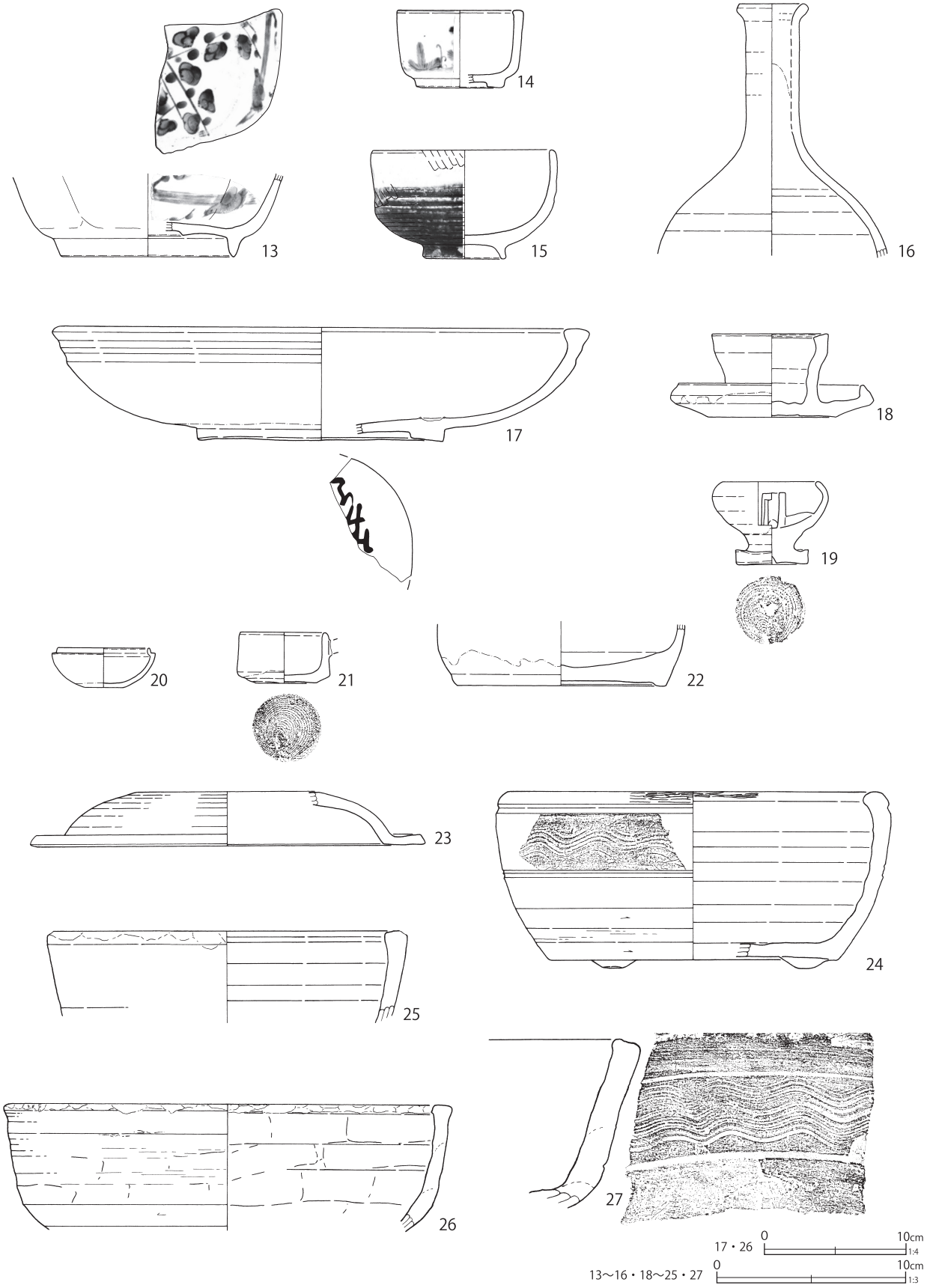
の目状高台の露胎部に焼き継ぎ印「十一」がある。10も肥前系磁器の皿で、内面に葦と思われる草文が染付される。蛇の目状高台の中心に焼き継ぎ印がある。11は肥前系磁器の皿で、蛇の目凹形高台の露胎部に「企」の墨書がある。12は口縁部が輪花状になる皿で、外面の唐草は外線内を濃み塗りする。内面は、体部を縦に分割して花文や松を染付する。漆継がみられる。13は肥前系磁器の鉢で、平面は多角形を呈するものである。内面に梅・鶯を染付する。焼き継ぎがみられる。14は肥前系磁器の小型の香炉で、底部は幅の広い蛇の目状の高台である。また、外面のみでなく、内面まで施釉されている。外面に若杉文を染付する。16は肥前系磁器の徳利で、大型の鶴頸形のものである。遺存範囲には染付は見られない。

15は瀬戸美濃系陶器の腰錆碗である。外面の口縁部と腰部にヘラ状の工具が強くあたっており、若干変形している。17は瀬戸美濃系陶器の皿で、高台が蛇の目状高台のものである。底部に墨書がある。18は瀬戸美濃系陶器の灯火具で、受部が深いタイプの灯明皿である。底部は中心部がくり底になっており、その周囲に径3.6㎝の環状重ね焼き痕が見られる。19は瀬戸美濃系陶器の秉燭で、黒色のフが入る茶色の鉄釉が施される。20は京都信楽系陶器の合子で、極めて薄手のものである。21は瀬戸美濃系陶器の餌入れで、灰釉が施される。棒状の把手が付いていたものらしいが欠失している。22は瀬戸美濃系陶器の徳利で外面に灰釉が掛けられる。一升徳利の底部と思われる。23は施釉土器質の陶器で、鍋類の蓋と考えたが、上下が反対となり鉢類である可能性もある。外面は釉下にケズリが施される。内面は丁寧なナデ調整で平滑である。

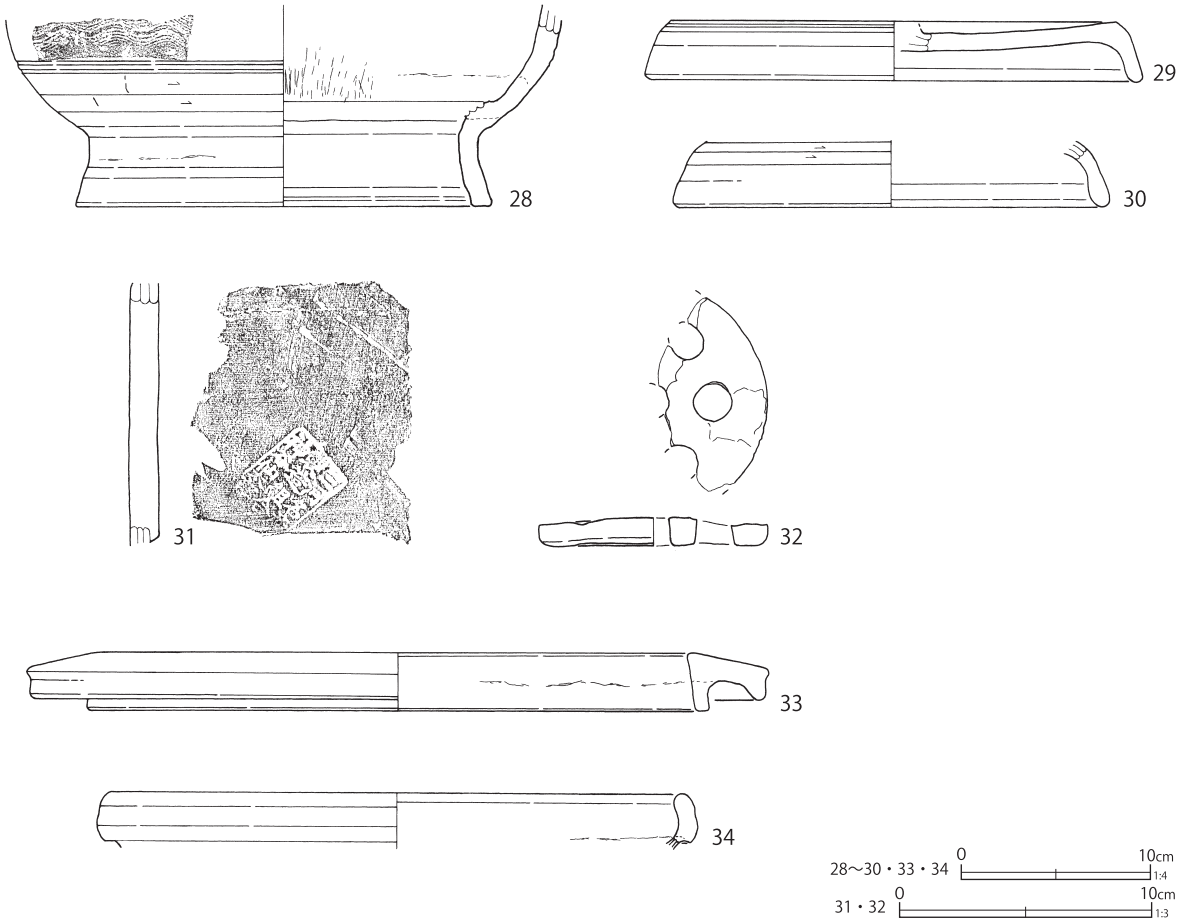
24は瓦質土器の丸火鉢で、硬質・瓦質のものである。口唇部はミガキ、外面に二本の沈線で区画を構成して内部に櫛歯波状文を施文する。下位は横位のケズリを、一部ヨコナデで消している。内面の口縁部は強いヨコナデで、内面はロクロナデ状の回転ナデ痕が残る。底部はヘラナデ調整、脚は低い円筒状である。胎土には角閃石を多く含む。25は土師質土器の丸火鉢で、外面は弱いナ



第 113 図　第２号井戸跡出土遺物（１）



第 114 図　第 2 号井戸跡出土遺物（2）

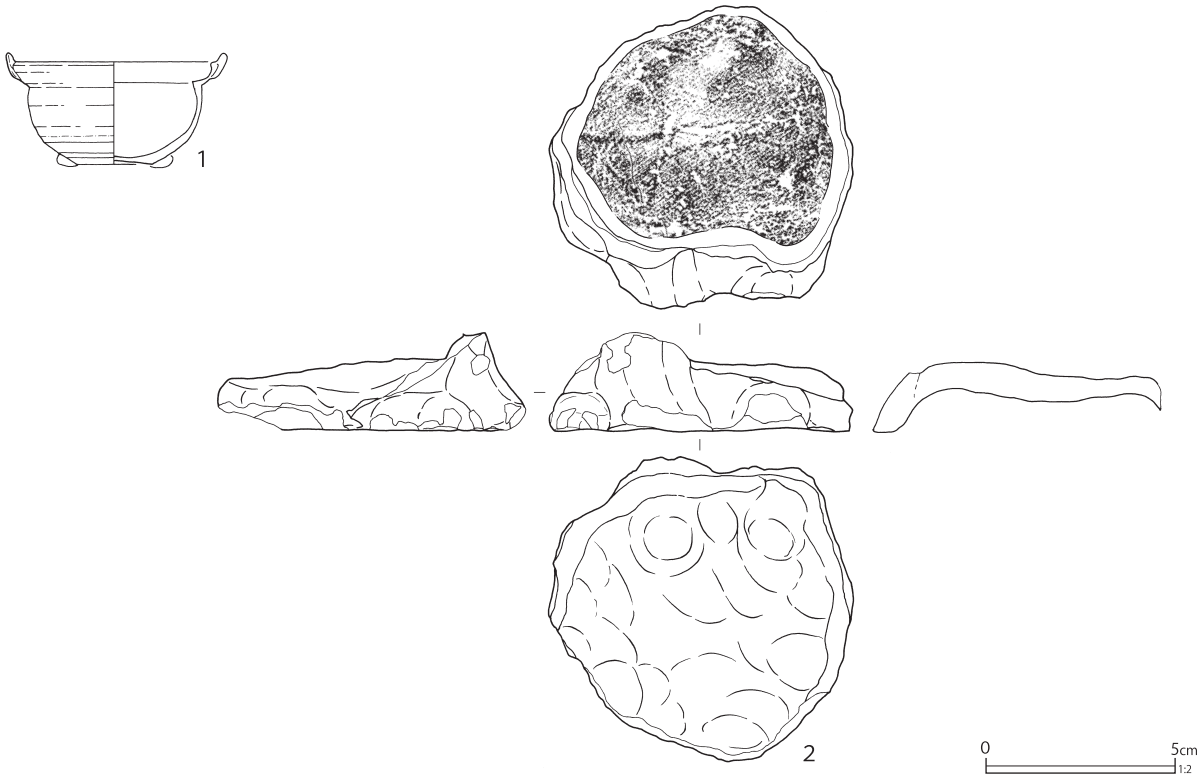


第 115 図　第２号井戸跡出土遺物（３）

第 54 表　第２号井戸跡出土遺物観察表（１）（第 113 ～ 115 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	-	[5.7]	4.9	-	55	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉・染付	
2	磁器	碗	(11.2)	6.2	(6.5)	-	50	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕（広東碗）	
3	磁器	碗	(10.2)	[4.4]	-	-	10	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕（端反碗）	
4	磁器	碗	(10.6)	5.5	(4.0)	-	30	良好	白	SE2	瀬戸美濃系　内外面施釉・鉄釉掛け分け　口縁部歪み大きい	
5	磁器	碗	(10.8)	6.2	3.9	-	45	良好	白	SE2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付・絵付	
6	磁器	坏	7.9	4.7	3.7	-	95	普通	白	SE2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面色絵（金・黄・緑・赤・白）	77-1
7	磁器	坏	7.3	4.1	3.4	-	95	良好	白	SE2	瀬戸美濃系　内外面酸化クロム青磁釉　外面銅版転写染付（青・緑）	
8	磁器	坏	(7.8)	4.8	2.9	-	45	良好	白	SE2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面ゴム印版染付	
9	磁器	皿	(14.4)	4.1	8.3	-	35	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目状高台　焼き継ぎ痕・焼き継ぎ印「十一」（赤）　上下接点ない２破片から図上復元	
10	磁器	皿	-	[2.0]	(7.7)	-	30	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目状高台　焼き継ぎ痕・焼き継ぎ印（赤）	
11	磁器	皿	-	[2.5]	(9.2)	-	10	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目凹形高台　墨書「企」	77-2
12	磁器	皿	(14.6)	[3.4]	-	-	10	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉・染付　漆継痕	
13	磁器	鉢	-	[4.3]	(9.1)	-	20	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉　内面染付　蛇の目状高台　焼き継ぎ痕　被熱	

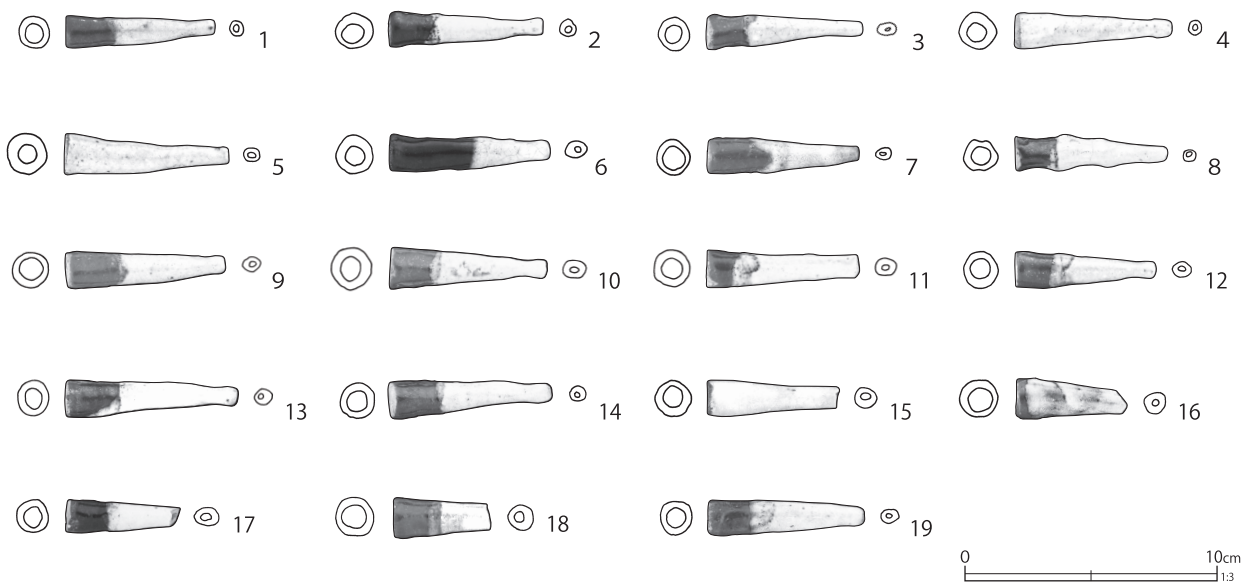
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
14	磁器	香炉	(6.0)	4.0	(3.8)	-	45	普通	白	SE2	肥前系　内外面施釉　外面染付　高台畳付部煤付着	
15	陶器	碗	9.4	5.7	4.0	I	85	普通	灰白	SE2	瀬戸美濃系　内面灰釉　内面灰釉・鉄釉掛け分け　(腰錆碗)	
16	磁器	徳利	3.3	[13.2]	-	-	40	普通	灰白	SE2	肥前系　外面施釉	
17	陶器	皿	(36.2)	8.0	(17.4)	HI	30	普通	灰白	SE2	瀬戸美濃系　内外面灰釉　墨書　蛇の目状高台	
18	陶器	灯火具	5.9	4.3	6.6	I	90	普通	灰白	SE2	瀬戸美濃系　内外面灰釉　底部糸切痕	
19	陶器	秉燭	5.0	4.4	3.5	I	95	普通	灰白	SE2	瀬戸美濃系　底部糸切痕（右）・穿孔　内外面鉄釉	77-3
20	陶器	合子	(4.8)	2.0	1.9	I	45	普通	灰白	SE2	京都信楽系　内外面透明釉	
21	陶器	餌入れ	4.5	2.6	3.2	HI	90	普通	灰白	SE2	瀬戸美濃系　底部糸切痕（右）　内外面灰釉　把手欠失	
22	陶器	徳利	-	[3.2]	10.9	EIK	10	普通	灰白	SE2	瀬戸美濃系　外面灰釉、底部拭き取り	
23	陶器	蓋	-	[2.8]	(19.0)	AI	10	普通	にぶい橙	SE2	施釉土器質　内外面透明釉	
24	瓦質土器	火鉢	(19.0)	9.3	(15.0)	CF	35	普通	灰黄	SE2	底部ヘラナデ　外面櫛歯波状文　口縁部ミガキ　燻す	
25	土師質土器	火鉢	(18.2)	[4.8]	-	AHI	10	普通	にぶい橙	SE2	江戸在地系　胎土粉質　口唇部～内面わずかに煤付着　口縁部二次敲打	
26	瓦質土器	火鉢	(30.4)	[9.0]	-	CEF	5	普通	灰黄褐	SE2	やや酸化炎焼成　口縁部敲打痕・煤付着	
27	瓦質土器	火鉢	-	[8.8]	-	CFH	20	普通	灰白	SE2	外面櫛歯波状文　内面煤付着　口唇部剥離（二次敲打か）　やや酸化炎焼成	
28	瓦質土器	火鉢	-	[10.6]	(22.0)	CFHI	5	普通	にぶい橙	SE2	やや酸化炎焼成　内面煤付着	
29	瓦質土器	蓋	(23.4)	[3.1]	(25.7)	CHIK	20	良好	灰白	SE2	上面砂目をナデで消す　燻す　内面煤付着	
30	瓦質土器	蓋	-	[3.5]	(22.4)	CFHI	5	普通	灰白	SE2	燻す	
31	土師質土器	焜炉	-	[10.2]	-	ADEHI	5	普通	にぶい橙	SE2	三河系　扉裏部分　刻印	
32	土師質土器	目皿	(9.0)	[1.1]	(8.0)	ADE	30	普通	にぶい橙	SE2	三河系か　上面砂目	77-4
33	瓦質土器	竈鍔	(30.8)	3.0	(32.1)	CHIK	10	普通	灰黄褐	SE2	煤付着（最大径 39.2）	
34	土師質土器	焙烙	(30.0)	[2.9]	-	CGHI	10	普通	灰白	SE2	砂目底	



第 116 図　第 2 号井戸跡出土遺物（4）

第 55 表　第２号井戸跡出土遺物観察表（２）（第 116 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重さ	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	ミニチュア	(5.4)	[2.9]	(2.0)	5.9	ＩＫ	良好	褐灰	SE2	鍋　内外面柿釉	
番号	種別	器種	幅／長	高さ	厚さ	重さ	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
2	土製品	人形	[8.0]／[8.0]	[2.6]	－	63.0	ＡＫ	普通	にぶい橙	SE2	江戸在地系　猫か　型成形　内座面掌圧痕　胎土小礫含む	

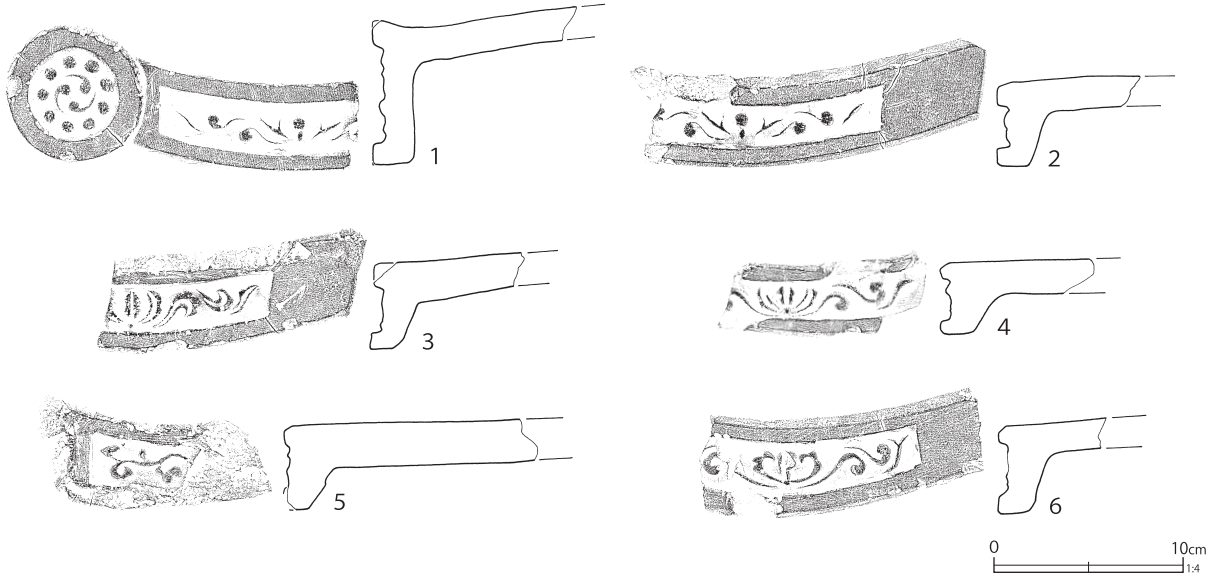


第 117 図　第２号井戸跡出土遺物（５）

第 56 表　第２号井戸跡出土遺物観察表（３）（第 117 図）

番号	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	煙管	長さ 5.8 小口径 0.8 口付径 0.3 重さ 9.7	K	普通	にぶい橙	SE2	吸口　外面鉄・灰釉掛け分け　小口部露胎	284-7
2	陶器	煙管	長さ 6.0 小口径 0.9 口付径 0.3 重さ 9.7	K	普通	にぶい橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け　小口部露胎	284-7
3	陶器	煙管	長さ 6.0 小口径 0.7 口付径 0.2 重さ 8.5	K	普通	にぶい黄橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け　小口部露胎	284-7
4	陶器	煙管	長さ 6.1 小口径 0.8 口付径 0.3 重さ 10.4	IK	普通	にぶい黄橙	SE2	吸口　外面灰釉（濁り）小口部露胎	284-7
5	陶器	煙管	長さ 6.4 小口径 0.8 口付径 0.4 重さ 12.0	IK	普通	にぶい黄褐	SE2	吸口　外面灰釉（濁り）小口部露胎	284-7
6	陶器	煙管	長さ 6.3 小口径 0.8 口付径 0.2 重さ 15.0	－	普通	にぶい褐	SE2	吸口　鉄・白色釉掛け分け　小口部露胎	284-7
7	陶器	煙管	長さ 5.9 小口径 0.9 口付径 0.3 重さ 11.2	K	普通	橙	SE2	吸口　鉄・白色釉掛け分け　小口部露胎	284-7
8	陶器	煙管	長さ 5.9 小口径 0.8 口付径 0.2 重さ 9.0	K	普通	にぶい黄橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け　小口部露胎	284-7
9	陶器	煙管	長さ 6.1 小口径 0.9 口付径 0.3 重さ 11.8	K	普通	にぶい黄橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け　小口部露胎	284-7
10	陶器	煙管	長さ 6.1 小口径 1.0 口付径 0.4 重さ 13.6	K	普通	にぶい黄橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け　小口部露胎	284-7
11	陶器	煙管	長さ 6.0 小口径 0.8 口付径 0.3 重さ 11.2	IK	普通	にぶい黄橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け	284-7
12	陶器	煙管	長さ 5.5 小口径 0.8 口付径 0.3 重さ 10.1	IK	普通	にぶい黄橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け　小口部露胎	284-7
13	陶器	煙管	長さ 6.3 小口径 0.8 口付径 0.2 重さ 10.7	K	普通	にぶい橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け　小口部露胎	284-7
14	陶器	煙管	長さ 6.4 小口径 0.8 口付径 0.2 重さ 10.1	K	普通	にぶい橙	SE2	吸口　鉄・灰釉（濁り）掛け分け　小口部露胎	284-7
15	陶器	煙管	長さ [5.1] 小口径 0.8 口付径 0.4 重さ 9.0	K	普通	灰白	SE2	吸口　外面灰釉（濁り）小口部露胎	284-7

番号	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
16	陶器	煙管	長さ［4.3］小口径0.9 口付径0.3 重さ10.1	K	普通	淡黄	SE2	吸口　外面鉄・灰釉（濁り）掛け分け 小口部露胎	284-7
17	陶器	煙管	長さ［4.4］小口径0.8 口付径0.4 重さ6.4	K	普通	浅黄橙	SE2	吸口　外面鉄・白色釉掛け分け　小口部露胎	284-7
18	陶器	煙管	長さ［3.8］小口径1.0 口付径0.3 重さ8.3	IK	普通	灰白	SE2	吸口　外面鉄・灰釉掛け分け　小口部露胎	284-7
19	陶器	煙管	長さ6.1 小口径0.8 口付径0.2 重さ11.2	K	普通	淡黄	SE2	吸口　外面鉄・白色釉掛け分け　小口部露胎	284-7

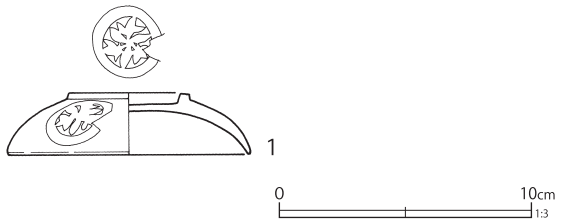


第118図　第２号井戸跡出土遺物（６）

第57表　第２号井戸跡出土遺物観察表（４）（第118図）

番号	種別	器種	長さ	幅	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	［13.6］	［18.8］	7.3	EIK	良好	灰	SE2	右巻き　９珠文	248-9
2	瓦	軒桟瓦	［7.1］	［18.7］	-	EIK	良好	灰	SE2		248-10
3	瓦	軒桟瓦	［8.0］	［15.1］	-	AEI	普通	灰	SE2		249-1
4	瓦	軒桟瓦	［8.1］	［13.0］	-	AEIK	良好	灰	SE2	煤付着	249-2
5	瓦	軒桟瓦	［12.6］	［12.9］	-	EHI	不良	灰	SE2	胎土粉質	249-3
6	瓦	軒桟瓦	［7.2］	［18.6］	-	AEI	良好	灰	SE2		249-4

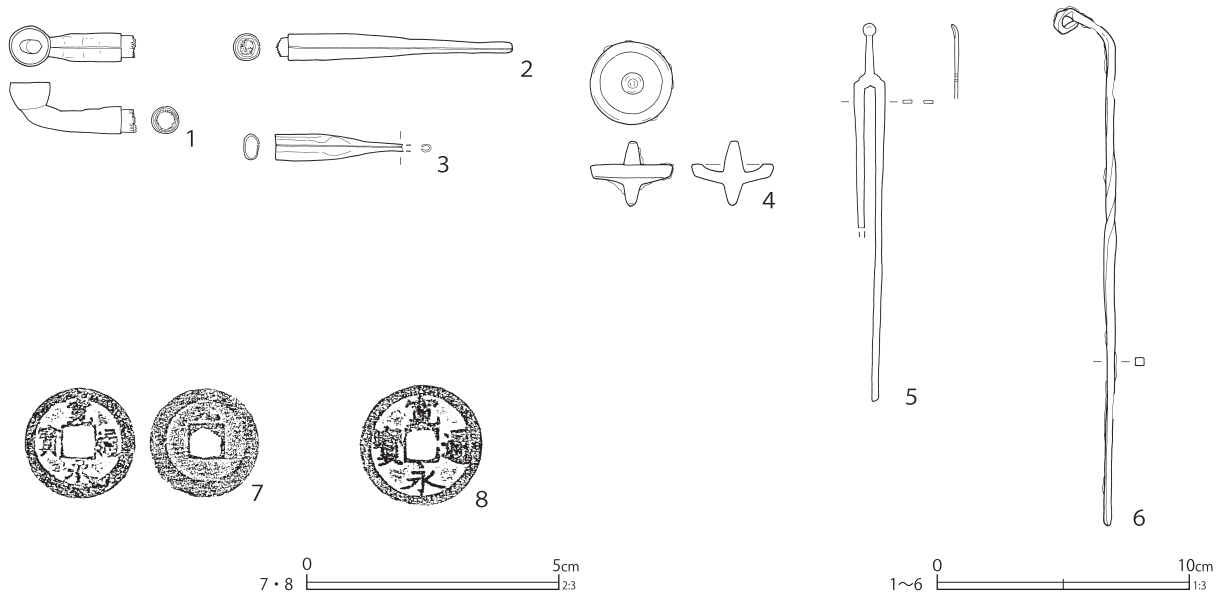
デ、内面は強いヨコナデで調整される。口縁部は外面側のみ二次敲打痕がみられる。内面上位から口唇部にごく少量の煤が付着する。雲母微細粒を含む江戸在地系土器である。26～28は輪高台状の脚台が付く火鉢である。いずれも燻しが甘く、酸化炎焼成ぎみに見える。26は遺存範囲の外面に施文が見られないものである。口縁部はヨコナデ、外面上位は弱いヘラナデ後に一部ヨコナデ調整、下位は横位のケズリ痕が残る。内面は弱いヘラナデ調整で、上位～口縁部にかけて煤が付着する。口縁部は二次敲打痕が多い。胎土に角閃石を



第119図　第２号井戸跡出土遺物（７）

第58表　第２号井戸跡出土遺物観察表（５）（第119図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀蓋	つまみ径（4.8）		－	（9.6）	2.5	－	横木取り	SE2	内面赤漆 外面黒漆 金で家紋３	

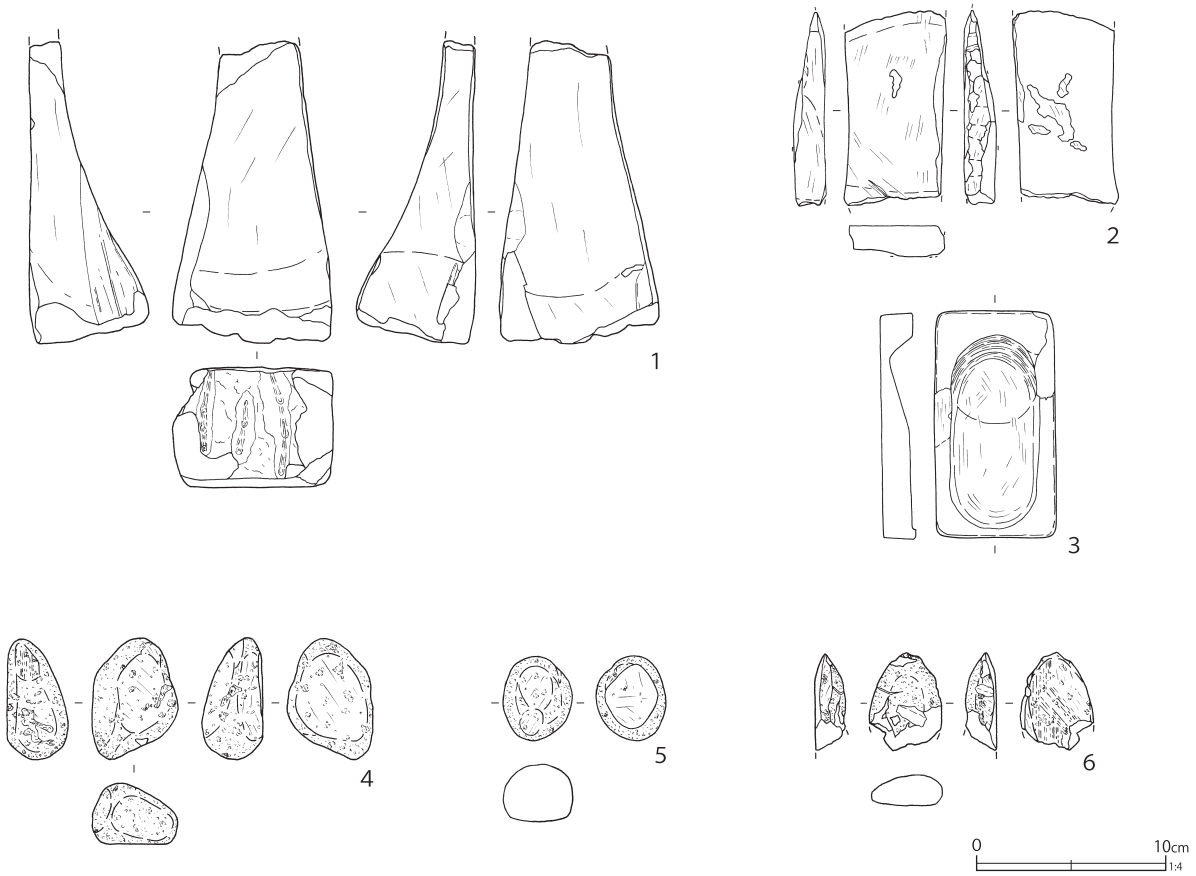


第 120 図　第２号井戸跡出土遺物（８）

第 59 表　第２号井戸跡出土遺物観察表（６）（第 120 図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ 4.4 火皿径 1.6 小口径 1.1 重さ 7.7	SE2	雁首 鍍金あり 羅宇残存	273-1
2	銅製品	煙管	長さ 8.9 小口径 1.0 口付径 0.4 重さ 11.9	SE2	吸口 羅宇残存	273-1
3	銅製品	煙管	長さ［5.0］小口径 1.0 × 0.6 口付径 0.4 × 0.3 重さ 3.8	SE2	吸口 口付欠損 潰れて歪む	
4	鉄製品	独楽	径 3.2 高さ 2.5 重さ 26.1	SE2		
5	銅製品	簪	長さ 15.0 幅 1.2 厚さ 0.2 重さ 7.3	SE2	片脚欠損	274-1
6	鉄製品	火箸	長さ 20.5 幅 0.35 厚さ 0.3 重さ 14.0	SE2	箸頭環状 持ち代捩りあり	
7	銅製品	銭貨	径 21.9 厚さ 0.9 重さ 1.8	SE2	寛永通寶（新）背元	
8	銅製品	銭貨	径 24.5 厚さ 1.0 重さ 3.0	SE2	寛永通寶（古）	

多く含む。27は口縁部の破片で、歪みが大きいので反転復元できなかった。口縁部は強いヨコナデ、以下に二条の沈線で区画し、櫛歯波状文を施文する。下位は横位のケズリ痕が残る。内面はヨコナデ、一部に弱いヘラナデ調整が施されるが不明瞭である。下位に火箸状の痕跡、上位～口縁部に煤が付着する。口縁部は内面側を中心に二次敲打痕が見られる。胎土に角閃石を多く含む。28は脚部から体部下位の破片で、底部は欠損する。外面は沈線区画内に櫛歯波状文を施文するものと考えられ、下位はケズリ痕が残る。内面は強いヨコナデであるが、ヘラナデの可能性もある。下位に火箸状痕跡、上位に煤の付着が認められる。高台部は強いヨコナデで仕上げる。胎土に角閃石を含む。29・30は瓦質土器の蓋である。29の上面は、砂目痕を一方向からナデで消している。体部上位は細く丁寧なケズリで、僅かに光沢が出ている。以下、内面にかけて回転ナデ痕が残るが、内面の中心付近のみ、平滑にナデ調整されている。内面には煤が多く付着している。胎土に角閃石を多く含む。30はやや小型のもので、体部上位は丁寧なケズリが二段以上施される。以下は内面にかけて強いヨコナデで仕上げる。胎土に角閃石が多く含まれる。31は三河系土器の焜炉で、扉裏部分である。刻印は「三河名産／製造組合／神谷仙太郎」銘である。32は土師質土器の目皿で、上面は粗い砂目、側面～下面はほとんど無調整に見えるが、弱いナデを施すものと考えられる。胎土に多量の雲母と径５㎜程までの長石が含まれており、三河系焜炉に伴うものであろう。33は瓦



第 121 図　第２号井戸跡出土遺物（９）

第 60 表　第２号井戸跡出土遺物観察表（７）（第 121 図）

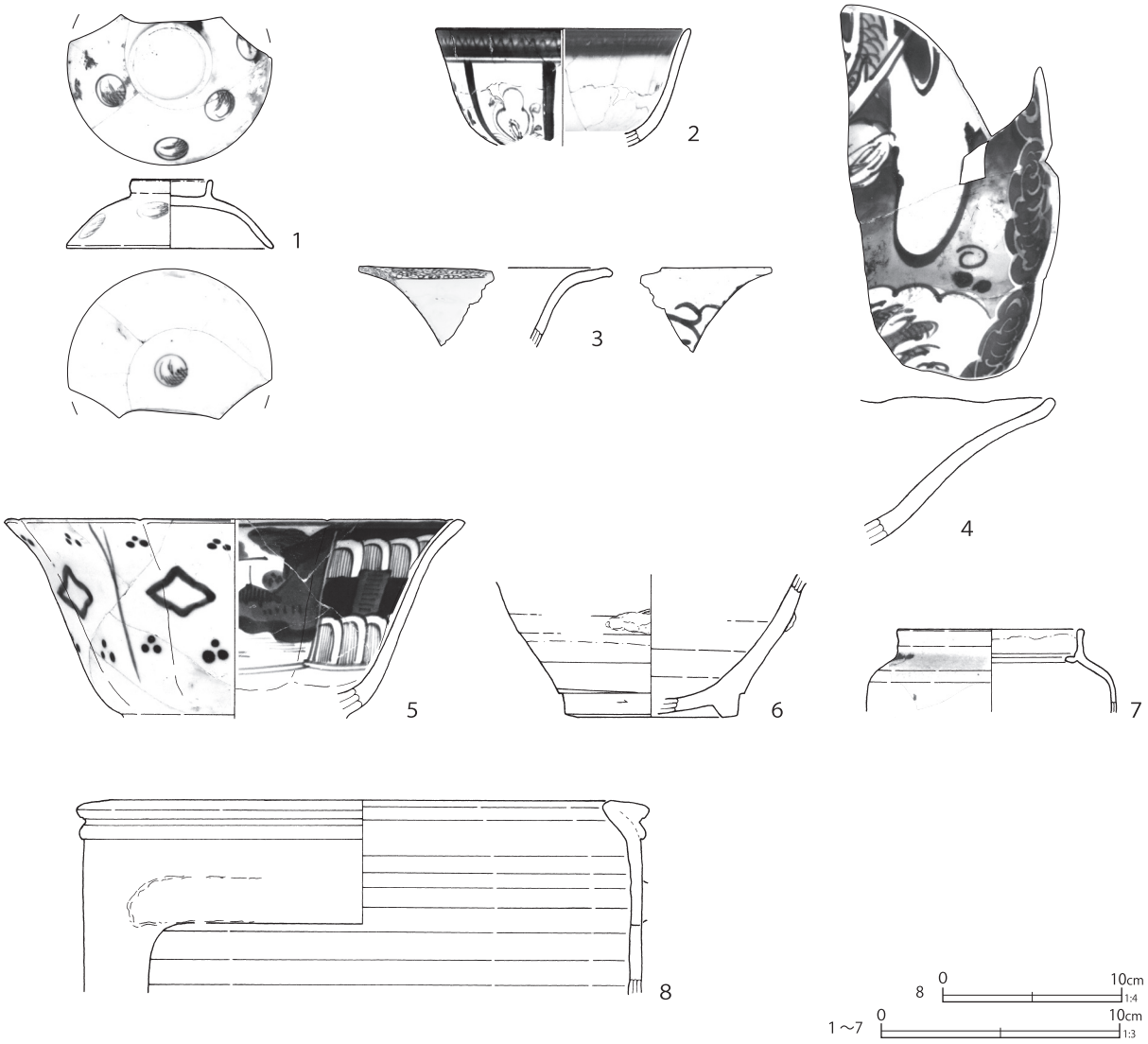
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	砥石	[16.0]	8.5	6.3	777.1	砂岩	SE2	サキノミ状工具痕 砥面４	
2	石製品	砥石	[10.2]	5.5	1.7	134.3	流紋岩	SE2	幅広工具痕か 刃物痕 砥面４	
3	石製品	硯	12.0	6.3	-	261.3	粘板岩	SE2	器高 1.7 ㎝	
4	石製品	磨石	6.4	4.5	3.2	45.0	角閃石安山岩	SE2	多孔質 自然面遺存 側面線状痕 使用面４	284-1
5	石製品	磨石	4.4	3.7	3.0	25.7	角閃石安山岩	SE2	多孔質 自然面遺存 使用面２	284-1
6	石製品	磨石	[5.1]	3.8	1.6	15.1	角閃石安山岩	SE2	多孔質 自然面遺存 線状痕あり 使用面３	284-1

質土器の竈鍔で、上面はナデ調整、内外面両側に面取りがあるが、これもナデを施し、やや丸みを帯びている。内面には接合痕が見られる。胎土に角閃石を含む。34は土師質土器の焙烙で、体部～底部間に大きな段がある。底部は砂目底、体部下位はケズリを完全にヨコナデで消している。従って、口縁部以下の体部はナデ調整を最終調整としている。胎土は硬質で、角閃石を一定量含んでいる。

本跡の陶磁器類には、多色の銅版転写や吹き墨絵付けのものが多く、内面口縁部に緑色圏線を巡らす国民食器碗などが認められた。

第116図１・２は鍋のミニチュアと土製品の人形である。２は比較的大型の人形と思われる。第117図は陶器製の吸い口であり、紙巻煙草の喫煙具と思われる。筒形の形態のもので、灰釉と鉄釉の掛け分けで施釉されている。出土したもの全てを図示した。

第118図は出土した瓦類で、すべて軒桟瓦である。図示した以外に、軒桟瓦５点（うち中心飾り



第 122 図　第３号井戸跡出土遺物（１）

第 61 表　第３号井戸跡出土遺物観察表（１）（第 122 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	蓋	3.3	2.8	(8.6)	-	60	普通	白	SE3	瀬戸美濃系　内外面施釉・染付　弱く被熱（端反碗）	
2	磁器	碗	(10.4)	[4.8]	-	-	15	普通	白	SE3	肥前系　内外面施釉・染付　（端反碗）	
3	磁器	鉢	-	[3.3]	-	-	5	普通	白	SE3	肥前系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕	
4	磁器	鉢	-	[6.1]	-	-	30	普通	白	SE3	肥前系　内外面施釉・染付　煤付着	
5	磁器	鉢	(18.5)	[8.3]	-	-	45	普通	白	SE3	肥前系　内外面施釉・染付	
6	陶器	煙硝摺	-	[5.9]	(6.0)	K	10	良好	灰白	SE3	瀬戸美濃系　外面柿釉　窯内の付着物あり	
7	陶器	土瓶	(7.6)	[3.4]	-	I	5	良好	灰白	SE3	外面灰釉　鉄絵・白盛絵付	
8	瓦質土器	竈	(28.0)	[10.7]	-	ADE	5	普通	灰黄褐	SE3	真壁系　口縁部～外面煤付着 窓幅は任意値で復元	

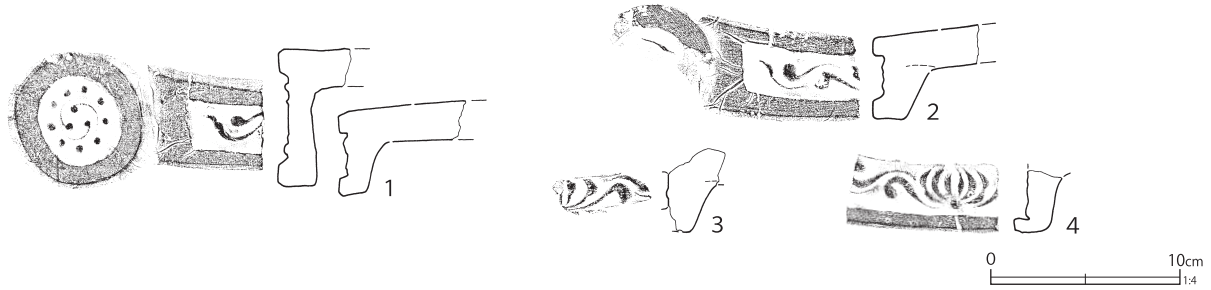
が残る軒平部破片１片、軒丸部のみの破片１片）が出土している。

第119図１は木製品で漆碗の蓋である。

第120図には金属製品、第121図には石製品を示す。

第３号井戸跡（第109図・第122～124図）

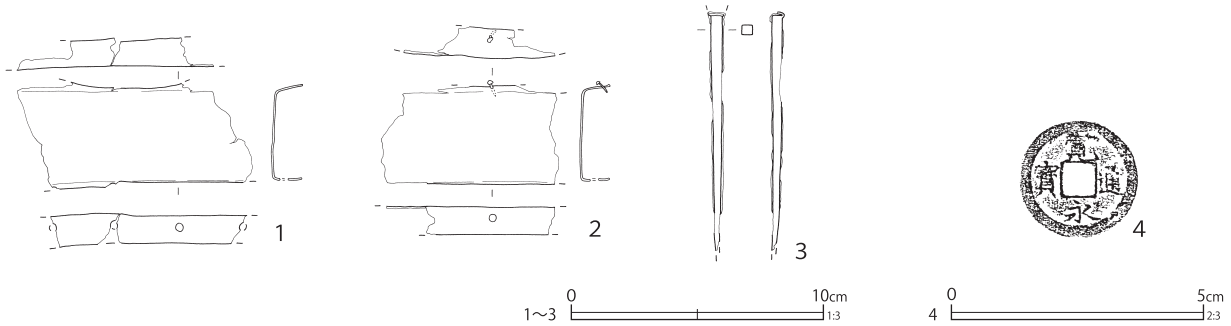
Ｅ７-Ｈ４グリッド、第７区画（区画Ｕ）の西側に位置する。長径175㎝、短径125㎝ほどの楕



第 123 図　第３号井戸跡出土遺物（２）

第 62 表　第３号井戸跡出土遺物観察表（２）（第 123 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	[18.4]	[13.9]	7.0	AHIK	普通	灰白	SE3	左巻き　９珠文　被熱・赤変	
2	瓦	軒桟瓦	[8.6]	[15.3]	(6.6)	AHIK	普通	灰白	SE3	右巻き　被熱・変色	
3	瓦	軒桟瓦	[2.9]	[5.7]	-	AHIK	普通	灰白	SE3	被熱・変色	
4	瓦	軒桟瓦	[3.3]	[8.2]	-	C	普通	灰白	SE3	被熱・変色	



第 124 図　第３号井戸跡出土遺物（３）

第 63 表　第３号井戸跡出土遺物観察表（３）（第 124 図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	不明	縦 4.2 横 [9.3] 高さ 1.2 厚さ 0.08 重さ 24.2	SE3	側面に等間隔に小孔（釘孔）あり	
2	銅製品	不明	縦 4.1 横 [7.0] 高さ 1.2 厚さ 0.08 重さ 18.4	SE3	１と同一個体 側面の孔に釘残存	
3	鉄製品	釘	長さ [9.4] 幅 0.45 厚さ 0.4 重さ 6.7	SE3		
4	銅製品	銭貨	径 23.6 厚さ 1.2 重さ 3.3	SE3	寛永通寶（新）	

円形の掘方を有し、中心が径80㎝程で垂直に落ち込むことから、桶のような構築材が用いられていた可能性がある。なお、安全性の問題から完掘はしていない。覆土が特徴的で、多量の焼土・焼土塊を含むものである。

第122図１は瀬戸美濃系磁器の端反碗の蓋で、内外面に丸に草文の染付が施される。少量の煤の付着が見られる。２は肥前系磁器の端反碗で、口縁部には内外面ともに鋸歯文と濃み塗りを組み合わせ、外面は区画した中に草花文を染付する。３は肥前系磁器の鉢で、口縁部は外方に大きく反る。外面には太い唐草文、内面口縁部には微塵唐草文を染付する。強く被熱しており、焼き継ぎ痕も認められる。４は肥前系磁器の大型の鉢である。被熱して細かく破損した数破片が認められる。全体の構成は不明ながら、内面に雲龍文を染付するものらしい。５は肥前系磁器の八角鉢で、やや大型のものである。内外面とも染付が施される。６は瀬戸美濃系陶器の煙硝摺とみられる。外面は柿釉が施され、窯内での付着物が見られる。

内面は露胎とする。７は陶器の土瓶で、灰釉を基調とするが、鉄絵・白盛で絵付けが施される。８は瓦質土器の竈で、窓部の上に突帯の剥落痕が残る。雲母や径３～４㎜の花崗岩粒子が含まれているが、三河系の土器に比較して鈍い色調である。真壁系の土器と考えて良いであろう。なお、窓幅は任意値での復元である。

陶磁器全体としては、瀬戸美濃系磁器の端反碗が複数認められたが、湯呑形碗は極めて少ない。地方窯系陶器の徳利（所謂「すず徳利」）の破片が認められるのが、やや新しい様相である。

遺物の中には被熱した資料が多く含まれており、図示した以外にも瀬戸美濃系磁器端反碗蓋・燗徳利、肥前系磁器の粗製皿・低い蛇の目状高台を有す皿・徳利、瀬戸美濃系磁器柿釉甕、常滑焼の陶器甕、堺明石系陶器擂鉢・瓦質土器竈などが強く被熱していた。覆土に焼土塊が多く含まれている点も勘案すると、本跡は、第105・121号土壙と同時期の火災による火災処理土壙とみられる。従って、本跡は栗橋７期の火災後に廃絶したものと推定される。

第123図には、瓦を示した。すべて軒桟瓦の破片である。

第124図には金属製品を示した。１・２は不明銅製品で、同一個体と思われる。手すりなど木材を被覆する金具であろうか。３は鉄釘、４は銭貨で寛永通寶の新寛永である。

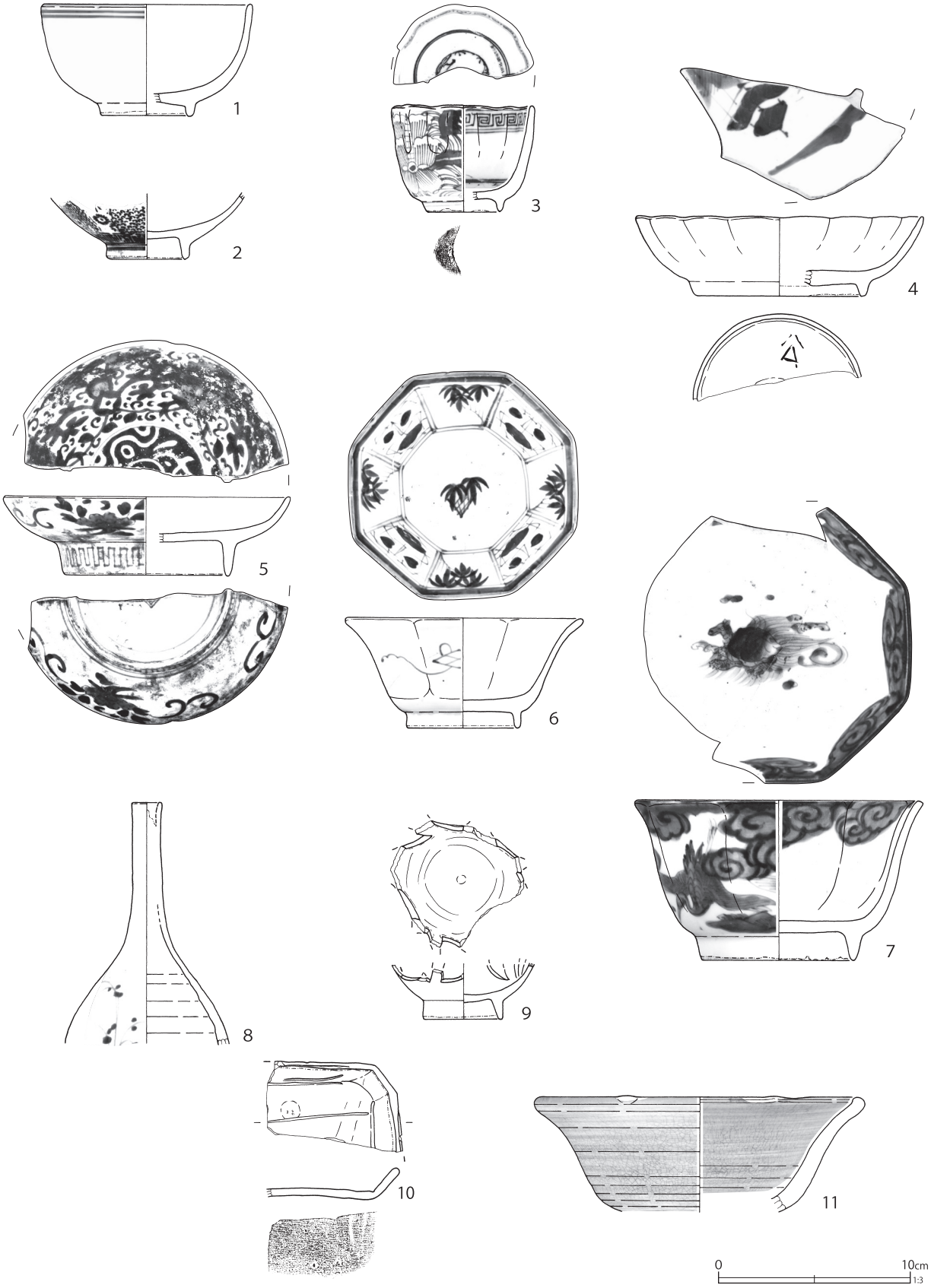
第４号井戸跡（第109図・第125～129図）

Ｅ７−Ｆ４・５グリッド、第９区画（区画Ｓ）の南東側に位置する。重複する第238・324号土壙より新しい。

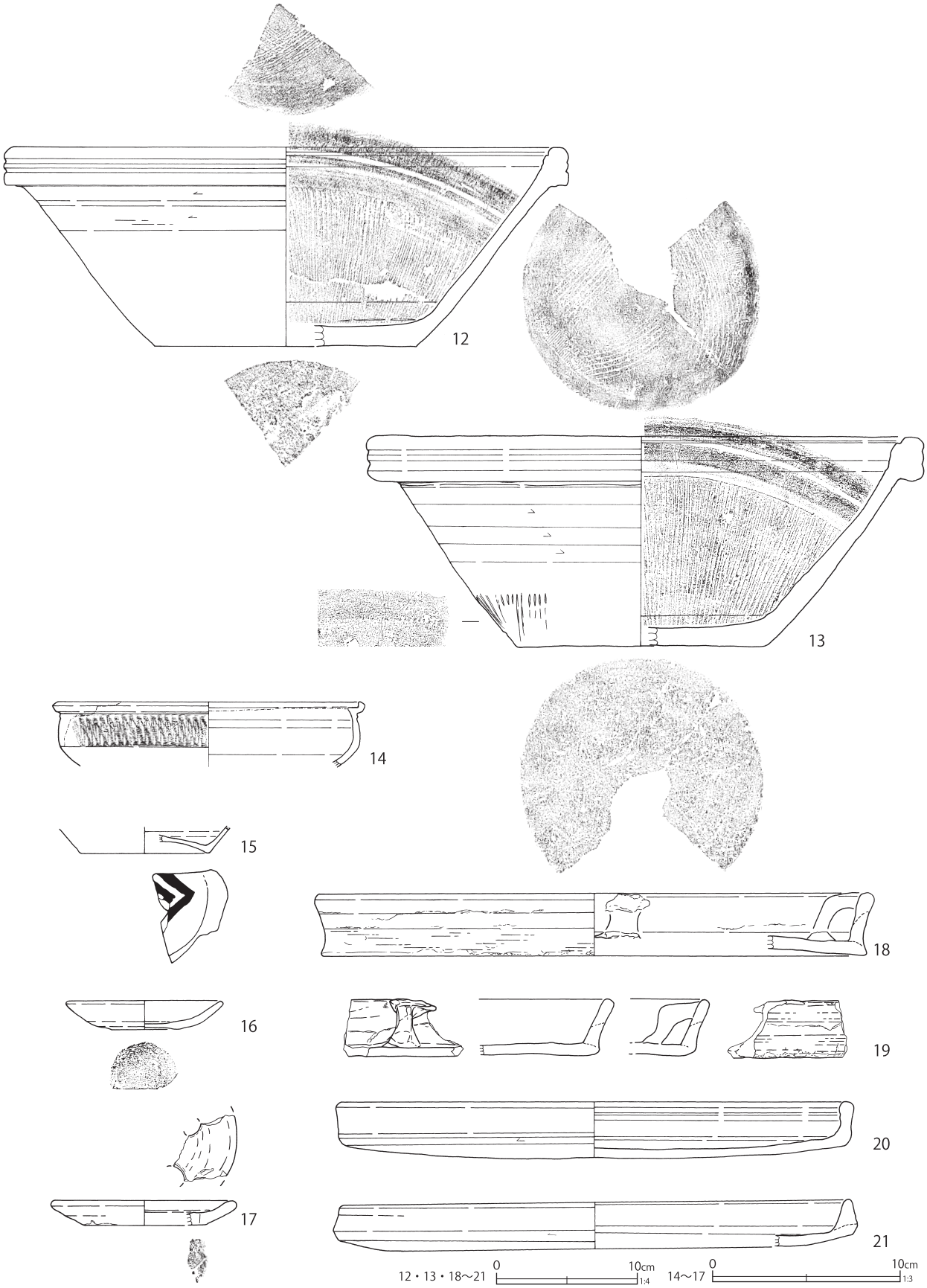
掘方は径2.15ｍである。少なくとも最終段階では、外径80㎝・内径65㎝のコンクリートの井戸枠を採用している。しかし、その外側には桶のタガが長径150㎝ほどに広がった状態で検出されており、コンクリート井戸枠に先行して桶による井戸枠が設置されていた段階があったと考えられる。覆土の堆積からみても、タガは掘方の埋土に覆われており、桶による井戸枠を改修してコンクリート枠にした可能性が高いであろう。覆土は２・３層が後者の段階の掘方埋土、１層が最終廃絶時の覆土で、いずれも砂質土である。

第125・126図には出土した陶磁器類を示した。

１は瀬戸美濃系磁器の碗で、口縁部外面に青帯が巡る国民食器である。２は瀬戸美濃系磁器の碗で型紙摺絵染付が施される。３は肥前系磁器の碗で、口縁部が輪花状になる。外面に唐花文、内面口縁部に角渦文、底部は二重圏線内に環状松竹梅文を濃い色調の呉須で染付する。焼き継ぎ痕がみられるほか、高台内に釘書きがあるようだが、大半が欠損する。４は肥前系磁器の皿で、口縁部は輪花状で口紅が施される。内面に崩れた山水楼閣文が染付される。蛇の目状高台には細い筆致で「△」の墨書がある。５は肥前系磁器の皿で、高台が高いのが特徴である。内外面に唐花と唐草文を染付している。高台部外面は櫛歯波状文を染付し、高台内には圏線の中に二重枠の銘款を有すようである。焼き継ぎ痕がみられ、また全体に煤が顕著に付着している。６・７は肥前系磁器の八角鉢で、６は小型のもの、７は大型のものである。８は肥前系磁器の御神酒徳利で、頸部がかなり長い。外面は露草とみられる草花文を染付している。９は体部に透かしを有する坏で、釉はザラザラしている。胎土は緻密である。朝鮮系の陶器にも見えるが、目跡などの決定的な特徴が無く、産地不明である。10は炻器質の陶器皿で光沢の鈍い柿釉が施されるが、口唇部（上端）は露胎とし、底部も露胎になる。外面には布目がみられる。11は瀬戸美濃系陶器の鉢で、黄色味の強い刷毛目釉が施される。12・13は堺明石系陶器の擂鉢である。いずれも縁帯部は肥厚して丸みを帯びており、13は特に丸みが強い。内面の擂目はいずれも一単位11条である。体部外面はケズリ



第 125 図　第 4 号井戸跡出土遺物（1）



第 126 図　第 4 号井戸跡出土遺物（2）

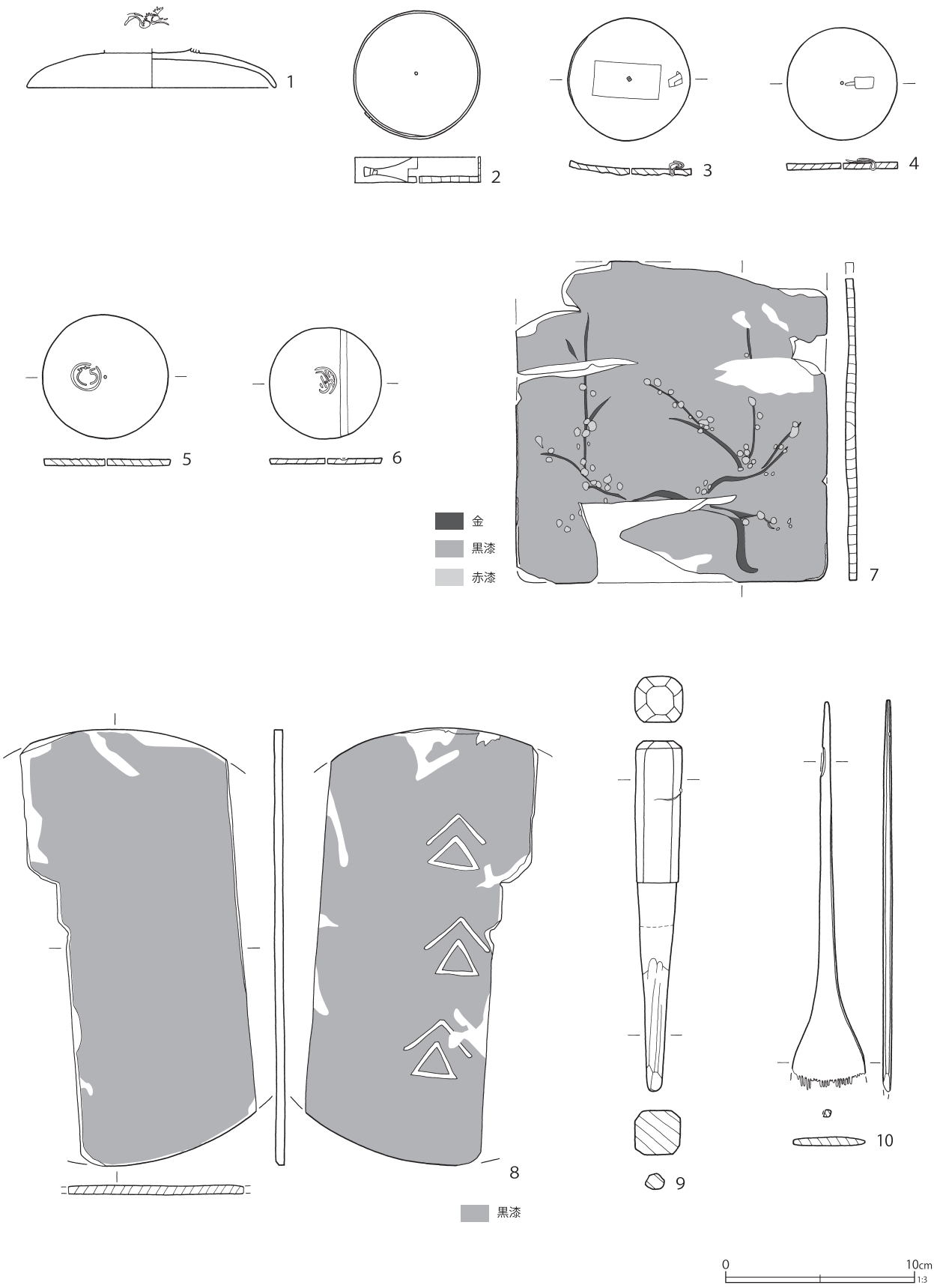
第 64 表　第４号井戸跡出土遺物観察表（１）（第 125・126 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(10.6)	5.7	(4.6)	-	40	良好	白	SE4	瀬戸美濃系　外面絵付（緑）	
2	磁器	碗	-	[3.4]	3.8	-	35	普通	白	SE4	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面型紙摺絵染付	
3	磁器	碗	(7.1)	5.5	(3.6)	-	45	普通	白	SE4	肥前系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕　高台内釘書	
4	磁器	皿	(14.6)	4.1	(8.4)	-	20	普通	白	SE4	肥前系　内外面施釉　内面染付　口紅　蛇の目状高台に墨書「△」	
5	磁器	皿	(14.6)	4.1	(8.4)	-	40	良好	白	SE4	肥前系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕　被熱・煤付着	77-5
6	磁器	鉢	12.0	5.7	5.6	-	100	普通	白	SE4	肥前系　内外面施釉・染付	
7	磁器	鉢	(14.6)	8.2	7.8	-	70	普通	白	SE4	肥前系　内外面施釉・染付	
8	磁器	御神酒徳利	1.4	[12.4]	-	-	60	普通	白	SE4	肥前系　外面施釉・染付	
9	陶器	坏	-	[2.9]	4.0	HK	20	普通	白	SE4	内外面施釉　体部に透かし彫り	77-6
10	陶器	皿	-	1.6	-	I	25	普通	暗赤灰	SE4	型成形　内外面柿釉　口唇部露胎・重ね焼き痕　外面体部～底部の一部に布圧痕	
11	陶器	鉢	(16.4)	[5.9]	-	K	20	普通	灰白	SE4	瀬戸美濃系　内外面刷毛目釉	
12	陶器	擂鉢	(38.0)	14.1	(18.5)	ADEG	20	普通	にぶい橙	SE4	堺明石系　砂目底　内面擂目	
13	陶器	擂鉢	(38.1)	15.0	17.4	DE	60	普通	赤橙	SE4	堺明石系　砂目底　内面擂目　外面下位に重ね焼きによる擂目の転写がみられる	
14	陶器	鍋	(16.0)	[3.4]	-	H	10	普通	灰白	SE4	内面～口縁部灰釉　外面トビガンナ状施文　煤付着	
15	陶器	土瓶		[1.4]	(6.7)	H	5	良好	灰白	SE4	外面灰釉　墨書「△」か　第 242 表 1	77-7
16	施釉土器	灯明皿	(8.0)	1.5	(3.4)	EI	45	普通	橙	SE4	江戸在地系　底部糸切痕　内外面透明釉　胎土粉質　口縁部煤付着	
17	土師質土器	目皿	(9.4)	1.3	(6.6)	CHI	10	普通	にぶい橙	SE4	被熱	
18	瓦質土器	焙烙	(39.0)	4.4	(38.5)	CF	10	普通	灰白	SE4	砂目底　燻す　小破片のため復元径が若干前後する可能性あり	
19	瓦質土器	焙烙	-	4.0	-	C	5	普通	灰白	SE4	底部シワ状痕　弱く燻す	
20	土師質土器	焙烙	(36.0)	4.0	(36.0)	CEHI	40	良好	灰白	SE4	砂目底、中心部摩耗か	
21	土師質土器	焙烙	(35.2)	3.2	(35.0)	CEHI	5	普通	浅黄橙	SE4	砂目底	

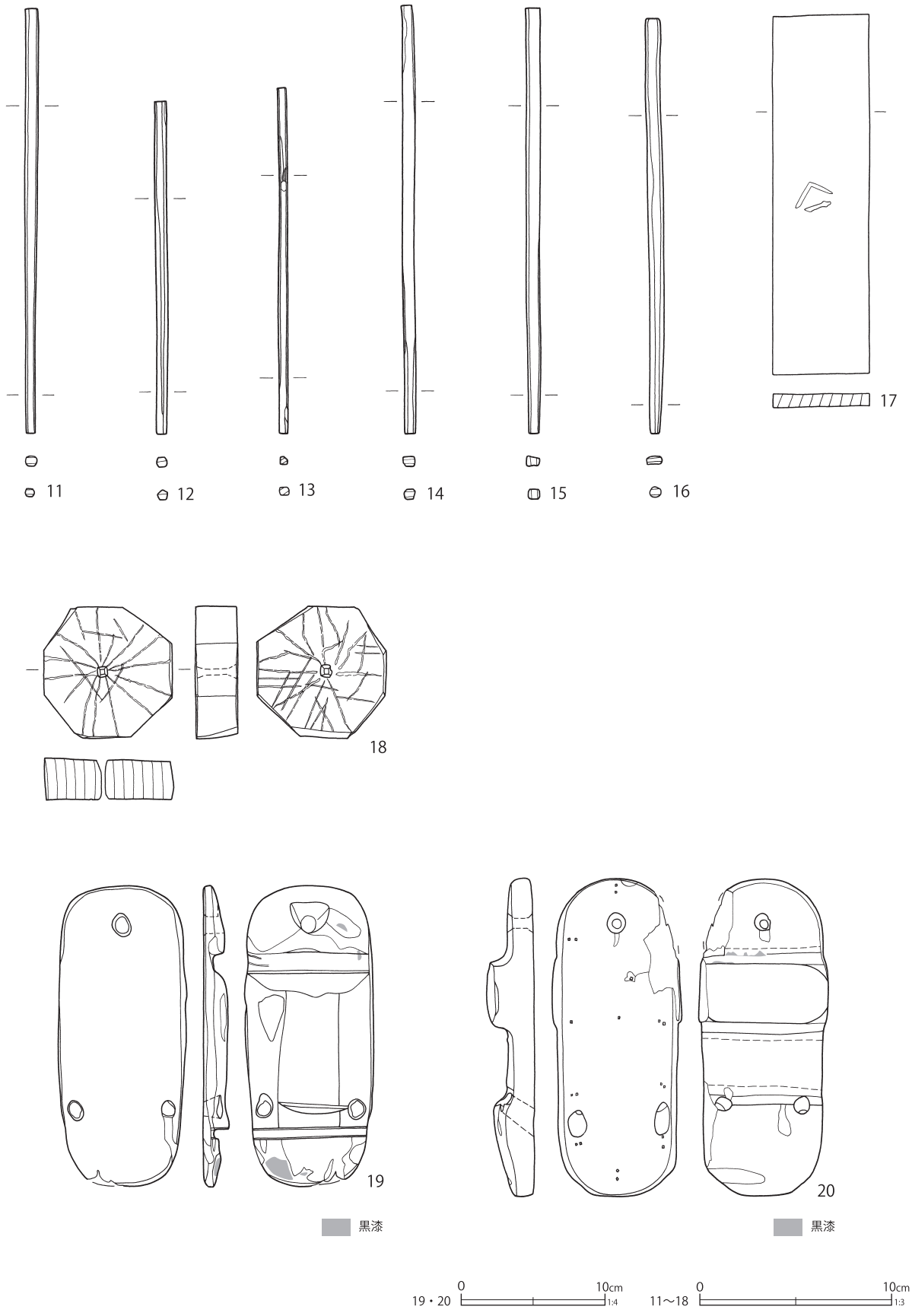
後に、下位ほどしっかりとヨコナデで調整している。12の内面下位には明確な重ね焼き痕がみられ、13の外面には重ね焼きに伴って、別の擂鉢の内面の擂目が転写されている。14は産地不詳の陶器の鍋で、内面に灰釉が掛けられる。外面は露胎で、上部にトビガンナ状施文、下位はケズリが施される。煤が顕著に付着する。15も産地不詳の陶器で土瓶の底である。器壁は薄く均質である。底部に墨書の一部が残り、「△」とみられる。

16は江戸在地系土器の施釉土器で、糸切痕の残る底部まで透明釉が施釉される。口縁部内面側の釉薬が、横方向に連続的に剥離して、そこに煤が付着する。内面は筋状の回転ナデ痕がみられる。17は土師質土器の目皿で、厚手のかわらけ小皿のような形態である。底部はヘラナデで処理される。胎土に少量の角閃石を含む。

18・19は瓦質土器焙烙である。いずれも器高は低く、外面は全面的にヨコナデで調整されている。胎土には角閃石が多く含まれる。18は底部外周に歪みがあるので、体部径から直径を算出して図上復元した。小破片なので、径は若干前後する可能性も残る。20・21は土師質土器の焙烙で、厚手のものである。いずれも体部～底部の接合痕が明瞭である。20は底部中心まで遺存している。底部内面は外周側をやや広く回転ナデし、中心部付近は平坦に調整される。外面側は砂目底だが、中心部付近は平滑で、使用によって摩耗しているものと判断される。21は小破片から反転復元して図化した。底部は粗い砂目である。底部に内耳が接地していた痕跡があることから、内耳を伴うことがわかる。



第 127 図　第４号井戸跡出土遺物（３）



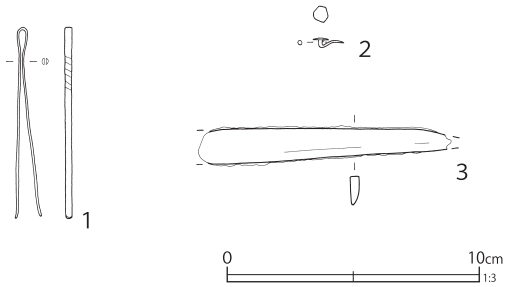
第 128 図　第 4 号井戸跡出土遺物（4）

第 65 表　第４号井戸跡出土遺物観察表（２）（第 127・128 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀蓋	－	－	－	13.0	[2.1]	－	横木取り	SE4	つまみ内に金で文様	
2	木製品	曲物	－	－	－	6.6	1.3	－	柾目	SE4	孔１	
3	木製品	曲物蓋	－	－	0.4	6.4	－	－	板目	SE4	蓋 表面に札跡 樹皮紐残 孔１	
4	木製品	曲物蓋	－	－	0.3	5.8	－	－	板目	SE4	蓋 樹皮紐残 孔１	
5	木製品	曲物	－	－	0.4	6.6	－	－	板目	SE4	底板 孔１ 焼印「壽」	
6	木製品	曲物	－	－	0.3	5.8	－	－	板目	SE4	底板 孔１ 焼印「壽」	
7	木製品	箱	16.9	16.3	0.5	－	－	－	板目	SE4	表裏面黒漆 金で枝 赤漆で花 側板接着痕	
8	木製品	漆塗容器	－	－	0.5	23.0	－	－	－	SE4	底板 表裏面黒漆 焼印「△」３箇所	
9	木製品	栓	18.4	2.5	2.4	－	－	－	板目	SE4		
10	木製品	櫛	[20.4]	3.8	0.4	－	－	－	板目	SE4		
11	木製品	箸	22.0	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状	SE4		
12	木製品	箸	17.2	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SE4		
13	木製品	箸	17.9	0.5	0.4	－	－	－	分割棒状	SE4		
14	木製品	箸	22.2	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SE4		
15	木製品	箸	22.0	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状	SE4		
16	木製品	箸	21.5	0.8	0.5	－	－	－	分割棒状	SE4		
17	木製品	木札	18.7	5.0	0.7	－	－	－	柾目	SE4	焼印「⌒」	
18	木製品	不明	6.8	6.7	2.2	－	－	－	柾目	SE4	表裏面放射状の刻み 中央に孔 裏面墨で２本線	
19	木製品	下駄	20.8	8.9	－	－	[1.8]	－	板目	SE4	陰卯下駄 裏面	
20	木製品	下駄	22.0	7.7	－	－	3.2	－	板目	SE4	連歯下駄 外周鉄 孔（貫通３・未貫通19）側面褐色塗料 裏面黒色塗料・黒漆	

出土した陶磁器類には、瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒杯や肥前系磁器の小丸碗が多い印象を受けるが、年代幅は広い。被熱した遺物も多く、図示したもの以外に肥前系磁器の半球碗蓋、瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒杯、瀬戸美濃系陶器のぺこかん徳利、植木鉢、蛇の目状高台の灰釉大皿、柿釉甕、産地不詳陶器の灰釉土瓶等に、顕著な被熱痕がみられた。これらは本跡と重複し、栗橋７期の火災被熱遺物を多く含む第324号土壙からの混在と判断される。

第127・128図は木製品である。８には「△」の焼き印があるが、これは第126図15に示した陶器土瓶の底にも、類似の墨書が確認できる。「△」の墨書や釘書きは、第112号土壙の燗徳利（底部墨書）や、第244号土壙の皿（高台部釘書き）・第316号土壙の燗徳利（底部墨書）・第324土壙の磁器皿（底部釘書き）・燗徳利（底部墨書）、第342号土壙の燗徳利（底部墨書）など陶磁器にも多くみられ、特に本跡と重複する第324号土壙の遺物に多い。第129図は金属製品で、１は髪留め（ヘアピン）、２は銅製品の鋲、３は鉄製品の刃物である。



第 129 図　第４号井戸跡出土遺物（５）

第 66 表　第４号井戸跡出土遺物観察表（３）（第 129 図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	髪留め	長さ 7.5 幅 0.1 厚さ 0.3 重さ 2.4	SE4		274-1
2	銅製品	鋲	長さ 0.4 幅 0.7 重さ 0.3	SE4		
3	鉄製品	刃物	長さ [10.0] 刃幅 1.1 背幅 0.4 重さ 19.4	SE4		

４ 溝跡・竹樋

溝跡は18条が検出された。この中には竹樋を埋設した遺構が４条ある。暗渠の可能性が考えられるが、削平により上部構造が確認できないので、便宜的に溝跡と一括して扱った。

また、第15～24号溝跡は、各敷地の地境であり、栗橋宿跡では度々「杭列」として報告している遺構である。地境の杭列は、側板を有す溝状遺構が同一箇所で改修・重複しているケースが多いことが、他の調査区で明らかになっている。従って、本報告では一括して溝跡として報告する。

以下、個別に溝跡について図面を示しながら記述していく。

第１号溝跡（第１号竹樋）（第130～134図）

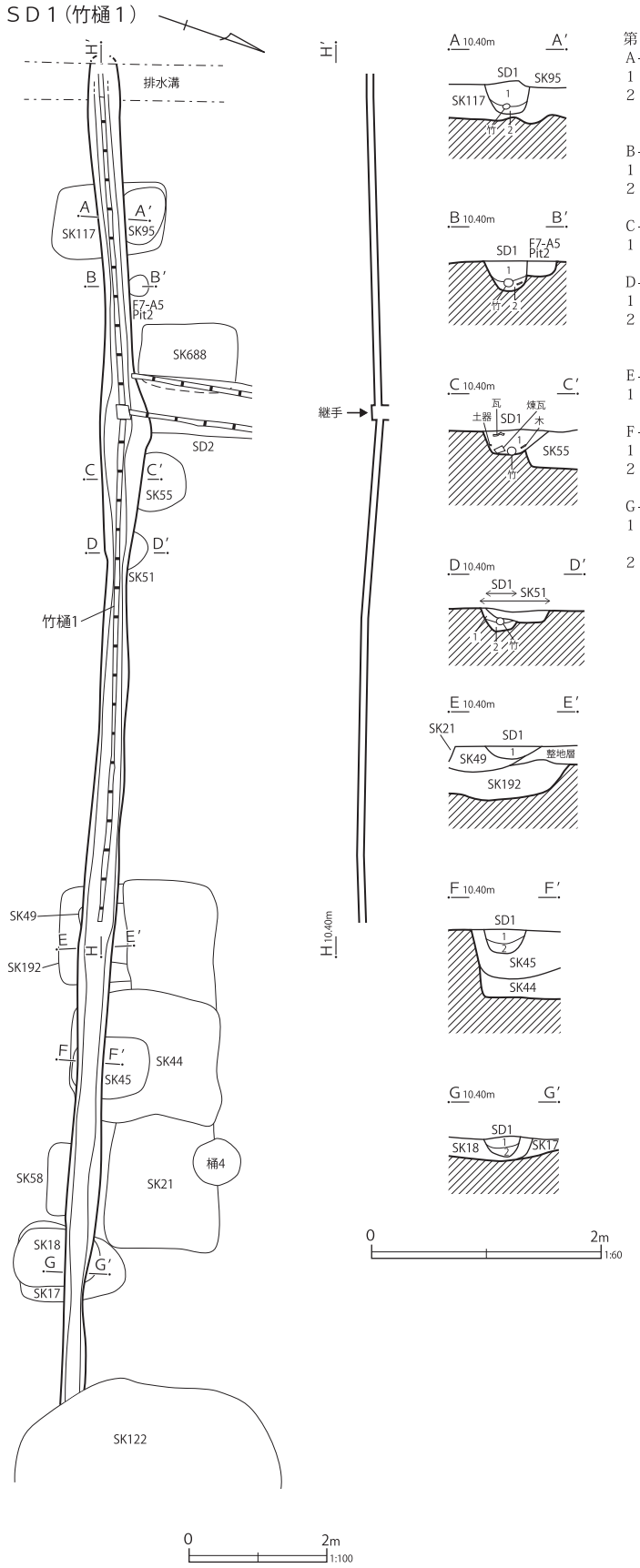
Ｆ７-Ａ５～７グリッドにわたり検出された。第２区画（区画Ｚ）の敷地内を東西に走る。長さ19.5mが検出され、走行方向はN-75°-Eである。

本跡では、西側の溝底面において約11.8mにわたって竹樋が検出された。このことから幅45cmの溝状の遺構は、竹樋の掘方とみられる。覆土観察では竹樋の設置レベルまで、黒褐色～暗褐色の粘質土を埋め戻している。より上層は、下層より明るい暗褐色土である。同様の土層堆積は竹樋が途切れる遺構東側でも観察されるので、本来は溝状遺構の全体に竹樋が設置されていた可能性がある。しかし、東側では竹樋そのものの遺存はまったく認められなかった。竹樋廃絶後に掘り返した可能性もあるだろう。

竹樋の継手は一箇所確認されており、木を刳り抜いている。継手位置で第２号溝跡（第２号

第 67 表　第一面溝跡一覧表　単位：m

番号	区画		グリッド	長さ	幅	深さ	主軸方向	備考
1	2		F7-A5/6/7	19.50	0.45	0.30	N-75°-E	竹樋 1 の掘方　竹樋 2a と連結　SK51/95 より古　桶 5・SK17/18/44/45/49/55/58/117/192・F7-A5 P2 より新　SK122 重複
竹樋 1 (SD1)			F7-A5/6	11.80	-	L=9.90	N-75°-E	竹樋 2a と連結
2	2 ～ 4		E7-J5 F7-A5	11.00	0.83	0.30	N-10°-W	竹樋 2a/2b の掘方　SD1(竹樋 1) と連結 SB5・SD4/17・SK71/688 より新　SK120 重複
竹樋 2a (SD2)			E7-J5 F7-A5	10.05	-	L=9.90	N-10°-W	竹樋 1 と連結
竹樋 2b (SD2)			E7-J5 F7-A5	6.00	-	L=9.80	N- 8°-W	
4	3		E7-J6/7 F7-A5/6	23.40	0.70	0.70	N-75°-E	竹樋 3 掘方 SE1・SK73/75/86/87/98/100/122/124 重複 SK144 より古 SD2(竹樋 2a/2b) より古
竹樋 3 (SD4)			E7-J6/7 F7-A5/6	22.00	-	L=9.50	N-75°-E	竹樋 1/2a より低い
5	1		F7-A7	2.00	0.40	-	N-20°-W	
6	4		E7-J5	3.60	0.60	0.08	N-75°-E	SK287 より新
7	4		E7-I6	4.30	0.40	0.17	N-20°-W	SK289/293 より新　SK198 重複
8	9		E7-F3/4	4.45	0.55	0.12	N-70°-E	SK230/334/339 より新
15a	2		F7-A5/6/7,B5	23.00	-	0.60	N-75°-E	SB3 より新　SB1/2・桶 3/6・SK9/11/24/31/92 重複
15b	2		F7-A5,B5	7.30	-	0.60	N-72°-E	西側根太長 3.25m　東側根太長 3.95m・幅 0.25 ～ 0.30m　SB3 重複
16	3		E7-J6 F7-A5/6	19.00	-	0.50	N-72°-E	桶 4・5 重複 SK74・87・122 重複 SD4(竹樋 3) と並走
17	4		E7-I7,J5/6/7	23.70	-	0.30	N-72°-E	SD2 より古　SK313 重複　SK155 重複
18	5		E7-I5/6,J4/5	23.50	-	0.15	N-72°-E	SK145b 重複
19	6		E7-H6,I4/5	23.00	-	0.35	N-72°-E	桶 11/12/20/21/22/23/47・SE2・SK175/206/214/219/220 重複
20	7		E7-H4/5	14.00	-	0.45	N-72°-E	竹樋 4 あり　SK335 より新
竹樋 4 (SD20)			E7-H4	4.50	-	L=9.90	N-72°-E	
21	8		E8-G4/5	17.00	-	-	N-72°-E	道路跡の南側
22	8		E8-G4/5	18.00	-	-	N-72°-E	道路跡の北側
23	9		E7-F3/4/5	19.10	-	0.50	N-73°-E	SE4 桶 10 重複
24	9		E7-E3/4	10.50	-	0.20	N-75°-E	SK272 重複



第１号溝跡

A-A′
1　暗褐色土　砂粒子少量
2　黒褐色土　砂粒子微量　SD1 を掘削した後埋め戻して竹管に勾配をつける

B-B′
1　暗灰色土　粘質　白色粒子・焼土粒子少量　粘性あり　しまり弱
2　暗灰色土　１層より暗い　粘質　褐色粒子少量　粘性あり　しまり強

C-C′
1　暗灰色土　粘質　炭化物粒子少量　白色粒子少量　粘性・しまりあり

D-D′
1　暗灰色土　粘質　炭化物粒子・白色粒子少量　粘性あり　しまり強
2　暗灰色土　１層より暗い　粘質　炭化物粒子多量　白色粒子少量　粘性・しまりあり

E-E′
1　暗灰色土　粘質　褐色粒子・炭化物粒子多量　粘性なし　しまり弱

F-F′
1　暗灰色土　粘質　炭化物粒子・白色粒子多量　粘性なし　しまり弱
2　暗褐色土　粘質　白色粗粒子多量　粘性なし　しまり弱

G-G′
1　暗褐色土　粘質　炭化物粒子・焼土粒子・白色粗粒子多量　粘性・しまり弱
2　暗褐色土　１層より暗い　炭化物粒子多量　褐色粒子少量　粘性・しまりあり　瓦出土

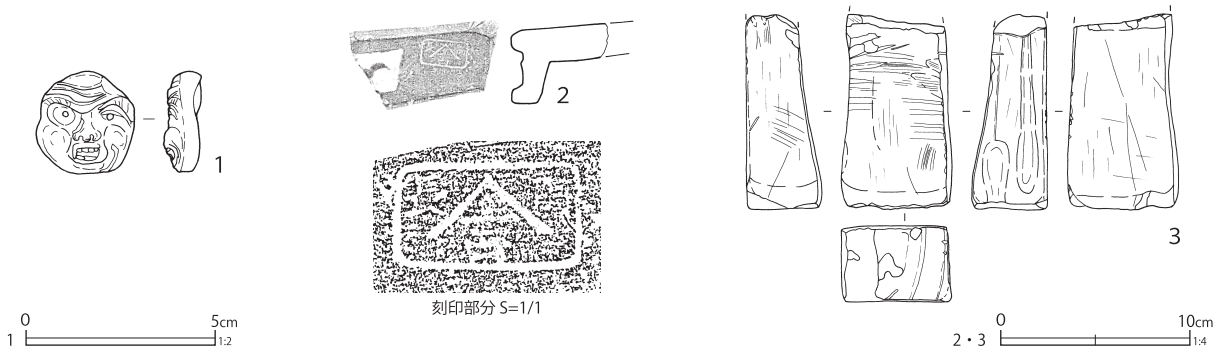
第 130 図　第１号溝跡

第 131 図　第 1 号溝跡出土遺物（1）

第 68 表　第 1 号溝跡出土遺物観察表（1）（第 131 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	11.2	4.7	4.1	-	65	良好	白	SD1	瀬戸美濃系　内外面施釉・銅版転写染付	
2	磁器	坏	(7.0)	3.2	2.7	-	60	良好	白	SD1	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付	
3	磁器	坏	(7.9)	4.1	3.8	-	70	良好	白	SD1	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面銅版転写染付（緑・茶）	
4	磁器	鉢	(8.7)	[6.6]	-	-	20	良好	白	SD1	瀬戸美濃系　内外面施釉・酸化コバルト染付　口紅	
5	磁器	鉢	(10.0)	[2.4]	-	-	5	普通	白	SD1	淡路珉平　内外面黄色釉	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
6	陶器	灯明皿	(10.3)	2.1	(4.4)	HIK	40	普通	灰白	SD1	瀬戸美濃系　内外面柿釉　外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
7	陶器	植木鉢	(27.0)	[22.6]	-	IK	25	普通	灰白	SD1	内外面灰釉	
8	陶器	土瓶	-	[4.7]	(6.2)	K	40	良好	灰白	SD1	外面青緑釉　底部墨書「⌀」ヵ	78-1
9	瓦質土器	火鉢	-	[5.0]	(23.0)	CI	5	普通	黄灰	SD1	脚部　外面ミガキ　燻す	
10	瓦質土器	目皿	(24.0)	1.7	(23.5)	CHI	20	普通	橙	SD1	下面砂目　被熱・赤変・上面白化	



第 132 図　第１号溝跡出土遺物（２）

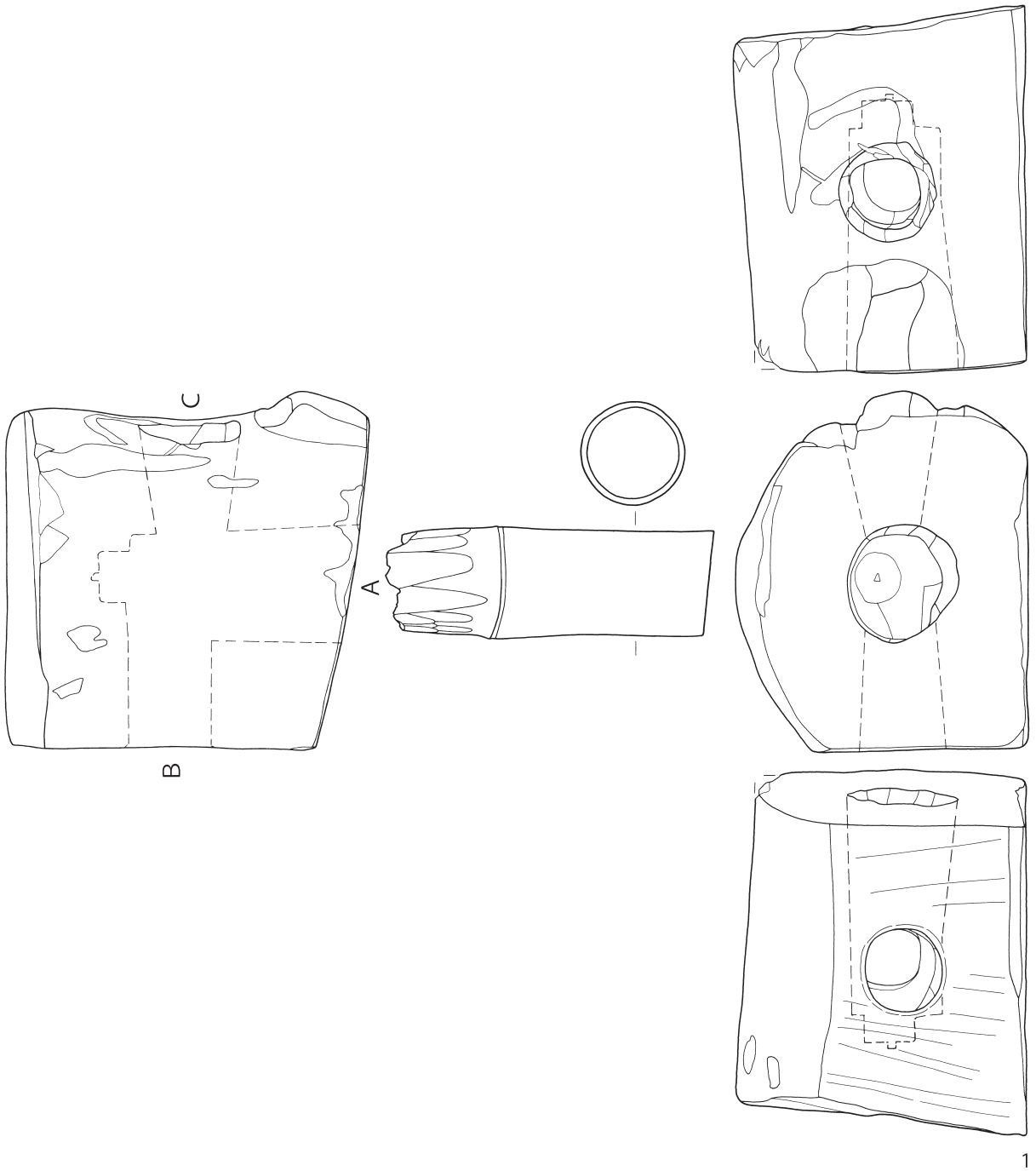
第 69 表　第１号溝跡出土遺物観察表（２）（第 132 図）

番号	種別	器種	幅 / 長	高さ	厚さ	重さ	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	土製品	泥面子	2.5/2.6	-	0.9	4.6	A H K	良好	にぶい橙	SD1	F7A5Gr 一枚型成形 芥子面	242-4
番号	種別	器種	長さ	幅	径	胎土	焼成	色調		遺構	備考	図版
2	瓦	軒桟瓦	[5.1]	[8.1]	-	AEI	良好	灰		SD1	刻印「舎」「阿 / 長」	249-10
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材			遺構	備考	図版
3	石製品	砥石	[10.3]	5.9	4.0	408.3	流紋岩			SD1	工具痕 刃物痕多数 砥面 5	

竹樋）に接続して、北側に分岐する。竹樋の傾斜方向はあまり明確では無い。第142図には、各竹樋の傾斜方向が分かり易いように、横方向を1/200、縦方向を1/100に縮尺を変えた図を提示した。第１号竹樋は、中心の継手部分が最も低く、一方向への傾斜を示していないことが分かる。第２号竹樋への供給を考えれば、東西両方向から導水した可能性もあろうが、同時期に両方向から導水したというのは不自然である。第１号竹樋の東側が遺存していないことや、第２号竹樋が二本並行して検出されている点を考慮すれば、掘り返しや、導水方向の付け替えが行われたと考えるほうが蓋然性があろう。

その際に注目されるのが、第１号竹樋と第２号竹樋を接続している継手である（第133図）。継手に竹樋を差し込む孔の形状は、第２号竹樋を接続する孔（A）を正面として、左手に東側からの竹樋を受ける孔（B）、右側に西側からの竹樋を受ける孔（C）が穿たれている。その孔を観察してみると、Bの孔が丁寧に削られて、側面が滑らかになっているのに対し、A・Cの孔は穿孔が雑で、両者の穿孔に時期差がある可能性が高い。つまり、東側から導水するBから、第２号竹樋のAへの導水が当初の水道であったものを、後に、Cを穿って、西側のCからAへの導水に改修している可能性がある。改修時にAの孔も削り直したとみられる。このことは、東側の竹樋が途中で無くなることや、第２号竹樋に新旧があることと関係するものであろう。

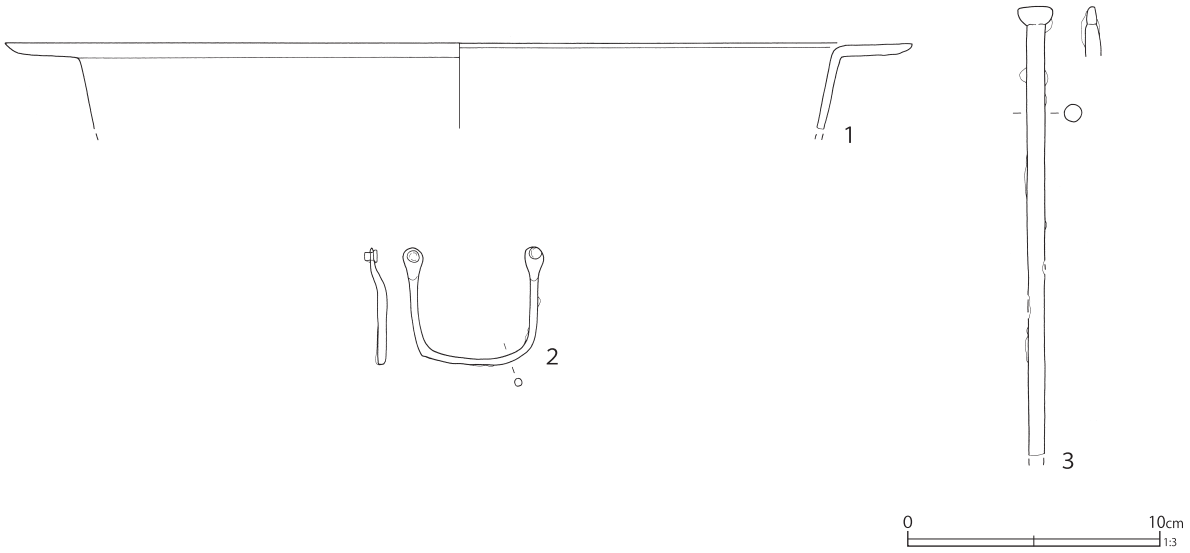
第131図に出土した陶磁器を示す。１は瀬戸美濃系磁器の平碗で、銅版転写で精緻な染付を施す。２・３は瀬戸美濃系磁器の坏で、２は酸化コ



第 133 図　第 1 号溝跡出土遺物（3）

第 70 表　第 1 号溝跡出土遺物観察表（3）（第 133 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	竹樋の継手	22.5	22.3	―	―	18.3	芯持材	SD1 竹樋 1	孔 3　樹皮付着　竹樋管付属（径 6.5　長 20.2） 鉄製環状金具が付属	



第 134 図　第１号溝跡出土遺物（４）

第 71 表　第１号溝跡出土遺物観察表（４）（第 134 図）

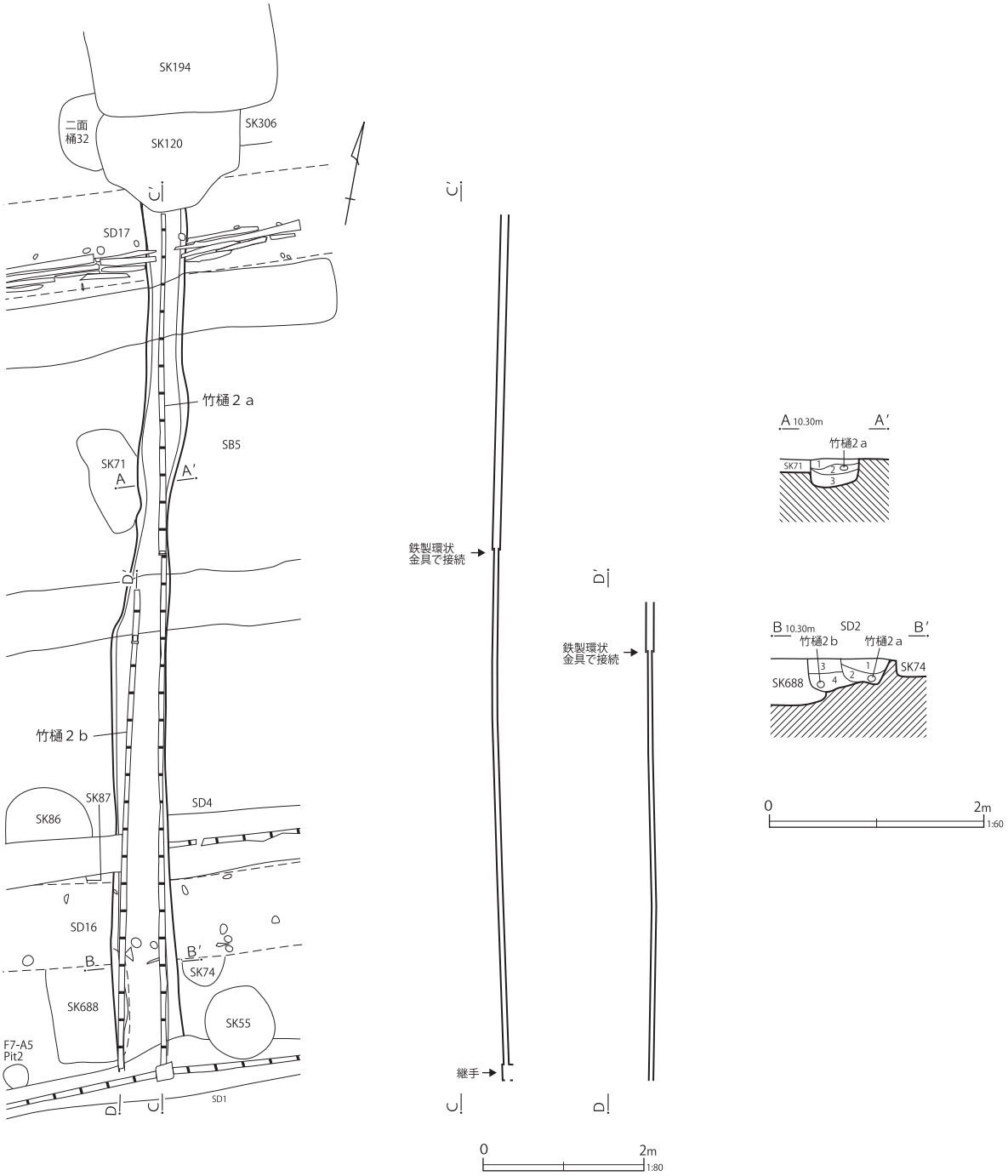
番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	鉄製品	鍋	口径（36.0）器高［3.4］厚さ 0.4 重さ 136.6	SD1	F7A5Gr	
2	鉄製品	把手	縦 4.7 横 5.7 厚さ 0.4 重さ 6.7	SD1	F7A5Gr	
3	鉄製品	火箸	長さ［17.8］厚さ 0.7 重さ 32.8	SD1	F7A5Gr	

バルト染付が施された端反の坏である。３は色銅版で染付を施す腰が張る端反の坏である。４は瀬戸美濃系磁器で筒形の鉢類である。外面に低い突帯が巡り、その突帯と口唇部は錆釉が施される。内外面ともに酸化コバルト染付が施される。５は淡路珉平系磁器の鉢で、黄釉が施釉される。全体に少量の煤が付着するが断面にも付着している。６は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、薄く光沢のある柿釉が施される。受けは径が小さく、上端は釉剥ぎされる。外面の重ね焼き痕の径も小さい。外面は極めて細かい単位で回転ケズリが施されている。７は産地不詳の陶器植木鉢で、白色味の強い灰釉が施釉される。光沢は鈍い。８は陶器の土瓶である。内面は透明釉が薄く掛かり、上位ほど回転ナデの稜が明瞭である。外面の青緑釉は光沢が強く色調も鮮やかである。外面露胎部はケズリ痕が残るが、脚部付近より下では平滑で、下端をナデで調整している可能性がある。底部に墨書があり、「⊠」の一部とみられる。

９は瓦質土器の火鉢で、硬質・瓦質のものである。低い脚を有し、外面は顕著にミガキが施される。胎土に角閃石を含む。10は瓦質土器の目皿であるが、被熱により赤変する。上面は周縁部のみ回転ナデ、中心に向かっては平滑にナデ調整しているようだが、被熱による白化が強く調整を観察し難い。下面は砂目を残す。

本跡の陶磁器類には、銅版転写染付の磁器が一定量含まれているが、重複関係の記録では、型紙摺絵染付を最新とする第95号土壙に掘り込まれているとされる。本跡と重複して、より古い遺構では、第44・45・49号土壙には酸化コバルト染付の磁器が、第17・18・192号土壙には型紙摺絵染付の磁器が、第192号土壙には銅版転写染付の磁器が含まれていた。本跡の出土遺物と重複遺構の遺物に時期的な齟齬も認められるが、いずれにしても栗橋９期の構築である。

ＳＤ２（竹樋２ａ・２ｂ）



第１号溝跡

A-A′

1　暗褐色土　粘質　炭化物粒子多量　粘性・しまりあり

2　暗褐色土　１層より暗い　粘質　炭化物粒子・粗砂粒子少量　粘性あり　しまり強

3　暗褐色土　１層より暗い　粘質　炭化物粒子・焼土ブロック（φ10㎜）多量

B-B′

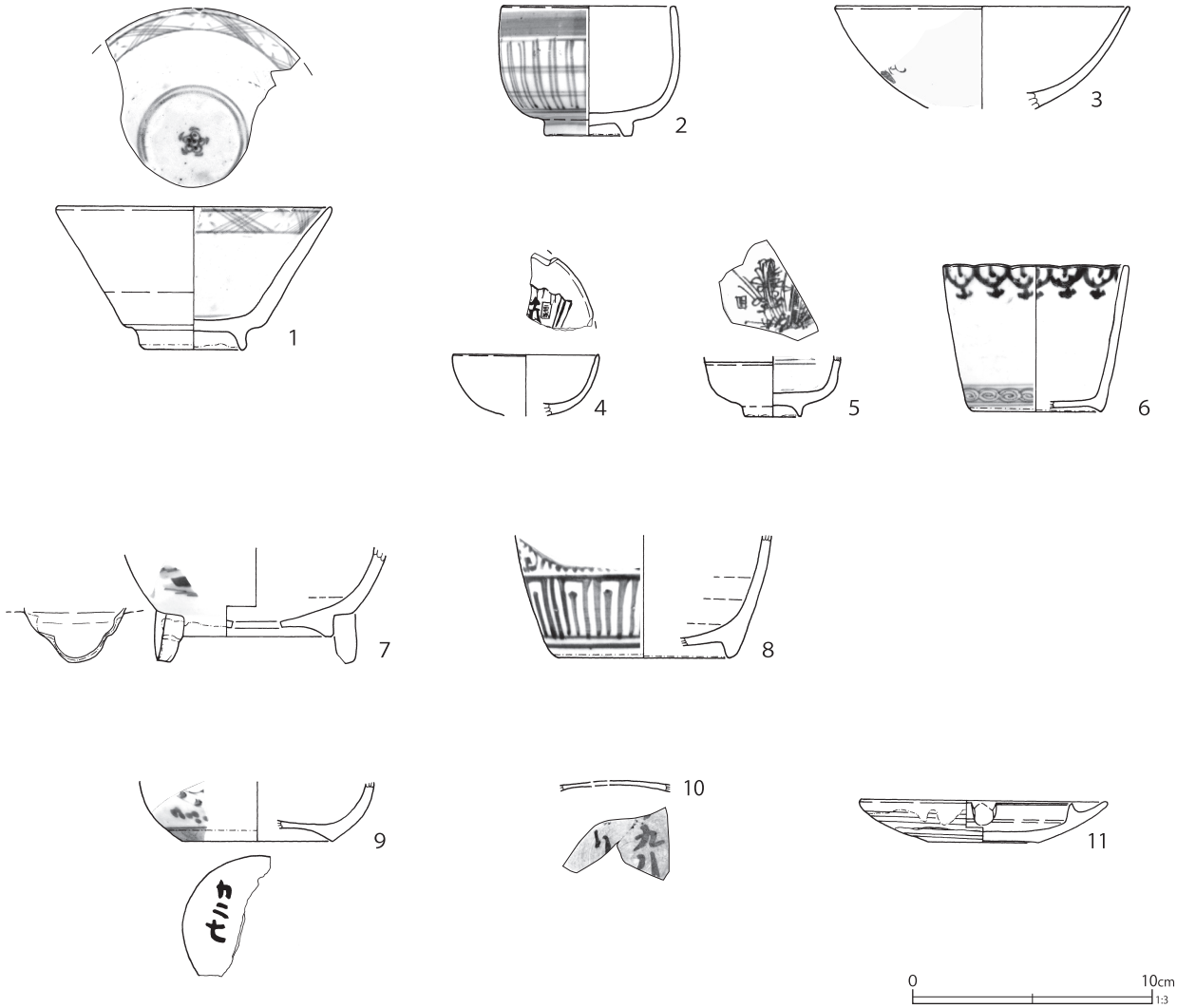
1　暗灰色土　粘質　炭化物粒子少量　粘性あり　しまり強

2　暗灰色土　１層より暗い　粘質　炭化物粒子・白色粒子少量　粘性弱　しまり強

3　暗灰色土　１層より暗い　粘質　炭化物粒子・白色粒子多量　粘性・しまりあり

4　暗灰色土　４層より暗い　粘質　炭化物粒子・白色粒子多量　粘性・しまりあり

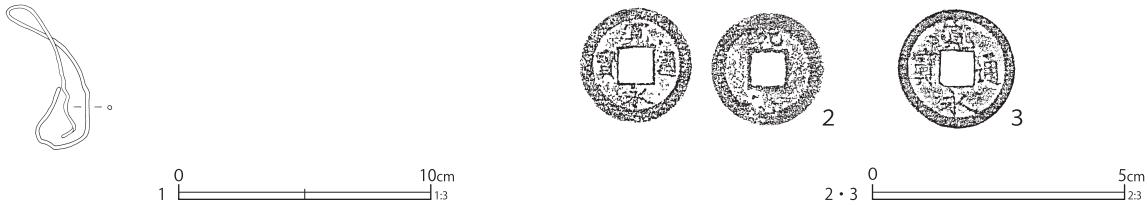
第 135 図　第２号溝跡



第 136 図　第２号溝跡出土遺物（１）

第 72 表　第２号溝跡出土遺物観察表（１）（第 136 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(11.2)	5.9	4.0	-	35	普通	白	SD2	肥前系　内外面施釉（外面青磁釉）　内面染付　弱く被熱（黒化）	
2	磁器	碗	7.0	5.3	(3.5)	-	75	良好	白	SD2	肥前系　内外面施釉　外面染付　（湯呑形碗）	
3	磁器	碗	(12.0)	[4.2]	-	-	15	普通	白	SD2	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面銅版転写染付（青・緑）	
4	磁器	坏	(6.0)	[2.5]	-	-	20	良好	白	SD2	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面上絵付（青・赤）「栗橋」　煤付着	78-2
5	磁器	坏	-	[2.4]	(2.2)	-	40	良好	白	SD2	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面上絵付（青）	78-3
6	磁器	猪口	(7.4)	6.0	(5.3)	-	40	普通	白	SD2	肥前系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕	
7	磁器	植木鉢	-	[4.7]	(6.2)	-	20	良好	白	SD2	肥前系　外面施釉・染付	
8	磁器	御神酒徳利	-	[5.0]	(7.0)	-	10	普通	白	SD2	肥前系　外面施釉・染付	
9	磁器	急須	-	[2.4]	(6.2)	-	5	普通	白	SD2	瀬戸美濃系　外面酸化コバルト染付　焼き継ぎ印（赤）「カ二七」	78-4
10	磁器	急須	-	[0.4]	-	-	5	普通	白	SD2	瀬戸美濃系　内面施釉　外面焼き継ぎ印（赤）「□九八」・墨書「[く] り」	78-5
11	陶器	灯明皿	10.0	1.7	4.5	IK	95	普通	灰白	SD2	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	



第 137 図　第２号溝跡出土遺物（２）

第 73 表　第２号溝跡出土遺物観察表（２）（第 137 図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	針金	縦 5.7 横 3.4 厚さ 0.1 重さ 3.9	SD2	F7J5Gr	
2	銅製品	銭貨	径 22.6 厚さ 0.9 重さ 1.6	SD2	寛永通寳（新）背元	
3	銅製品	銭貨	径 23.7 厚さ 1.2 重さ 2.1	SD2	寛永通寳（新）	

本跡は第２号竹樋へ接続しており、二回以上の付け替えが想定される。その都度の掘り返し・改修が行われた可能性もあるが、残念ながら、上部の削平によりその検証は困難であった。

第132図１は土製品の泥面子で芥子面である。２は軒桟瓦で、刻印「舍」「阿／長」が認められる。類例は、番士屋敷跡（埼玉県埋文事業団2018）から多く出土している。３は砥石で流紋岩製である。平ノミ状工具痕を端部に認める。

第134図は金属製品で、１は鉄製鍋である。口縁部が外方に広がる形態である。２は鉄製品の把手、３は鉄製品の火箸である。

第２号溝跡（第２号竹樋）（第135～137図）

Ｅ７-Ｊ５、Ｆ７-Ａ５グリッドに位置する。第２区画（区画Ｚ）から北に延び、第４区画（区画Ｘ）へ至る。大部分は第３区画に位置し、第５号建物跡（栗橋７期）を掘り込んでいる。また、後述する第３号竹樋の上を通過しており、本跡の方が新しい。

本跡も溝状遺構の底面付近に二条の竹樋が検出されており、竹樋掘方の可能性が高い。掘方部分は全長11.0m、幅83cmで、走行方向はN-10°-Wである。竹樋は東西に並行して２本検出されており、東側の竹樋をａ、西側の竹樋をｂとする。このうちａは南側の継手（第133図）で第１号竹樋と接続しているが、ｂは南北両端ともに途中で途切れ、他の施設への接続は認められない。断面観察からｂが廃絶後にａが機能したことが確認され、第１号竹樋の改修痕と関わる。

竹樋の遺存長はａ10.05m、ｂが6.0mである。傾斜方向はいずれも南から北へ向かって下がっているので、少なくともａは、継手で接続する第１号竹樋から導水している可能性が高い。竹管同士の接続は鉄製の環状金具で結節する（写真図版53の３・５・６参照）。

第136図に出土した陶磁器類を示した。

１は肥前系磁器の碗で、体部が朝顔形に開くものである。外面は青磁釉、内面は五弁花文等を染付する。口縁部の一部が被熱して焦げている。２は肥前系磁器の湯呑形碗で、外面に格子文を染付する。高台はやや幅広い。３は瀬戸美濃系磁器の平碗で、外面に色銅版による染付が見られる。４は瀬戸美濃系磁器の坏である。内面には舟の帆かと思われる青の上絵付けがみられ、赤で「栗橋」の文字も上絵付けされる。５は瀬戸美濃系磁器の坏で、外面に突帯を有す。内面に上絵付けで、草花らしい文様を描く。６は肥前系磁器の猪口で、口縁部は輪花・瓔珞状の文様を染付する。下位には渦文帯を染付する。７は肥前系磁器の植木鉢で、板状の脚が付く。外面には山水文らしい染付の一部がみられる。８は肥前系磁器で、蛸唐草文を染付する御神酒徳利である。９・10は瀬戸美

濃系磁器の急須である。ただし小破片のため小型の土瓶の可能性も残る。９は外面に酸化コバルト染付が認められる。露胎部に「カ二七」の焼き継ぎ印がみられる。10は底部の細片で、赤で「□九八」の焼き継ぎ印と墨書「［く］り」が見られる。11は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、光沢のにぶい柿釉がやや厚く掛けられる。釉のムラはあまりみられない。受けは低く断面が三角形、径7.0㎝である。切り込みはU字状だが、やや逆台形に近い。外面露胎部にはかなり細かいケズリ痕が見られ、環状の重ね焼き痕（径7.3㎝）が巡る。

本跡の出土遺物には、型紙摺絵染付の磁器が多く、銅版転写染付の磁器が少量みられる。陶磁器の様相から栗橋９期後半に帰属するものであろう。

第137図は出土した金属製品である。１は銅線（針金）、２・３は銭貨で、寛永通寶の新寛永である。このうち２は背「元」である。

さて、本跡の導水先は、北側の第４区画（区画Ｘ）と思われる。掘方の北端には、第120号土壙があるが、この遺構の出土遺物も栗橋９期である。本跡の下部は円筒状の形態であり、埋設桶などを据えて竹樋からの水を受けていた可能性が考えられるだろう。第４区画（区画Ｘ）は『絵図』の「鍛冶屋　幸次郎」にあたり、実際に多量の鍛冶関連遺物が出土した区画である。第１・２号竹樋も、鍛冶屋との関連で理解することが妥当であろう。

第４号溝跡・第３号竹樋（第138～141図）

Ｅ７−Ｊ６・７、Ｆ７−Ａ５・６グリッド、第３区画（区画Ｙ）の最南部に位置する。地境にあたる第16号溝跡と並行している。

本跡も第１・２号溝跡と同様に、下位に竹樋（第３号竹樋）が検出されており、本来は竹樋の掘方とすべきかもしれない。ただし、調査段階では掘り込みの上部（確認面から30㎝程下）で一度底面を検出しており、竹樋の掘方とは別の溝跡が上部に重複していた可能性も残る。

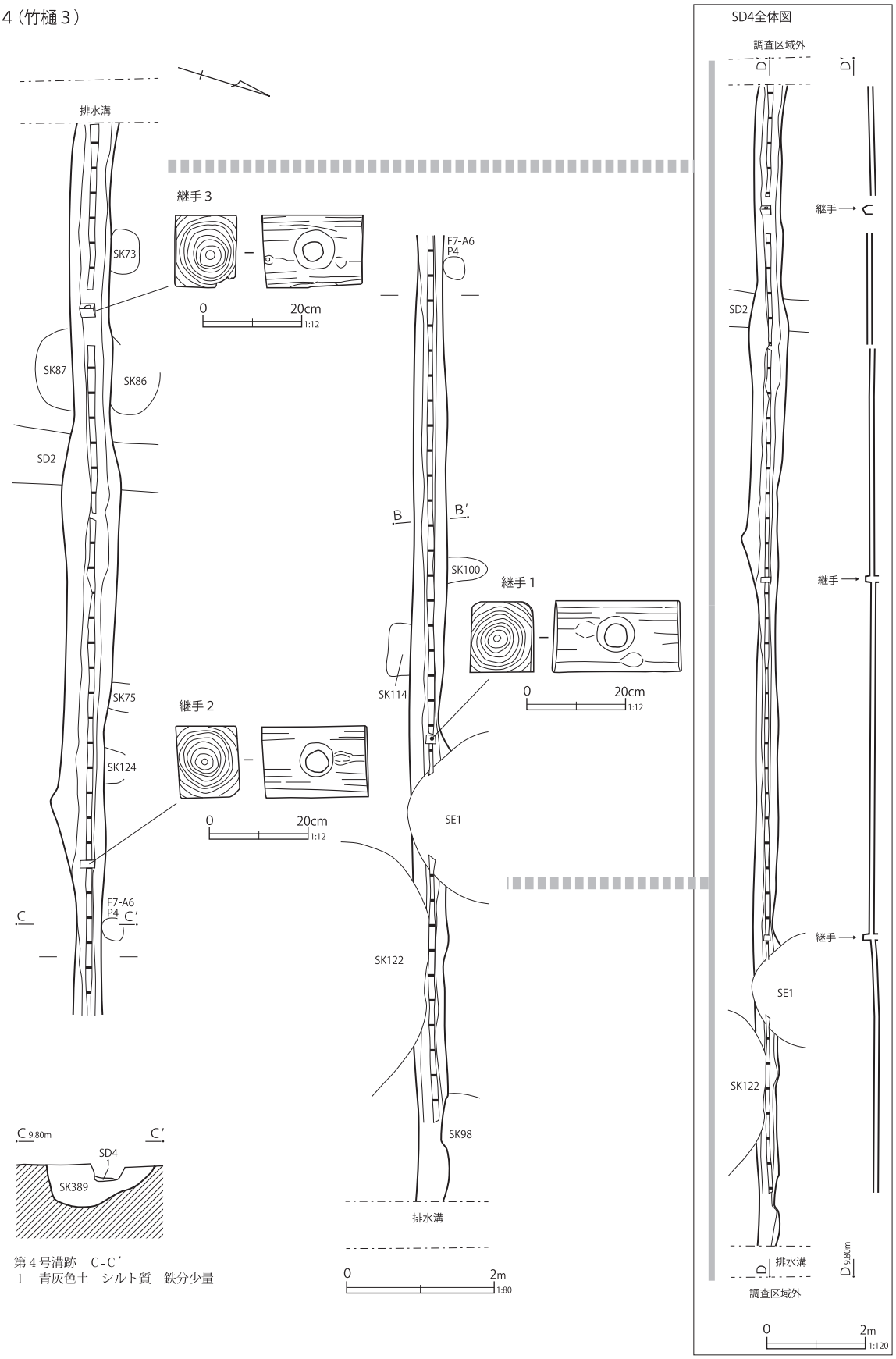
溝跡全体の長さは調査区を横切って23.4m以上あり、幅は70㎝程である。走行方向はN-75°-Eである。

竹樋は確認面から60～70㎝程下で検出され、標高は9.5mほどである。第２号溝跡（竹樋）と交差しているが、本跡のほうが下を通過しており、立体交差のようになっている。従って第２号溝跡（竹樋）より、本跡（第４号竹樋）のほうが古い。竹管は三箇所の継手で繋がれる。継手は木製の角材に貫通孔を穿つものである（写真図版272−６～８）。継手同士の間隔は概ね3.6mで、傾斜は西側から東側に向かって低くなる。調査区内には分岐や溜め井は見当たらず、供給先はより東側と推定される。

第140図に出土した陶磁器類を示す。

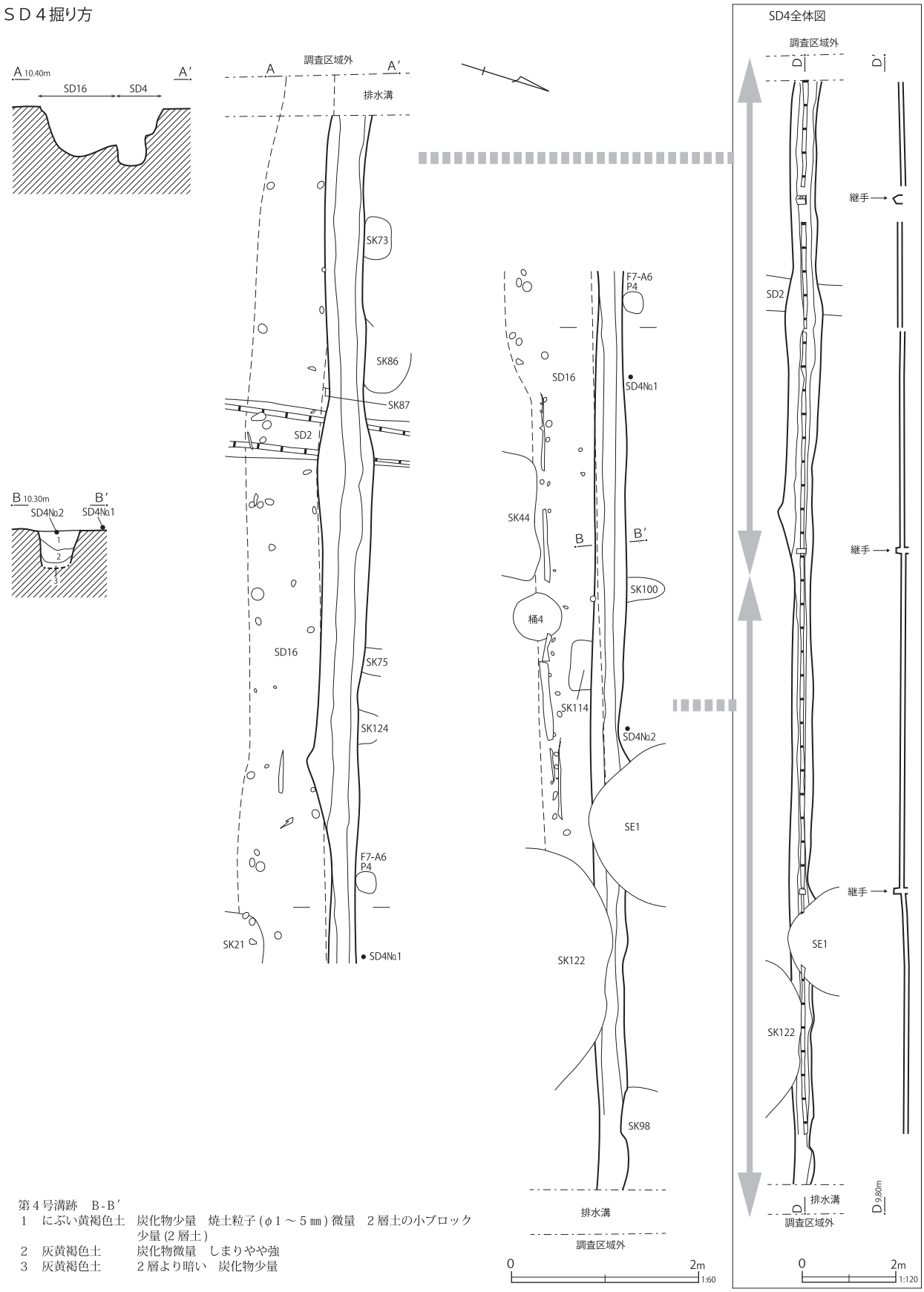
１は肥前系磁器の端反碗で、高台は薄くシャープである。外面に藤花と栗、内面の口縁部に四方襷文を染付する。焼き継ぎ痕跡がみられる。２は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗で、外面に崩れた草花・昆虫文を染付する。同文の別個体が１個体認められる。３は肥前系磁器の碗で薄手半球形のものである。外面に精緻な花唐草文を染付する。焼き継ぎ痕がみられる。４は肥前系磁器の皿で、厚手粗製のものである。全体が僅かに煤けている。内面には草花文を染付する。内面底面に五弁花文をコンニャク印で染付する。高台内は崩れて痕跡的な渦（福）文がみられる。５は肥前系磁器の皿で、背が低い。外面は一重の唐草文、内面は周囲に草文、底部中心に五弁花文を染付する。蛇の目凹形高台である。６は瀬戸美濃系陶器の坏で、光沢が強く、白っぽい灰釉が施される。口縁部内面側が打ち欠かれている。７は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、光沢のあまりない柿釉が薄く施釉されている。内底面に環状の重ね焼き痕（径3.7㎝）がある。底面にも重ね焼き痕の一部が残る。８は産地不詳の灯明皿で、内面～外面上位にウグイス色の光沢のある灰釉が施釉される。外面は口縁部付

ＳＤ４（竹樋３）



第４号溝跡　C-C′
1　青灰色土　シルト質　鉄分少量

第 138 図　第４号溝跡（１）



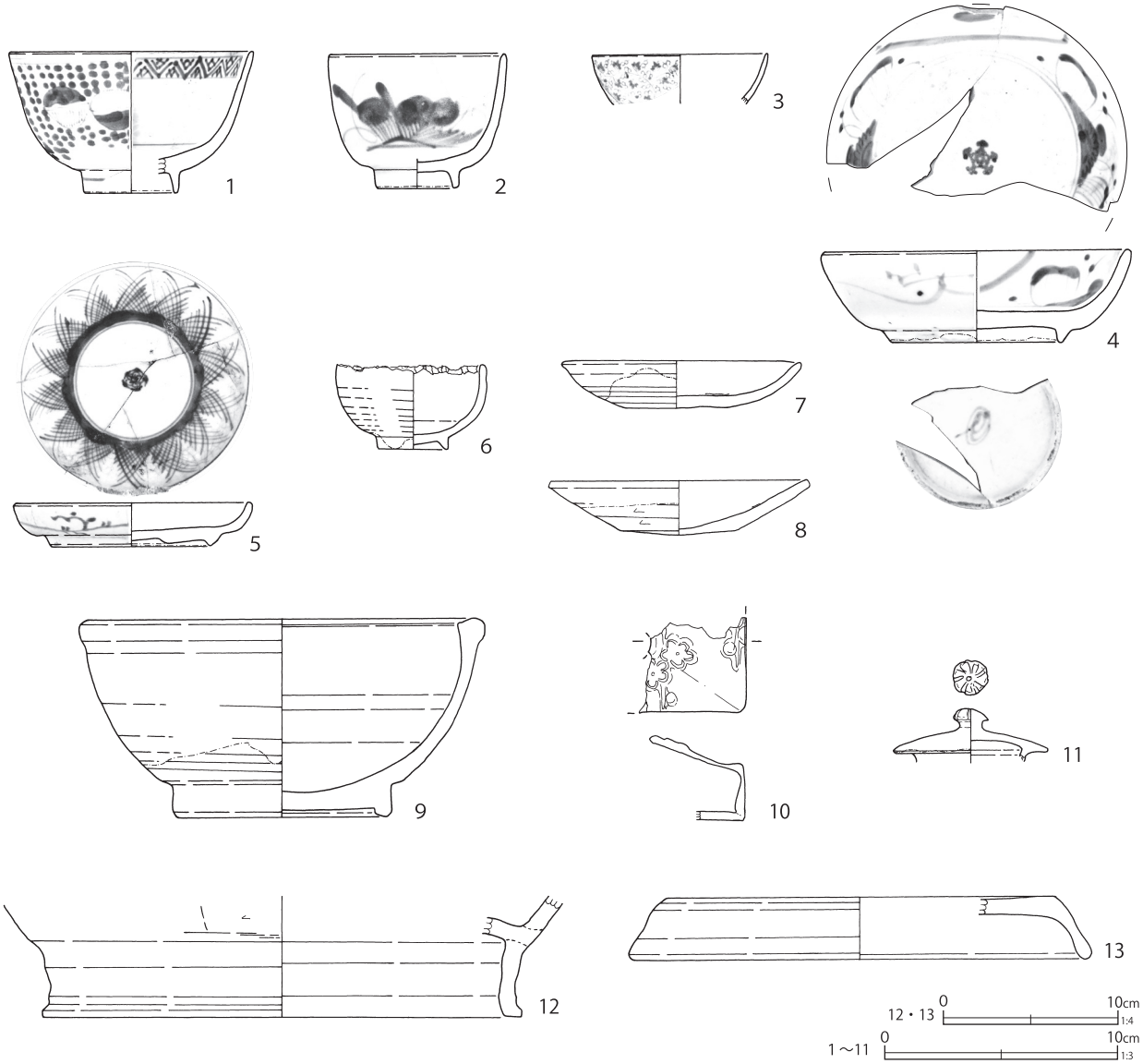
第４号溝跡　B-B′
1　にぶい黄褐色土　炭化物少量　焼土粒子（φ１～５㎜）微量　２層土の小ブロック少量（２層土）
2　灰黄褐色土　炭化物微量　しまりやや強
3　灰黄褐色土　２層より暗い　炭化物少量

第 139 図　第４号溝跡（２）

近は回転ナデ、以下は回転ケズリ痕が底部まで残る。地方窯系の製品とみられる。胎土は灰白色で緻密だが、外面露胎部はやや橙色味をおびて、灰黄色を呈する。10は京都信楽系陶器の水滴で、頂部に型押しで梅樹文の施文がみられる。中心に向かい屋根形に高くなるものらしく、頂部に穿孔がみられる。底部は露胎で、ナデ調整されて平滑である。内面には布圧痕が顕著に残る。11は陶器の土瓶蓋で、黄土色の鉄釉が施釉される。つまみは菊花状に成形されている。大堀相馬系陶器の可能性が高い。

12は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の高い脚が付く。全体に酸化炎焼成ぎみで、表裏面はにぶい黄橙色を呈するが、断面の中心は灰白色を帯びる。胎土に角閃石と径2㎜程の赤色粒子を多く含む。13は土師質土器火消壺の蓋で、江戸在地系土器である。胎土に微細な雲母粒を含む。

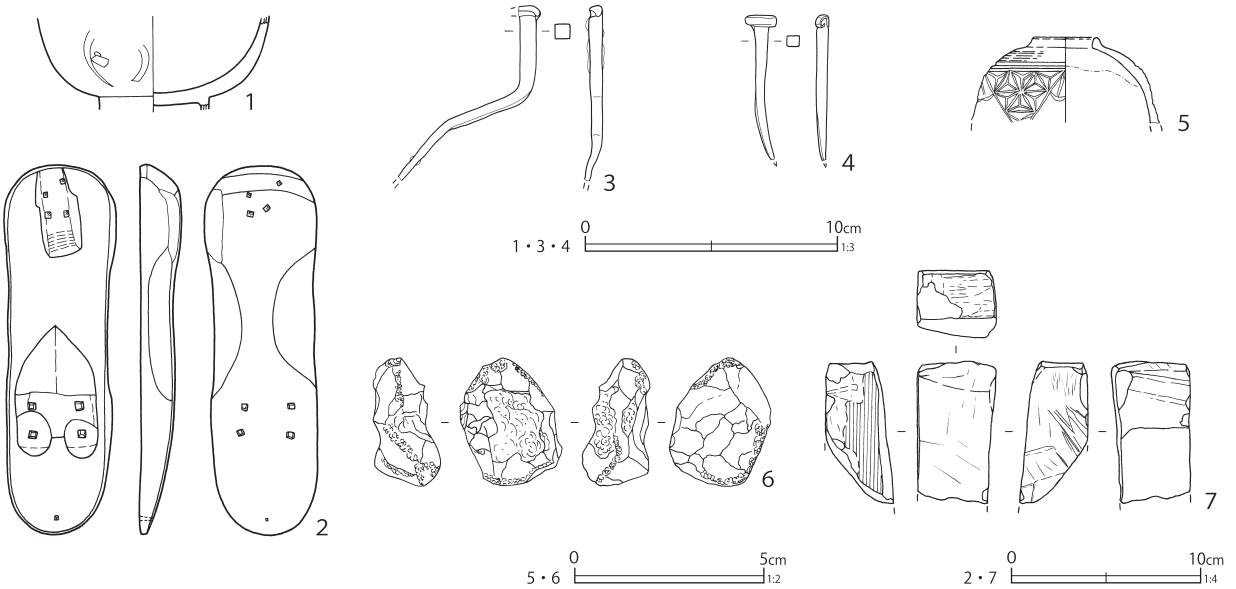
このほかに、酸化コバルト染付の磁器急須・赤絵で上絵付けをした瀬戸美濃系磁器小型丸碗・淡路珉平焼蓮華・三河系土器焜炉がみられるが、これらは量が少なく、全て西半部からの出土である。西半部に重複する第１号井戸跡や第122号土



第 140 図　第４号溝跡出土遺物（１）

第 74 表　第 4 号溝跡出土遺物観察表（1）（第 140 図）

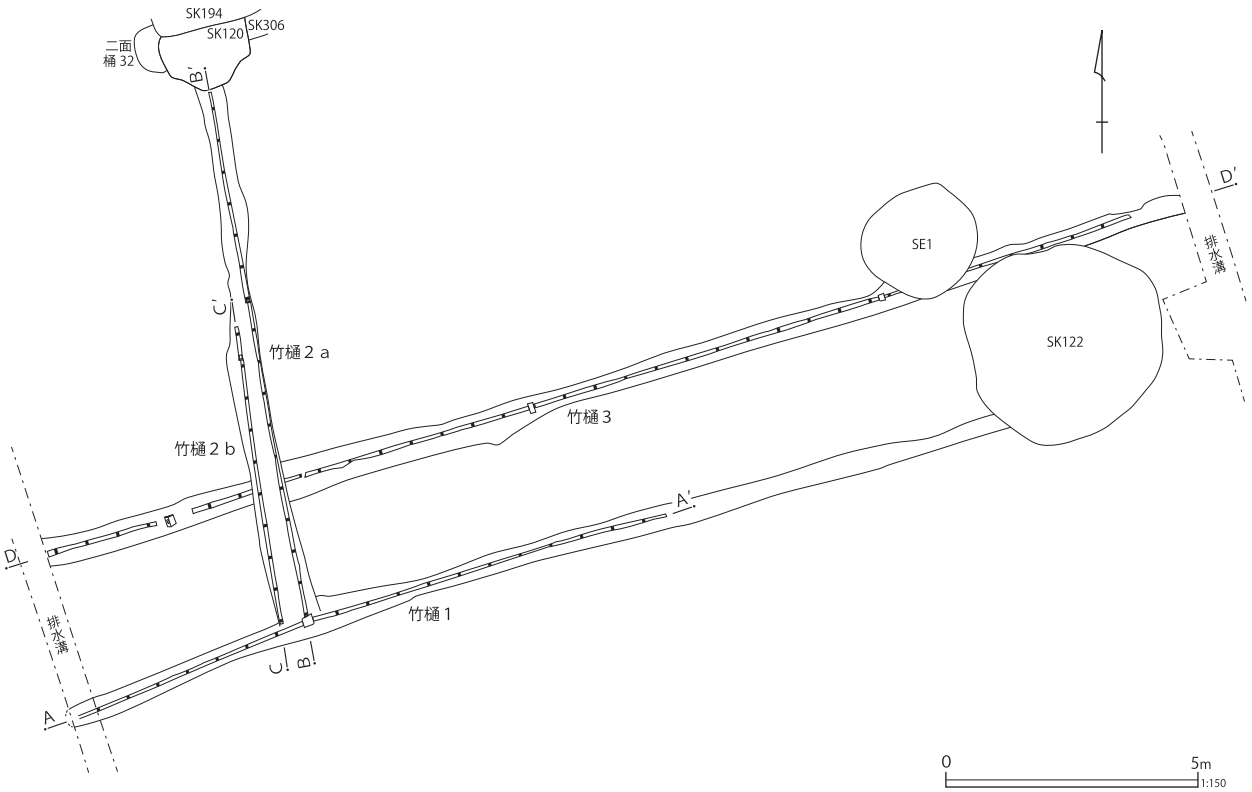
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(10.2)	6.0	(3.8)	-	20	普通	白	SD4	肥前系　内外面施釉・染付　焼き継ぎ痕（端反碗）	
2	磁器	碗	(7.3)	5.7	3.2	-	85	普通	白	SD4	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付　同文別個体 1 あり　（湯呑形碗）	
3	磁器	碗	(7.4)	[2.1]	-	-	10	良好	白	SD4	肥前系　内外面施釉　外面染付　焼き継ぎ痕	
4	磁器	皿	(12.9)	3.9	(7.2)	-	50	普通	白	SD4	肥前系　内外面施釉・染付	
5	磁器	皿	9.8	1.8	6.7	-	95	普通	白	SD4	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目凹形高台	78-6
6	陶器	坏	-	[3.6]	2.8	IK	95	普通	灰白	SD4	瀬戸美濃系　内外面灰釉　口縁部二次敲打	78-7
7	陶器	灯明皿	(10.0)	2.0	4.5	I	95	普通	灰	SD4	瀬戸美濃系　内外面柿釉　外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
8	陶器	灯明皿	(10.9)	2.3	5.0	IK	45	良好	灰白	SD4	内面～外面上位灰釉　内面ピン痕 2 遺存	
9	陶器	片口鉢	(16.6)	8.4	(9.0)	IK	30	良好	灰白	SD4	瀬戸美濃系　内外面灰釉　被熱・一部黒化	
10	陶器	水滴	-	3.6	-	K	30	普通	灰白	SD4	京都信楽系　板作成形　外面透明釉　上面施文（陽刻状）　穿孔　内面布圧痕　縦 [4.0] cm　横 [4.5] cm	
11	陶器	蓋	-	[2.2]	-	I	25	良好	灰白	SD4	上面鉄釉　最大径 (6.6) cm	78-8
12	瓦質土器	火鉢	-	[6.8]	(27.4)	CEHI	5	普通	灰白	SD4	やや酸化炎焼成	
13	土師質土器	蓋	(22.0)	3.5	(25.8)	AHIK	5	普通	にぶい橙	SD4	江戸在地系　上面砂目　胎土粉質	

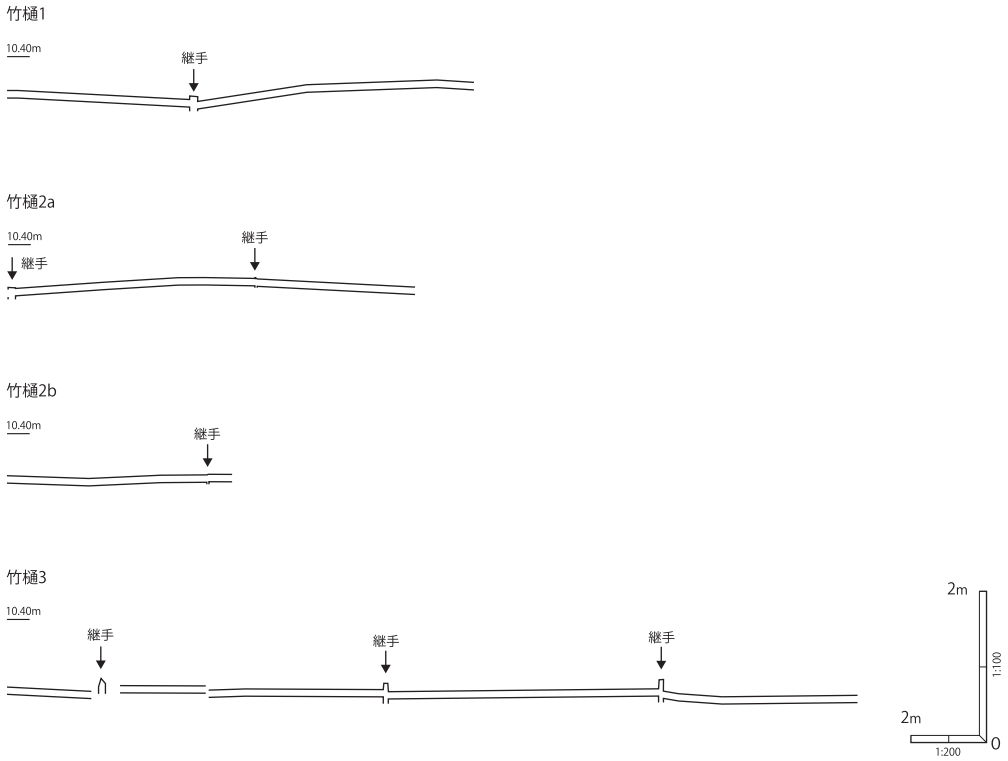


第 141 図　第 4 号溝跡出土遺物（2）

第 75 表　第 4 号溝跡出土遺物観察表（2）（第 141 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	－	[3.6]	－	横木取り	SD4	内面赤漆 外面黒漆 金色で紋（不鮮明）	
2	木製品	下駄	19.6	5.9	－	－	2.2	－	板目	SD4	無眼下駄	
番号	種別	器種	法量							遺構	備考	図版
3	鉄製品	釘	長さ [6.9] 幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 10.8							SD4		
4	鉄製品	釘	長さ [5.7] 幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 3.2							SD4	F7A5	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
5	施釉土器	ミニチュア	(1.6)	[2.5]	－	3.0	K	普通	灰白	SD4	京都系　土瓶か　上下合二枚型成形　型成形　外面陰刻文・黄色釉	
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材			遺構	備考	図版
6	石製品	火打石	3.4	2.7	1.8	14.9	玉髄			SD4	使用痕あり	284-3
7	石製品	砥石	[7.5]	4.2	3.6	143.5	流紋岩			SD4	幅広工具痕　ノコギリ痕　削痕あり　砥面 3 被熱（黒色化）	





第 142 図　第１～３号竹樋配置図

壙からの混在と判断される。混在の遺物を除けば、２に示した瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗、11に示した陶器土瓶の蓋などが最新期と思われる。非掲載遺物にも瀬戸美濃系磁器端反碗・燗徳利や、陶器の三彩土瓶・鉄絵土瓶などが確認される。従って、本跡の構築時期は栗橋７期後半～８期頃と推測される。

なお、本跡から出土した陶磁器類には、火災で被熱したとみられるものがかなり含まれる。具体的には、肥前系磁器では、丸碗蓋・猪口・粗製皿（くらわんか手）・内面蛇の目状釉剥ぎの皿・油壷・合子が、瀬戸美濃系陶器では、内面蛇の目状釉剥ぎの灰釉鉢・片口鉢・半胴甕・柿釉甕・油徳利・緑釉瓶掛・煙硝摺があり、他に堺明石系陶器擂鉢、京都信楽系陶器丸碗、産地不詳陶器の飴釉徳利にも被熱がみられる。18世紀後半頃のものが多いが、前述のように本跡の帰属は19世紀前半の栗橋７・８期であり、被熱遺物は下層からの巻き上げと判断される。

第141図には、木製品・金属製品・石製品等を一括して示した。

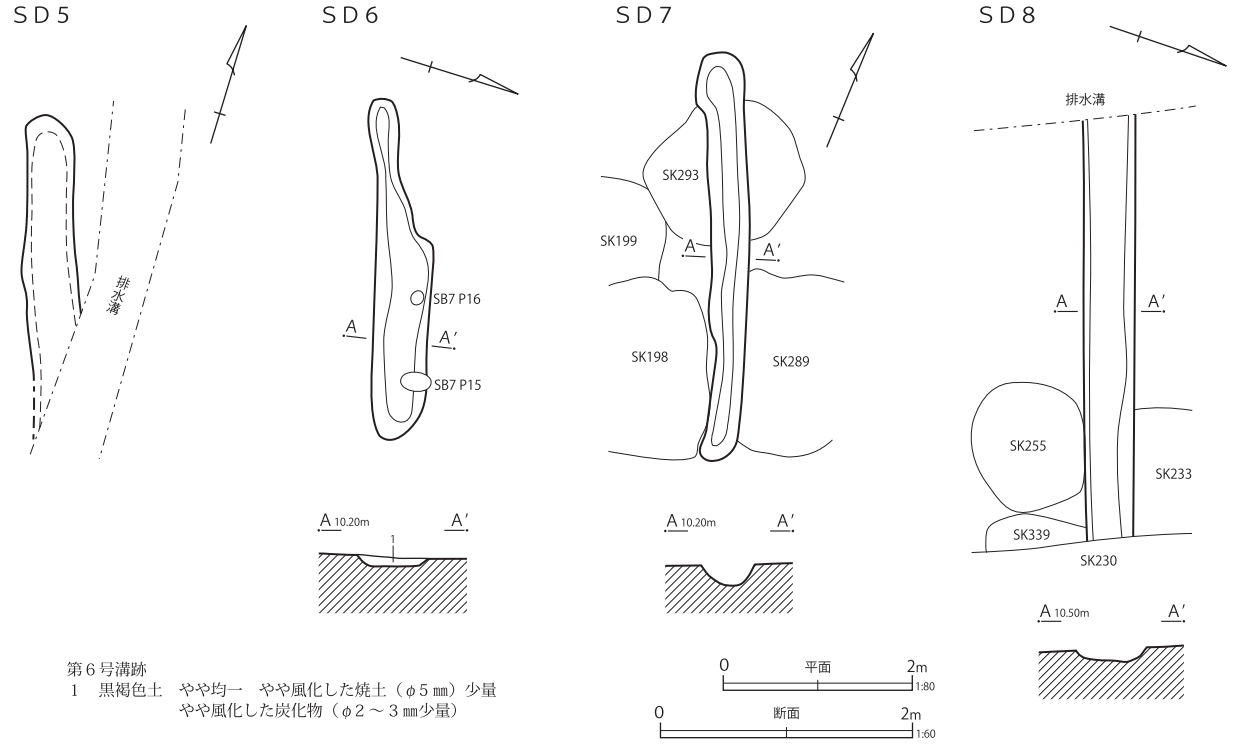
１は木製品の漆椀で、外面には黒漆に金彩で絵付けをおこなう。２は木製品の下駄で、無眼下駄である。３・４は鉄製品の釘である。５は土製品のミニチュアで、接合面で割れている。土瓶を模すものであろうか。６は玉髄製の火打石で、良く使用されている。７は流紋岩製の砥石である。

第５号溝跡（第143～146図）

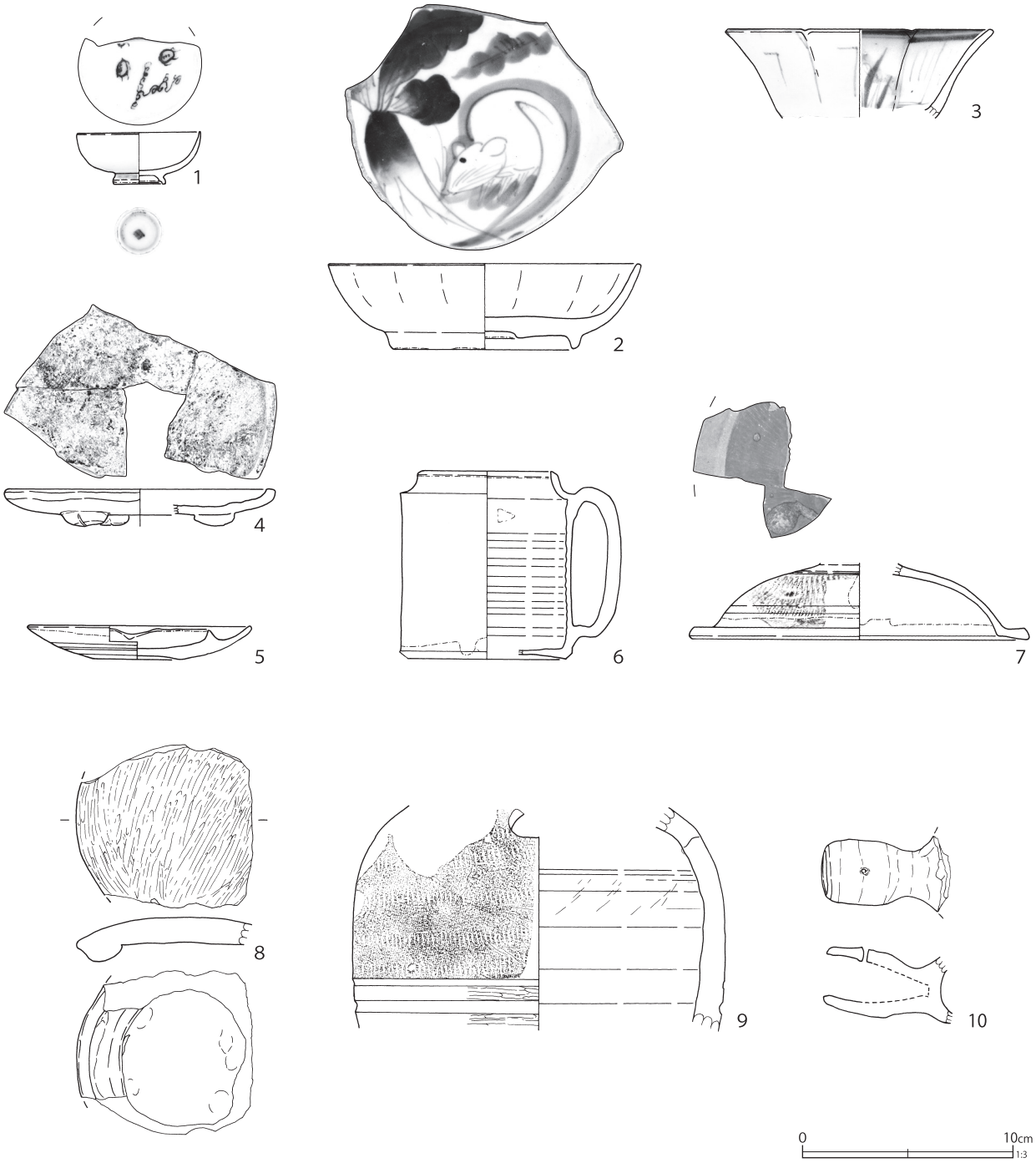
Ｆ７-Ａ７グリッド、第１区画（区画AA）で検出された溝である。調査区東端、第２号建物跡の基礎に囲まれた場所に位置し、東は調査区外に延びる。検出された全長は2.0m、幅40cm、走行方向はN-20°-Wである。溝跡として扱ったが、全体像が不明であり、楕円形プランの土壙の可能性も残る。

第144図は出土した陶磁器類である。

１は瀬戸美濃系磁器の坏で、体部が丸い卵殻手酒杯である。高台部に鎖状文、高台内に崩れた銘



第 143 図　第５～８号溝跡

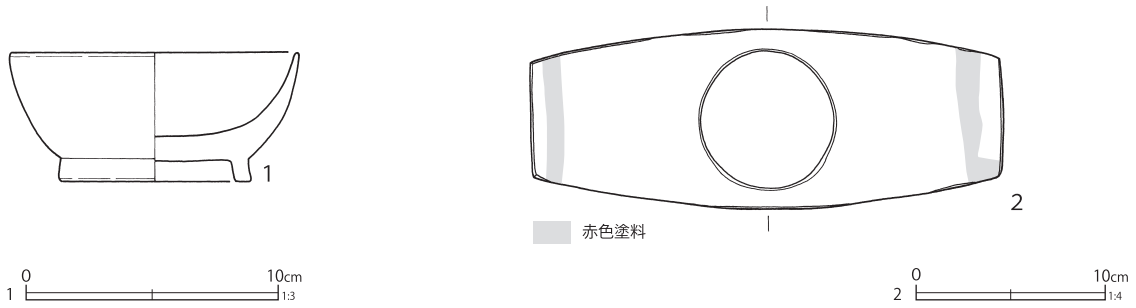


第 144 図　第 5 号溝跡出土遺物（1）

第 76 表　第 5 号溝跡出土遺物観察表（1）（第 144 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	坏	5.7	2.4	2.3	-	70	普通	白	SD5	瀬戸美濃系　内外面施釉　内面上絵付(青)外面染付	
2	磁器	皿	(14.6)	4.0	8.4	-	70	普通	白	SD5	肥前系　内外面施釉　内面染付　蛇の目状高台	
3	磁器	鉢	(12.2)	[4.1]	-	-	10	普通	白	SD5	肥前系　内外面施釉・染付	
4	陶器	皿	(12.2)	1.7	-	I	50	普通	灰白	SD5	軟質施釉陶器　型成形　底部布圧痕　内面型押施文・透明釉・緑釉施釉	79-1
5	陶器	灯明皿	(10.5)	1.6	(3.9)	I	70	良好	灰白	SD5	京都信楽系　内面～口縁部透明釉　煤付着	

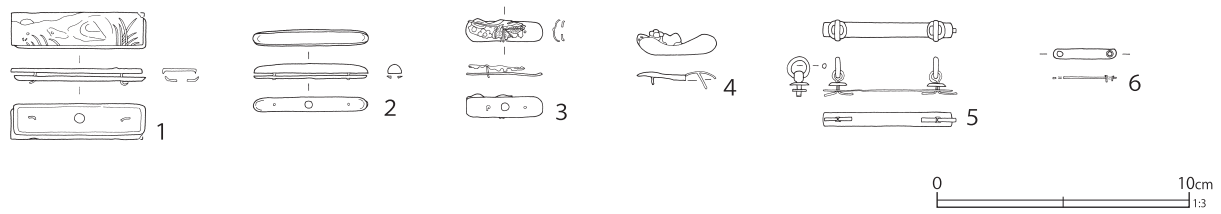
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
6	陶器	水注	(6.0)	8.8	(7.4)	-	40	良好	灰白	SD5	瀬戸美濃系　内外面鉄釉	
7	陶器	蓋	-	[3.5]	(15.8)	I	15	良好	褐灰	SD5	飯能か　内外面鉄化粧　内面灰釉　外面灰釉流掛　トビガンナ状施文	78-9
8	瓦質土器	手焙り	-	[2.1]	-	CFI	10	普通	灰白	SD5	上面ミガキ　燻す	
9	瓦質土器	手焙り	-	[10.4]	-	CI	15	普通	灰白	SD5	外面トビガンナ状施文、一部ミガキ　内面上位煤付着　穿孔　8と同一個体か	
10	土師質土器	把手付鍋	-	[3.7]	-	CEHI	15	良好	にぶい橙	SD5	把手部分　穿孔1　内外面煤付着	



第145図　第5号溝跡出土遺物（2）

第77表　第5号溝跡出土遺物観察表（2）（第145図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	11.2	5.0	7.4	横木取り	SD5	内面赤漆 外面黒漆	
2	木製品	不明品	9.5	25.0	0.7	－	－	－	板目	SD5	孔1 左右端赤色塗料 一部炭化	



第146図　第5号溝跡出土遺物（3）

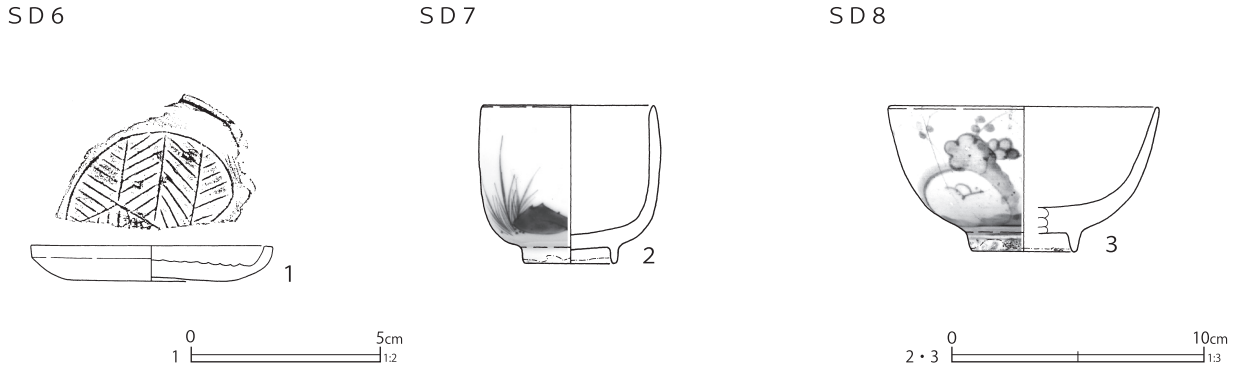
第78表　第5号溝跡出土遺物観察表（3）（第146図）

番号	種別	器種	法量	遺構	備考	図版
1	銅製品	煙草入れの金具	縦1.4 横5.3 高さ0.7 重さ4.2	SD5	前金具 花草文か	273-2
2	銅製品	煙草入れの金具	縦0.6 横4.6 高さ0.6 重さ6.0	SD5	前金具	273-2
3	銅製品	煙草入れの金具	縦0.9 横3.0 厚さ0.06 重さ0.7	SD5	前金具 花葉文	273-2
4	銅製品	煙草入れの金具	縦1.0 横3.2 厚さ0.06 重さ0.7	SD5	前金具 裏金欠	273-2
5	銅製品	煙草入れの金具	縦0.9 横5.3 環径0.9 高さ1.6 重さ3.2	SD5	吊金具	273-2
6	銅製品	煙草入れの金具	縦0.4 横2.5 厚さ0.08 重さ0.5	SD5	吊金具 裏金	

款を染付する。内面にも青の上絵付けで、亀・波文を描く。

２は肥前系磁器の皿で、高い蛇の目状高台を有すものである。内面の見込みいっぱいに大根と鼠の文様を染付する。口縁部は一部のみの遺存だが、輪花状で口紅を施すものらしい。３は肥前系磁器の小型の八角鉢である。

４は軟質施釉陶器の皿で、内面に型押施文がみられる。透明釉を基調に緑釉を掛け分けているようだが、釉の剥離が多く、文様のモチーフとともに詳細は観察し難い。下面は布目痕だが、口縁部付近のみヨコナデ、脚は胡桃脚である。５は京都信楽系陶器の灯明皿（受皿）である。受けは低く上端部は釉剥ぎされる。径6.9㎝である。外面の



第 147 図　第６～８号溝跡出土遺物

第 79 表　第６～８号溝跡出土遺物観察表（第 147 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	施釉土器	ミニチュア	(6.4)	[0.9]	－	ＩＫ	－	良好	にぶい橙	SD6	型成形　内面陽刻文・施釉（被熱による白色化・剥落）　外面指頭痕　重さ 17.8	242-5
2	磁器	碗	(6.6)	6.2	(3.5)	-	55	普通	白	SD7	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面染付（湯呑形碗）	
3	磁器	碗	(10.4)	5.7	(4.0)	-	30	普通	白	SD8	肥前系　内外面施釉　外面染付	

口縁部はヨコナデ、以下は底部まで回転ケズリ痕が残る。６は瀬戸美濃系陶器の水注で、薄手のものである。薄く施釉される鉄釉は黒色で、光沢は無い。口唇部は露胎であり、蓋付きの汁次として用いられていたものであろう。内面のロクロ目が明瞭である。７は陶器行平の蓋で、内外面ともに赤褐色の鉄化粧が施されており、内面はその上から灰釉が全体的に施釉される。外面はトビガンナ状の施文がみられ、鉄化粧のみの露胎とするが、僅かに灰釉が散っており、流し掛けされていたようである。灰釉はにぶい緑色であるが、釉が厚く溜まった部分はうのふ状に青白く発色する。胎土や裏面の釉薬からみると飯能焼の可能性が高いが、釉・流し掛けの技法に生産地の類例がみられない。トビガンナが疎らなところから、飯能焼でも後半のものであろう（富元久美子氏の御教示）。

８・９は同一個体と思われる瓦質土器の手焙りである。外面はトビガンナ状施文、体部下位の横沈線区画内や頂部はミガキが施される。体部上位の破片には背面の円孔が残る。焼成は硬質・瓦質。胎土には角閃石が多く含まれる。10は土師質土器の把手付鍋の把手部分である。全体に煤が付着している。

陶磁器の総数は多くは無く、特に磁器類は少ない。地方窯系の陶器が多い様相で、時期は栗橋９期のはじめ頃と推定される。

第145図１・２は木製品である。１は漆椀、２は孔のある用途不明の木製品である。

第146図は金属製品である。１～６は煙草入れの金具である。１から４は、煙草入れの袋につけられた前金具である。３点には装飾が施される。５と６は袋に提緒を付けるための金具である。６は裏金のみ遺存する。

第６号溝跡（第143・147図）

Ｅ７－Ｊ５グリッド、第４区画（区画Ｘ）の南側で検出された短く浅い溝跡である。長さは3.6m、幅60cmで、走行方向はN-75°-Eである。第７号建物跡に接近しており、軸方向も一致する。

深さ８cm程、覆土は黒褐色の単層である。重複する第287号土壙（栗橋８期）より新しい。

陶磁器は、産地不詳の陶器燗徳利と松岡系陶器土瓶蓋の２点である。遺物と重複関係から、栗橋８期ないし９期前半の帰属と考えられる。